

---

熊谷市

---

# 諏訪木遺跡 II

---

県道熊谷羽生線（熊谷市地内）埋蔵文化財発掘調査報告  
（第1分冊）

2007

埼玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



D区出土縄文土器



E区出土縄文土器



F区出土縄文土器



左：F区出土遮光器系土偶 右：E区出土ミミズク土偶

# 序

埼玉県の新5か年計画（平成19～23年度）「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」は、総合交通体系の整備を基本目標のひとつとして掲げております。

現在県内では交通混雑の緩和と円滑な道路交通の実現のために、幹線道路の整備やバイパス・橋梁の建設などの施策が進められております。

県北部に位置する熊谷市は、「埼玉県長期ビジョン」において「北部複合都市圏」における業務核都市と位置づけられ、今後一層の躍進が期待されているところです。その市街地東部を走る県道熊谷羽生線は、平成16年に開催された「彩の国まごころ国体」メイン会場へのアクセス道路として計画され、同時に慢性的な交通渋滞の解消による産業活動の円滑化と、より快適な都市環境の実現を目的として整備が進められてまいりました。

この路線には、縄文時代の生活跡である諏訪木遺跡が存在することが知られていました。その取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課（当時）が関係機関と慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、縄文時代から平安時代の集落跡や中・近世の遺構群が発見されました。特に縄文時代後期から晩期の集落跡は、熊谷市周辺の妻沼低地帯では調査事例がほとんどなく、全県的な情勢をみるうえでも貴重な発見となりました。

本書はこれらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力をいただきました埼玉県県土整備部道路街路課、熊谷県土整備事務所、熊谷市教育委員会並びに地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 福田 陽 充

# 例言

1. 本書は埼玉県熊谷市に所在する諏訪木遺跡の発掘調査報告書である。

諏訪木遺跡については、すでに2冊の発掘調査報告書が公刊されている(吉野2001・黒坂2002)。本書は諏訪木遺跡第9次・10次・12次調査の成果中、縄文時代に関わる部分の報告であり、通算3冊目の発掘調査報告書となる。

同時に調査された弥生時代以降に関わる部分の成果については平成19年度に刊行される予定である。

2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は以下の通りである。

諏訪木遺跡 (SWNK)

第9次

埼玉県熊谷市大字上之2873番地他

平成14年5月23日付け教文第2-18号

第10次

埼玉県熊谷市大字上之2873番地他

平成14年11月8日付け教文第2-87号

第12次

埼玉県熊谷市大字上之2851番地他

平成15年4月11日付け教文第2-1号

3. 発掘調査は県道熊谷羽生線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課(当時)が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 本事業は、第1章の組織により実施した。

発掘調査は、第9次調査を山本靖・岡本健一が担当し、宅間清公の補助を受け、平成14年5月15日から平成14年7月31日まで実施した。

第10次調査は細田勝・根岸洋・山本靖・岡本健一が担当し、宅間清公の補助を受け、平成14年11月1日から平成15年3月27日まで実施した。

第12次調査は西井幸雄・渡辺・田代雄介が担当し、平成15年4月8日から平成15年9月30日まで実施した。

本書に関わる整理作業は渡辺清志が担当し、平成16年4月8日から平成18年9月30日まで実施した。その後、校正・印刷の工程を経て、平成19年3月本書を刊行した。

5. 発掘調査時の遺跡基準点測量は、第9・10次調査分は中央航業株式会社、第12次調査分は株式会社中央測地設計に委託した。

6. 発掘調査時の遺構等写真撮影は担当者と宅間が行った。また、整理作業時の遺物写真撮影は渡辺が行った。

7. 出土品の整理および図版の作成は渡辺が行い、上野真由美・小野美代子・山北美穂・亀田直美・矢田美知子の協力、成田友紀子・鈴木理恵の補助を受けた。

報告書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IVの土偶・岩偶の遺物観察を小野が、その他を渡辺が行った。

8. 本書の編集は渡辺があたった。

9. 本書にかかる資料は平成19年4月1日以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

10. 発掘調査から整理・報告書作成までのあいだ、以下の方々より、御教示・御協力を賜った(敬称略)。

阿部芳郎 猪瀬美樹 江原 英

鈴木加津子 鈴木正博

熊谷市教育委員会

# 凡例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系(原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基く各座標値を示す。

また、各押図における方位表示は、すべて座標北をあらわす。

2. 本書で扱うグリッドは、座標値X=-16.7、Y=-38.300を原点とし、南東方向に10m×10mを単位として設定されている。呼称は、方眼の北西隅の枕名称を用い、原点のA1より東方向にアラビア数字、南方向にアルファベットで指数が増加する方法をとった。

また、調査の進行上必要に応じて2m×2mの中グリッド、1m×1mの小グリッドを併用した。設定方法はページ下の概念図を参照されたい。

3. 本書における遺構の略号は次のとおりである。

竪穴住居跡：SJ 土壇：SK 溝跡：SD

井戸跡：SE 炉跡：I 配石遺構：配石

本書では、発掘調査時点で命名した呼称を、以下のとおり一部変更している。

新	旧
D区第12号竪穴住居跡	D区SX1

4. 測量・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構

竪穴住居跡：1/60 土壇：1/60

ビット群：1/100 炉跡：1/60

配石遺構：1/30 土器埋設遺構：1/30

遺物

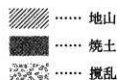
縄文土器実測図：1/4 縄文土器拓影図：1/3

縄文土製品：1/2

縄文石器実測図：2/3・1/3

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図、概念図等は、その都度スケールや縮尺率を表示した。

5. 測量区内の各種網掛け部表示は以下のとおりである。



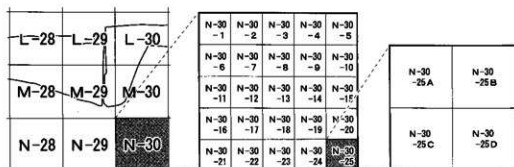
また、土器実測展開図の中の網掛けは、縄文など地文を施文された範囲を示す。

その他、位置図・概念図・全体図等の上の個別の色分けや強調については、必要に応じて表示している。

6. 縄文時代の石器の分類については次ページ以降の表・図に拠った。

7. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図、熊谷市都市計画図1/2,500を適宜縮小して使用した。

8. 文中の参考文献は(著者 刊行年度)の順で表示し、巻末に引用参考文献一覧表として掲載した。



1. 長さ・幅・厚さ：cm 重さ：g 欠損の場合は（ ）つきで表記

2. 形態

石鏡	A 1	凹基無蓋
	A 2	平基無蓋
	B 1	凹基有蓋
	B 2	平基有蓋
	B 3	凸基有蓋
	C	尖基
	D	円基
E	不明	

石鏡	A	全体がつまみ部と鏡部に分かれる
	B	つまみ部をもたない棒状
	C	不定形剥片の一端に短い鏡部をもつ
	D	不定形剥片の一端に長い鏡部をもつ

スクレイパー	A 1	つまみ有り片刃			
	A 2	つまみ有り両刃			
	B 1	つまみ無し片刃			
	B 2	つまみ無し両刃			
		縦長剥片	横長剥片	円形	
	a 1	長辺を刃部とする	b 1	長辺を刃部とする	C
	a 2	短辺を刃部とする	b 2	短辺を刃部とする	
a 3	長短両辺を刃部とする	b 3	長短両辺を刃部とする		

磨石 叩石	円形		楕円形		棒状 C
	A 1	片面使用	B 1	片面使用	
	A 2	両面使用	B 2	両面使用	
	A 3	三面以上使用	B 3	三面以上使用	

凹石	円形		楕円形		棒状 C	単孔
	A 1	片面使用	B 1	片面使用		a
	A 2	両面使用	B 2	両面使用		多孔
	A 3	三面以上使用	B 3	三面以上使用		b

石鏡	A	長軸両端にスリット
	B	長軸一端にスリット
	C	長軸軸にスリット
	D	短軸両端にスリット
	E	短軸一端にスリット
	a	自然礫を使用
	b	自然礫を整形して使用
c	剥片素材のもの	

石皿	A	楕円形
	B	長方形
	C	不整形
	a	自然礫を使用
	b	自然礫を整形して使用

打製石斧	A	短冊形
	B	楕形
	C	分銅形
	D	楕円形
	E	不明

磨製石斧	A	定角式
	B	乳棒状
	C	小形

砥石	A	有溝
	B	無溝

3. 残存度

石鏡	①	完形	⑥	基部残存
	②	先端欠損	⑦	返し部残存
	③	基部欠損	⑧	未成品
	④	返し部欠損	⑨	長軸方向の割裂
	⑤	先端残存		

石錘	①	完形	⑤	錘部先端残存
	②	錘部先端欠損	⑥	つまみ部残存
	③	つまみ部欠損	⑦	長軸方向の割裂
	④	錘形両端欠損	⑧	未製品

打製石斧 磨製石斧	①	完形	④	刃部のみ残存
	②	基部欠損	⑤	基部のみ残存
	③	刃部欠損	⑥	長軸方向の割裂

スクレイパー	①	完形
	②	つまみ部欠損
	③	刃部の一部を欠損
	④	つまみ周辺のみ残存
	⑤	未製品

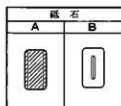
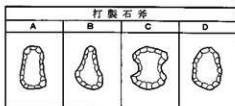
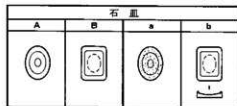
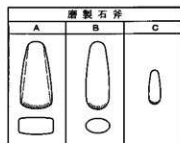
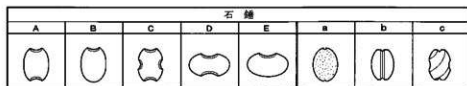
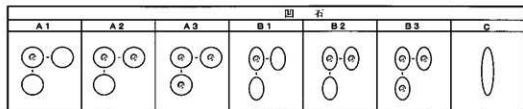
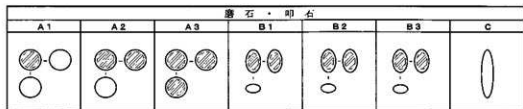
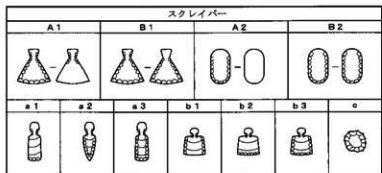
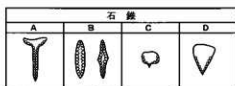
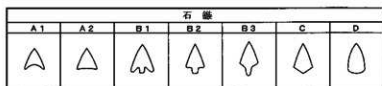
石錘	①	完形
	②	長軸方向に破損
	③	短軸方向に破損
	④	スリットのみ確認可

石皿	①	完形
	②	長軸方向に破損
	③	短軸方向に破損
	④	使用面のみ確認可

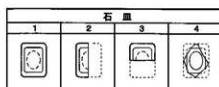
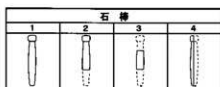
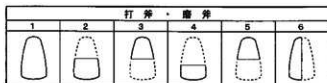
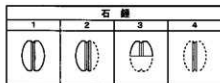
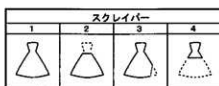
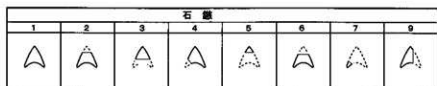
石棒 石剣	①	完形
	②	一端折損
	③	両端折損
	④	長軸方向の割裂

磨石 叩石 凹石 砥石	①	完形
	②	折損
	③	表面の剝離
	④	風化による崩壊
	⑤	その他





石器分類基準 (1) 形態分類



石器分類基準（2）残存度

# 目次

## (第1分冊)

口絵  
序  
例言  
凡例  
目次

I 調査の概要	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4
II 遺跡の立地と環境	6
III 遺跡の概要	11
IV 発掘された遺構と遺物	18
1. D区の遺構と遺物	18
(1) 住居跡	18
(2) 土壌	102
(3) ビット	120
(4) グリッド出土遺物	120
2. E区の遺構と遺物	153

(1) 土壌	153
(2) ビット	153
(3) グリッド出土遺物	154
3. F区の遺構と遺物	234
(1) 住居跡	234
(2) 炉跡	253
(3) 土壌	253
(4) 配石遺構	254
(5) 土器埋設遺構	256
(6) グリッド出土遺物	257
V 結語	317
(第2分冊)	
写真図版	

# 挿図目次

第1図 発掘調査の流れ	2
第2図 埼玉県の地形図	6
第3図 諏訪木遺跡と周辺の遺跡	8
第4図 周辺の地形	10
第5図 調査区位置関係図	12
第6図 D区(縄文時代)全体図	13
第7図 D区遺物包含土層断面図	14
第8図 E・F区(縄文時代)全体図	14
第9図 E・F区土層断面図(1)	15
第10図 E・F区土層断面図(2)	16
第11図 D区第1号竪穴住居跡(1)	19
第12図 D区第1号竪穴住居跡(2)	20
第13図 D区第1号竪穴住居跡遺物分布図(1)	22

第14図 D区第1号竪穴住居跡遺物分布図(2)	23
第15図 D区第1号竪穴住居跡遺物分布図(3)	24
第16図 D区第1号竪穴住居跡遺物分布図(4)	25
第17図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(1)	26
第18図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(2)	27
第19図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(3)	28
第20図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(4)	29
第21図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(5)	30

第 22 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土器 (6)	第 41 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土製品 (1)
.....31	.....54
第 23 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土器 (7)	第 42 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土製品 (2)
.....32	.....55
第 24 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土偶	第 43 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (1)
.....34	.....56
第 25 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土製品 (1)	第 44 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (2)
.....35	.....57
第 26 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土製品 (2)	第 45 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (3)
.....36	.....58
第 27 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土器 (1)	第 46 图 D 区第 3·4 号竖穴住居跡 (1)
.....37	.....59
第 28 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土器 (2)	第 47 图 D 区第 3·4 号竖穴住居跡 (2)
.....38	.....61
第 29 图 D 区第 1 号竖穴住居跡出土土器 (3)	第 48 图 D 区第 3 号竖穴住居跡出土土器
.....39	.....62
第 30 图 D 区第 2 号竖穴住居跡	第 49 图 D 区第 5 号竖穴住居跡
.....41	.....63
第 31 图 D 区第 2 号竖穴住居跡遺物分布图 (1)	第 50 图 D 区第 3·4·5 号竖穴住居跡出土土器
.....43	.....64
第 32 图 D 区第 2 号竖穴住居跡遺物分布图 (2)	第 51 图 D 区第 4 号竖穴住居跡出土土製品
.....44	.....65
第 33 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (1)	第 52 图 D 区第 4 号竖穴住居跡出土土器
.....45	.....65
第 34 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (2)	第 53 图 D 区第 8 号竖穴住居跡
.....46	.....66
第 35 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (3)	第 54 图 D 区第 8 号竖穴住居跡遺物分布图 (1)
.....48	.....67
第 36 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (4)	第 55 图 D 区第 8 号竖穴住居跡遺物分布图 (2)
.....49	.....68
第 37 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (5)	第 56 图 D 区第 8 号竖穴住居跡出土土器 (1)
.....50	.....69
第 38 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (6)	第 57 图 D 区第 8 号竖穴住居跡出土土器 (2)
.....51	.....70
第 39 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (7)	第 58 图 D 区第 8 号竖穴住居跡出土土器 (3)
.....52	.....71
第 40 图 D 区第 2 号竖穴住居跡出土土器 (8)	第 59 图 D 区第 8 号竖穴住居跡出土土器 (4)
.....53	.....72
	第 60 图 D 区第 8 号竖穴住居跡出土土製品
	.....73
	第 61 图 D 区第 8 号竖穴住居跡出土土器 (1)
	.....74
	第 62 图 D 区第 8 号竖穴住居跡出土土器 (2)
	.....75

第63図	D区第10号竪穴住居跡	76	第86図	D区第12号竪穴住居跡出土土製品	97
第64図	D区第10号竪穴住居跡遺物分布図	77	第87図	D区第12号竪穴住居跡出土石器 (1)	99
第65図	D区第10号竪穴住居跡出土土器 (1)	77	第88図	D区第12号竪穴住居跡出土土器 (2)	100
第66図	D区第10号竪穴住居跡出土土器 (2)	78	第89図	D区第12号竪穴住居跡出土土器 (3)	101
第67図	D区第10号竪穴住居跡出土土器 (3)	79	第90図	D区土壌 (1)	102
第68図	D区第10号竪穴住居跡出土土偶	80	第91図	D区土壌 (2)	103
第69図	D区第10号竪穴住居跡出土土製品	80	第92図	D区土壌 (3)	104
第70図	D区第10号竪穴住居跡出土石器	81	第93図	D区土壌出土遺物分布図 (1)	105
第71図	D区第11号竪穴住居跡	83	第94図	D区土壌出土遺物分布図 (2)	106
第72図	D区第11号竪穴住居跡遺物分布図	84	第95図	D区土壌出土土器 (1)	107
第73図	D区第11号竪穴住居跡出土土器 (1)	85	第96図	D区土壌出土土器 (2)	108
第74図	D区第11号竪穴住居跡出土土器 (2)	85	第97図	D区第31・32・41・42・43・45・ 47・48・52・53号土壌出土土器	109
第75図	D区第11号竪穴住居跡出土土製品	86	第98図	D区44号土壌出土土器	110
第76図	D区第11号竪穴住居跡出土石器	86	第99図	D区49号土壌出土土器 (1)	111
第77図	D区第12号竪穴住居跡	88	第100図	D区49号土壌出土土器 (2)	112
第78図	D区第12号竪穴住居跡出土遺物分布図	89	第101図	D区土壌出土土製品	113
第79図	D区第12号竪穴住居跡出土遺物分布図	90	第102図	D区土壌出土石器 (1)	114
第80図	D区第12号竪穴住居跡出土土器 (1)	91	第103図	D区土壌出土石器 (2)	115
第81図	D区第12号竪穴住居跡出土土器 (2)	92	第104図	D区土壌出土石器 (3)	116
第82図	D区第12号竪穴住居跡出土土器 (3)	93	第105図	D区ピット (1)	118
第83図	D区第12号竪穴住居跡出土土器 (4)	94	第106図	D区ピット (2)	119
第84図	D区第12号竪穴住居跡出土土器 (5)	96	第107図	D区グリッド出土土器 (1)	121
第85図	D区第12号竪穴住居跡出土土偶	97	第108図	D区グリッド出土土器 (2)	122
			第109図	D区グリッド出土土器 (3)	123
			第110図	D区グリッド出土土器 (4)	124
			第111図	D区グリッド出土土器 (5)	125
			第112図	D区グリッド出土土器 (6)	127
			第113図	D区グリッド出土土器 (7)	128
			第114図	D区グリッド出土土器 (8)	129
			第115図	D区グリッド出土土器 (9)	130
			第116図	D区グリッド出土土器 (10)	132

第117図	D区グリッド出土土器 (11)	133	第154図	E区グリッド出土土器 (11)	176
第118図	D区グリッド出土土器 (12)	134	第155図	E区グリッド出土土器 (12)	177
第119図	D区グリッド出土土器 (13)	135	第156図	E区グリッド出土土器 (13)	178
第120図	D区グリッド出土土器	137	第157図	E区グリッド出土土器 (14)	180
第121図	D区第57号土城出土岩版	138	第158図	E区グリッド出土土器 (15)	181
第122図	D区グリッド出土土製器 (1)	140	第159図	E区グリッド出土土器 (16)	183
第123図	D区グリッド出土土製器 (2)	141	第160図	E区グリッド出土土器 (17)	184
第124図	D区グリッド出土土製器 (3)	142	第161図	E区グリッド出土土器 (18)	185
第125図	D区グリッド出土石器 (1)	144	第162図	E区グリッド出土土器 (19)	187
第126図	D区グリッド出土石器 (2)	145	第163図	E区グリッド出土土器 (20)	188
第127図	D区グリッド出土石器 (3)	146	第164図	E区グリッド出土土器 (21)	189
第128図	D区グリッド出土石器 (4)	147	第165図	E区グリッド出土土器 (22)	191
第129図	D区グリッド出土石器 (5)	149	第166図	E区グリッド出土土器 (23)	192
第130図	D区グリッド出土石器 (6)	150	第167図	E区グリッド出土土器 (24)	193
第131図	D区グリッド出土石器 (7)	151	第168図	E区グリッド出土土器 (25)	195
第132図	E区第20号土城	153	第169図	E区グリッド出土土器 (26)	196
第133図	E区ピット	153	第170図	E区グリッド出土土器 (27)	197
第134図	E区ピット遺物分布図 (1)	154	第171図	E区グリッド出土土器 (28)	198
第135図	E区ピット遺物分布図 (2)	155	第172図	E区グリッド出土土器 (29)	199
第136図	E区ピット遺物分布図 (3)	156	第173図	E区グリッド出土土器 (30)	200
第137図	E区ピット遺物分布図 (4)	157	第174図	E区グリッド出土土器 (31)	201
第138図	E区ピット遺物分布図 (5)	158	第175図	E区グリッド出土土器 (32)	202
第139図	E区ピット遺物分布図 (6)	159	第176図	E区グリッド出土土器 (33)	203
第140図	E区ピット遺物分布図 (7)	160	第177図	E区グリッド出土土器 (34)	204
第141図	E区ピット遺物分布図 (8)	161	第178図	E区グリッド出土土器 (35)	205
第142図	E区ピット遺物分布図 (9)	162	第179図	E区グリッド出土土器 (36)	207
第143図	E区ピット遺物分布図 (10)	163	第180図	E区グリッド出土土器 (37)	208
第144図	E区グリッド出土土器 (1)	165	第181図	E区グリッド出土土器 (38)	209
第145図	E区グリッド出土土器 (2)	166	第182図	E区グリッド出土土器 (1)	211
第146図	E区グリッド出土土器 (3)	167	第183図	E区グリッド出土土器 (2)	212
第147図	E区グリッド出土土器 (4)	169	第184図	E区グリッド出土土器製品 (1)	214
第148図	E区グリッド出土土器 (5)	170	第185図	E区グリッド出土土器製品 (2)	215
第149図	E区グリッド出土土器 (6)	171	第186図	E区グリッド出土土器製品 (3)	216
第150図	E区グリッド出土土器 (7)	172	第187図	E区グリッド出土土器製品 (4)	217
第151図	E区グリッド出土土器 (8)	173	第188図	E区グリッド出土土器製品 (5)	218
第152図	E区グリッド出土土器 (9)	174	第189図	E区グリッド出土土器 (1)	221
第153図	E区グリッド出土土器 (10)	175	第190図	E区グリッド出土土器 (2)	222

第191図	E区グリッド出土石器 (3)	223	第215図	F区第14号竪穴住居跡出土遺物分布図	249
第192図	E区グリッド出土石器 (4)	224	第216図	F区第14号竪穴住居跡出土土器 (1)	250
第193図	E区グリッド出土石器 (5)	225	第217図	F区第14号竪穴住居跡出土土器 (2)	251
第194図	E区グリッド出土石器 (6)	226	第218図	F区第14・15号竪穴住居跡出土土製品	252
第195図	E区グリッド出土石器 (7)	228	第219図	F区第14号竪穴住居跡出土石器	252
第196図	E区グリッド出土石器 (8)	229	第220図	F区炉跡	253
第197図	E区グリッド出土石器 (9)	230	第221図	F区第24号土墳	253
第198図	E区グリッド出土石器 (10)	231	第222図	F区第24号土墳出土土器	253
第199図	F区第11号竪穴住居跡	234	第223図	F区第1号配石遺構	254
第200図	F区第11号竪穴住居跡出土遺物分布図	235	第224図	F区第1号配石遺構分布図	255
第201図	F区第11号竪穴住居跡出土土器	236	第225図	F区第1号配石遺構出土土器	255
第202図	F区第11号竪穴住居跡出土土偶	236	第226図	F区第1号土器埋設遺構	256
第203図	F区第11号竪穴住居跡出土土製品	236	第227図	F区第1号土器埋設遺構出土土器	257
第204図	F区第11号竪穴住居跡出土石器	237	第228図	F区グリッド遺物分布図 (1)	258
第205図	F区第12・13号竪穴住居跡	238	第229図	F区グリッド遺物分布図 (2)	259
第206図	F区第12・13号竪穴住居跡出土遺物分布図 (1)	240	第230図	F区グリッド遺物分布図 (3)	260
第207図	F区第12・13号竪穴住居跡出土遺物分布図 (2)	241	第231図	F区グリッド遺物分布図 (4)	261
第208図	F区第12・13号竪穴住居跡出土土器 (1)	242	第232図	F区グリッド遺物分布図 (5)	262
第209図	F区第12・13号竪穴住居跡出土土器 (2)	244	第233図	F区グリッド出土土器 (1)	264
第210図	F区第12・13号竪穴住居跡出土土器 (3)	245	第234図	F区グリッド出土土器 (2)	265
第211図	F区第12・13号竪穴住居跡出土土製品	246	第235図	F区グリッド出土土器 (3)	266
第212図	F区第12・13号竪穴住居跡出土土偶	246	第236図	F区グリッド出土土器 (4)	267
第213図	F区第12・13号竪穴住居跡出土石器	247	第237図	F区グリッド出土土器 (5)	269
第214図	F区第14号竪穴住居跡	248	第238図	F区グリッド出土土器 (6)	270
			第239図	F区グリッド出土土器 (7)	271
			第240図	F区グリッド出土土器 (8)	272
			第241図	F区グリッド出土土器 (9)	274
			第242図	F区グリッド出土土器 (10)	275
			第243図	F区グリッド出土土器 (11)	276
			第244図	F区グリッド出土土器 (12)	277
			第245図	F区グリッド出土土器 (13)	279

第246図	F区グリッド出土土器 (14)	………	280	第261図	F区グリッド出土土製品 (1)	………	298
第247図	F区グリッド出土土器 (15)	………	281	第262図	F区グリッド出土土製品 (2)	………	299
第248図	F区グリッド出土土器 (16)	………	282	第263図	F区グリッド出土土製品 (3)	………	300
第249図	F区グリッド出土土器 (17)	………	284	第264図	F区グリッド出土石器 (1)	………	302
第250図	F区グリッド出土土器 (18)	………	285	第265図	F区グリッド出土石器 (2)	………	303
第251図	F区グリッド出土土器 (19)	………	286	第266図	F区グリッド出土石器 (3)	………	304
第252図	F区グリッド出土土器 (20)	………	287	第267図	F区グリッド出土石器 (4)	………	305
第253図	F区グリッド出土土器 (21)	………	289	第268図	F区グリッド出土石器 (5)	………	307
第254図	F区グリッド出土土器 (22)	………	290	第269図	F区グリッド出土石器 (6)	………	308
第255図	F区グリッド出土土器 (23)	………	291	第270図	F区グリッド出土石器 (7)	………	309
第256図	F区グリッド出土土器 (24)	………	292	第271図	F区グリッド出土石器 (8)	………	310
第257図	F区グリッド出土土器 (25)	………	293	第272図	F区グリッド出土石器 (9)	………	311
第258図	F区グリッド出土土器 (26)	………	294	第273図	F区グリッド出土石器 (10)	………	313
第259図	F区グリッド出土土器 (偶)	………	295	第274図	F区グリッド出土石器 (11)	………	314
第260図	F区グリッド出土土器 (偶)	………	296	第275図	F区グリッド出土石器 (12)	………	315

## 表 目 次

第1表	遺跡名一覧	………	9	第11表	D区第8号竪穴住居跡	柱穴計測表	………	65	
第2表	D区第1号A竪穴住居跡	柱穴計測表	………	20	第12表	D区第8号竪穴住居跡	石器計測表	………	75
第3表	D区第1号B竪穴住居跡	柱穴計測表	………	21	第13表	D区第10号竪穴住居跡	柱穴計測表	………	77
第4表	D区第1号竪穴住居跡	石器計測表	………	40	第14表	D区第10号竪穴住居跡	石器計測表	………	82
第5表	D区第2号竪穴住居跡	柱穴計測表	………	42	第15表	D区第11号竪穴住居跡	柱穴計測表	………	82
第6表	D区第2号竪穴住居跡	石器計測表	………	58	第16表	D区第11号竪穴住居跡	石器計測表	………	87
第7表	D区第3号竪穴住居跡	柱穴計測表	………	61	第17表	D区第12号竪穴住居跡	石器計測表	………	101
第8表	D区第4号竪穴住居跡	柱穴計測表	………	61	第18表	D区土城跡	計測表	………	104
第9表	D区第5号竪穴住居跡	柱穴計測表	………	62	第19表	D区土城跡	石器計測表	………	117
第10表	D区第5号竪穴住居跡	石器計測表	………	65	第20表	D区ピット群	計測表	………	120
					第21表	D区グリッド	石器計測表	………	152
					第22表	E区ピット群	計測表	………	154



第23表	E区グリッド	石器計測表	232	第27表	F区第12・13号竪穴住居跡	石器計測表	
第24表	F区第11号竪穴住居跡	柱穴計測表					247
			234	第28表	F区第14号竪穴住居跡	柱穴計測表	
第25表	F区第11号竪穴住居跡	石器計測表					248
			237	第29表	F区第14号竪穴住居跡	石器計測表	
第26表	F区第13号竪穴住居跡	柱穴計測表					252
			239	第30表	F区グリッド	石器計測表	316

# I 調査の概要

## 1. 調査に至る経過

埼玉県では、「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、県内道路交通網の整備を推進している。本報告書に係る一般県道熊谷羽生線は、平成16年開催の「彩の国まごころ国体」メイン会場へのアクセス道路としても位置づけられ、既存路線の交通渋滞等を解消するバイパスとして計画されたものである。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、こうした県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該道路事業に先立ち、道路建設課長（当時）から平成11年9月9日付け道建第271号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長（当時）あて照会があった。

それに対して文化財保護課は、平成11年12月20日・21日、平成12年11月29日～12月1日、12月4日・7日・8日、平成13年5月22日・23日、及び平成13年8月27日～29日の各時期に遺跡範囲等確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成11年12月28日付け教文第937-1号、平成12年1月19日付け教文第1013号、平成13年7月11日付け教文第556号、及び平成13年9月14日付け教文第307号で、次の内容の回答を行った。

### 1 埋蔵文化財の所在

#### ① 池上遺跡（遺跡コード№59-054）

種別：集落跡・古墳・条里跡

時代：縄文・古墳・奈良・平安

所在地：熊谷市大字上之

#### ② 諏訪木遺跡（遺跡コード№59-019）

種別：集落跡・館跡

時代：縄文・古墳・奈良・平安・中世

所在地：熊谷市大字上之

## 2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

道路建設課と文化財保護課は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課（道路街路課）・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出されて発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの催告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する催告：

平成13年6月7日付け教文第3-173号

発掘調査届に対する指示通知：

平成13年6月7日付け教文第2-12号

平成13年7月2日付け教文第2-36号

平成14年5月23日付け教文第2-18号

平成14年11月8日付け教文第2-87号

平成15年4月11日付け教文第2-1号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

諏訪木遺跡の発掘調査は平成14年5月15日から平成15年9月30日まで実施した。

平成14年度には第9次・第10次調査を行い、平成15年度には12次調査を実施した。

この間、熊谷市教育委員会により第11次調査が実施されている。

発掘調査は道路建設用地内での残土処理および生活道路保存の必要上、D区を6地点、E・F・G区をそれぞれ2地点に区分して実施された。

第9次調査（平成14年5月15日～7月31日）

D区第1・2・3地点を対象に実施した。

調査に先立って平成14年5月中旬から表土除去を開始し、6月上旬までにこれを完了した。これと並行して発掘調査事務所の設置その他の手続きを行った。

6月上旬から調査補助員による遺構確認作業を行い、確認した遺構の精査を行った。遺構は上下2面から検出され、第一面からは古代～中・近世、第二面からは縄文時代の遺構・遺物が出土した。

出土した遺物は出土地点・層位を記録したうえで順次とりあげ、遺構の床および壁の検出を行った。

遺構精査後、写真撮影・図面作成などの記録作業を行い、7月末までに事務所撤収・埋戻しを行って第9次調査を終了した。

第10次調査（平成14年11月1日～平成15年3月27日）

D区第4・5・6地点およびE区第1・2地点を対象に実施した。

平成14年11月、発掘調査事務所の設営に引き続き、D区第4・5地点の表土除去作業を開始した。これに引き続いて調査補助員による遺構確認・精査を行った。

調査区は第1・2地点にそれぞれ隣接しており、やはり上下2面の遺構検出面が存在した。

この部分の記録保存作業は12月後半までに終了、事務所撤収と埋戻しを行って年内の作業を終了した。

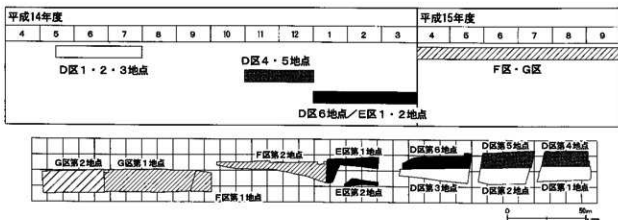
明るる平成15年1月上旬、D区第6地点およびE区第1・2地点の表土除去を行い、補助員による遺構確認作業を開始した。第一面からは弥生～中・近世の遺構遺物が出土した。また、E区の第二面にも縄文時代の遺物包含層の広がりが確認された。

この部分の記録保存作業は3月後半までに終了し、事務所撤収と埋戻しを行って第10次調査を終了した。

第12次調査（平成15年4月8日～9月30日）

F区・G区を対象に実施した。

4月、発掘調査事務所の設営と、F区第1地点およびG区第2地点の表土除去を行った。F区では第一面に弥生～古墳時代の集落跡、第二面に縄文時代



第1図 発掘調査の流れ

の遺構遺物の存在が確認された。G区では第一面に古代の集落跡が確認された。4月末には調査補助員による遺構精査を開始した。

6月上旬にはG区第2地点の記録保存作業を終了し、G区第1地点の表土除去を開始した。この部分には弥生時代～古代の遺構が濃密に分布していた。

同時にF区第2面の掘削を開始し、縄文時代の遺構・遺物が調査区西端のごく限られた範囲に集中していることが確認された。

8月上旬、最後に残ったF区第2地点の表土除去を実施。この部分には古墳時代前期に形成された谷が存在し、G区に隣接する斜面部からは同時期の土器とともに、建材を含む木製品や杭列が出土した。

9月中旬には記録保存作業を終了し、後半には事務所の撤収と埋戻しを行って、発掘調査を終了した。

## (2) 整理・報告書の作成

諏訪木遺跡の整理作業は、平成16年4月8日から平成18年9月30日まで実施した。

対象となったのはD区・E区およびF区第1地点である。G区およびF区第2地点には縄文時代の遺構・遺物が存在しなかったため、整理作業の対象としなかった。

### 平成16年度

D区の遺物と一部の遺構を中心に整理作業を行った。

4月上旬から遺物の水洗・註記および復元作業を行った。これと並行して遺構実測図の整理と修正・補足を行い、一部について第二原図の作成を行った。完成した第二原図はスキャナでデジタル化してパソコンに取り込み、トレース・写植・版組みを経て遺構図版を完成させた。

5月中旬、遺物の実測を開始。一部に機械実測・写真実測を併用した。6月上旬からは遺物実測図のトレースを開始した。器形の復元に至らなかった土器破片については拓影図を掲載することとした。

10月、復元作業の進行に伴い遺物分布図の編集を

開始した。

2月上旬には完成した遺物図の仮版組みを行った。また、復元土器の一部について着色、写真撮影を行った。

### 平成17年度

D区の遺構の残りとしてE区の遺構・遺物を中心に、F区の一部も含め整理作業を行った。年間のおおまかな作業スケジュールは前年度と変わらないが、遺物の実測およびトレースについては前年度に引き続き、ほぼ通年で行った。

3月上旬に遺物の写真撮影を行い、同時に遺構写真を紙焼きして、遺構・遺物ともトリミングを行った。

### 平成18年度

F区の遺構・遺物の整理作業と全体のとりまとめを行った。

4月上旬に遺物の水洗・註記・復元作業を開始し、6月一杯で終了した。

遺物実測およびトレースは前年度から継続して4月当初から行い、7月末でひとまず終了、以後補足的な実測作業を継続した。

遺物実測図は遺構・地点ごとに仮版組みを行い、トレースまで完成したものから正式な版組に移った。

遺構図・遺物分布図については5月一杯で終了し、細部の修正とレイアウトの変更を8月上旬まで行った。

6月上旬から原稿の執筆を開始した。8月以降割付を作成し、完成した図版および原稿を組み入れていった。8月中旬には残るすべての遺物の写真撮影を行い、写真図版の編集を行った。

9月下旬にはすべての図版を完成して割付に組み入れ、遺物を整理・収納し、整理作業を終了した。

その後印刷会社を決定し、3度の校正を経て、平成19年3月に報告書を刊行した。

### 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

#### 平成14年度（発掘調査）

理事長	桐川卓雄	(調査部)	
常務理事兼管理部長 (管理部)	大館健	調査部長	高橋一夫
管理幹	持田紀男	調査部副部長	坂野和信
主 席	田中由夫	主席調査員 (調査第二担当)	昼間孝志
		統括調査員	細田勝
		主任調査員	山本靖
		主任調査員	岡本健一
		調査員	根岸洋

#### 平成15年度（発掘調査）

理事長	桐川卓雄	(調査部)	
常務理事兼管理部長 (管理部)	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部副部長	村田健二	調査部副部長	坂野和信
主 席	田中由夫	主席調査員 (調査第一担当)	昼間孝志
		統括調査員	西井幸雄
		主任調査員	渡辺清志
		調査員	田代雄介

#### 平成16年度（整理報告書作成）

理事長	福田陽充	(調査部)	
常務理事兼管理部長 (管理部)	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部副部長	村田健二	調査部副部長	坂野和信
主 席	田中由夫	主席調査員 (資料整理第二担当)	金子直行
		主任調査員	渡辺清志

#### 平成17年度（整理報告書作成）

理事長	福田陽充	(調査部)	
常務理事兼管理部長 (管理部)	保永清光	調査部長	今泉泰之
管理部副部長	村田健二	調査部副部長	坂野和信
主 席	高橋義和	主席調査員 (資料整理第二担当)	金子直行
		主任調査員	渡辺清志

理 事 長	福 田 陽 充	（調査部）	
常務理事兼総務部長 （総務部）	岸 本 陽 一	調 査 部 長	今 泉 泰 之
総務部副部長	昼 間 孝 志	調査部副部長兼資料活用部副部長	小 野 美 代 子
総務課長	高 橋 義 和	整理第二課長	富 田 和 夫
		主任調査員	渡 辺 清 志

## II 遺跡の立地と環境

諏訪木遺跡は熊谷市街地東部に位置し、南北を荒川と利根川に挟まれた低地帯に所在する。

地形的には寄居町末野付近を扇頂部とする広大な洪積扇状地である荒川扇状地の扇端部であり、さらに熊谷市三ヶ尻付近を扇頂部とする沖積扇状地である新荒川扇状地（熊谷扇状地）が、利根川右岸の妻沼低地へと落ち込む接点にあっている。

以上のような地理的環境ゆえにかつての当該地域には、扇状地に伴う微高地群と、利根川・荒川およびその支流により形成された自然堤防が交錯し、星川・忍川など扇端部湧水群に由来する小河川による開析を受けた複雑な地形が存在したものとみられるが、現在はその大半が地下に埋没しており、耕地化・宅地化による地形の改変が繰り返された結果、一部を除き起伏にとぼしい平坦な地形を呈している。

遺跡はJR熊谷駅北東2キロの地点にあり、北を星川、南を忍川が流れる中間に位置している。

### 2. 歴史的環境

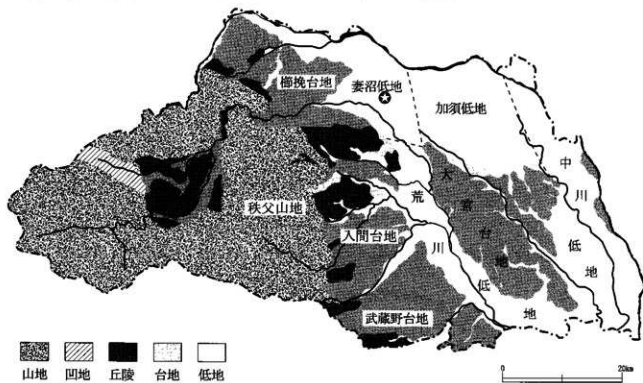
妻沼低地周辺の遺跡については（財）埼玉県埋蔵

文化財調査事業団が行ったスポーツ文化公園および周辺国道・県道関連の報告書において繰り返し記述されており、重複する部分も多いため、ここでは諏訪木遺跡周辺の遺跡分布と古地形とのかかわりについて述べる。第4図は旧陸軍測量部作成の迅速図をもとに旧地形と遺跡立地の関係を示したものである。

荒川旧流路と目される星川は、遺跡の北500mを大きく蛇行しつつ東へと流れている。一方南約1.5キロのところには忍川がやはり東の行田市街地方面へと流れている。

両河川の間には灌漑用水として整理されたものも含め無数の小河川が流れているが、そのほとんどは東および南へと流れて周辺の耕地をうるおし、最終的に忍川へと合流している。

これらのうち最も大きなもののひとつが、箱田付近に湧水点を持って諏訪木遺跡と前中西遺跡の間を縫って流れる衣川であり、現在の熊谷ミニ工業団地の東で大きく南南東へとカーブして忍川へと注いで



第2図 埼玉県の地形図

いる。もうひとつが今日の成田用水路となる河川で、諏訪木遺跡および池上遺跡の北縁をかすめて東流する。現在は荒川六堰頭直工から取水して古見用水路へと接続しているが、迅速図作成時点では現東京電力熊谷送電所付近で星川から分かれて現在の流路を東流し、いくつかの水路に分かれて小敷田遺跡方面に南下する。これはその位置関係から星川の旧流路を開削したものと考えられる。

既に述べたとおり、新荒川扇状地扇端部の複雑な地形は、現在そのほとんどが地下に埋没しているが、第4図では迅速図作成時点における集落域＝微高地と思われる範囲を網掛けで示した。

前述の星川旧流路に沿っていくつかの自然堤防が分布しており、諏訪木遺跡・池上遺跡・成田氏館跡・宮の裏遺跡・中条遺跡の各遺跡はいずれもこの自然堤防上に立地していることがわかる。

諏訪木遺跡の立地する秋葉付近では、自然堤防の南縁は樹枝状に開析されている。谷の最も深く入り込んだ部分は現成田小学校南の校庭付近にあたっている。

これは今回の発掘調査におけるG区第1地点に当たっており、平安期の住居跡が点在していたものの遺構の分布がもっとも希薄な部分であり、縄文期の生活面にいたっては皆無であった。

微高地上と考えられる部分にも、南北方向に走る旧流路や谷地形がいくつも確認された。これらの地形にはいくつかの異なる時代に属するものが存在しており、ごく限られた範囲内で時代の異なる自然堤防が複雑に重なり合っていることが明らかになった。

一方、南の忍川沿いにも自然堤防の発達した部分が発見されており、平戸遺跡や小敷田遺跡は忍川の自然堤防および後背湿地上に営まれた遺跡であること

がわかる。

また、弥生時代中～後期の集落と墓域を検出した前中西遺跡は忍川の支流である衣川の自然堤防上に立地しているものと考えられ、諏訪木遺跡の南半分も同河川の自然堤防に乗っている可能性が高い。

興味深いのは、熊谷市街中央部の熊谷氏館跡を別にすれば小敷田遺跡より上流の忍川沿いに見るべき遺跡がほとんど存在していないことで、むしろ衣川筋の南西寄りに弥生の平戸遺跡・前中西遺跡が立地している点である。

忍川の旧流路とみられるものは小敷田遺跡および池上遺跡で確認されており、現在の古宮古堰付近で星川から分岐して南流していたことが小敷田の報告者の吉田により想定されている。古墳時代前期を主体とする多量の木製品が出土しているが、遺物の時代は古くは弥生時代中期にまでさかのぼる。

一方で前中西遺跡南縁ないし北縁を経由して平戸遺跡北縁→小敷田遺跡南縁に至る、現在の衣川の原形となる流れが存在したものと考えられる。

諏訪木遺跡では、熊谷ミニ工業団地建設時の熊谷市教育委員会による調査で古墳時代後期を中心に縄文時代後期から古代にかけての遺物を出土する河道が発見され、農具をはじめとする多量の木製品が出土した。

また、今回の報告に関わる(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査でもF区とG区をへだてる河道から多量の木製品とともに古墳時代前期の土器が出土した。

このほか、古宮遺跡では古宮古堰から東流する用水路を挟んで2地点から縄文時代晩期中葉の遺物集が確認されている。旧流路の両岸に遺物が廃棄されたものだろうか。

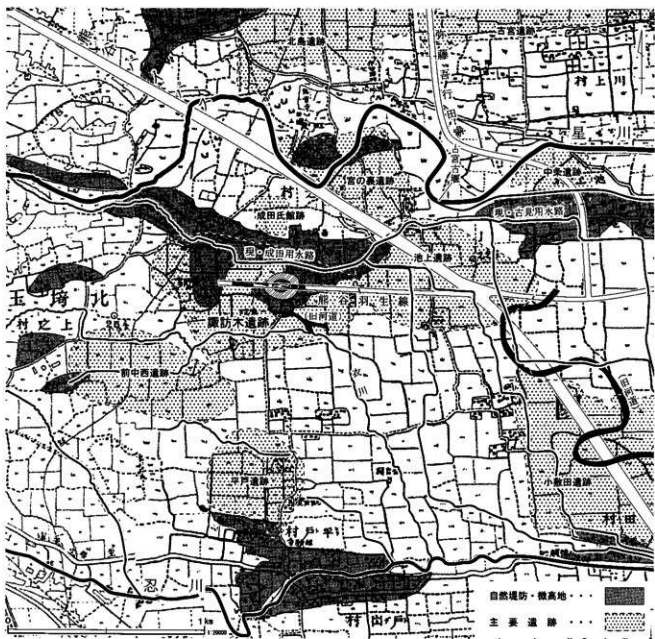




第3図 諏訪木遺跡と周辺の遺跡

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	諏訪木遺跡	縄文後期・晩期、弥生中期、古墳後期、中世、近世	23	池守遺跡	弥生、古墳、平安以前、中世、江戸以降	45	中耕地遺跡	古墳、平安
2	前中西遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	24	天神遺跡	弥生～平安	46	西通遺跡	古墳
3	成田氏館跡	室町	25	赤城遺跡	古墳、奈良、平安	47	横塚山古墳	古墳
4	池上遺跡	縄文後期、弥生中期、古墳後期、中世、近世	26	中条遺跡	古墳前期・後期、奈良、平安、鎌倉、室町	48	道ヶ谷戸遺跡	10世紀
5	平戸遺跡	弥生中期	27	中条氏館跡	奈良、平安、鎌倉、室町、江戸	49	弥藤吾新田遺跡	古墳、歴史時代
6	宮の裏遺跡	古墳後期	28	船塚遺跡	5世紀後半～6世紀初頭	50	下田町遺跡	縄文後期、弥生中期後半・後期末～古墳前期、古墳中期、後期、奈良、平安、鎌倉、室町、近世
7	上河原遺跡	中近世	29	中島遺跡	古墳後期、奈良、平安	51	玉太西遺跡	古墳後期
8	古宮遺跡	縄文～中近世	30	南河原桑里遺跡	8世紀～9世紀に形成された桑里遺構	52	北郭遺跡	
9	箱田氏館跡	平安	31	持田藤の宮遺跡	平安初期、室町	53	とうかん山古墳	6世紀後半
10	河上氏館跡	鎌倉	32	市田氏館跡	室町	54	雷電山古墳	5世紀中葉
11	上川上東遺跡		33	久下氏館跡	鎌倉	55	三千塚古墳	5世紀中葉～7世紀後半
12	北島遺跡	弥生、古墳、奈良、平安、室町	34	光屋敷遺跡	古墳後期、中世	56	秋葉塚	6世紀～7世紀後半
13	天神東遺跡	古墳前期	35	忍城跡	中世、近世	57	村岡館跡	平安
14	田谷遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	36	石原古墳群	古墳	58	中条古墳群	古墳前期・後期
15	中条桑里遺跡	古墳前期～中近世	37	坪井古墳群		59	肥塚古墳群	古墳後期
16	肥塚館跡	鎌倉	38	広瀬古墳群	古墳後期	60	上之古墳群	古墳後期
17	出口下遺跡	古墳後期、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸	39	玉井古墳群	古墳後期	61	大塚古墳群	
18	出口上遺跡	古墳後期、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸	40	鶴森入胎遺跡	古墳～平安	62	高畑遺跡	古墳
19	肥塚中島遺跡	古墳後期、奈良、平安、鎌倉、室町	41	奈良東耕地遺跡		63	中郭遺跡	
20	八幡山遺跡		42	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後期、奈良、平安	64	酒巻古墳群	古墳 6世紀後半
21	熊谷氏館跡	奈良、平安、鎌倉	43	東通遺跡	平安	65	高条古墳群	古墳 6世紀後半
22	小敷田遺跡	弥生中期、古墳初頭～前期・後期、奈良、平安	44	一本木前遺跡	縄文、弥生、古墳前期・中期・後期、奈良、平安、中世以降			

第1表 遺跡名一覧



第4図 周辺の地形

### III 遺跡の概要

諏訪木遺跡は新荒川扇状地の扇端部に位置し、旧星川・旧忍川系の河川群が形成した自然堤防上に位置している。周囲は荒川のもたらした膨大な量の河川堆積物に覆われ、近世・近代以降の人為的な地形の影響ともあいまって一見平坦な地形を見せている。

遺跡は南北750m・東西1キロ以上という広大な範囲に広がっているが、II章でみてきたように微視的には複数の地形区分にまたがっていることが明白であり、遺構・遺物およびそれらを乗せている地形の時間的・空間的な分布は多様性に富んでいる。

今回の発掘調査の原因となった奥道熊谷羽生線バイパスの予定地は、遺跡の北縁から約300~100m南を走っている。それは旧星川流路に伴う自然堤防群を、ほぼ東西に横断しているものと考えられる。

結果として、遺跡東端で池上遺跡と内容的に連続するA区から、西端で前中西遺跡と対峙するG区までの間にいくつもの低地部と微高地部がくりかえしあらわれることとなった。それらの微地形群のなかで、本報告書の内容に関わる縄文時代の生活面の分布状況は次のようなものであった。

最東端のA区、およびA・B区の中間の低地部では縄文時代の遺構・遺物は存在しない。上層の調査でも古代の水田以外の遺構は発見されておらず、一貫して低湿な環境であったことがわかる。

B・C区では縄文時代後~晩期の遺構遺物が調査された。西のB区では南東にひらけた二面の段状地形(上面は標高21.8m、下面は標高21.5m付近)に晩期の土壌群が展開していた。

この東に続くC区では、標高22.2mを最上部とする斜面部で後期の遺物包含層が確認され、加曾利B2式から高井東式・安行1式を主体とする多量の土器が出土した。

居住施設をもち、出土遺物も生産用具が中心であったことから、場の性格は生業関連施設であった

ことが想定され、主たる居住空間からはやや離れたことが想定された。

B区西端から距離にして約40m、標高21.5m前後の凹地を隔てたD区第2・第5地点には、再び標高22.2m付近を最高点とする微高地が存在し、ここ以後~晩期の集落跡が乗っていた。

B・C区では検出されなかった竪穴住居跡10軒が調査され、少なくとも26基の土壌が検出された。遺構はすべて後期中葉から晩期中葉にかけて形成された遺物包含層中に形成されていた。

B区の晩期埋葬空間の延長であると同時に、これに対応する主たる居住域と考えることができる。

一方で、遺構の時期は後期末~晩期前葉が大半であり、包含層の形成が本格化したのも曾谷・高井東期であって後期中葉の遺物が僅少であったことなどから、C区の遺物包含層(生産施設)との関係性は薄いと考えられ、加曾利B式段階の集落の所在については現在のところ明らかになっていない。

D区西半(第3・第6地点)は深い低地部となっており、遺構は存在せず本格的な遺物包含層の形成もみられなかったが、それでも若干の遺物の散布が確認できた。

縄文時代の生活面がふたたび現われるのはE区西半からF区第2地点の東端にかけての一角で、D区の集落部分からは約80mを隔てている。

等高線にして22.5m前後を最高点とする微高地上に晩期前葉を中心とする集落が存在し、少なくとも4軒の竪穴住居跡が調査された。住居跡と認識されなかった部分についても地山黄褐色シルト上に炉跡や焼土面を多数検出しており、D区の微高地と遜色ない住居跡群が存在したことは間違いない。

集落部分から東の斜面にかけては後期後葉~晩期中葉の遺物包含層が存在していた。

集落の外側は北西に面した緩斜面となり、この斜面の肩部からF区第1号配石遺構が発見されたこと

は非常に興味深い。ムラの外縁部に一種の祭祀空間が置かれたものであろうか。ここから7mほどで地形は急峻な斜面につきあたり、現地地表4m近い低地部へと一気に下降している。遺物の散布はこの崖線を境にしてほとんど止まるものとみられる。

これより西、F区第2地点中心部以西は縄文時代にはほとんど低地部となっていたようだ。特に第2地点西部のL-25グリッド付近に設けたテストピットでの層位観察では弥生時代の生活面以下は幾重にも堆積した砂・シルト層となっていた。

F区第1地点の古墳時代前期の河道を挟んでさらに西、G区にあって縄文時代の生活面は発見できなかった。一帯は縄文時代晩期中葉以降もたらされた多量の河成シルト層に覆われ、この地域に人類の痕跡を見るには弥生時代中期における集落の形成を待たねばならない。

弥生～古墳時代の調査終了後、広範囲にわたって重機による探索を行ったが、縄文時代の層は少量の炭化物が散布する青白色シルト面として確認できる

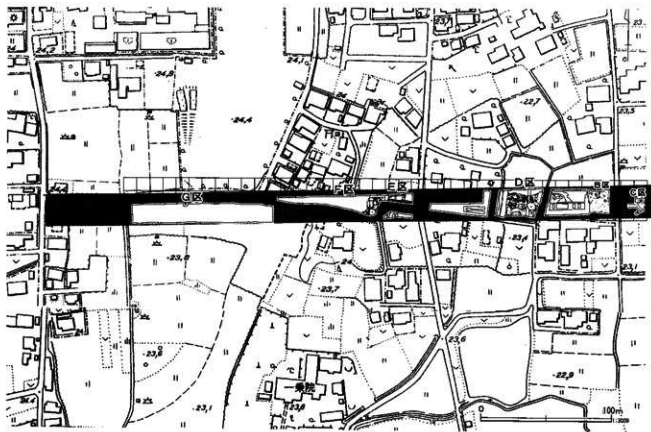
ものの遺構・遺物の散布はみられず、一貫して河川の後背湿地のような地形であったものと思われた。

熊谷羽生線バイパスの建設予定地はG区西端をもって終わっているが、ここから諏訪木遺跡の西境界線まではさらに150mほどが残されている。

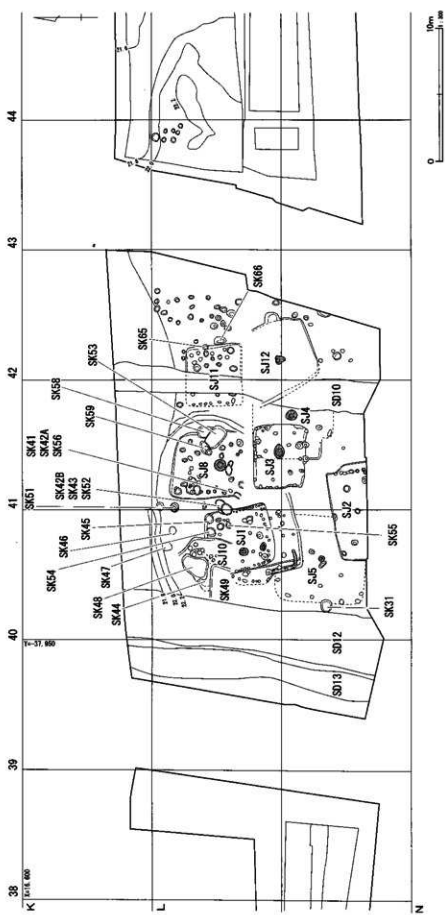
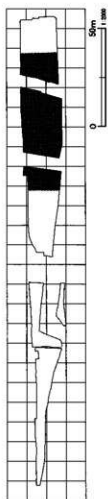
第II章における古地相復元ではこの部分にも集落が占地し得る安定した微高地の存在が推定された。

周辺の発掘調査成果と重ね合わせてみるに、弥生～古代の集落の存在はもちろんであるが、縄文時代においても遺構・遺物が存在する可能性は極めて高い。

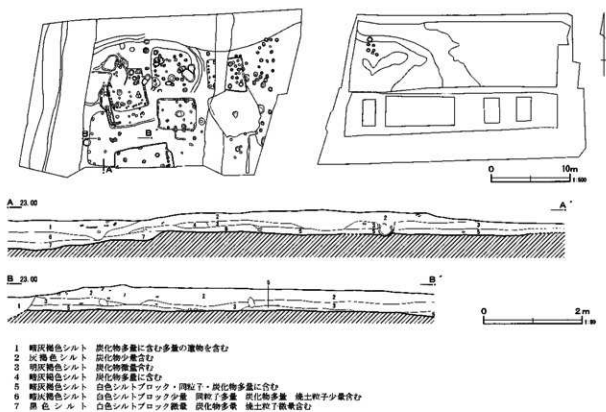
以上、今回の開発に伴う諏訪木遺跡の調査では、大きく三つのエリアからなる縄文時代の生活面を検出することができた。特にD区における後晩期集落とE・F区におけるそれは、時間的にも重なる部分が大きく、間を隔てる低地部にあって遺物の散布が確認されるなど、一連の集落と考えるのが自然であるように思われる。



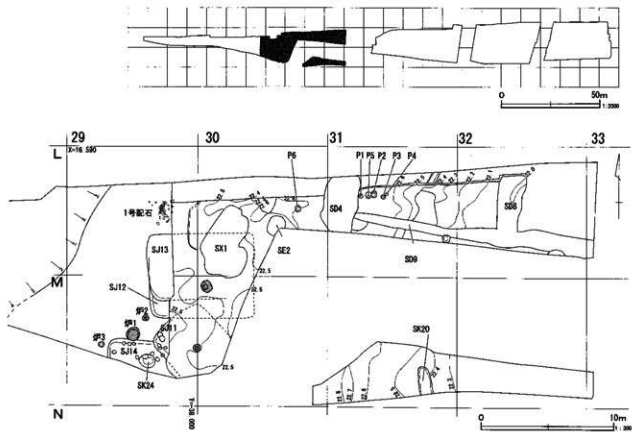
第5図 調査区位置関係図



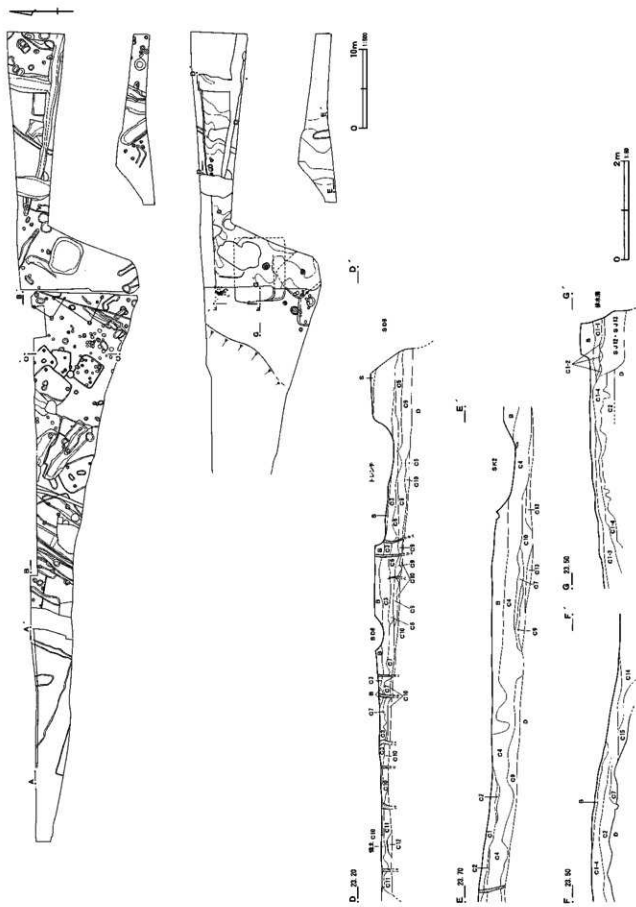
第6图 D区(縄文時代)全体图



第7図 D区遺物包含層土層断面図

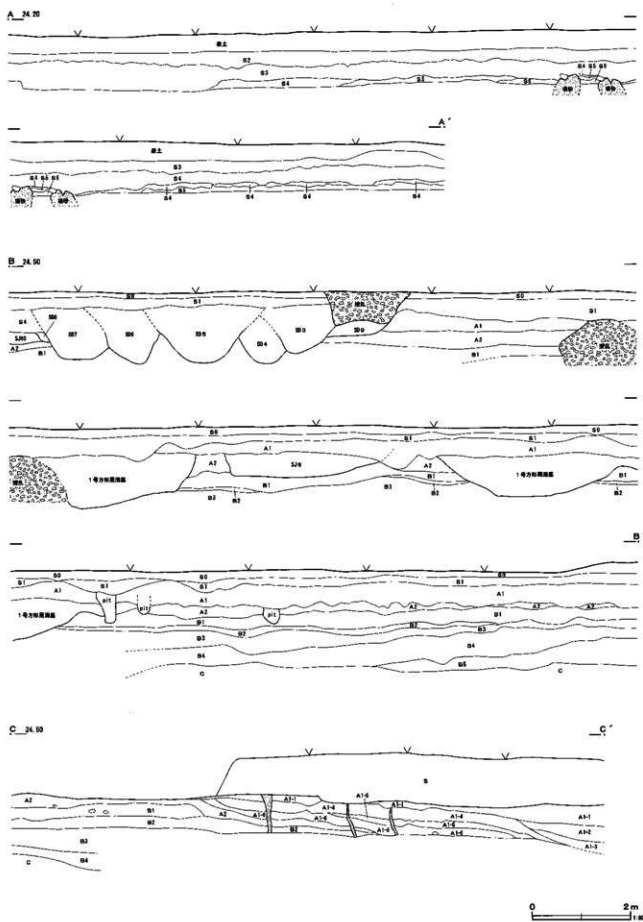


第8図 E・F区(縄文時代)全体図



第9图 E·F区土层断面图(1)





第10图 E·F区土层断面图(2)

F区においては現代から縄文時代までの連続した土層を観察・記録することができた。各層の時代については、出土遺物や狭雑物、位置関係などから推測したものである。

S層…平安以降現代までの耕作土および盛土等である。陶磁器類をはじめ各時代の遺物を出土する。

S0 現代の道路に伴う混土礫層

S1 黒褐色シルト 浅間A火山灰混入 近現代水田耕作土

S2 灰色シルト 浅間A火山灰混入 近世水田耕作土

S3 灰褐色シルト 炭化物少量含む 中世水田耕作土

S4 灰褐色シルト 浅間Bを多量に含む 平安時代水田耕作土

S5 灰褐色シルト 炭化物少量含む 平安時代水田耕作土

S6 灰褐色シルト 平安水田床土

A層…弥生～中世の遺物包含層で、複数の生活面を含む。

A1-1 黄褐色砂質シルト 炭化物少量 弥生～鬼高の遺物を少量含む

A1-2 暗褐色灰褐色シルト 焼土粒子少量粗粒炭化物多く含む

A1-3 黄褐色砂質シルト 炭化物少量含む 遺物ほとんど含まない

A1-4 黒褐色シルト 焼土・炭化物多く含む 多量の遺物を含む

A1-5 黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む 遺物少量含む

A1-6 暗褐色灰褐色砂質シルト 焼土ブロック・焼土粒子多く含む 多量の遺物を含む

A2 黄褐色砂質シルト 第1面の遺構確認面であり、それ自身弥生時代の遺物を包含する

B層…縄文時代晩期以降弥生時代中期までの間に堆積した無遺物層で、第1面と第2面を分離している。微高地部分では層厚20cm程度の砂質シルト層だが、低地部では性状の異なるいくつもの層にわかれ、層厚も数mにおよぶ。

なお、集落部分では最下層から縄文時代晩期中葉の遺物が出土することもある。

B1 暗褐色砂質シルト

B2 黒褐色砂質シルト 薄い縞状のラミナが発達する

B3 暗茶褐色粘土層

B4 白色粘土層

B5 灰白色粘土層

C層…微高地部では縄文時代晩期の遺物包含層を構成し、大量の遺物を包含する。焼土やD層の黄褐色シルトが挟在し、複数の生活面と遺構覆土を含んでいるものとみられる。低地部では青灰色の粘土質シルト層へと遷移する。

C1-1 暗灰褐色シルト

C1-2 暗褐色シルト

C1-3 黒褐色シルト

C1-4 黒褐色シルト

C2 暗褐色シルト 黄褐色シルトブロック・炭化物若干含む

C3 明灰褐色シルト 鉄分の沈殿が著しい 炭化物・焼土少量含む

C4 黒褐色シルト 炭化物粒子やや多く含む

C5 青灰褐色シルト 炭化物少量含む

C6 灰黄褐色シルト 黄褐色シルト粒子・炭化物少量含む

C7 暗黄褐色シルト 炭化物粒子微量含む ほとんど遺物含まない

C8 暗灰褐色シルト 炭化物粒子少量含む

C9 黒色シルト 炭化物多量に含む

C10 青灰褐色シルト 遺物含まない

C11 暗青灰褐色シルト 炭化物やや多く含む SJ12・13の覆土か

C12 黒褐色シルト 炭化物粒子少量含む SJ12・13の覆土か

C13 緑灰褐色シルト 遺物含まない

C14 灰色シルト 焼土ブロック・炭化物極少量含む

C15 暗灰褐色シルト 炭化物やや多く焼土ブロック極少量含む

D層…縄文時代の遺構が存在する微高地部では黄褐色～灰黄褐色の粘土質シルトであり、低地部では青灰色の砂質シルト～砂層へと遷移する。

## IV 発見された遺構と遺物

### 1. D区の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

##### D区第1号竪穴住居跡 (第11図～16図)

L-40・L-41グリッドに所在する。第10号竪穴住居跡に切られており、また、第42B・43B・45・49・52・54号土壌とも切り合い関係にある。

隅丸長方形の竪穴住居跡が少なくとも2軒切り合っているものと考えられ、北側のものを1A号、南側のものを1B号と命名した。

第1A号竪穴住居跡は長軸5.3m、短軸5.0m、深さ最大13cmを測る。主軸方向はN-12°-Wを指すものとみられる。

第1B号竪穴住居跡は長軸6.3m、短軸5m、深さ最大26cmを測る。主軸方向はN-15°-Wを指すものとみられる。

両者の新旧関係は、第1A号の埋没過程で、その覆土の一部掘り込んで第1B号がつくられたものと考えられる。

炉跡は2箇所で見出された。北寄りの石囲い炉を炉1、南寄りの地床炉を炉2とそれぞれ命名した。土層観察の所見や位置関係から、炉1・2は第1B号竪穴住居跡に属するものと考えた。

また、第1A号竪穴住居跡内で検出された柱穴P12の東縁で焼土が検出されており、これが同住居跡に属する炉跡の痕跡と考えられる。

遺物は主に安行3a式の新段階から3b式の土器が出土している。

##### D区第1号竪穴住居跡出土遺物 土器 (第17図～23図)

1は大波状口縁深鉢で、口縁から胴部中段までが残存する。5単位の波状口縁を呈し、胴部中段に括れを持つ。

折返口縁を呈し、篋状工具先端による縦位の刺突が二段に巡る。波頂部には刻みを持つ扇状突起が配され、形態化した豚鼻突起が重畳する。

胴上半部は縄文施文の扁平な隆帯による弧状の区画が巡り、下端を幅広の帯縄文で区画、両者の接点に刻みを持つ小環状の貼付文が配される。

区画の下には弧状の沈線が巡り、さらに1条の沈線が巡って、両者の間に縄文が施文される。

それぞれの弧状区画の接点には豚鼻突起が配される。地文はLR単節の縄文で、横位回転で施文される。安行3b式である。

2は水平口縁深鉢である。底部欠失するが、口縁のみ軽微に外反する寸胴の器形をなす。口端上に刻みを持つ横瘤を3個一単位で配し、前面にも1個配する。口縁直下に平行沈線を巡らせ、対弧状の短沈線で区切って楕円形の区画文を構成する。

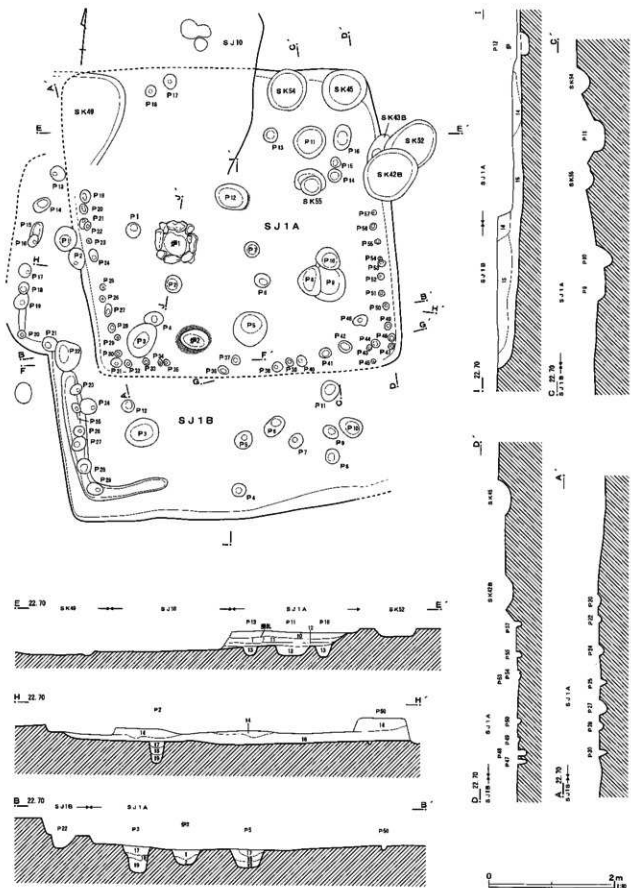
胴上半部には上下を平行沈線で区画した文様帯を持ち、横位の弧線文を上下に交互配置する。口縁と胴部の文様帯の境には豚鼻突起を配する。

胴部中段以下には縦位の集合沈線文を配する。単調な弧線文の連続や、地文縄文を喪失する等、比較的新しい要素と考えられ、安行3a式の新しい部分ないし3b式の土器と考えた。

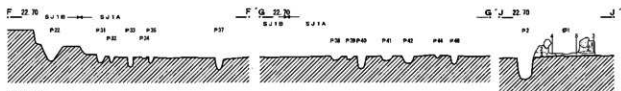
3も上に類似の深鉢である。単調かつ直線的に開くバケツ状の器形で、口縁上に突起を持たず、頸部の楕円形区画も持たない。

口縁直下を密接した2条の沈線で区画し、胴上半部の文様帯は上下対向する連続弧線文が描かれ、上下を平行沈線により区画する。地文は縦位の集合沈線文である。

4は台付鉢とみられ、口縁から胴部中段までが残存する。水平口縁上にB突起が並び、口縁直下に縄文帯を持って、胴部との境を1条の沈線で区画する。胴部の文様帯はJ字状の沈線を上下対向させた入組文で、間隙に三叉文を充填する。文様帯下端は1条の沈線で区画される。



第11图 D区第1号竖穴住居跡 (1)



- D区 S1-1
- 1 暗灰色土層 : 炭化物粒子多く含む。鉄分含む。砂質。粘性なし。締まりあり
  - 2 黒色土層 : 焼土粒子少量含む。炭化灰(焼物繊維)極めて多く含む
  - 3 黒褐色土層 : 焼土粒子、炭化物粒子多く含む。粘性あり。締まりあり
  - 4 暗褐色土層 : 暗褐色土粒子多く含む。炭化物粒子少量含む。砂質。締まりあり
  - 5 暗褐色土層 : 砂質土層。風じりなし
  - 6 暗褐色土層 : 灰褐色土粒子含む。焼土粒子、炭化物粒子多く含む。粘性なし。締まりあり
  - 7 暗褐色土層 : 炭化物粒子(6層より大粒)含む。粘性なし。締まりあり
  - 8 暗褐色土層 : 青灰色ブロック、焼土粒子、炭化物粒子多く含む。締まりあり
  - 9 黒色土層 : 炭化物粒子多く含む
  - 10 黒色土層 : 暗褐色土層層状に含む。炭化物粒子含む。締まりあり
  - 11 暗褐色土層 : 青灰色土、炭化物粒子含む。締まりあり
  - 12 暗褐色土層 : 焼土粒子、鉄分粒子少量含む。炭化物粒子多く含む
  - 13 暗褐色土層 : 炭化物粒子少量含む。粘性あり。締まりあり
  - 14 灰褐色土層 : 炭化物少量含む。砂質含む
  - 15 暗褐色土層 : 焼土、炭化物粒子含む
  - 16 暗褐色土層 : 炭化物多く含む
  - 17 暗褐色土層質土層 : 青灰色ブロック含む。炭化物粒子多く含む。粘性あり
  - 18 暗褐色土層質土層 : 1層よりも青灰色ブロック多く含む。粘性あり
  - 19 暗褐色土層質土層 : 1層よりも炭化物粒子多く含む。粘性あり

- D区 S1-181
- 1 暗褐色土層 : 炭化物粒子少量含む。自然堆積。粘性なし。締まりあり
  - 2 暗褐色土層 : 炭褐色土粒子・焼土粒子少量含む。炭化物粒子・鉄分多く含む。粘性あり。締まりあり
  - 3 暗褐色土層 : 炭褐色土粒子少量含む。炭化物粒子多く含む。粘性あり。締まりあり
  - 4 暗褐色土層 : 焼土粒子少量含む。炭化物粒子多く含む。粘性あり。締まりあり
  - 5 炭褐色土層 : 穴を受けているためややチャリヤする。この層の砂床と考えられるまたは、使用に際する炭化物層。炭化物粒子少量含む。地山と考えられる

- D区 S1-182
- 1 黒褐色土層 : 青灰色粘上ブロック含む。焼土粒子、炭化物粒子多く含む
  - 2 黒褐色土層 : 1層よりも炭化物粒子多く含む

第12図 D区第1号竪穴住居跡 (2)

第2表 D区第1号A竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.24	0.22	0.25	Pit30	0.12	0.10	0.12
Pit 2	0.28	0.24	0.35	Pit31	0.18	0.14	0.19
Pit 3	0.58	0.42	0.43	Pit32	0.12	0.10	0.12
Pit 4	0.30	0.22	0.35	Pit33	0.13	0.10	0.14
Pit 5	0.56	0.54	0.30	Pit34	0.10	0.06	0.02
Pit 6	0.24	0.22	0.17	Pit35	0.10	0.10	0.08
Pit 7	0.24	0.22	0.08	Pit36	0.18	0.10	0.06
Pit 8	0.42	0.38	0.51	Pit37	0.14	0.12	0.16
Pit 9	(0.66)	(0.56)	0.14	Pit38	0.17	0.16	0.05
Pit10	0.38	0.34	0.22	Pit39	0.14	0.12	0.04
Pit11	0.54	0.52	0.17	Pit40	0.18	0.16	0.18
Pit12	0.52	0.40	0.16	Pit41	0.18	0.16	0.05
Pit13	0.24	0.22	0.17	Pit42	0.20	0.18	0.10
Pit14	0.22	0.22	0.11	Pit43	0.08	0.08	0.03
Pit15	0.16	0.14	0.14	Pit44	0.12	0.11	0.04
Pit16	0.40	0.26	0.20	Pit45	0.07	0.06	0.05
Pit17	0.22	0.20	0.21	Pit46	0.22	0.16	0.13
Pit18	0.20	0.16	0.13	Pit47	0.10	0.09	0.14
Pit19	0.20	0.14	0.04	Pit48	0.12	0.12	0.13
Pit20	0.16	0.12	0.05	Pit49	0.12	0.10	0.04
Pit21	(0.16)	(0.12)	0.08	Pit50	0.12	0.09	0.06
Pit22	0.14	0.08	0.03	Pit51	0.10	0.09	0.06
Pit23	0.08	0.06	0.09	Pit52	0.11	0.10	0.08
Pit24	0.20	0.14	0.07	Pit53	0.12	0.10	0.04
Pit25	0.10	0.09	0.13	Pit54	0.06	0.06	0.05
Pit26	0.10	0.08	0.05	Pit55	0.08	0.08	0.07
Pit27	0.20	0.10	0.11	Pit56	0.10	0.10	0.05
Pit28	0.14	0.10	0.04	Pit57	0.08	0.08	0.08
Pit29	0.08	0.08	0.08				

第3表 D区第1号B型六住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.40	0.36	0.53	Pit16	0.20	0.16	0.19
Pit 2	0.32	0.26	0.39	Pit17	0.22	0.20	0.22
Pit 3	0.52	0.48	0.16	Pit18	0.18	0.16	0.10
Pit 4	0.22	0.22	0.18	Pit19	(0.24)	(0.22)	(0.21)
Pit 5	0.30	0.28	0.2	Pit20	0.14	0.14	0.22
Pit 6	0.38	0.24	0.55	Pit21	(0.22)	(0.22)	(0.15)
Pit 7	0.26	0.20	0.13	Pit22	0.50	0.44	0.22
Pit 8	0.24	0.20	0.09	Pit23	0.18	0.17	0.12
Pit 9	0.24	0.18	0.13	Pit24	0.28	0.25	0.20
Pit10	0.38	0.29	0.12	Pit25	0.18	0.11	0.04
Pit11	0.34	0.28	0.10	Pit26	0.18	0.16	0.05
Pit12	0.20	0.18	0.04	Pit27	0.26	0.18	0.03
Pit13	0.24	0.24	0.12	Pit28	0.24	0.22	0.05
Pit14	0.28	0.19	0.19	Pit29	0.24	0.20	0.21
Pit15	(0.40)	(0.18)	(0.16)				

地文はLR単節横位回転の縄文である。安行3a式の新段階と考えた。

5～8は台付鉢の脚部である。内、5～7は球形の脚部が一旦括れ、直線的に開く裾へと接続するものである。

5は球胴部分に三角形ないし三叉状の透かしが設けられる。裾部は縄文帯となって三段の列点文が巡り、上端を1条の沈線で区画する。晩期前葉に属する。

6は裾部分を欠失する。透かしは円窓をはさんで三角形の透かしが斜め対向する魚眼三叉文のモチーフをとり、上下にゆるやかな弧線文が巡って、崩れた入組文を構成する。地文を持たない点や崩れた入組文から安行3a式新段階と考えた。

7も裾部分を欠失する。三日月形の透かしを基点に弧線文が描かれ、隣接する樽状の帯縄文と併せて入組文を構成するものとみられる。晩期前葉の土器である。

8は円錐形の脚部で、文様を持たない。晩期前葉～中葉の無文土器の一種であろう。

9～11は丸底の浅鉢である。いずれも全容を知りうる資料である。

9は碗形の胴部に外反する短い口縁部が接続する。小波状口縁を呈し、直下に縄文帯を持つ。胴上半部には斜位の紡錘モチーフが樽状に走り、間際に

三叉文が重疊する。文様帯下端は帯縄文により区画される。地文はLR単節の縄文である。安行3a式である。

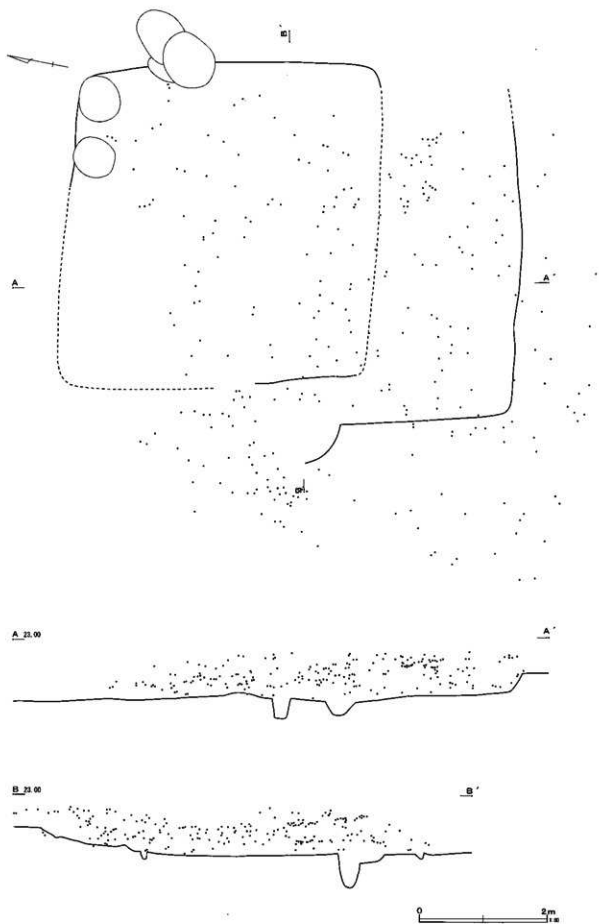
10も口縁外反する浅鉢である。3個一単位の瘤を持つ山形突起が1単位のみ配され、直下に貫通孔を伴う。

口縁部に縄文帯を持ち、胴上半部に3条の平行沈線が巡るが、中段の沈線の一部が変化して直線的な入組三叉文ないし魚眼三叉文を構成する。文様帯下端は帯縄文で区画され、胴下半部は縄文帯となる。地文はL無節横位回転の縄文である。安行3a式の新段階と考えた。

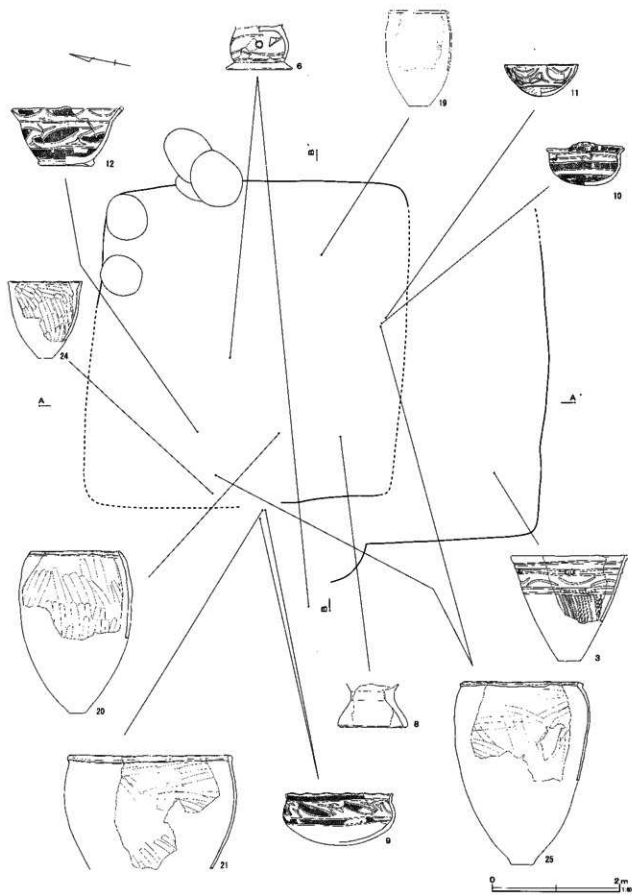
11は半球状の浅鉢である。口縁直下に平行沈線の弧状モチーフ、胴下半部に横位の沈線が巡り、間際に9に類似の対向三叉文が描かれる。地文を持たず、篋状工具の調整痕が観察される。安行3a式であろう。

12は円形の高台を持つ浅鉢で、台付鉢の体部に類似の器形である。水平口縁上に1単位ないし2単位の山形突起を配する。口縁部には弧状の区画が巡り、縄文が充填される。

胴上半部は単段の連結弧線文が巡り、間際に上下連結し交差する三叉文が描かれる。文様帯上下は横位の沈線で区画され、胴下半部は縄文帯となる。安行3a式である。

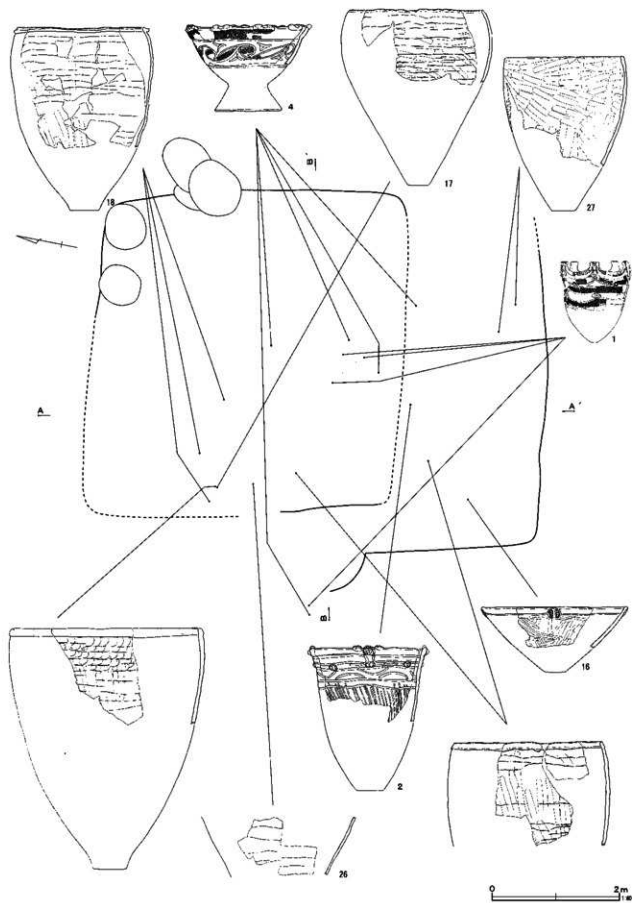


第13图 D区第1号竖穴住居跡遺物分布图(1)

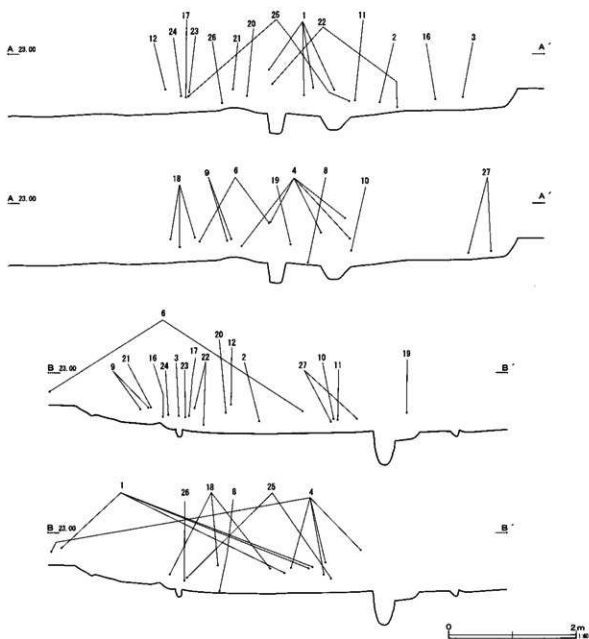


第14图 D区第1号竖穴住居跡遺物分布图(2)





第15图 D区第1号竖穴住居跡遺物分布图(3)



第16図 D区第1号竪穴住居跡遺物分布図(4)

13は注口土器の頸部であろう。口縁部との境を隆帯で区画し、平行沈線間に弧状沈線の区画が描かれる。晩期前葉の土器であろう。

14は人面注口土器である。口縁から胴下半部までが残存する。口縁直下にミズク土偶に類似の顔面表現がみられ、左右に環状の貼付文による耳の表現も伴っている。

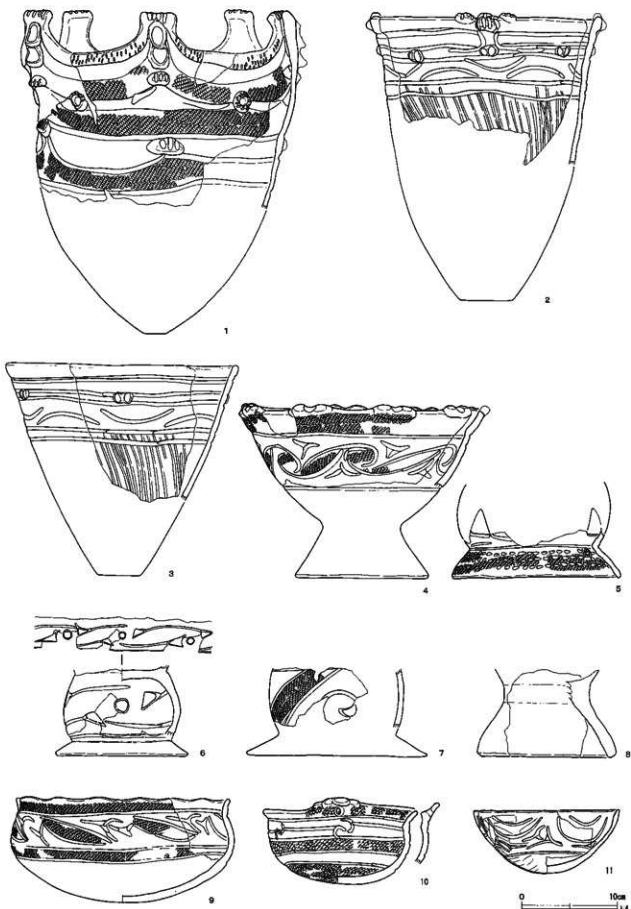
顔面の直下に注口部を持ち、下部に刻みを持つ縦瘤が左右対称に付される。

地文を持たず、隆帯状に細かな刻みが施される。安行3b式期とみられる。

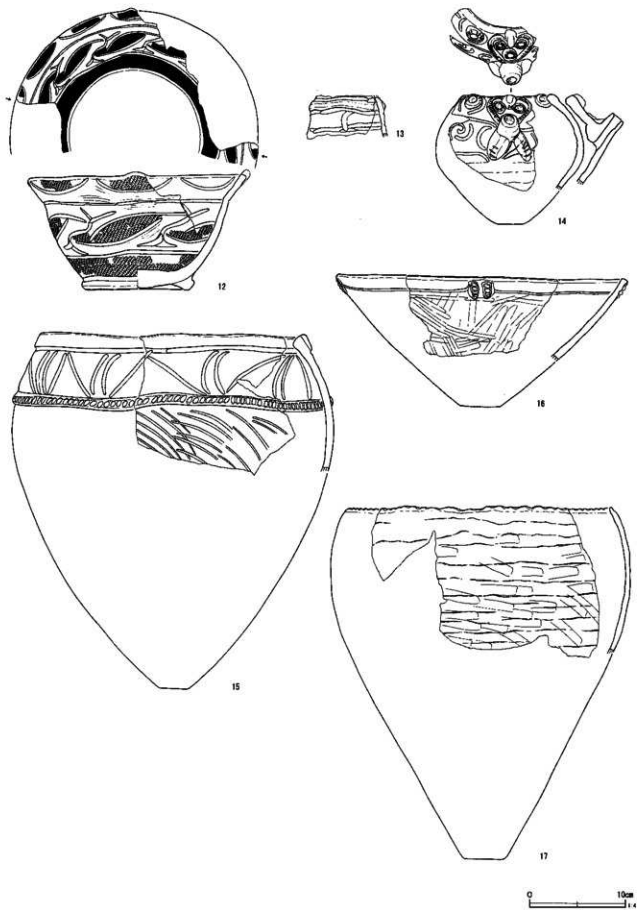
15は晩期前葉の紐線文土器である。口縁直下に刻み無しの隆帯と1条の沈線が巡る。

胴上半部には平行沈線による弧状モチーフと斜行沈線が交互に配置され、下端を刻みを持つ隆帯で区画する。区画から下には斜位の集合沈線文が施される。

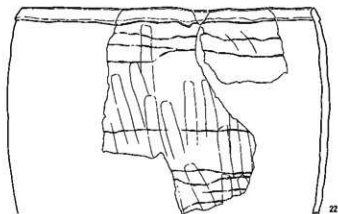
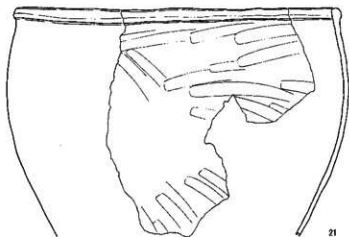
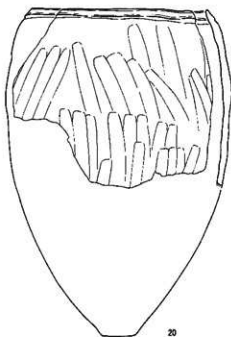
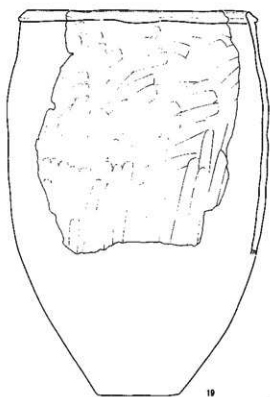
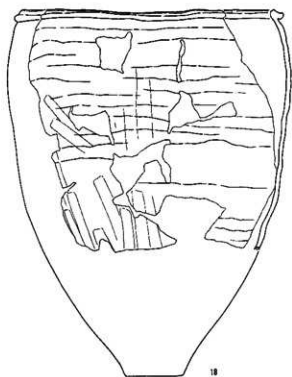
16は半粗製の浅鉢である。口縁から胴部中段に



第17图 D区第1号竖穴住居出土土器(1)



第18图 D区第1号整穴住居跡出土土器(2)



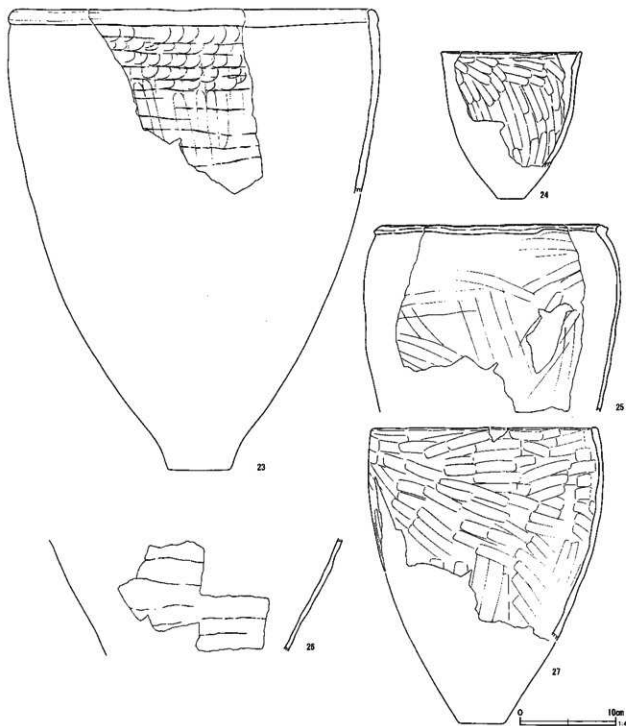
第19图 D区第1号竖穴住居跡出土土器(3)

かけて残存し、ごく軽微に内彎しつつ直線的に開く。横走する沈線の末端が対向三叉文を構成し、刻みを持つ縦瘤が二個一単位で配される。胴部には篋状工具による調整痕が観察される。晩期前葉のものとみられる。

17~20は晩期前葉の粗製土器で、無文の深鉢であ

る。すべて単圓に内彎しつつ立ち上がる深鉢で、18のように中段に緩い括れを持つ個体がしばしばみられる。

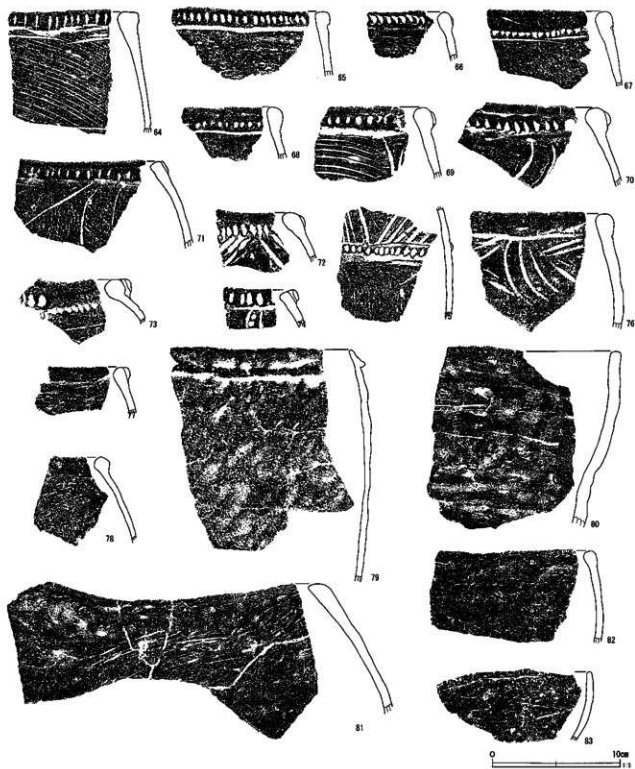
口縁部の特徴からいくつかのタイプに分けられ、末端の反り返る折り返し口縁(18・19・22・20?)、丸みを持つ折り返し口縁(21・23・25)、単純口縁(24・



第20図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(4)



第21网 D区第1号整穴住居跡出土土器 (5)



第22図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(6)

27)等が存在する。17は不整な小波状口縁である。

胴部には器面調整以外の特徴に乏しく、篋状工具を用いた粗雑な撫で調整が共通してみられる。輪積み痕を残す土器(17・18・22・23・26)がしばしばみられ、粘土紐の圧着痕と思われるひだ状の痕跡(23)

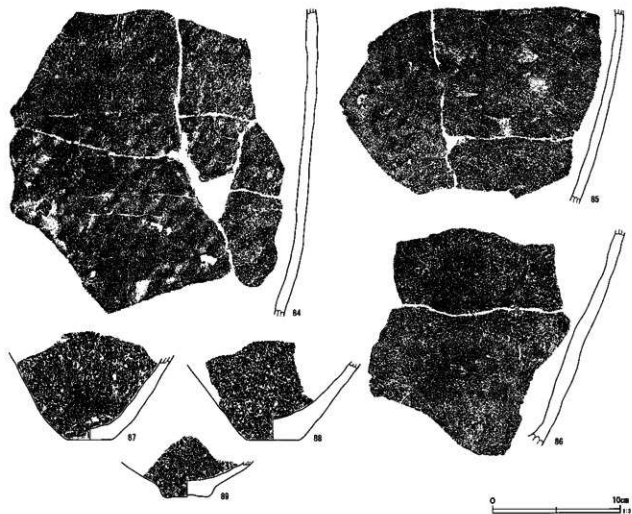
が観察されるものも少なくない。

多くはシルト質の粗悪な胎土で焼成も不良、胴下半部を中心に二次焼成に伴う風化がみられる。

28以下は破片資料である。

28は高井東式の大波状口縁深鉢で、さかざき状の





第23図 D区第1号竪穴住居跡出土土器(7)

中空突起で、口縁への接続部分に3条の隆帯が巡り、前面に縦瘤が配される。29は安行1式の大波状口縁深鉢で、重畳する縦瘤の上に貫通孔を持つ。30・31は後期安行式の砲弾形深鉢で、水平口縁上に刻みを持つ突起が配される。

32~36は晩期前葉における大波状口縁深鉢で、1と同一個体らしき36(1と同一個体か)が安行3b式、他は3a式であろう。44~50はこれに対応する胴部破片で、やはり1に類似の47が安行3b式である他は安行3a式の可能性が高い。

37~43は晩期前葉の水平口縁深鉢で、外反口縁のものと砲弾形のものが存在する。37・38は矮小な縦瘤が配される。41は爪形文列を持つ平行沈線で口縁直下を区画する。

51~55は安行3a式に特徴的な磨消縄文土器群である。対を成す突起を伴う水平口縁、ないしは緩い波状口縁をなし、三叉文、入組文、連続弧線文などからなる文様帯が多段に展開する。53は台付鉢の可能性があり、54は連続弧線文で、接点に三叉文が配される。

56~61は半粗製の土器群である。大型の縦瘤を配する56は安行1式に伴うものとみられるが、それ以外は晩期前葉であろう。

57は口縁内彎して折り返し口縁をなし、末端に刻みを巡らせて刻みを持つ縦瘤を二個一対で配する。

58は同様の縦瘤を持つ口縁部である。60は口縁直下に棒状工具押圧を伴う隆帯が巡る。61は先端が反り返る折り返し口縁で、半截竹管状工具先端の刺突

が施される。

62~76は紐線文土器である。口縁直立し、斜位の刺突列のみで器面を区画する62・63は後期安行式に伴うものとみられる。

64以下は晩期前葉のものであろう。内彎口縁で、口唇断面肥厚し、刺突列や刻みを伴う隆帯が巡る。

68~75は胴上半部に文様帯を持つ。69は横位の集合沈線文を地文に対弧状モチーフを描く。それ以外は無文地に沈線文を描くもので、磨消縄文はみられない。70は平行沈線による「ノ」の字状モチーフ、72・75は斜行する集合沈線帯がみられる。74は平行沈線間に円形の刺突文が並ぶ。

71は横位の山形文と弧線文が重畳する。76も同種のモチーフだが、口縁の刺突列を持たず、文様帯下端が開放しており、安行3c式に下る可能性がある。

77~86は晩期前葉の粗製無文深鉢である。77・78は丸みを持つ折り返し口縁、79は先端が反り返る折り返し口縁である。80~83は単純口縁で、80は胴中段に括れを持つ。81は極端な内彎口縁である。83は浅鉢の可能性もある。

胴部には篋状工具の調整痕やひだ状の圧着痕が特徴的にみられ、84は輪積み痕を残している。

87~89は無文の底部である。87・88は深鉢、円形の高台を持つ89は注口土器とみられる。

#### 土製品

##### 土偶 (第24図)

1はミズク型中空土偶の右肩部である。現存する最大高6.5cm、最大幅5.9cm、厚さ3.9cmを測る。暗褐色を呈し、一部に赤彩痕を残す。器壁は厚ぼったく、焼成は良好である。安行3b期のものと思われる。

2は左脚部で、胴部との接着部分から剝離している。ひとがたを構成する各部がある程度乾燥した段階で接合され、化粧粘土を被せて整形したものとみられる。現存する最大高4.2cm、最大幅2.7cm、厚さ1.7cmを測る。胎土に微量の砂を含み、焼成は良好である。曾谷~安行1式期のものと思われる。

##### 耳飾 (第25図1~11)

1~7は無文、8~11は文様を持つ個体をそれぞれ一括した。

1~3は中実白状の耳飾である。

1は側縁部中段に袂りを持ち、断面上下端が張り出す。上面ドーム状に張り出し、篋状工具の調整痕が観察される。裏面は緩やかに窪み、指頭痕による凹凸がみられる。完形で、最大径4.8cm、高さ2.5cmを測り、重さ71.8gを量る。

2は1に類似する中実白状の耳飾である。上下面ともゆるやかに窪み、上面は篋状工具による調整痕、裏面には指頭痕が観察される。未図化ながら側縁部にも部分的に篋状工具による面取りが施されている。最大径5.1cm、高さ2.4cmを測り、重さ98.7gを量る。

3は1・2に比べやや扁平で、側縁の袂りが弱い。上面窪みを持ち、成形時の指頭痕を残す。下面は比較的平坦で、篋状工具の調整痕と指頭痕が観察される。最大径5.1cm、高さ2.3cmを測り、重さ98.7gを量る。

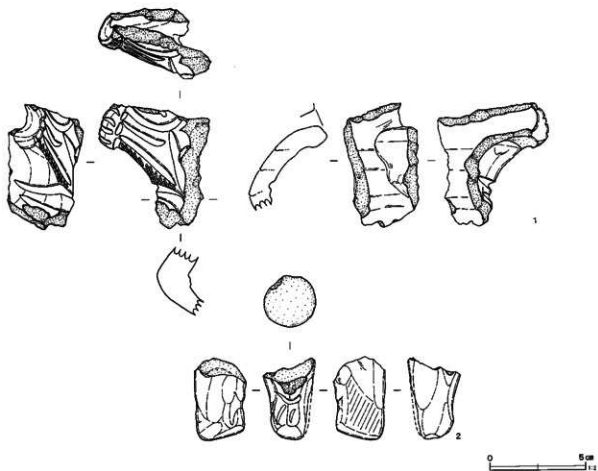
4~7は中央に貫通孔を持つ滑車状の耳飾である。

4は直径と高さの差が少ない円筒状の器形である。断面扁平で、上下端が軽微に外反する。全周の四分の一強が残存し、最大径4.1cm、高さ1.8cmを測る(以下、破損品の最大径は推定値)。

5・6は断面上端が肥厚して内側へ折り返す断面「r」字状のタイプである。いずれも側縁に袂りを持たず直行する。5は全周の五分の一強が残存し、最大径7.4cm、高さ2.1cmを測る。6は折り返し部の末端が鉤状に下垂する。全周の四分の一強が残存し、最大径6.6cm、高さ1.9cmを測る。

7は断面三角形で、側縁の上下端が突出する。全周の四分の一強が残存し、最大径8.2cm、高さ1.8cmを測る。表面に二次焼成による赤化が観察され、表面が風化している。

8・9は断面扁平で軽微に外反し、内面上半に文様帯を持つ。



第24図 D区第1号竪穴住居跡出土土偶

8は横流れの魚眼三叉文ないし対向三叉文が描かれるものとみられる。断片的な資料で直径を復元し得ないが、高さ2.1cmを測る。

9は横位のわらび手沈線を中心に矢羽根状の沈線文が描かれる。全周の六分の一弱が残存し、最大径5.0cm、高さ2.0cmを測る。胎土はきわめて砂質で、表面の風化が著しい。

10は中央に透かし彫りによる文様を持ち、これに沿ってわらび手状の沈線が描かれる。外縁の四隅に刻みを持つ。胎土は緻密で、表面平滑に仕上げられている。全周の四分の一程度が残存し、最大径6.1cm、高さ2.0cmを測る。

11は断面上端が肥厚して文様帯を持ち、隆帯+沈線による横S字モチーフを挟んで三叉文が対向す

る。全周の七分の一程度が残存し、最大径6.3cm、高さ1.3cmを測る。

ミニチュア土器 (第25図12・13)

いずれも無文の深鉢底部である。12は底部周辺に成形時の指頭痕が残る。13はわずかに上げ底状を呈し、篋状工具による縦位の調整痕が観察される。

土製円盤 (第25図14～第26図18)

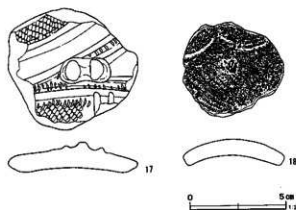
貼り瘤や突起をモチーフとして中央に取り込んだものが多く見られる。

14は高井東式の口縁部文様帯で、円形の突起を中央に取り込む。最大径6.5cmを測り、44.9gを量る。15は安行1式の水平口縁深鉢口縁部で、縦瘤を中央に取り込む。最大径4.9cmを測り、重さ39.5gを量る。

16は安行2式の大波状口縁深鉢の波頂部を使用す



第25图 D区第1号整穴住居跡出土土製品 (1)



第26図 D区第1号竪穴住居跡出土土製品(2)

る。双頭状の突起と重畳する貼り瘤を中央に取り込んでいる。最大径5.9cmを測り、重さ54.7gを量る。17も安行2式の口縁部文様帯で、三角形区画文交点に配された豚鼻突起を中央に取り込んでいる。最大径6.8cmを測り、重さ45.3gを量る。18は磨消縄文の胴部で、最大径5.3cmを測り、重さ24.3gを量る。

#### 石器

##### 石鏃(第27図1)

チャートの横長剥片を使用し、背面に主要剥離面を残す。短い逆刺が作り出されており、凸基ないし平基有茎の石鏃とみられる。茎部はほぼ表面のみからの剥離で半円形に造り出されている。

右側縁部の加工が全くなされていないことから未製品と考えたが、先端が欠損しており、この状態で使用に供された可能性もある。

##### 石核(第27図2)

チャート製の石核である。ドーム状の背面に対し腹面の平坦な亀の甲形を呈する。背面の一部に筋理面を残しており、比較的小型の原礫を半割した上で加工したものと思われる。

背面右側縁に細かな剥離が集中しており、スクレイパーとして使用された可能性が考えられる。

##### 石錘(第27図3)

ホルンフェルスの横長剥片を使用した石錘である。表面および左側縁部に自然面を、裏面に主要剥

離面を残し、下側縁部のみ粗い剥離により整形するほかは、ほぼ原形のまま使用している。

長短軸それぞれ一箇所づつに挟りを造り出しており、十字に結束して使用したものとみられる。重さ21.1gを量る。

##### 打製石斧(第27図4)

短冊形の打製石斧とみられるが、刃部を大きく欠損する。背面に広く自然面を残しており棒状の原礫を長軸方向に半割したうえで加工したものと思われる。側縁は細かな調整剥離によって整形されており、敲打による潰しは行われていない。

##### 砥石(第27図5)

無溝の砥石である。扁平な砂岩の自然石を無加工で使用したものとみられる。平面隅丸台形を呈するが、長軸方向一端を折損する。表面のみ短軸方向への線状痕が観察される。

##### 磨石(第27図6～28図12)

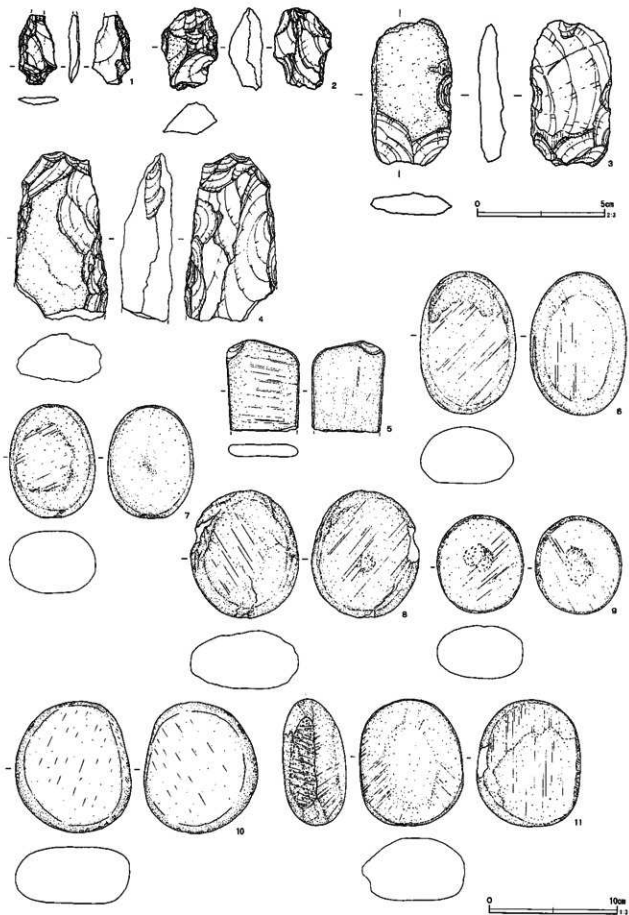
大半が安山岩の自然礫を無加工で使用している。多くに被熱を伺わせる赤変がみられる。

6は楕円形の自然礫をほぼ無加工で使用したものとみられる。両面使用され、特に裏面は磨耗により平坦となっている。全面に赤変が観察される。

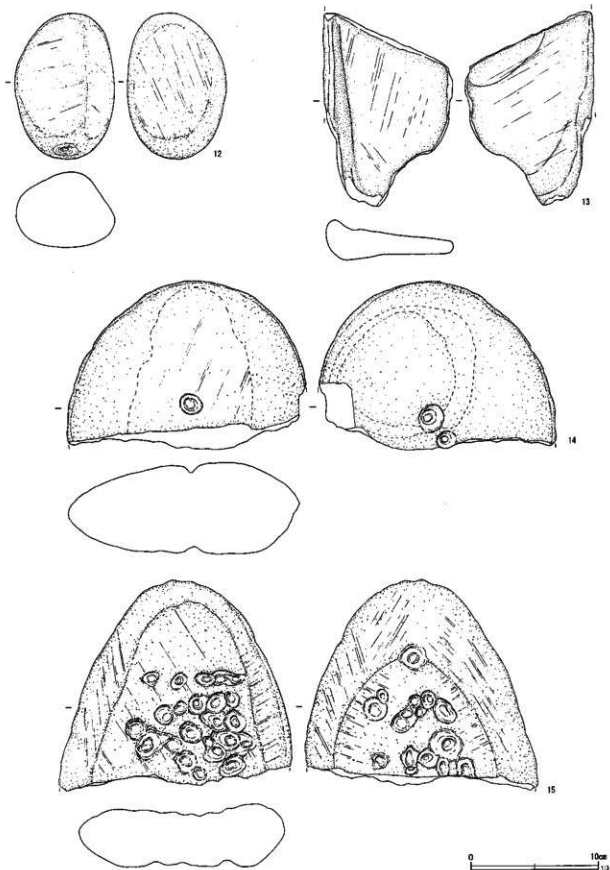
7は楕円形の自然礫を使用している。両面使用され、特に表面が平滑になっている。長軸両端に敲打が観察され、叩石として転用された可能性が考えられる。ほぼ全面に赤変とスズ状の黒色付着物が観察される。

8は閃緑岩を使用している。楕円形の自然礫を使用するが、風化による崩壊が顕著である。両面使用され、特に裏面が平滑となっている。表面中央に凹部がみられるが、凹石への転用によるものか、風化による剥落であるかは判別できなかった。表面の一部が赤変し、裏面は全体に黒変している。

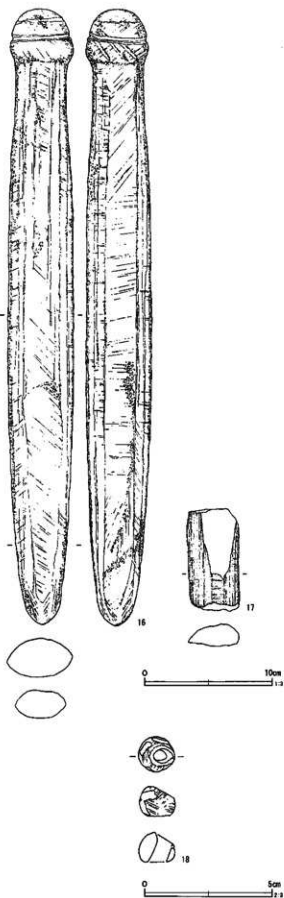
9は閃緑岩を使用する。平面楕円形を呈し、両面使用されるほか、側縁もすべて使用され平坦となっている。表裏面の中央にあばた状の敲打が観察され、凹石への転用が開始されているものとみられる。



第27图 D区第1号整穴住居跡出土石器(1)



第28图 D区第1号竖穴住居跡出土石器(2)



第29図 D区第1号整六住居跡出土石器(3)

10は不整形円形の礫を使用する。両面使用されるほか、右側縁部も使用され平坦となっている。表面から左側縁にかけて赤変がみられ、裏面にはスス状の黒色付着物が観察される。

11は楕円形の自然礫を使用する。両面使用され、特に裏面は平滑となっている。左側縁も使用され、著しい摩滅が観察される。裏面に広くスス状の付着物が観察される。

12は断面三角形の自然礫が用いられ、三面にわたり使用される。凹石としても転用されており、長軸の一端に凹部が存在する。全体が赤変しており、表面の風化が著しい。

#### 石皿 (第28図13~15)

13は長方形で縁辺部の隆起を伴った硯状の石皿であったとみられ、左下側縁部から磨面中央にかけての部分のみが残存している。裏面も使用され、ゆるやかに窪んでいる。破断面にも磨耗が及んでおり、破損後もなんらかの形で使用が続けられたものとみられる。粗粒の砂岩が使用される。

14は楕円形の自然礫を無加工で使用したものとみられ、全体の約二分の一程度が残存する。両面にわたり使用が徹底され、側縁断面始刃状を呈する。

凹石として転用されており、表面に1箇所、裏面に2箇所の凹部が観察される。また、両面にそれぞれスス状の付着物が観察される。

15は多孔質の安山岩を使用する。ひし形に近い楕円形を呈し、表裏それぞれに明瞭な磨面を形成している。側縁部にも磨耗が観察され、自然礫をある程度整形したうえで使用しているものとみられる。また、表裏それぞれを多孔石として転用している。表面を中心に黒変が観察される。

#### 石棒・石剣 (第29図16・17)

16は完形の有頭石棒である。頭部は半球形で、周囲に2条の沈線が巡る。裏面胴部との境の隆起部分に斜め方向の沈線らしきものが観察される。胴部との境には明瞭な段を形成する。

胴部は研磨による整形が徹底され、側縁断面は始



第4表 D区第1号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石鏃?	(2.7)	1.5	0.4	2.0	B 3-②	チャート
2	石核	3.2	2.2	1.4	7.9		チャート
3	石鏃?	5.7	3.2	0.9	21.1	C-c-①	ホルンフェルス
4	打製石斧	(13.1)	7.2	4.0	456.1	A-a-③	ホルンフェルス
5	磨石	(7.1)	5.7	1.0	74.2	B-②	砂岩
6	磨石	11.1	7.5	4.6	616.7	B 2-①	安山岩
7	磨石	8.8	6.7	4.8	393.1	B 2-①	安山岩
8	磨石	9.9	8.5	4.5	512.8	B 2-③	安山岩
9	磨石	7.5	6.7	4.1	306.6	A 2-①	閃緑岩
10	磨石	10.4	9.0	4.5	604.3	B 2-①	安山岩
11	磨石	9.9	8.1	4.9	593.3	B 3-①	安山岩
12	磨石	11.4	7.7	6.0	692.3	B 2-①	安山岩
13	石皿	(15.4)	(10.4)	3.2	353.4	B-b-④	安山岩
14	石皿	(13.1)	18.7	7.5	2288.7	A-a-②	閃緑岩
15	石皿	(16.3)	18.3	5.1	1535.8	A-a-②	安山岩
16	石棒	47.7	5.2	3.2	1185.8	①	緑泥片岩
17	石剣	(8.0)	4.1	(1.7)	89.0	④	緑泥片岩
18	垂飾	1.4	1.4	1.2	1.7		滑石

刃状を呈する。

全体に赤変が観察され、表面の風化が著しい。

17は石剣ないし石棒の胴部破片である。裏面から左側縁部にかけて剥落しているが、扁平な断面形状から石剣に分類した。

垂飾 (第29図18)

滑石製の垂飾である。球状の胴に対し、斜め方向に穿孔されている。きわめて軟質の石材が使用されており、内面には使用に伴う摩滅が顕著にみられる。

一部に赤変が観察され、風化による表面の剥落が著しい。

D区第2号竪穴住居跡 (第30図～32図)

M-40・M-41グリッドに所在する。隅丸長方形の竪穴住居跡であったとみられるが、南寄りの大半が調査区域外に存在している。

床面はほぼ平坦である伊跡は検出されておらず、調査区域外に存在している可能性が高い。床面上から17本のピットが検出されているが、P 2・P 5・P 6が主柱穴とみられ、それ以外は大半が東壁寄りに集中する壁柱穴である。

長軸7.5m、短軸5.5m、深さ最大35cmを測る。主軸方向はN-10°-Wを指す。

遺物は後期末葉から晩期前葉の土器が出土しているが、主体をなすのは安行3 a式である。

D区第2号竪穴住居跡出土遺物

土器 (第33図～40図)

1は半粗製の水平口縁深鉢で、口縁から胴部中段にかけて残存する。胴部中段に緩やかな括れを持ち、口縁内彎する。口縁直下に押圧を伴う縦瘤を4単位配するほか文様はみられない。器面には篋状工具による撫で調整痕が観察される。また、口縁にふきこぼれによるものと思われる黒色物質の付着が観察される。安行1式期のものか。

2～5は晩期安行式に属する大波状口縁深鉢である。

2は5単位の波状口縁で、波頂部に双頭状の突起を配し、前面に二段の豚鼻突起を配するほか、波底部にも単独の豚鼻突起を配する。

胴上半部は帯縄文による三角形区画が構成され、胴部中段には楕円形区画文が巡り、区画の接点には縦横の突起が重畳する。胴下半部は縄文帯となり、上端を1条の沈線で区画する。地文はRL単節の縄文である。安行3 a～3 b式であろう。

3は口縁から胴下半部まで残存するものとみられる。比較的ゆるやかな多単位の波状口縁で、折り返し口縁にならない等口縁部の造りは簡略であり、また文様が胴部中段から上に圧縮されているため腰高な印象を与える土器である。

波頂部に双頭状の突起を配し、直下に二段の豚鼻

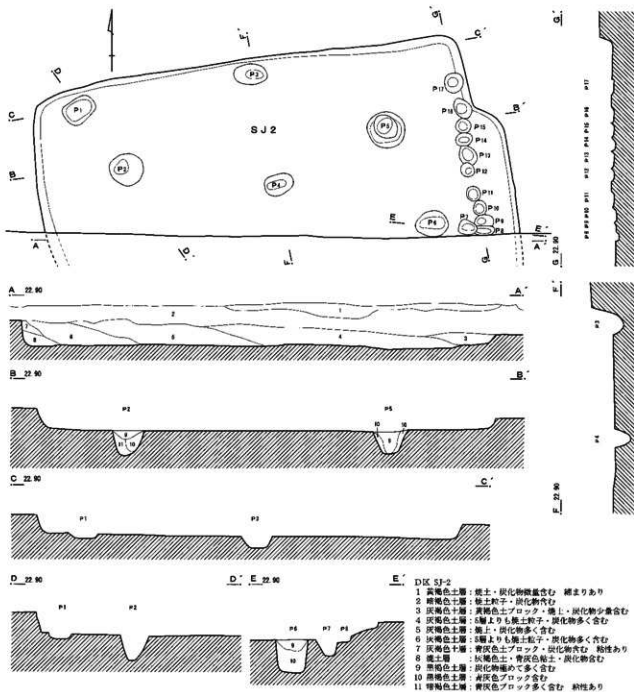
突起を配する。胴上半部は縄文帯の中に三角形の区画をパネル的に浮き立たせる手法を取っている。

胴部中段には磨消縄文による楕円形の区画が巡る。区画の接点には豚鼻突起と刺突を持たない円形の貼り瘤がとりまぜて配される。胴下半部には縄文が施文されず、篋状工具による髪状の圧着痕が残されている。地文はし無節の縄文である。安行3b式

と考えられる。

4は口縁から胴部中段まで残存する。胴部に括弧を持たず、口縁はいちじろしく肥厚して直立する。

4単位の大波状口縁で、波頂部に刻みを持つ扇状突起を配し、直下に縦長の豚鼻突起を配する。胴上半部には帯縄文の三角形区画が構成され、交点に豚鼻突起が配される。地文はRL単節の縄文である。安行



第30図 D区第2号竪穴住居跡

第5表 D区第2号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.52	0.36	0.10	Pit10	0.22	0.20	0.05
Pit 2	0.52	0.50	0.40	Pit11	0.24	0.20	0.03
Pit 3	0.50	0.32	0.18	Pit12	0.24	0.20	0.04
Pit 4	0.44	0.32	0.26	Pit13	(0.26)	0.26	0.03
Pit 5	0.56	0.56	0.38	Pit14	0.26	0.20	0.06
Pit 6	0.50	0.40	0.53	Pit15	0.22	0.22	0.04
Pit 7	0.28	0.20	0.27	Pit16	0.34	0.24	0.08
Pit 8	(0.28)	0.10	0.10	Pit17	0.30	0.28	0.11
Pit 9	0.28	0.16	0.02				

3 b式である。

5は口縁から胴下半部まで残存するが、口縁上の突起を欠損する。

4単位の大波状口縁で、波頂部直下に刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起が重畳して配され、波底部にも同様の縦瘤と突起が配される。胴上半部には帯縄文の三角形区画が構成され、接点に豚鼻突起が配される。無文帯をはさんで胴中段に1条の沈線が走り、直下に上弦の弧線文が巡って、両者の間に縄文が施文され、下端を帯縄文で閉塞して、無文部を半円形の区画として浮か立させている。胴下半部は無文である。地文はLR単節の縄文である。安行3 a式である。

6～8はそれぞれタイプの異なる水平口縁の精製深鉢である。

6は口縁から胴下半部まで残存する。胴中段に最大径を持ち、口縁内彎する砲弾形の深鉢である。口唇断面肥厚して折り返し口縁をなし、刻みを持つ縦瘤が4単位配される。口縁下に3段の帯状文が走り、口縁突起の直下には対弧状の沈線が描かれて無文部に横楕円形の区画を構成している。地文はRL単節の縄文で、胴中段以下には斜位の集合沈線文が施文される。安行2式である。

7は口縁～胴中段まで残存する。底部から口縁にかけてゆるやかに内彎しつつ開き、胴中段に軽微な括れを持つ。

口縁直下に縄文帯を持って刻みを持つ縦瘤を2個1単位で配し、下端を沈線で閉塞する。胴上半部には平行沈線の弧状モチーフ、胴中段には上下の弧線を組み合わせたレンズ状のモチーフが走り、両者の間に小人組文が描かれる。また、モチーフの接点

には豚鼻突起が配される。地文はRL単節の縄文で、胴下半部は無文である。後期末葉に属する。

8は口縁から胴中段まで残存する。水平口縁上に台形の小突起が並び、直下に平行沈線が巡って縄文が施文される。胴部の文様帯は中段に平行沈線の区画をはさんで二段構成となり、それぞれに連結弧線文が描かれ、間に三叉文が配される。地文はLR単節の縄文である。安行3 a式と考えられる。

9は台付鉢とみられ、口縁から胴下半部までが残存する。胴部はわずかに内彎しつつ開き、頸部に括れを持って口縁外反する。水平口縁上に1箇所のみ山形突起を配し、それ以外には刻みなしの横瘤を等間隔で配する。

口縁から頸部にかけて縄文帯となり、下端を1条の沈線で区画する。胴上半部に文様帯を持ち、上下の半円形モチーフが斜めに連繫される。胴下半部は縄文帯となる。地文はLR単節の縄文である。安行3 a式であろう。

10は小型の浅鉢で、頸部から胴中段まで残存する。胴中段がソロバン玉状に張り出す。

胴上半部に文様帯を持ち、円文をはさんで三叉文が対向する玉抱き三叉文を描く。胴中段には中央押圧を伴う横長の突起が配され、左右にレンズ状の区画が描かれて、内部に縄文が施文される。口縁から頸部にかけては縄文帯で、下端を1条の沈線で区画する。地文はLR単節の縄文である。安行3 a式である。

11～15は注口土器で、文様不明の15以外は安行3 a式と考えられる。いずれも円盤状の胴部から頸部～口縁部がドーム状に立ち上がる。

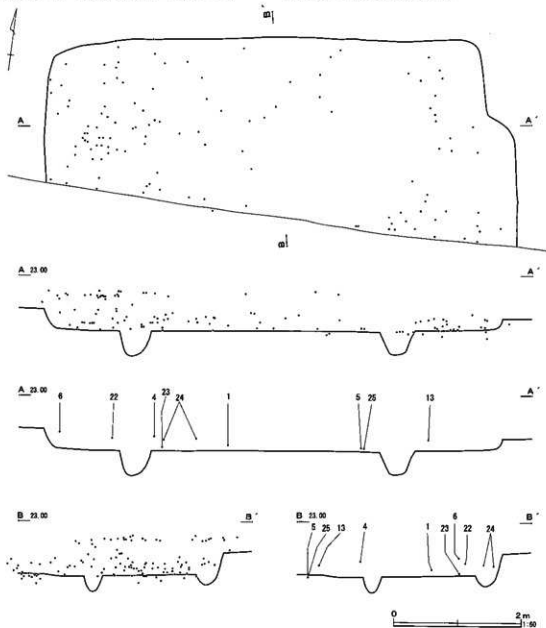
11は底部から肩部まで残存する。胴部中段がソロバン玉状に張り出し、肩部が極端に内彎する。注口部は付け根を残して欠損するが、周囲に同心円文が巡って縄文が施文され、下部には短沈線を伴う横長の突起を配する。注口部の左右には入組文が描かれ、余白に三叉文が配される。文様帯下端は帯縄文で閉塞される。地文はLR単節の縄文である。

12は注口土器と考えたが、注口部を欠いており、小型の広口壺の可能性もある。肩部から胴部中段まで残存する。胴部中段はソロバン玉状に張り出し、肩部が強く内彎する。平行沈線による半円形のモチー

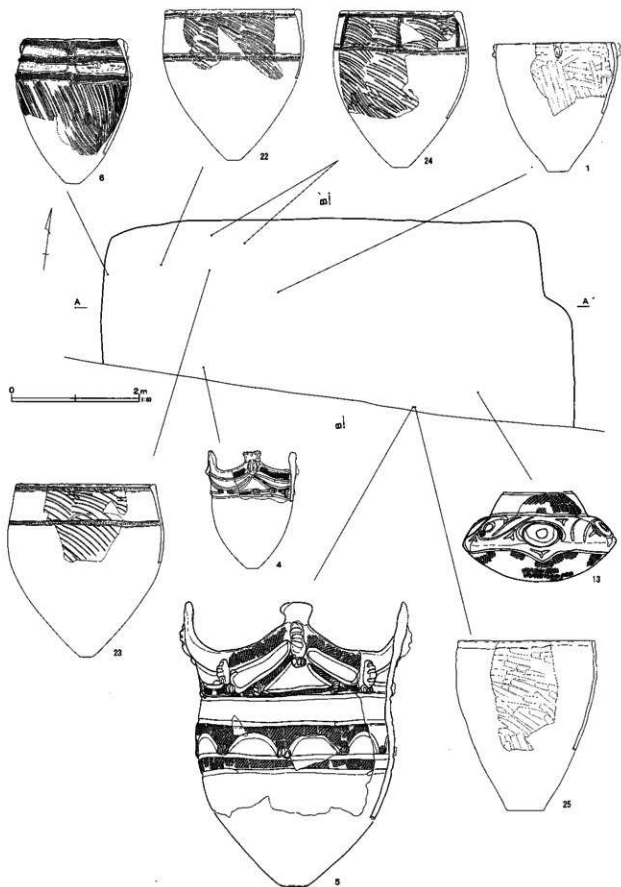
フが上下対向してX字状の構成をとり、内部に縄文が施文される。左右の余白には円文が描かれ、四方に三叉文が配される。地文はLR単節の縄文である。

13は口縁を欠き、注口部も付け根を除いて欠失している。

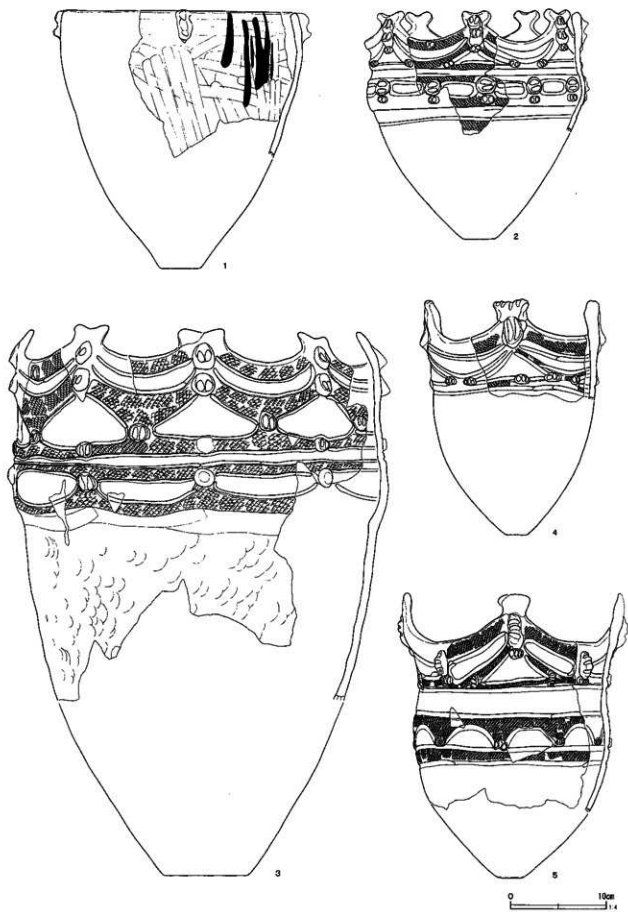
丸底で胴部中段がソロバン玉状に張り出し、肩部は強く内彎して、頸部は内傾して立ち上がる。胴上半部に上下を沈線で区画した文様帯を持ち、同心円文を斜めに連繋した入組文が描かれて、余白に三叉文が配される。頸部および胴下半部は縄文帯となる。地文はLR単節の縄文である。



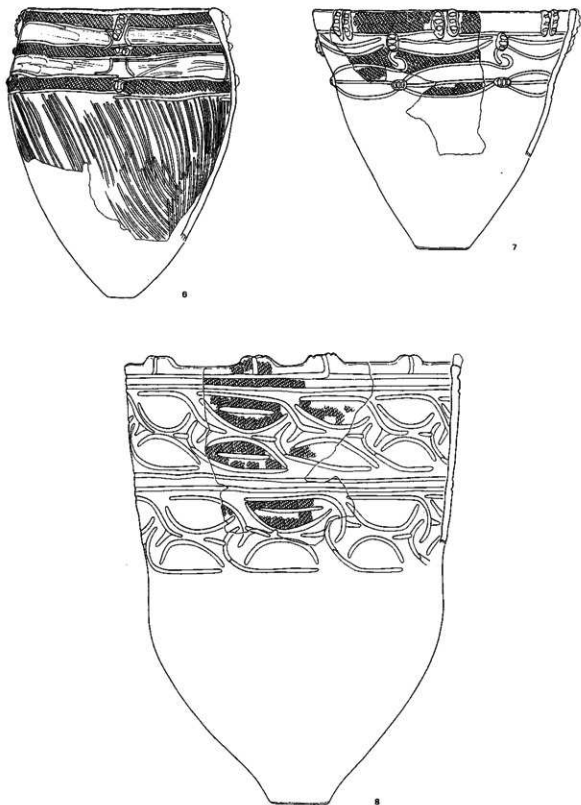
第31図 D区第2号竪穴住居跡遺物分布図(1)



第32图 D区第2号竖穴住居跡遺物分布图(2)



第33图 D区第2号竖穴住居出土土器 (1)



第34图 D区第2号整穴住居跡出土土器(2)

14は底部から胴上半部にかけて残存する。胴部中段がソロバン玉状に張り出すが、胴下半部が球胴状に張る腰高の器形で、壺の可能性もある。胴上半部には13に類似の入組文+三叉文が描かれ、下端を短沈線で区画する。縄文は施文されない。

15は頸部のみ残存する。前面にLR単節の縄文が施文され、口縁との境に1条の沈線が巡る。

16~18は小型の壺である。

16は無文の壺で、肩部から上を欠く。球胴状を呈し、底面はわずかに上げ底となる。器表面は横位の研磨が徹底される。晩期前葉と考えられる。

17は口縁から胴部中段まで残存する。胴部中段がソロバン玉状に張り出し、頸部に括れをもって口縁外反しつつ直立する。安行3a式である。

水平口縁で一箇所に対をなす小突起を配する。突起の直下には二段の魚眼三叉文が描かれるが、上段のものは中央に貫通孔を持つ。胴上半部には魚眼三叉文が描かれ、胴部中段には帯縄文が巡って、中央押圧ある横長突起が配される。地文はLR単節の縄文である。

18は大洞系の土器である。口縁部を欠失する。丸底・球胴で、頸部に括れを持ち、幅狭の平行沈線と列点文が巡る。胴部にはLR単節の縄文が施文される。大洞BC式期のものか。

19~21は無文の浅鉢で、いずれも晩期前葉のものとみられる。

19は器高と口径がほぼ等しく、胴部は直線的に開いて口縁やや内彎する。成形はいびつで、器面に篋状工具によるひだ状の着痕を残す。

20は口縁から底部まで残存する。上面観楕円形の鉢であったとみられ、底面もやや楕円形で、またわずかに上げ底を呈する。

21は底部から口縁までほぼ垂直に立ち上がる湯飲み形の器形である。外面に篋状工具の調整痕を残す。

22~24は紐線文土器で、後期末葉~晩期初頭のものとみられる。

22・23はいずれも口縁から胴部中段まで残存する。口縁下に斜位の刺突列と1条の沈線を巡らせる。胴部中段には平行沈線を巡らせ、内部に刺突列を巡らせる。24は口縁から胴下半部まで残存する。区画の構成は22・23に似るが、胴上半部の区画内部に3本沈線が垂下する。

25は晩期前葉の無文粗製深鉢である。口縁から胴下半部まで残存する。胴部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる単調な器形で、折り返し口縁を呈する。器面には篋状工具の粗雑な調整痕がみられる。

26以下は破片資料を一括した。

26~31は高井東式および曾谷式である。26・27は大波状口縁深鉢の口縁部で、いずれも突起を欠失する。口縁直下には隆帯による区画が巡り、波頂部直下には26では中央押圧ある円形の突起、27は橋梁状の把手が存在したものとみられる。28は水平口縁で、キャリパー形の深鉢と考えたが、浅鉢の可能性もある。口縁直下に段を持って平行沈線による区画を描き、頸部は無文となる。

29も水平口縁で口端わずかに外反する。口縁直下に円形の貼り瘤を配し、周囲にX字状の平行沈線文を描く。30は砲弾形の水平口縁深鉢である。口唇断面肥厚して折り返し口縁をなし、円形の貼り瘤を配する。頸部には隆帯を巡らせて区画文を構成する。口縁および隆帯上にRL単節の縄文を施文する。

31は大波状口縁深鉢の底部で、隆帯による区画が存在し、縦瘤を配する。

32は安行1式で、胴上半部に多段の帯縄文がみられる。33・34は安行2式の口縁部である。

35~49は晩期安行式の大波状口縁深鉢で、安行3b式を主体とする。波頂部に二頭状の突起を持ち、直下に二段の豚鼻突起を配する。口縁直下の縄文帯はしばしば省略され、胴上半部には磨消縄文による三角形の区画が描かれる。

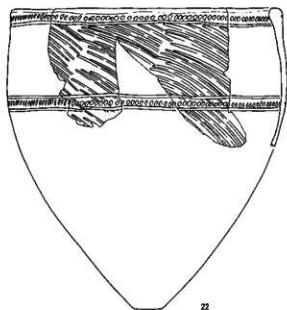
50~53は後期安行式の水平口縁深鉢で、大半が安行2式に位置づけられる。

54~67は安行3a式の磨消縄文系深鉢である。水

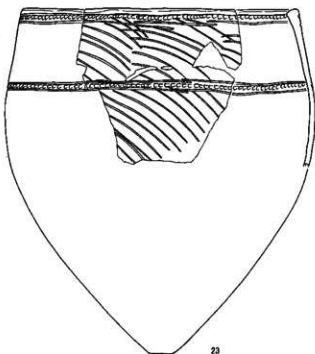




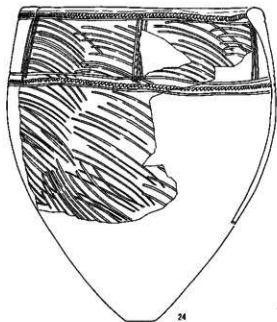
第35图 D区第2号整穴住居跡出土土器 (3)



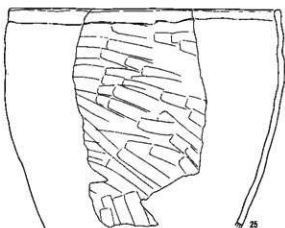
22



23



24



25



第36図 D区第2号竪穴住居跡出土土器(4)

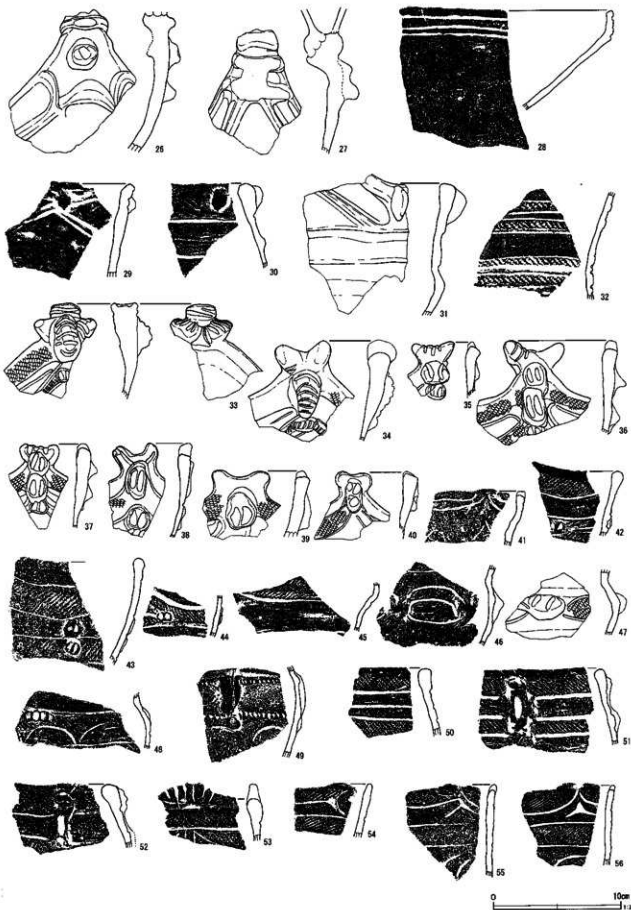
平ないしゆるやかな波状口縁で、対をなす小突起が配される。口縁直下に弧状の区画が巡り、余白に三叉文が描かれる。胴部には入組三叉文が描かれる。

68・69は細密沈線を地文とする土器で、安行3b式であろう。70～73もほぼ同時期のものとみられる。

74は無文地に三段の押圧を伴う縦瘤を配する口縁。75・76は刻みを持つ縦瘤を二個一対で配する口縁

である。77は縦位の波状沈線が垂下する深鉢胴部である。いずれも後期末葉のものか。

78～83は注口土器で、いずれも晩期前葉のものである。78は注口部の付け根に隆帯が巡り、下面にボタン状の貼付文が配される。79は注口下面に刻みを持つ横瘤、81は二個一対の縦瘤を伴う。83は頸部から胴上半部の破片で、安行3a式であろう。

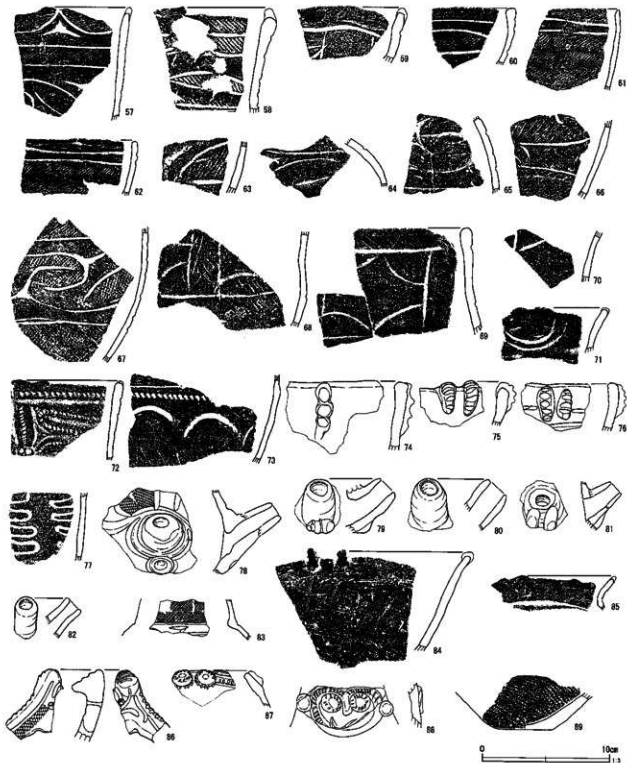


第37图 D区第2号整穴住居跡出土土器(5)

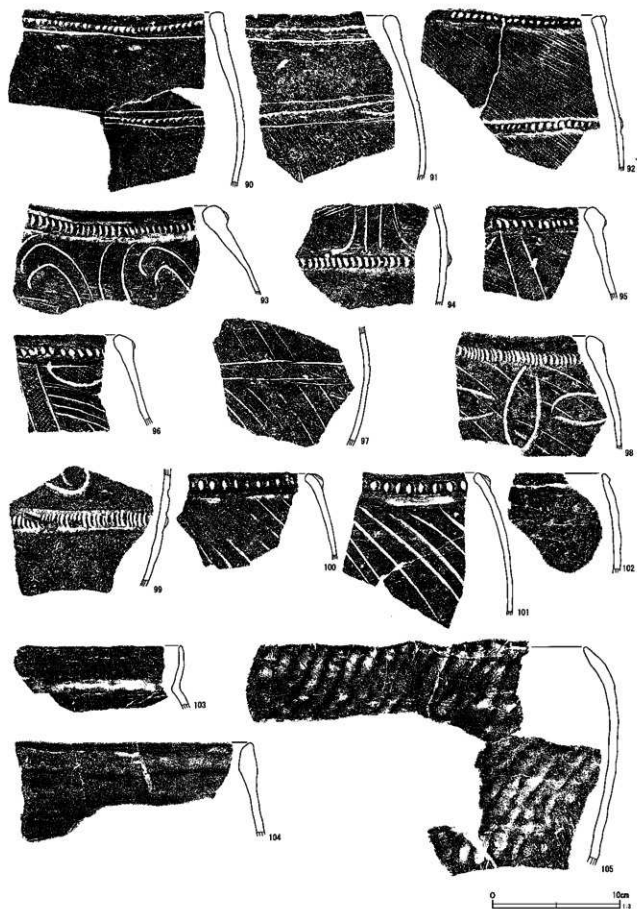
84は台付鉢の口縁部であろう。水平口縁上に二個一対の瘤を配し、胴部は無文である。85は浅鉢の口縁部である。いずれも晩期前葉のものか。

86は異形台付土器の突起とみられる。頂部に刻みを持つ瘤が配され、正面中央に貫通孔を有する。後期末～晩期前葉のものか。

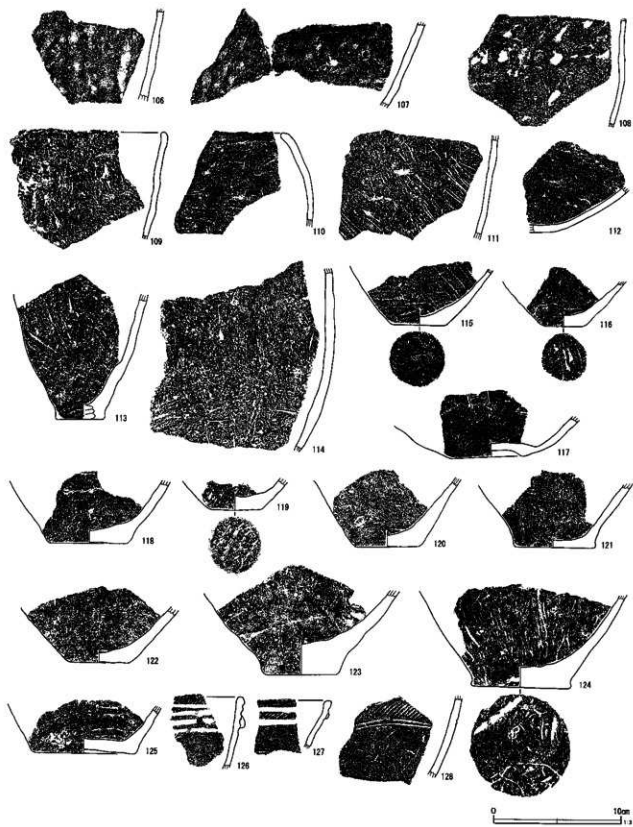
87は注口土器の口縁部とみられるが、刻みを伴うボタン状貼付文が第1号住居跡出土の人面注口土器と類似する。88は人面土器ないしならんかの土製品の一部とみられる。ミズク土偶類似の顔面表現がみられ、両側縁が透かし穴風になっている。いずれも安行3b式であろう。



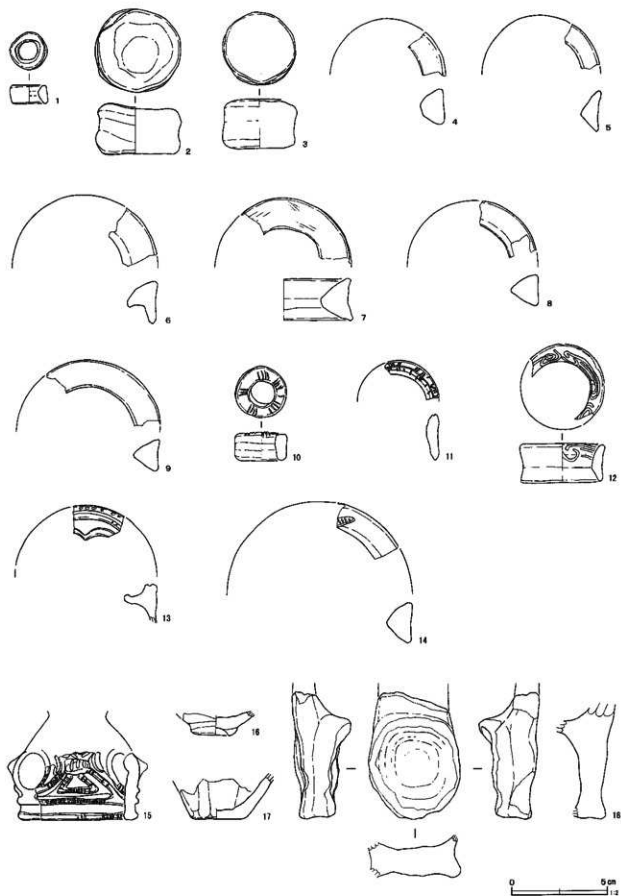
第38図 D区第2号竪穴住居跡出土土器(6)



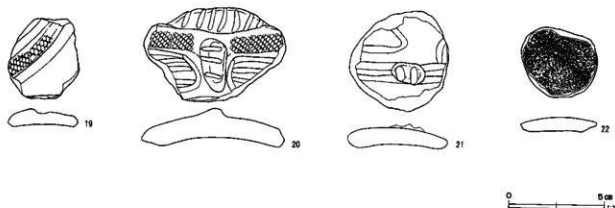
第39图 D区第2号竖穴住居跡出土土器(7)



第40图 D区第2号竖穴住居跡出土土器(8)



第41图 D区第2号竖穴住居跡出土土製品(1)



第42図 D区第2号竪穴住居跡出土土製品 (2)

89は縄文の施文される底部で、後期末葉～晩期前葉のものであろう。

90～101は紐線文土器で、後期末葉～晩期前葉のものである。90・91は刺突列＋沈線の区画が口縁と胴部中段に巡る。92は刻みを伴う隆帯を区画とするものである。93～99は胴上半部を文様帯とするもので、95～97は磨消縄文がみられる安行3b式である。

102～114は後期前葉の無文粗製深鉢である。口縁には折返し口縁のものと同単口縁のものがみられる。器形は大半が内彎しつつ単調に立ち上がる深鉢だが、103は頸部に括れを持つキャリバー形を呈する。112は浅鉢であらう。

器面には筈状工具の粗い撫で調整や、成形時につけられたひだ状の圧着痕が残されている。

115～125は底部である。117は浅鉢で、極端な上げ底を呈する。

126～128は本報告中最も新しい時期の遺物で、晩期末葉の土器である。126は工字文の口縁部、127は縄文を施文する隆帯を巡らせる口縁で、壺型土器であらう。128は縄文帯の下端を平行沈線で区画する。

#### 土製品

##### 耳飾 (第41図1～14)

1～9は無文の耳飾である。

1は小型の滑車状耳飾である。断面三角形を呈する。完形で、最大径2.0cm、高さ1.0cmを測り、重さ2.7

gを量る。2は中実臼状の耳飾で、上面やや窪み、成形時の指頭痕が残存する。側縁に幅の狭い袢りを持つ。完形で、最大径4.5cm、高さ2.7cmを測り、重さ50.8gを量る。

3も中実臼状のタイプである。上下面とも平坦で、側縁に緩やかな袢りを持つ。完形で、最大径3.8cm、高さ2.6cmを測り、重さ44.8gを量る。6は断面上端を内側に折り返す断面「r」字状のタイプである。全周の八分の一程度が残存し、最大径7.6cm、高さ2.2cmを測る (以下、破損品の最大径は復元値)。

4・5・7・8は内面中段が張り出す断面三角形のタイプである。

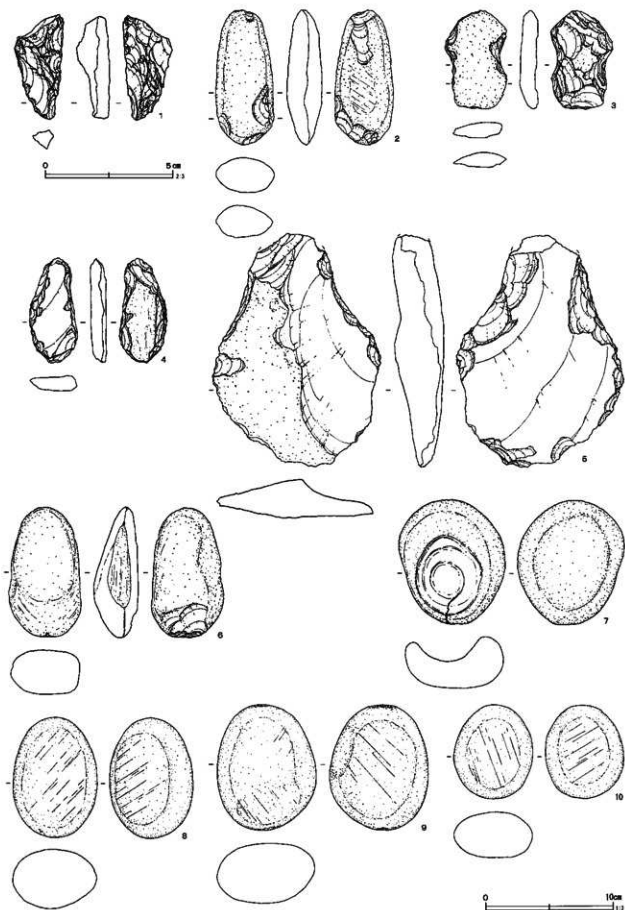
4は全周の八分の一程度が残存し、最大径6.0cm、高さ1.9cmを測る。5は全周の八分の一弱が残存し、最大径6.2cm、高さ2.1cmを測る。7は側縁が「く」の字に外反し、上下端が突出する。全周の三分の一弱が残存し、最大径7.1cm、高さ2.2cmを測る。

8は全周の五分の一強が残存し、最大径6.9cm、高さ1.1cmを測る。9は全周の三分の一程度が残存し、最大径7.4cm、高さ1.6cmを測る。

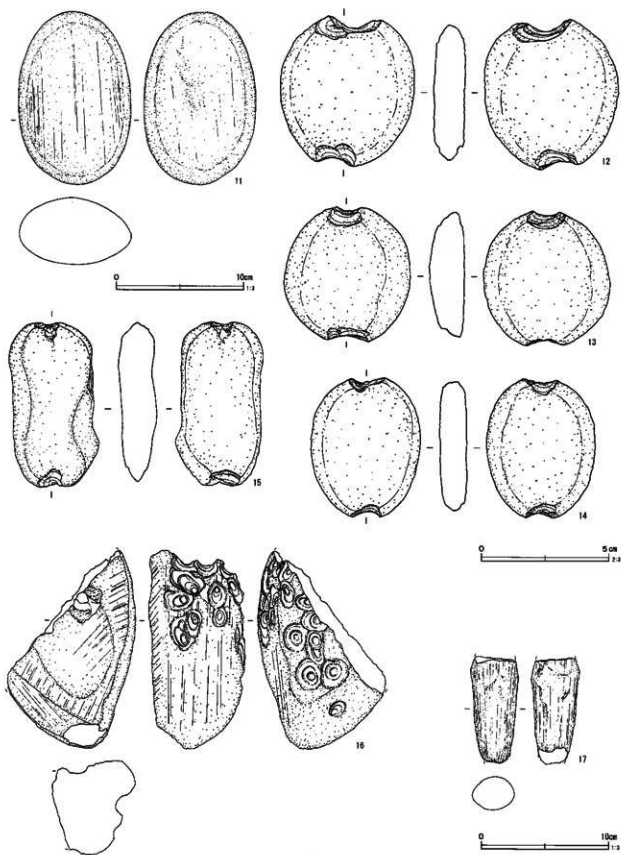
10～14は有文の個体を一括した。

10は断面長方形で、直径と高さの差が比較的小さい筒状のタイプである。平行沈線文が5単位放射状に配される。完形で、最大径2.7cm、高さ1.5cmを測り、重さ9.4gを量る。

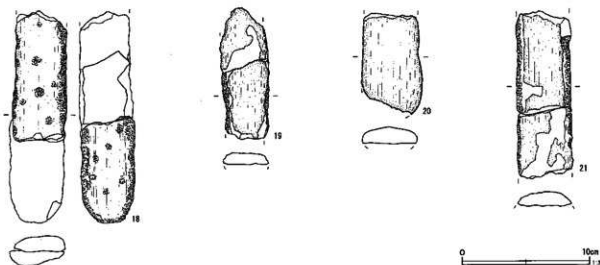




第43图 D区第2号整穴住居跡出土石器(1)



第44图 D区第2号竖穴住居跡出土石器(2)



第45図 D区第2号竪穴住居跡出土石器 (3)

第6表 D区第2号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石鏃	4.0	1.9	1.3	7.3	D-⑧	チャート
2	磨製石斧?	10.5	4.6	2.7	173.3	B-①	緑色岩
3	打製石斧	7.6	4.9	1.4	63.8	C-①	砂岩
4	打製石斧	8.1	3.8	1.2	57.6	B-①	緑泥片岩
5	打製石斧	(18.1)	13.2	4.0	812.5	B-②	ホルンフェルス
6	叩石	10.1	5.7	3.5	315.4	C-①	緑色岩
7	磨石	9.7	8.4	4.1	344.5	A 1-①	砂岩
8	磨石	9.3	6.5	4.6	396.7	B 2-①	閃緑岩
9	磨石	9.7	7.7	4.7	503.9	B 2-①	閃緑岩
10	磨石	7.2	6.2	3.6	235.7	A 2-①	閃緑岩
11	磨石	13.4	8.8	5.3	841.5	B 2-④	安山岩
12	石鏃	5.3	5.9	1.3	64.7	A-a-①	砂岩
13	石鏃	5.0	5.2	1.4	53.5	A-a-①	砂岩
14	石鏃	4.3	5.4	1.1	40.2	A-a-①	砂岩
15	石鏃	3.5	6.4	1.5	51.2	A-a-①	砂岩
16	石皿	(15.2)	(10.4)	7.6	729.8	C-a-④	安山岩
17	石棒	(8.2)	3.8	3.1	113.6	②	緑泥片岩
18	石剣	(17.4)	4.5	(2.5)	136.3	④	絹雲母片岩
19	石剣	(10.2)	3.9	(1.0)	49.7	④	絹雲母片岩
20	石剣	(7.8)	4.8	(1.4)	73.0	④	絹雲母片岩
21	石剣	(13.1)	4.4	(1.1)	73.0	④	絹雲母片岩

11は断面扁平で、上端に1条の沈線が走り、これに沿って細密な刻みが施される。全周の四分の一強が残存し、最大径4.2cm、高さ2.3cmを測る。

12は内面中段が軽微に突出して稜をなし、それより上に入組文が描かれる。全周の三分の二弱が残存し、最大径4.4cm、高さ2.0cmを測る。

13は上面に透かし彫り風のモチーフを持つものと見られるが、大半が失われ、下半部も欠失している。最大径7.4cmで現存高2.1cmを測る。14は断面三角形で、内面稜線の直上に刻みを持つ隆帯が残存する。全周の八分の一程度が残存し、最大径9.6cm、高さ2.1cmを測る。

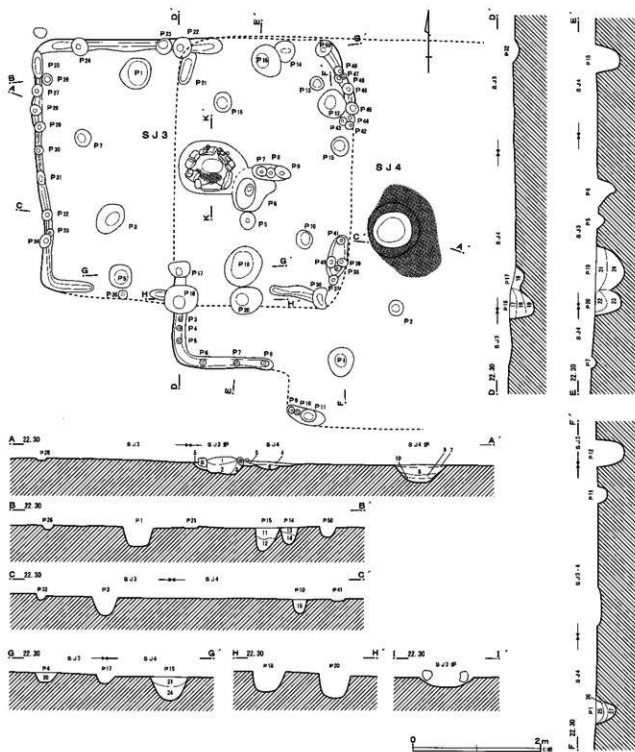
#### ミニチュア土器 (第41図15~17)

15は異形台付土器の脚台部をかたどったものである。四方に円窓を持ち、間隙に刻みを伴う隆帯で三角形の区画を描き、交点に豚鼻突起を配する。グリッド出土遺物中に類似の脚台が存在し、同一個体の可能性がある。復元径7.4cm、現存高3.4cmを測る。

16は円形の高台を伴う底部で、注口土器等に伴うものと考えられる。17は深鉢底部で、篋状工具による縦位の調整痕が観察される。

#### 手觸形土器 (第41図18)

容器部分から把手の接続部分までが残存する。また、容器部分の口縁をすべて欠失する。



DK SJ-3-4

- 1 灰褐色土層 : 炭化物粒子少量含む 鉄分多く含む 砂質 自然堆積  
粘性なし 締まりあり
- 2 黒灰褐色土層 : 焼土粒子少量含む 炭化物粒子多く含む 自然堆積  
炭化物堆積層 粘性あり 締まりあり
- 3 暗灰褐色土層 : 灰褐色土層に少量含む やや砂質 掘土見られない  
粘性あり 締まりあり
- 4 黒褐色土層 : 炭化物・灰多く含む
- 5 暗褐色土層 : 炭化物粒子少量含む
- 6 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物粒子少量含む
- 7 灰褐色土層 : 炭化物粒子少量含む 鉄分少量含む 砂質 自然堆積  
粘性なし 締まりあり

- 8 黒灰褐色土層 : 灰褐色土ブロック少量含む 自然堆積 粘性あり  
締まりあり
- 9 暗灰褐色土層 : 砂質 自然堆積 粘性なし 締まりなし
- 10 黒灰褐色土層 : 焼土粒子少量含む 砂質 粘性なし 締まりなし
- 11 厚褐色土層 : 焼土粒子・炭化物粒子少量含む
- 12 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物粒子少量含む
- 13 暗黄褐色土層 : 炭土粒子・炭化物粒子少量含む
- 14 青灰褐色土層 : 焼土粒子・炭化物粒子少量含む
- 15 暗灰褐色土層 : 炭化物多く含む
- 16 黒褐色土層 : 炭化物粒子少量含む

第46図 D区第3・4号竪穴住居跡 (1)

容器部分は平面不整な五角形を呈し、底部は裾が張り、上げ底状を呈する。全長6.6cm、容器部分の長さ5.4cm、短径4.8cm、現存高3.1cmを測る。

#### 土製円盤 (第42図)

19は晩期安行式の大波状口縁深鉢で、口縁部文様帯の一部を使用する。最大径3.7cmを測り、重さ13.7gを量る。20は安行2式の水平口縁深鉢で、口縁突起と縦瘤を中央に取り込んでいる。最大径7.5cmを測り、重さ41.6gを量る。

21は豚鼻突起を中央に取り込んでいる。最大径5.2cmを測り、重さ28.2gを量る。22は無文の胴部で、最大径4.0cmを測り、重さ10.4gを量る。

#### 石器

##### 石錐 (第43図1)

平面三角形を呈し、錐部と柄部との区分は不明瞭、錐部先端を欠損する。上端に節理面を残す。

##### 磨製石斧 (第43図2)

磨製石斧未製品と考えられる。敲打調整が全面に及んでいるが、成形時の剥離面を多く残している。腹面中央で部分的に研磨調整が開始されている。刃部は未完成である。

##### 打製石斧 (第43図3～5)

3は小型の分銅形打製石斧である。背面に広く原礫面を残し、両面剥離により抉り部を造り出す。4は緑泥片岩の板状礫を素材とする小型の石斧である。

5は粗大な撥形打製石斧である。横長剥片を素材とし、背面に原礫面を残す。胴部は細かな両面剥離によって緩やかなカーブを造り出しているが、刃部はほぼ無加工で用いている。

##### 叩石 (第43図6)

楕円形の自然礫の長軸側一端を使用している。右側縁部に平坦面を持っており、磨石として使用している可能性がある。

##### 磨石 (第43図7～44図11)

いずれも平面楕円形の自然礫の両面を磨面としている。7は表面中央に凹部を持つが、人工的なものではなく、甌穴等自然に生じたものと判断した。

##### 石錘 (第44図12～15)

扁平な自然礫の長軸側両端に両面剥離による抉りを造り出している。重量の平均値は52.4g、最大値は64.7g、最小値は40.2gである。

##### 石皿 (第44図16)

多孔質の安山岩をある程度成形したうえで使用しているものとみられる。平面三角形で、二分の程度が残存する。表面に明瞭な凹部を持ち、右側縁および裏面を多孔石として転用している。

##### 石棒・石剣 (第44図17～第45図21)

17は基部で、先端を欠損している。断面楕円形で表面の風化が著しく、部分的に赤変が観察される。

18～21はいずれも絹雲母片岩の板状礫を素材とするもので、断面扁平であるため石剣とした。いずれも胴部破片と考えられるが、面的な剥落と風化が顕著である。

#### D区第3号竪穴住居跡 (第46図・47図)

L-41・M-41グリッドに所在する。第4号竪穴住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡がより新しいものと考えられる。

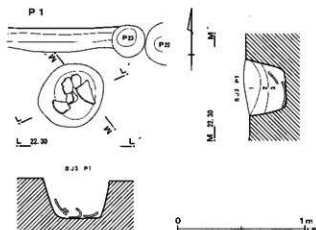
ほとんど壁の立ち上がりが検出できなかったが、壁溝の残存状態をみるに、長軸約4.1m、短軸約3.0mの隅丸長方形を呈する竪穴住居跡であったと考えられる。深さ最大5cmを測る。短軸側に主軸を持ち、ほぼ南北を指すものとみられる。

床面中央部から円形の石囲い戸を検出した。また、床面上から50本のピットを検出したが、これには重複する第4号竪穴住居跡のものも含まれるであろう。P1・P3・P10・P14・P15が本住居跡に伴う主柱穴とみられる。

遺物は後期中葉から晩期前葉のものが出土しているが、後述ピット内部からは晩期前葉の土器が出土している。

#### D区第3号竪穴住居跡出土遺物 (第48図・第50図1～9)

第48図1は柱穴P1から出土した土器で、晩期前



第47図 D区第3・4号竪穴住居跡 (2)

第7表 D区第3号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.50	0.44	0.31	Pit26	0.16	0.16	0.06
Pit 2	0.26	0.24	0.18	Pit27	0.18	0.16	0.07
Pit 3	0.52	0.38	0.31	Pit28	0.16	0.14	0.20
Pit 4	0.36	0.34	0.17	Pit29	0.18	0.16	0.11
Pit 5	0.28	0.22	0.11	Pit30	0.14	0.12	0.13
Pit 6	0.48	0.28	0.25	Pit31	0.22	0.12	0.07
Pit 7	0.16	0.14	0.08	Pit32	0.16	0.16	0.11
Pit 8	0.14	(0.12)	0.10	Pit33	(0.12)	0.12	0.06
Pit 9	0.26	0.14	0.04	Pit34	0.22	0.18	0.09
Pit10	0.28	0.24	0.24	Pit35	0.14	0.12	0.11
Pit11	0.30	0.28	0.15	Pit36	0.34	0.20	0.20
Pit12	0.44	0.44	0.44	Pit37	0.16	0.14	0.03
Pit13	0.22	(0.20)	0.08	Pit38	0.10	0.08	0.03
Pit14	0.32	(0.28)	0.26	Pit39	0.16	0.12	0.08
Pit15	0.50	0.44	0.39	Pit40	0.18	0.14	0.11
Pit16	0.30	0.26	0.09	Pit41	0.14	0.12	0.02
Pit17	0.34	0.24	0.14	Pit42	0.12	0.12	0.03
Pit18	0.52	0.44	0.38	Pit43	0.14	0.12	0.02
Pit19	0.60	0.58	0.38	Pit44	(0.18)	0.22	0.05
Pit20	0.50	0.42	0.42	Pit45	0.20	0.18	0.06
Pit21	0.52	0.20	0.03	Pit46	0.18	0.16	0.05
Pit22	0.32	0.22	0.09	Pit47	(0.08)	(0.08)	0.05
Pit23	0.24	0.24	0.10	Pit48	0.14	0.10	0.05
Pit24	0.26	0.26	0.09	Pit49	0.14	0.12	0.05
Pit25	0.42	0.14	0.03	Pit50	0.28	0.22	0.14

第8表 D区第4号竪穴住居跡 柱穴計測表

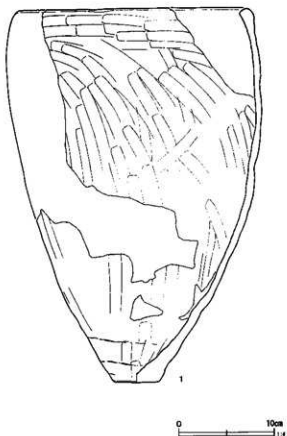
名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.44	0.40	0.32	Pit 7	0.10	0.08	0.05
Pit 2	0.24	0.22	0.18	Pit 8	0.12	0.06	0.08
Pit 3	0.08	0.06	0.02	Pit 9	0.10	0.08	0.08
Pit 4	0.08	0.06	0.07	Pit10	0.10	0.08	0.04
Pit 5	0.08	0.08	0.02	Pit11	0.24	0.20	0.11
Pit 6	0.10	0.10	0.05				

葉の粗製無文深鉢である。底部から口縁にかけてゆるやかに内彎しつつ立ち上がる単調な器形だが、胴部中段の一箇所で軽微な括れが観察される。口唇は肥厚して、内面に稜を形成する。器面には篋状工具による粗雑な撫で調整が残るが、口縁直下では横位、胴部以下では斜位～縦位の調整が行なわれている。底部付近に輪積み痕を残す。

第50図には破片資料を一括した。6は加曾利B3式の深鉢口縁部である。口縁下に刺突列と1条の沈線が巡り、頸部に縄文が施文される。

1は安行Ⅱ式の大波状口縁深鉢で、波底部の破片である。口縁直下に縄文帯を持ち、刻みを持つ縦瘤を配する。胴上半部には豚鼻突起を配し、突起間を刻みを伴う隆帯で連繋する。2は後期安行式の弧形土器口縁部とみられる。

3は後期安行式の紐線土器である。口唇は若干肥厚して口縁はほぼ直立し、篋状工具先端の刺突列を巡らせて下端を1条の沈線で区画する。地文は横位の集合沈線である。7は同種の深鉢胴下半部で、縦位の集合沈線が観察される。5は無文の口縁部で、内面に隆帯が巡る。8・9は無文の胴部である。



第48図 D区第3号竪穴住居跡出土土器

10～12は高井東式の口縁部である。10・11は大波状口縁深鉢の波底部である。10は縦瘤、11は円形の突起を配し、左右に沈線による楕円形区画を配する。12は水平口縁深鉢で、口縁直下に隆帯による区画を配し、内部に平行沈線文を施文する。

13は後期安行式の波状口縁深鉢で、帯縄文の下位に生じた三角形の区画内部に矢羽根状の集合沈線を充填している。14は平行沈線間に縄文を施文する胴部である。15は縄文のみ施文される胴下半部で、胴部中段に付された突起の一部がみられる。

16は後期安行式に伴う砲弾形の粗製深鉢である。16は口縁直下に刺突列と単沈線の区画が巡り、縦位

#### D区第4号住居跡 (第46図)

L-41・M-41グリッドに所在する。第3号竪穴住居跡に切られる。

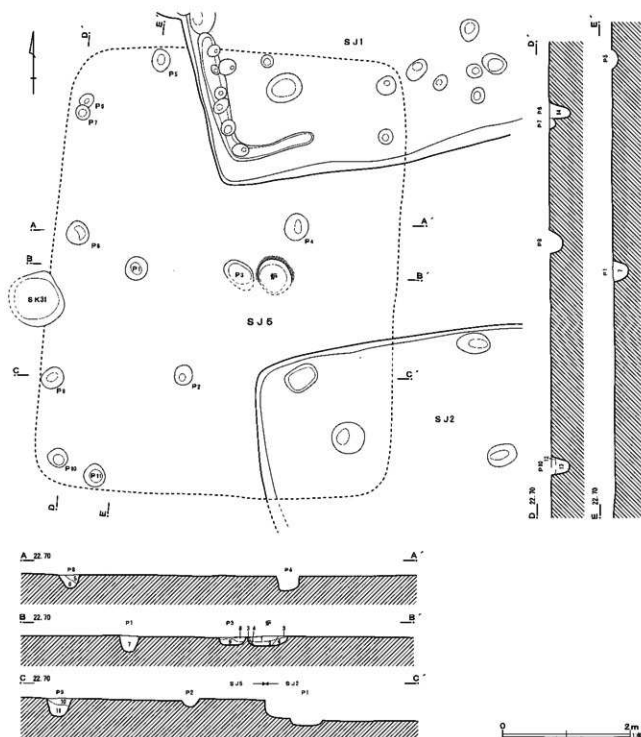
地床炉を中心に、南西と北西の各コーナーと若干のピットを検出した。正確な形態や規模は不明ながら、長軸約6.0mの隅丸長方形の竪穴住居跡であったと考えられる。

遺物は主に後期後葉の土器片が出土している。

#### D区第4号住居跡出土遺物 土器 (第50図10～25)

第9表 D区第5号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.36	0.34	0.25	Pit 7	0.24	0.22	0.12
Pit 2	0.30	0.28	0.13	Pit 8	0.36	0.34	0.18
Pit 3	0.50	(0.36)	0.10	Pit 9	0.36	0.32	0.29
Pit 4	0.40	0.36	0.25	Pit10	0.30	0.30	0.27
Pit 5	0.34	0.26	0.09	Pit11	0.34	0.32	0.21
Pit 6	0.22	0.20	0.33				

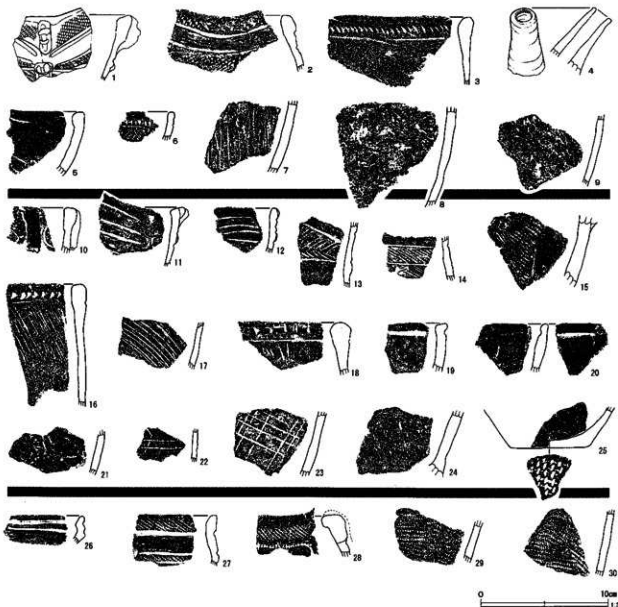


13 区 SJ-6

- 1 黒灰褐色土層：焼土粒子・炭化物粒子多く含む 骨片及び骨粉少量含む 自然堆積 粘性あり 締まりあり
- 2 黒灰褐色土層：焼土粒子少量含む 炭化物粒子多く含む 自然堆積 粘性あり 締まりなし
- 3 灰褐色土層：焼土ブロック・鉄分多く含む 炭化物粒子少量含む 粘性なし 締まりあり
- 4 灰褐色土層：炭化物粒子少量含む 鉄分多く含む 粘性あり 締まりあり
- 5 暗灰褐色土層：(やや茶褐色が強い) ローム粒子・炭化物粒子多く含む 鉄分少量含む 自然堆積 粘性なし 締まりあり
- 6 暗灰褐色土層：炭化物粒子・鉄分少量含む やや砂質 自然堆積 粘性あり 締まりなし
- 7 暗灰褐色土層：(やや茶褐色が強い) ローム粒子・炭化物粒子・鉄分多く含む 自然堆積
- 8 暗灰褐色土層：焼土粒子・鉄分少量含む 炭化物粒子多量含む やや砂質 自然堆積 粘性なし 締まりあり
- 9 灰褐色土層：焼土による侵食によるものか、層に類似した暗灰褐色土ブロック含む
- 10 暗灰褐色土層：(やや茶褐色が強い) ローム粒子・炭化物粒子多く含む 鉄分少量含む 自然堆積 粘性なし 締まりあり
- 11 暗灰褐色土層：炭化物粒子少量含む 鉄分多く含む 自然堆積 粘性あり 締まりあり
- 12 暗灰褐色土層：炭化物粒子少量含む 自然堆積 粘性なし 締まりあり
- 13 灰褐色土層：ローム粒子と含まれる茶褐色粒子少量含む 炭化物粒子少量含む やや砂質 自然堆積 粘性あり 締まりあり
- 14 黒灰褐色土層：ローム粒子・炭化物粒子多く含む 焼土粒子・鉄分少量含む やや砂質 自然堆積 粘性なし 締まりあり

第40図 D区第5号竪穴住居跡





第50図 D区第3・4・5号竪穴住居跡出土土器

の集合沈線を地文とする。18は口唇外面に刻みが巡り、直下に1条の沈線が巡る。17は斜位の集合沈線のみ胸部破片である。

19~23は後期の半粗製の土器である。19は口縁外面、20は内面に凹線が巡る。22・23は半裁竹管の平行沈線により格子目文が描かれる。

24・25は無文の胴下半部で、25は底面に縄代瓦痕が観察される。

#### 土製品

##### 耳飾 (第51図)

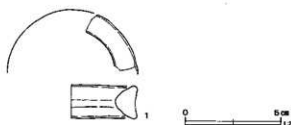
1は滑車形の耳飾である。断面三角形で表裏とも

無文、全体の六分の一程度が残存し、最大径(推定)6.7cm、高さ1.7cm、重量7.8gを測る。

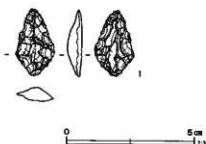
##### D区第5号竪穴住居跡 (第49図)

L-40・M-40グリッドに所在する。炉を中心に若干のピットが検出されたのみだが、南北に主軸を持つ長軸7m程度の隅丸長方形の竪穴住居跡であったと考えられる。

炉跡は楕円形の地床炉で、上層を中心に焼土の堆積がみられたほか、周辺の床面上にも焼土の散布がみられた。



第51図 D区第4号竪穴住居跡出土土製品



第52図 D区第5号竪穴住居跡出土石器

第10表 D区第5号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石鏃	2.5	2.6	5.5	1.8	C-①	チャート

遺物は後期後葉～晩期前葉の小破片が出土したのみであり、遺構の時期は不明である。

#### D区第5号竪穴住居跡出土遺物

##### 土器 (第50図26～30)

26・27は高井東式の口縁部である。26は水平口縁で口縁直下に段を持ち、平行沈線が巡る。27は晩期前葉の精製深鉢口縁部とみられる。28は注口土器の口縁部とみられ、貼り瘤の剥落痕と円孔が観察される。

後期末葉のものか。29・30は縄文のみ施文される胴下半部である。

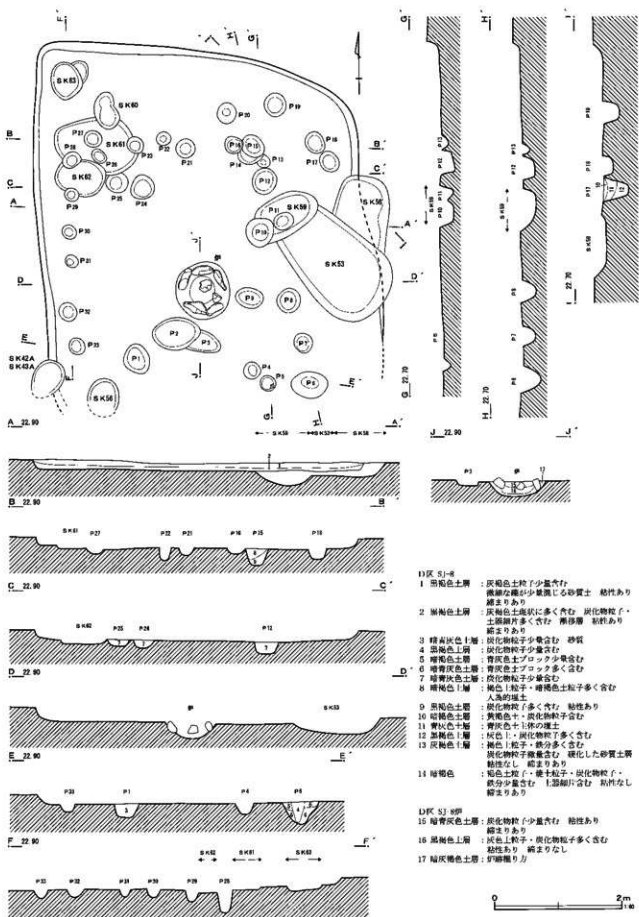
##### 石器

##### 石鏃 (第52図)

突基の石鏃である。横長の剥片を使用しており、腹面に主要剥離面を残し、入念な交互剥離で成形する。石材は青白色のチャートを使用する。

第11表 D区第8号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.48	0.40	0.21	Pit18	0.32	0.30	0.15
Pit 2	0.75	0.48	0.12	Pit19	0.35	0.34	0.26
Pit 3	(0.41)	0.35	0.07	Pit20	0.32	0.28	0.25
Pit 4	0.26	0.26	0.18	Pit21	0.28	0.27	0.12
Pit 5	0.24	0.22	0.11	Pit22	0.20	0.18	0.16
Pit 6	0.57	0.40	0.24	Pit23	0.26	0.24	0.19
Pit 7	0.30	0.28	0.20	Pit24	0.36	0.36	0.14
Pit 8	0.39	0.36	0.23	Pit25	0.32	(0.30)	0.10
Pit 9	0.42	0.32	0.23	Pit26	0.24	0.14	0.09
Pit10	0.44	0.44	0.22	Pit27	0.26	0.26	0.07
Pit11	0.30	0.24	0.25	Pit28	0.28	0.24	0.36
Pit12	0.40	0.38	0.19	Pit29	0.21	0.20	0.18
Pit13	0.20	0.18	0.11	Pit30	0.22	0.20	0.15
Pit14	(0.34)	(0.12)	0.10	Pit31	0.20	0.18	0.12
Pit15	0.34	0.34	0.24	Pit32	0.34	0.34	0.13
Pit16	0.30	0.26	0.08	Pit33	0.26	0.22	0.13
Pit17	0.30	0.28	0.25				



第53図 D区第8号壁穴住居跡

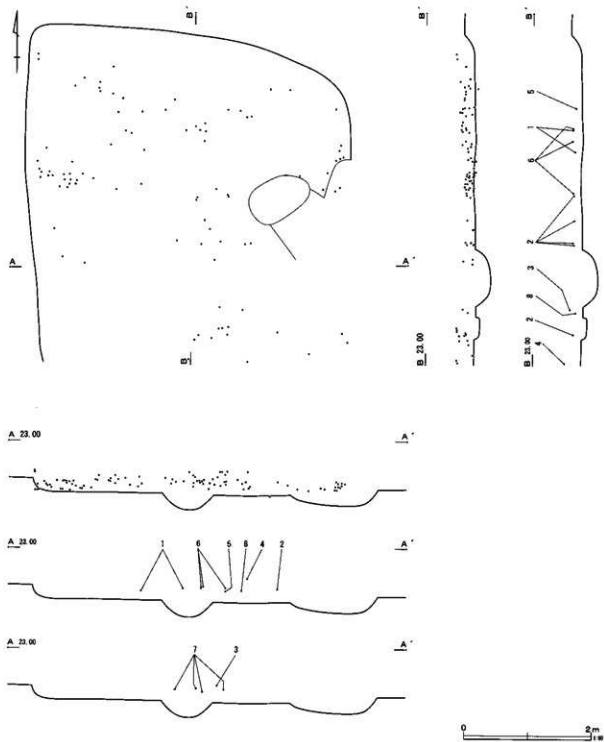
D区第8号竪穴住居跡（第53図～第55図）

L-41グリッドに所在する。第42A号・43A号・53号・56号・58号・59号・60号・61号・62号・63号の各土壌に切られる。南壁を検出できなかったが、不整な隅丸長方形の竪穴住居跡であったと考えられる。長軸5.3m、短軸5.2mを測り、深さ最大13cmを測る。

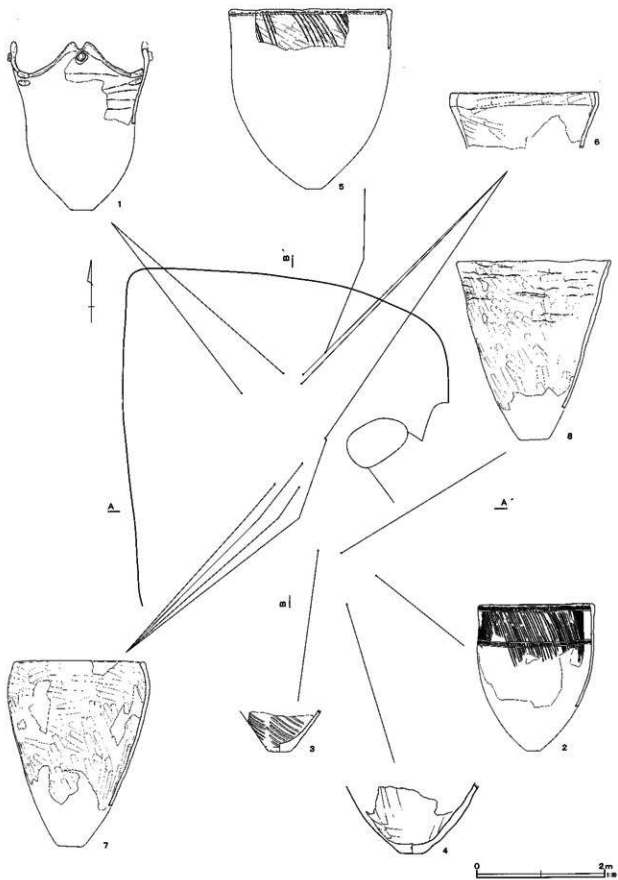
主軸方向はほぼ南北を指す。

床面平坦で、中央やや南寄りに石囲い炉を検出した。柱穴らしきピットは33本検出されたが、主柱穴は不明で、壁柱穴構造をとる可能性が高い。

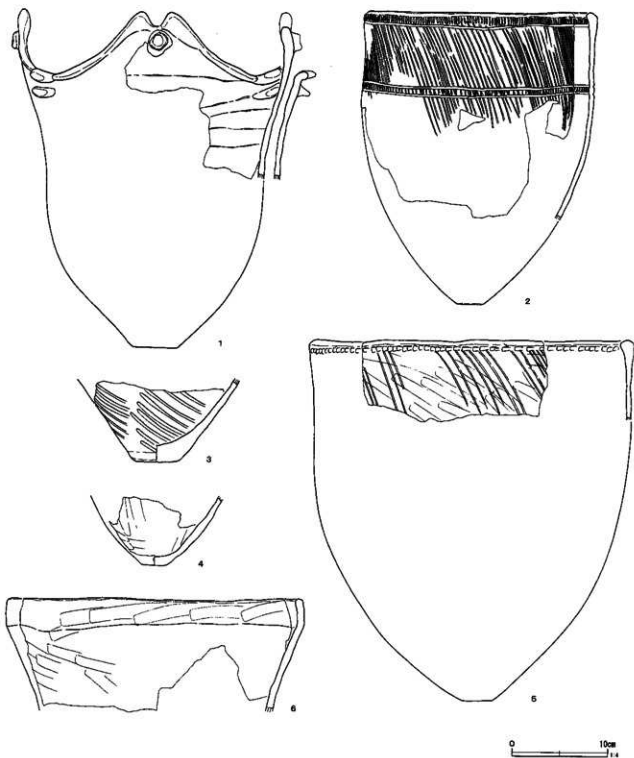
遺物は主に高井束式～後期安行式の土器が出土している。



第54図 D区第8号竪穴住居跡遺物分布図(1)



第55图 D区第8号整穴住居跡遺物分布图(2)



第56図 D区第8号竪穴住居跡出土土器 (1)

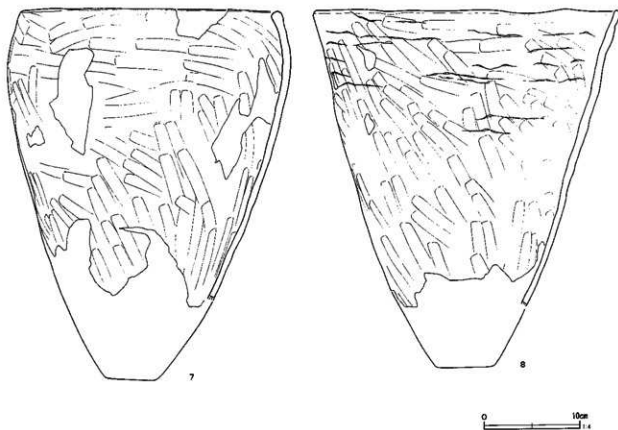
D区第8号竪穴住居跡出土遺物  
土器 (第56図～59図)

1は高井東式の大波状口縁深鉢である。口縁から胴部中段まで残存する。胴部中段に括れを持つキャリパー形を呈し、双頭状の波状口縁で、正面に中央押圧を伴うボタン状の突起を配する。また、波底部

には横長の突起が重畳する。

6は水平口縁の深鉢で、高井東式と考えられる。口縁から胴上半部までが残存する。頸部は緩やかに外反し、頸部に稜を持って口縁直立する。

2～5は安行1式の紐線文土器である。2は口唇断面わずかに肥厚し、口縁直立する。口端外面に刻



第57図 D区第8号竪穴住居跡出土土器(2)

み+沈線の区画が巡り、胴部中段には沈線+刻み+沈線の区画が巡る。

5は口縁から胴上半部までが残存する。口唇断面は肥厚して口縁直立する。口縁直下に押し引き状の列点文が巡る。地文は縦位ないし斜位の集合沈線である。3は同様の深鉢の底部で、斜位の集合沈線文がみられる。

7・8は晩期前葉の粗製無文深鉢である。いずれも口縁から胴下半部にかけて残存する。7は胴上半部に最大径を持って口縁内彎し、口唇断面肥厚する。8は底部から胴部に向かってほぼ直線的に開く。

4はやや小型の土器で、底部から胴部中段にかけて内彎しつつ立ち上がる。

9以下は破片資料である。

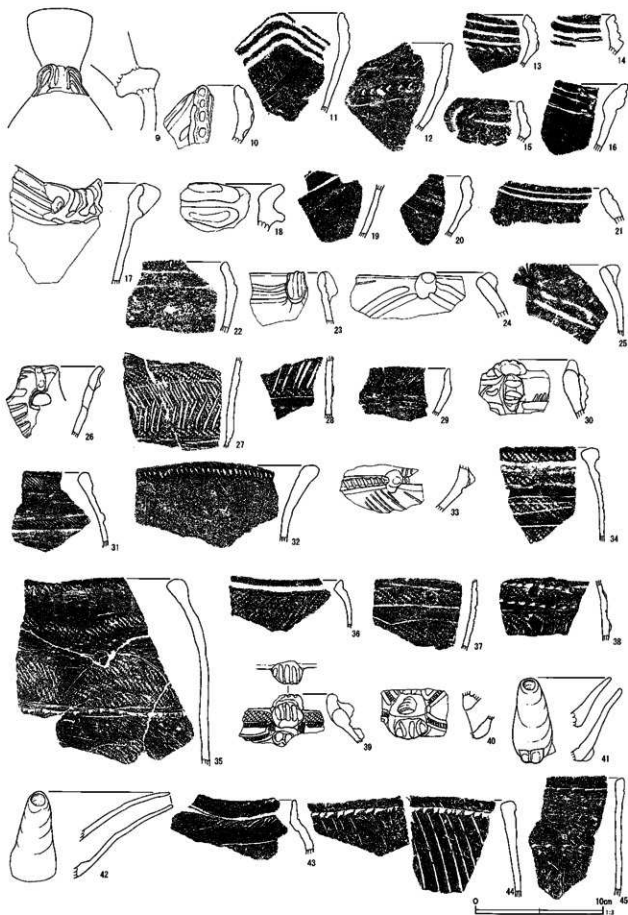
9~25・55は高井東式で、いずれも口縁部の破片である。9~21・55は波状口縁深鉢で、口縁下に隆帯や平行沈線の区画を持ち、波頂部に突起を配するもの

(9・13~17等)と、突起や区画を持たない山形波状口縁のもの(10~12等)に分けられる。55は突起の直下にボタン状の貼付文が付きされる。

22~25・29は水平口縁の深鉢である。22・29は口縁下に段を持って縄文が施文される。23は3条の平行沈線が巡り、刻みを持つ小突起が配される。24・25は内彎する口縁で、口端直下に円形の貼り瘤が付きされる。

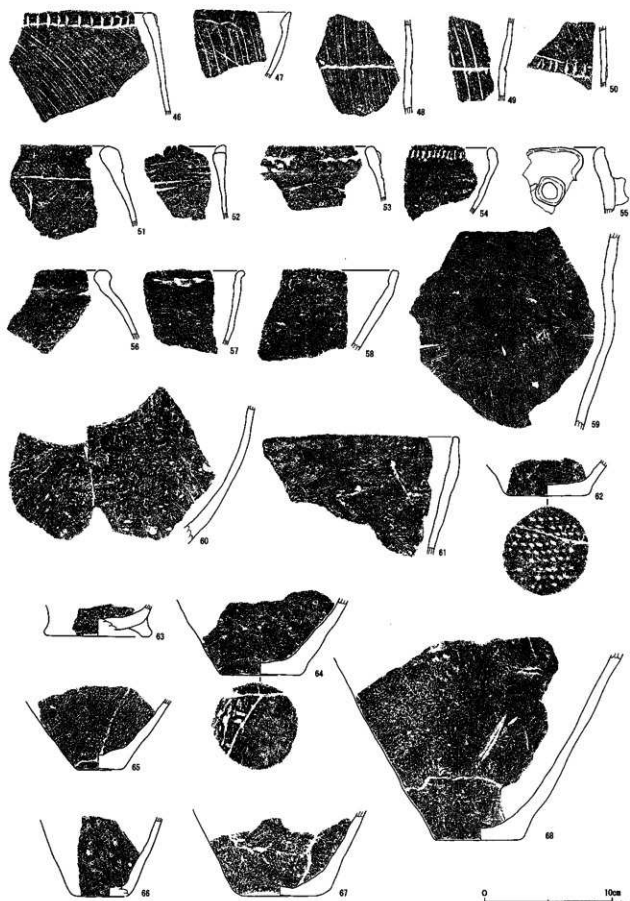
26~43は後期安行式で、安行1式を主体とする。26~28は大波状口縁深鉢である。26は波頂部で、中央押圧を伴う縦瘤がみられ、中央に貫通孔を持つ。27・28は胴部中段で、帯縄文間に矢羽根状の集合沈線文を施文する。30・31・51・52は水平口縁の砲弾形深鉢である。30は安行2式で、口端上および前面に刻みを持つ貼り瘤を配する。

32は台付鉢の口縁部である。口唇外面に刻みが巡り、縦位の集合沈線文が施文される。33も台付鉢で、



第58图 D区第8号竖穴居出土土器 (3)





第59图 D区第8号整穴住居跡出土土器 (4)

胴部中段の文様帯と胴下半部の地文部を区画する隆帯区画である。34～38・43は瓢形土器である。

39～42は注口土器である。39は口縁部、40は注口の接続部分で、安行2式であろう。41・42は注口部で、41は下端に貼り瘤を付している。

44～50・53・54は紐線文土器で、大半は後期安行式に伴うものとみられる。46・50は刻み+沈線を区画としており、肥厚して内彎する口縁部の特徴からも、やや時代が下るものと考えられる。

56～61は無文土器である。後期のものと晩期前葉のものが混在しているものとみられる。

62～68は底部を一括した。大半が晩期の粗製土器とみられる。高台付きの底部63は晩期の浅鉢に伴う

ものであろう。

### 土製品

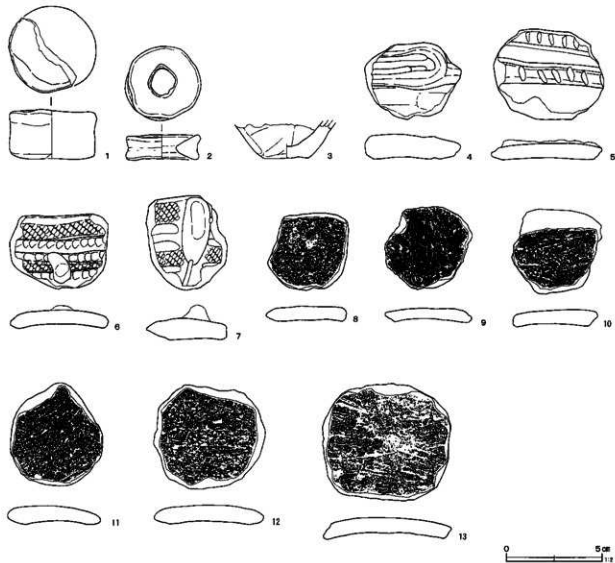
#### 耳飾 (第60図1・2)

1は中実白状で無文、側縁にごく弱い袈りを持つ。全体の二分の一弱が残存し、最大径4.6cm、高さ2.6cmを測る(以下、破損品の最大径は推定値)。

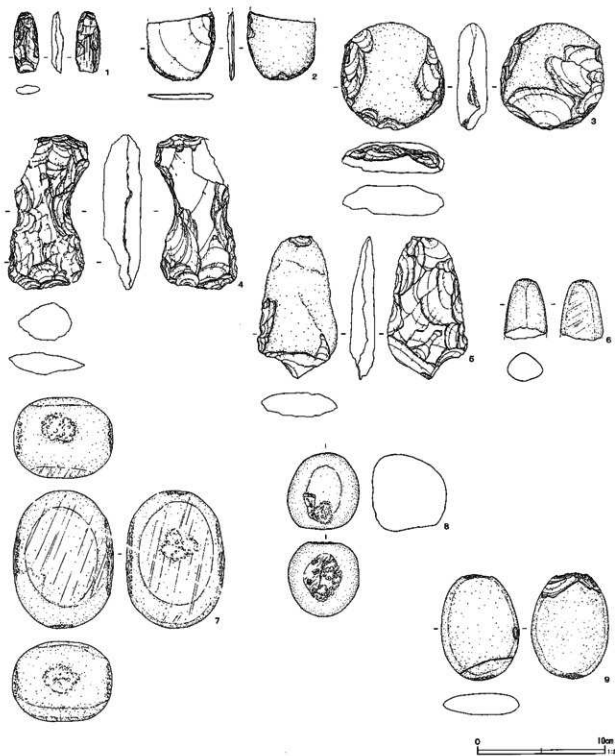
2は無文の滑車形耳飾で、断面三角形を呈し、側縁に深い袈りを持つ。完形で、最大径3.9cm、高さ1.3cmを測り、重さ16.5gを量る。

#### ミニチュア土器 (第60図3)

無文の深鉢底部である。甕状工具の調整痕が観察される。



第60図 D区第8号壜穴住居跡出土土製品



第61図 D区第8号竪穴住居跡出土土器 (1)

土製円盤 (第60図4~13)

4・5は高井東式で、口縁直下の隆帯区画の部分を使用し、4はC字状の小突起を取り込んでいる。

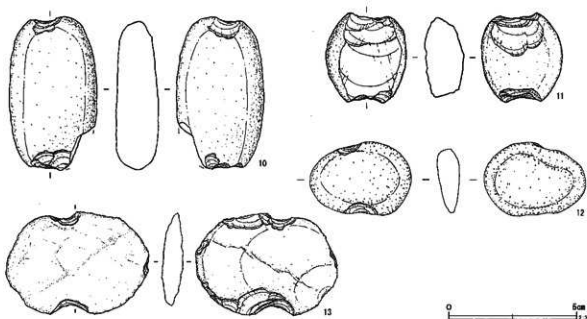
6・7は安行1式で、前者は瓢形土器、後者は水平口縁深鉢の口縁部を使用し、上端は口縁のカーブを

生かして、貼り瘤を中央に取り込んでいる。8以下は無文の胴部を使用する。法量は以下の通りである。

4：最大径5.0cm・重さ13.0g

5：最大径5.8cm・重さ25.4g

6：最大径5.1cm・重さ21.8g



第62図 D区第8号竪穴住居跡出土石器(2)

第12表 D区第8号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	打製石斧	4.7	2.0	0.9	10.0	C-①	ホルンフェルス
2	スクレイパー	(5.3)	5.4	0.5	18.0	B 1-b 1-①	砂岩
3	スクレイパー	8.3	8.0	2.4	214.2	B 2-c-①	安山岩
4	打製石斧	12.1	6.5	3.0	235.3	C-②	ホルンフェルス
5	打製石斧	11.1	6.3	2.0	138.6	A-②	ホルンフェルス
6	礮石	(4.7)	3.4	2.4	44.5	C-②	砂岩
7	磨石	10.7	7.9	6.3	764.9	B 2-①	閃緑岩
8	礮石	6.0	5.7	5.9	301.0	A 1-①	砂岩
9	磨石	8.3	6.1	1.7	135.2	B 2-①	砂岩
10	石錘	3.6	6.3	1.8	64.4	A-a-①	砂岩
11	石錘	3.3	3.7	1.7	31.2	A-a-①	砂岩
12	石錘	4.3	3.1	1.0	16.3	D-a-①	砂岩
13	石錘	8.4	6.3	1.4	82.0	C-c-①	ホルンフェルス

7：最大径4.2cm・重さ28.3g

8：最大径4.2cm・重さ12.6g

9：最大径4.5cm・重さ13.1g

10：最大径4.4cm・重さ20.8g

11：最大径4.9cm・重さ19.8g

12：最大径5.7cm・重さ31.8g

13：最大径6.7cm・重さ43.0g

石器(第61図・62図)

1・4・5は打製石斧である。

1は小型の石斧で、腹面に節理面を残す。側縁と基部は両面加工され、刃部のみ片刃となる。

4は分銅形で、基部の側縁を欠損する。5は背面に大きく自然面を残しており、刃部の加工は極め

て粗く、未製品の可能性もある。

2・3はスクレイパーである。

2は全体の1/2程度が残存する。背面に主要剥離面、腹面に自然面を残す。下端および右側縁に細かな両面剥離により刃部を造り出している。

3は扁平な円礮の3辺を両面加工して刃部としたもので、背腹両面に自然面が残されている。

6・8は印石である。

6は全体の1/2程度が残存する。棒状の礮の両端を使用したものとみられ、側面の一部が磨石として転用されている。8は球状の礮を使用したもので、底面および表・裏面が敲打されている。

9は扁平な楕円礮の両端を使用したもので、側縁

にもわずかに敲打がみられる。

10～13は石錘である。

10・11は楕円礫の長軸側両端にスリットを設けたもので、11は腹面に広く剥離がみられる。

12・13は短軸側にスリットを持つものである。12は自然深に片側からの剥離でスリットを施したもので、13は大型の剥片を加工したもので、背面に自然面を残す。両面からの剥離でスリットが造られるほか、他の側縁にも細かな剥離を施して整形している。

#### D区第10号竪穴住居跡 (第63図～64図)

L-40グリッドに所在する。第1号住居跡を切っており、第44・48・49号土壌に切られている。東壁の一部を検出したのみで、平面形および規模・主軸方

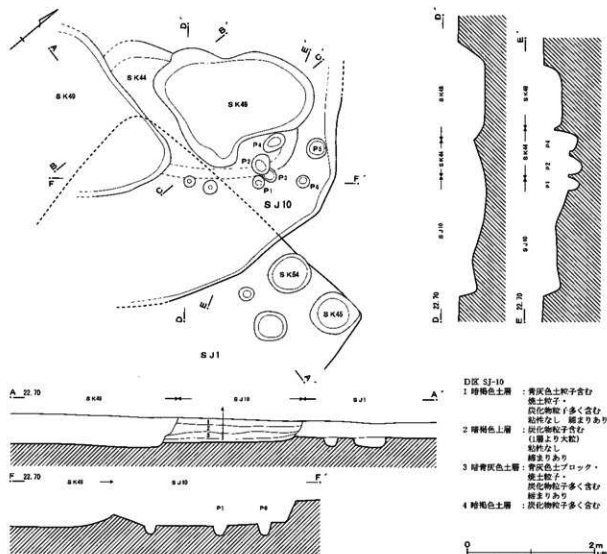
向は不明である。深さは37cmを測る。

遺物は高井東式～後期末葉の土器が中心に出土している。

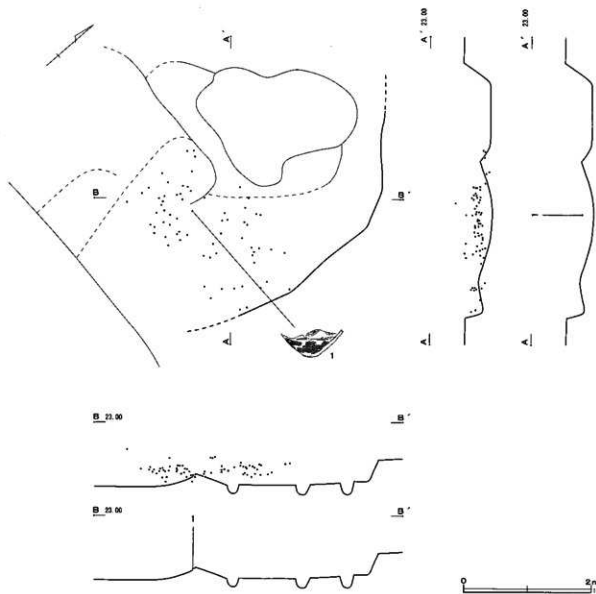
#### D区第10号竪穴住居跡出土遺物土器 (第65図～67図)

1は小型の精製深鉢で、胴下半部から底部までが残存する。後期安行式に属するものとみられる。

2～12は高井東式である。2・4は大波状口縁深鉢で、波頂部直下の破片だが突起を欠失している。9は同種の深鉢の口縁底部で、隆帯による区画が巡り、環状の把手が配されている。3は山形波状口縁の深鉢で、波頂部に楕円形の貼り瘤を持つ。5～8は平行沈線の巡る口縁部破片で、7は水平口縁、それ以外は波状口縁となる。



第63図 D区第10号竪穴住居跡



第64図 D区第10号竪穴住居跡遺物分布図

第13表 D区第10号竪穴住居跡 柱穴計測表

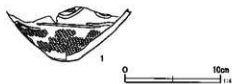
名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.20	0.20	0.17	Pit 4	0.38	0.22	0.15
Pit 2	0.30	0.30	0.19	Pit 5	0.32	0.32	0.07
Pit 3	(0.16)	0.20	0.17	Pit 6	0.22	0.18	0.18

10・11は刻みを持つ隆帯が巡る口縁部。12は無文の口縁で口唇肥厚し内外面に稜を持つ。

13～17は安行式の大波状口縁深鉢の口縁部である。13は安行1式で、波底部に縦長の貼り瘤がみられる。18は口縁部文様帯で、多段の帯縄文の一部がみられる。14～17は安行3 a～3 b式である。

19・21～23は後期末葉の水平口縁深鉢である。19は口縁上に刻みを持つ小突起を配し、縦位の蛇行沈線

文がみられる。21は刻みをもつ縦瘤が二個一対で配される。23は細密な沈線で横楕円形の区画が描かれ、間にS字モチーフが描かれる。20は同時期の深鉢

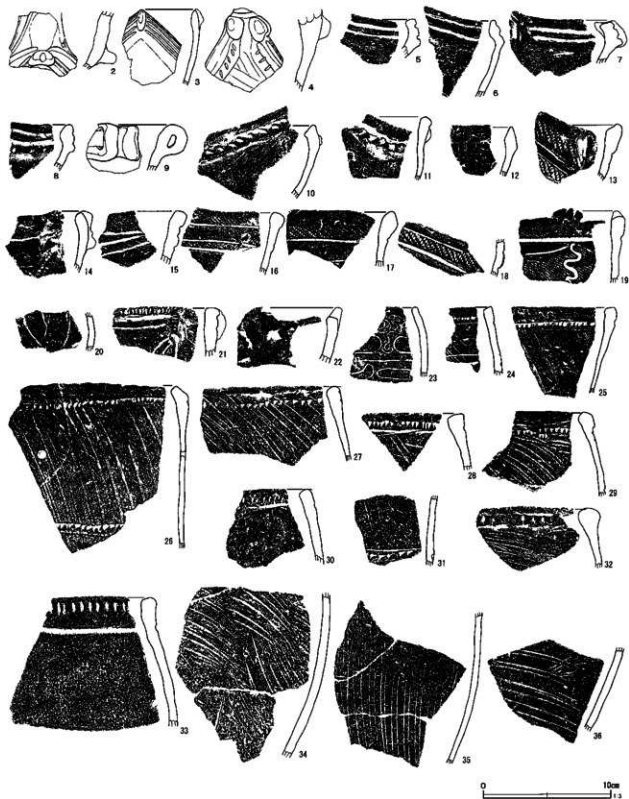


第65図 D区第10号竪穴住居跡出土土器 (1)

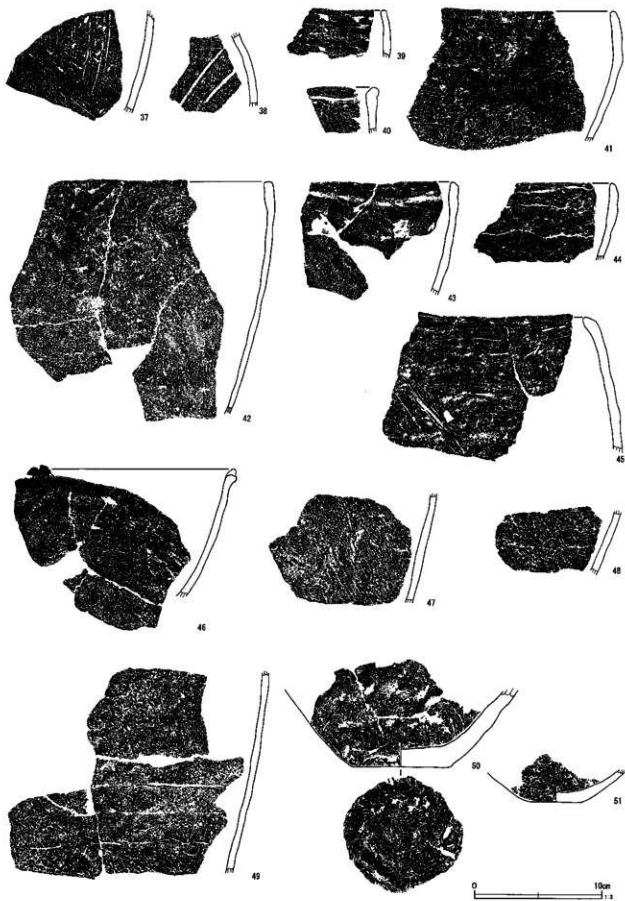
ないし浅鉢胴部であろう。

26～38は紐線文系土器である。25～27の口縁部は安行1式、それ以外は後期末葉～晩期前半に属するものと考えられる。

39～49は無文土器で、大半が晩期前葉と考えられる。篋状工具の粗い器面調整が特徴で、44・48・49は輪積み痕を残している。46は浅鉢ないし台付鉢とみられ、口端上に対をなす小突起を配している。

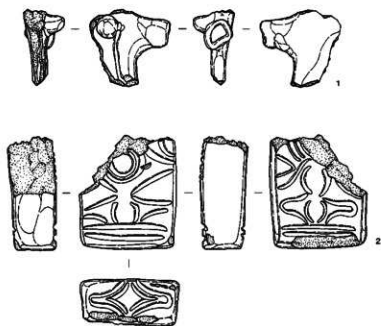


第66図 D区第10号竪穴住居跡出土土器(2)



第67图 D区第10号竖穴住居跡出土土器(3)





第68図 D区第10号竪穴住居跡出土土偶

50・51は底部で、前者は深鉢、後者は浅鉢のものである。

土偶・土版 (第68図)

1は左胸から左腕部にかけての部分である。現存する最大高4cm、最大幅2.1cm、厚さ0.8cmを測る。黒色を呈し、焼成はやや不良である。後期末葉のものと思われる。

2は土版と考えられるが、上半部を欠く。表裏とも対弧文と菱形の区画文が重畳するほか、底面にも

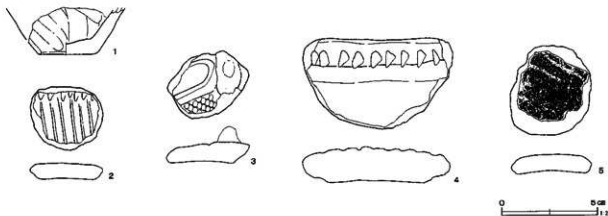
菱形区画文が描かれる。現存する最大高6cm、最大幅5.2cm、厚さ2.5cmを測る。緻密な胎土で、焼成は良好である。

ミニチュア土器 (第69図1)

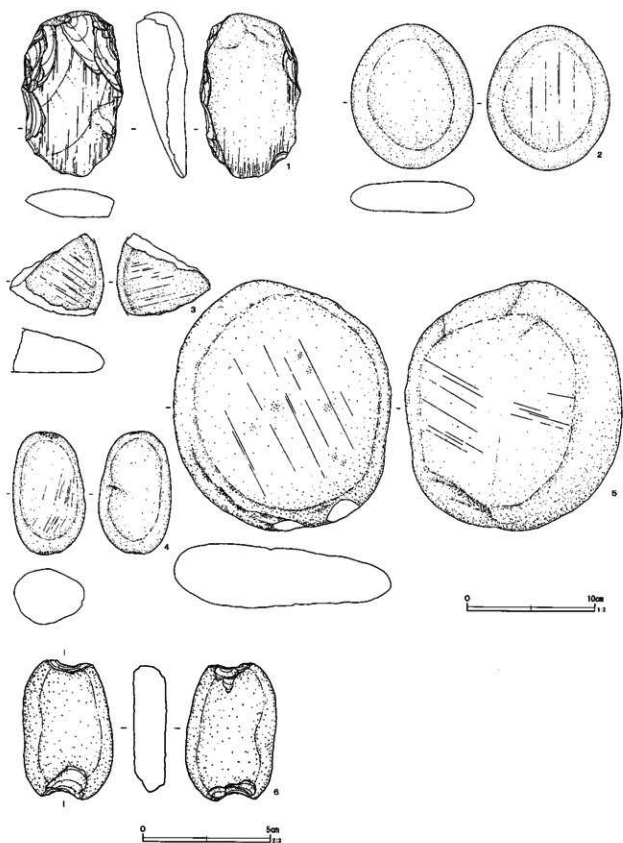
無文の深鉢底部である。篋状工具による釐位の調整痕が観察される。

土製円盤 (第69図2～5)

2は後期安行式の組線文土器を使用しており、胴部中段の刺突列を取り込んでいる。最大径3.8cmを測



第69図 D区第10号竪穴住居跡出土土製品



第70图 D区第10号竖穴住居跡出土石器

第14表 D区第10号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	打製石斧	12.9	7.9	4.0	433.1	D-①	ホルンフェルス
2	磨石	11.3	9.6	2.4	405.2	B2-①	砂岩
3	磨石	(6.4)	(7.3)	(3.4)	154.9	A2-②	安山岩
4	磨石	9.5	5.6	4.3	325.1	C-①	緑色岩
5	石皿	19.6	17.5	5.0	2471.2	A-①	安山岩
6	石鏃	3.6	5.5	1.3	38.2	A-a-①	砂岩

り、重さ11.98を量る。3は安行1式の口縁部文様帯で、貼り瘤を取り込んでいる。最大径4.3cmを測り、重さ18.5を量る。4は晩期の紐線文土器の口縁部破片を使用している。最大径7.7cmを測り、重さ56.2gを量る。5は集合沈線文の胴部である。最大径4.2cmを測り、重さ19.2を量る。

#### 石器

##### 打製石斧(第70図1)

縦長の剥片の側縁のみを調整加工したもので、腹面に原礫面、背面に主要剥離面を残し、基部にも原礫面を残している。

##### 磨石(第70図2~4)

いずれも扁平な自然礫を加工せずに用いており、4は叩石への転用がみられる。

##### 石皿(第70図5)

石皿ないし台石で、扁平な自然礫を無加工で使用する。

##### 石鏃(第70図6)

自然礫の長軸側両端に両面剥離により抉りを造り出している。

#### D区第11号竪穴住居跡(第71図・72図)

L-41・L-42グリッドに所在する。

北西部分を後世の溝跡によって破壊されているが、長軸4.6mの隅丸長方形の竪穴住居跡であったとみられ、深さ最大34cmを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。

床面は平坦で、北東方向への傾斜が顕著にみられる。床面上から27本のピットが検出され、うちP1・P3・P4・P5・P14が主柱穴、残りは壁柱穴とみられる。炉跡は溝跡により破壊されたものとみられる。

遺物は後期から晩期中葉のものが出土しているが、量的に晩期前葉が主体をなしている。

#### D区第11号竪穴住居跡出土遺物

##### 土器(第73図・74図)

1は安行3c式の深鉢で、口縁から胴部中段にかけて残存する。多単位の波状口縁をなし、波頂部直下に対弧状の沈線による紡錘状のモチーフを描いて、内部に複数の列点文を施文する。

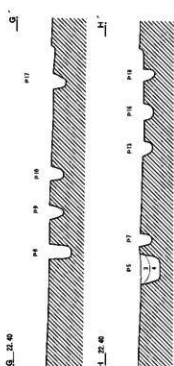
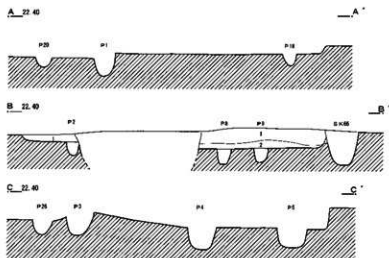
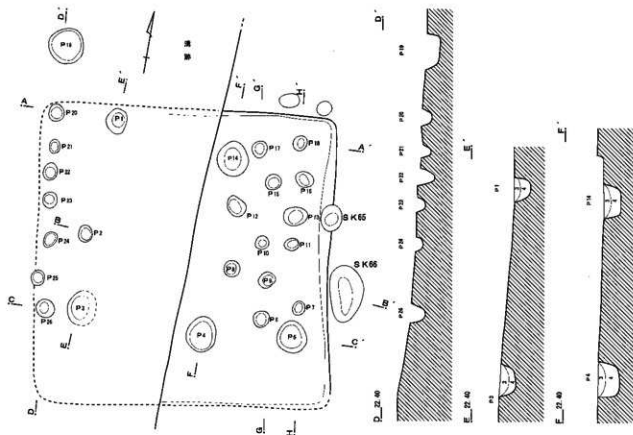
類型には列点文を伴う平行沈線を巡らせて文様帯を上下に区画し、胴上半部には口縁部と同様の紡錘文と、上下対向する弧線文を交互に配置する。

文様帯の下端は1条の沈線により区画する。縄文は施文されない。

2は小型の無文深鉢で、底部が欠失する。内髷し

第15表 D区第11号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	名称	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
Pit1	0.40	0.32	0.36	Pit15	0.56	0.50	0.29
Pit2	0.26	0.21	0.17	Pit16	0.26	0.24	0.17
Pit3	(0.50)	(0.18)	0.28	Pit17	0.28	0.24	0.18
Pit4	0.56	0.46	0.34	Pit18	0.26	0.22	0.19
Pit5	0.50	0.46	0.31	Pit19	0.24	0.22	0.18
Pit6	0.26	0.24	0.37	Pit20	0.55	0.54	0.19
Pit7	0.22	0.20	0.19	Pit21	0.26	0.22	0.18
Pit8	0.26	0.26	0.24	Pit22	0.22	0.16	0.15
Pit9	0.25	0.24	0.21	Pit23	0.28	0.20	0.26
Pit10	0.20	0.20	0.19	Pit24	0.24	0.22	0.15
Pit11	0.24	0.19	0.20	Pit25	0.26	0.20	0.13
Pit12	0.34	0.28	0.20	Pit26	0.24	0.22	0.22
Pit13	0.37	0.30	0.17	Pit27	0.28	0.28	0.24
Pit14	0.42	0.33	0.36				

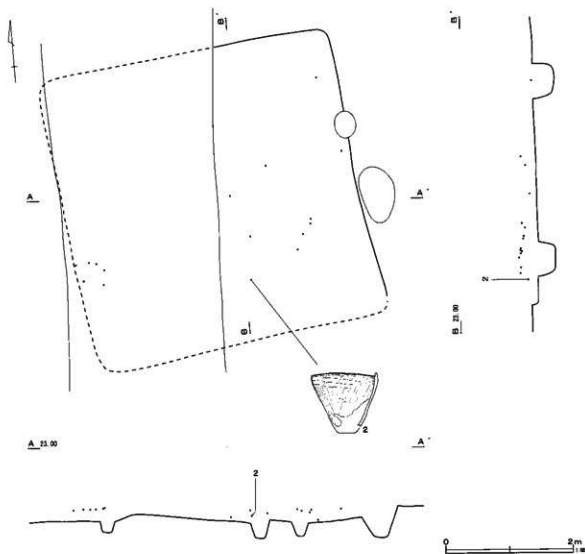


D区 S3-11

- 1 暗褐色土層 : 褐色土粒子・赤土粒子・炭化物粒子・骨片少量含む 粘りあり 締まりあり
- 2 暗褐色土層 : 炭化物粒子・骨片少量含む 粘りあり 締まりあり (層より薄い)
- 3 暗紫灰褐色土層 : 暗褐色土粒子ブロッケ状に多く含む 炭化物少量含む 水性粘土質
- 4 暗褐色土層 : 炭化物粒(少量含む) 骨や砂質 水性粘土質

0 2m

第71図 D区第11号竪穴住居跡



第72図 D区第11号竪穴住居跡遺物分布図

つつほ直線的に開くコップ形の器形である。器面には篋状工具の無で調整痕が観察され、口縁直下では横位、胴部以下では縦位方向の調整が施される。

晩期前葉の粗製土器の一種と考えた。

3以下は破片資料である。3は加曾利B3式ないし曾谷式期で、深鉢ないし鉢と考えられる。頸部が「く」の字に張り出し、口縁内彎して口唇断面内削ぎ状を呈する。口縁直下に沈線を巡らせて縄文を施文し、胴部には平行沈線による弧状モチーフの一部が観察される。

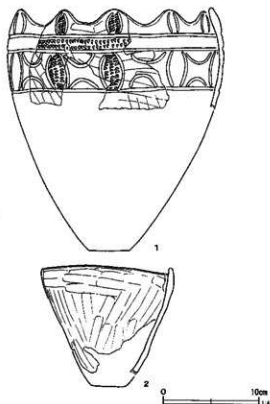
4～8は高井東式である。4～6は波状口縁深鉢の口縁部で、口唇断面肥厚して口縁直下に段を持ち、隆帯や平行沈線の区画が巡る。

8は水平口縁深鉢で平行沈線の区画を持ち、口端上に小突起を配する。7は山形波状口縁深鉢の胴上半部とみられ、斜位の集合沈線が施文される。

9は安行1式の波状口縁深鉢である。胴上半部の破片で多段の帯縄文がみられ、波頂部直下に貫通孔を持つ。10は安行3aの水平口縁深鉢である。左右に小突起を伴う山形突起を配し、直下に弧状の単沈線を描く。口縁下は縄文帯となり、下端を1条の沈線で区画して、胴上半部に文様帯を持つ。

11は浅鉢胴上半部の文様帯とみられる。無文地に対向三叉文がみられ、文様帯下端を1条の沈線で区画して、胴下半部は縄文帯となる。

12～14は注口土器の口縁部であろう。いずれも晩



第73図 D区第11号竪穴住居跡出土土器 (1)

期前葉のものと考えられる。15は壺の頸部で、中段に括れを持ち、列点を伴う隆帯が巡る。やはり晩期前葉に位置づけられる。

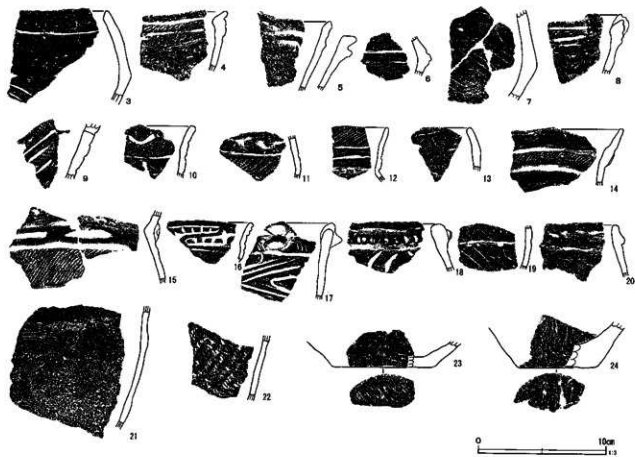
16は大洞系の浅鉢口縁部である。口縁直下に羊歯状文が巡る大洞BC式期のものである。

18・19は紐線文土器である。18は口縁直下に刻みを持つ隆帯が巡り、胴上半部に文様帯を持つ。安行3b式期のものか。19は胴部中段の区画で、沈線と刺突を巡らせ、斜位の集合沈線を地文とする。後期末葉～晩期初頭のものと考えられる。

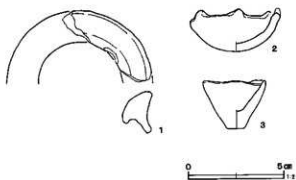
20・21は晩期前葉の粗製無文深鉢である。20は末端が反り返る折り返し口縁である。21は薄手の深鉢胴部で、篋状工具の調整痕が観察される。

22は粗い縄文のみ施文される胴部である。

23・24は底部である。いずれも無文で、24は深鉢だが23は鉢等の可能性がある。



第74図 D区第11号竪穴住居跡出土土器 (2)



第75図 D区第11号竪穴住居跡出土土製品

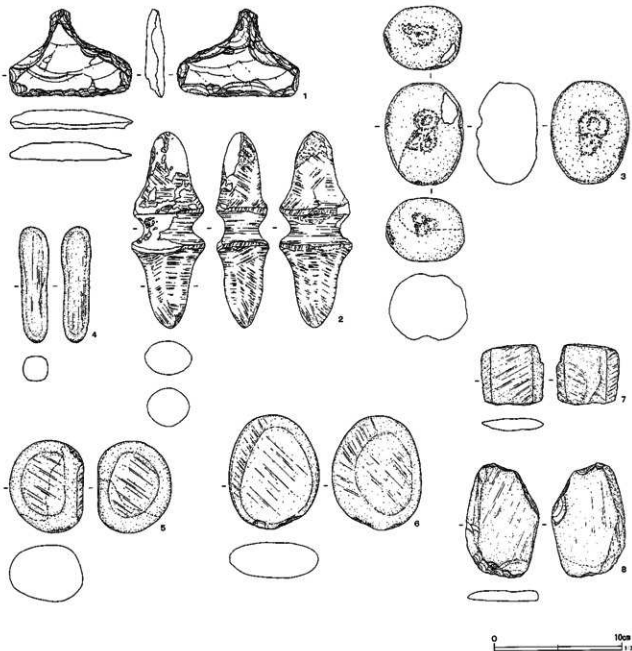
土製品 (第75図)

1は無文の滑車形耳飾で、断面「U」字状のタイプである。全体の四分の一程度が残存し、復元最大径7.6cm、現存高2.1cmを測る。

2・3はミニチュア土器である。2は水平口縁の浅鉢で、丸底で口縁内彎し、口端上に小突起を配する他、文様は施文されない。3は底部から口縁まで直線的に開く盃形の深鉢で、無文である。

石器 (第76図)

1は石匙である。腹面に主要剥離面を残している。



第76図 D区第11号竪穴住居跡出土石器

第16表 D区第11号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石器	6.8	9.5	1.5	85.0	A2-b2-①	ホルンフェルス
2	熱結石	15.3	5.6	4.0	330.6		砂岩
3	阿石	8.0	6.1	4.9	307.3	B2-b-①	安山岩
4	叩石	9.0	2.3	2.0	75.2	C-①	砂岩
5	磨石	7.1	5.8	4.3	281.2	B2-①	閃緑岩
6	磨石	8.8	7.0	3.1	266.0	B2-②	安山岩
7	砥石	(4.7)	4.9	1.1	29.1	B-①	砂岩
8	砥石	8.9	5.7	0.9	58.1	B-②	砂岩

刃部は長方形で、下端および右側縁に細かな両面剥離による刃部を作り出している。つまみは先細りの台形で、側縁を両面剥離で成形している。

2は熱結石である。中央の抉りを挟んで鐔を持ち、両端はゆるやかな紡錘形を描く。全面に被熱によるとみられる赤変とケロイド状の風化が観察される。

3は磨石転用の凹石である。両面に2箇所～3箇所凹所がみられ、また上下端および左側縁にも敲打痕が観察される。また、背面中央から右下側縁部にかけてス状の黒色付着物が観察される。

4は棒状の叩石である。自然石をほぼ無加工で使用し、下端に敲打痕がみられるほか、側面舞に線状痕が観察される。

5・6は両面使用の磨石、7・8は無溝の砥石で、8は扁平な自然礫を使用しているが上下端に細かな剥離がみられ、叩石としての転用が伺われる。

#### D区第12号竪穴住居跡 (第77図～79図)

L-41・42、M-41・42グリッドに所在する。当初性格不明遺構として調査を開始したが、床面中央に炉跡らしき掘り込みを検出したため、最終的に竪穴住居跡と判断した。

南東および西側の壁の一部を検出したのみで正確な規模は不明だが、長軸約6.5mの隅丸方形の竪穴住居跡であったと考えられる。主軸はN-15-Wを指すものとみられる。

床面はやや起伏を持ち、特に南東壁際が一段高くなっている。壁の立ち上がりは比較的鈍角である。東壁に張出状の施設を持つが、土壌の切り合いである可能性もある。床面上からは柱穴は検出されなかったが、壁外に沿って5基のピットが検出され、

本住居跡と関連する施設と考えた。

遺物は晩期前葉の土器が多数出土したが、主体をなすのは安行3a式である。

#### D区第12号竪穴住居跡出土遺物

##### 土器 (第80図～84図)

1は大波状口縁深鉢で、安行3a～3b式である。口縁部および底部を欠損する。胴上半部に帯縄文による三角形区画文が描かれ交点に豚鼻突起が配される。胴中段には横位の帯縄文が巡って文様帯を区画し、胴下半部には縦位の集合沈線文が施文される。地文はRL単節横位回転の縄文である。

2は大波状口縁深鉢のモチーフが形骸化したものである。三角形区画文および横位の区画帯は幅広の凹線で描かれ、これに沿って細密な刻みが施される。モチーフ交点の豚鼻突起は棒状工具押圧を伴う貼り瘤に代替される。地文を持たず、篋状工具による調整痕が観察される。安行3b式と考えられる。

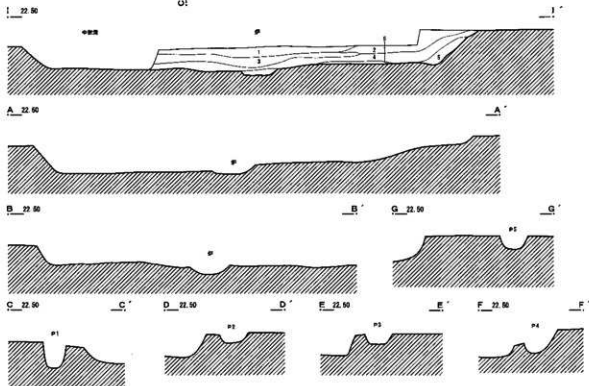
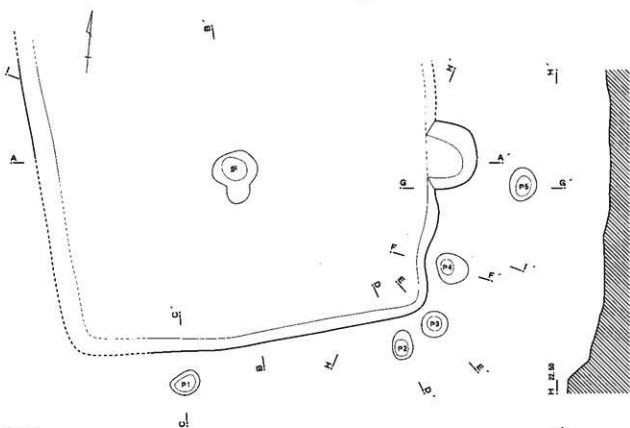
3は水平口縁の砲弾形深鉢ないし注口土器で、安行3a式期のものであろう。口縁から胴下半部にかけて残存する。

折返口縁を呈し、口縁上に扇形突起を配し、正面に刻みを持つ縦帯が付される。胴上半部に文様帯を持ち、地文縄文上に幅広の沈線により弧線文+三叉文が巡る。胴中段に刻みを持つ横長突起が並び、無文帯をはさんで横位の帯縄文が巡る。胴下半部は無文で、篋状工具による横位の調整痕が観察される。

地文はRL単節横位回転の縄文である。

4は安行3a式の水平口縁深鉢で、ほぼ全体を知り得る資料である。底部から胴上半部にかけて単調に内彎しつつ立ち上がり、頸部に強い屈曲を持ち、口縁外反する。口唇部肥厚して、二個一対の突起を



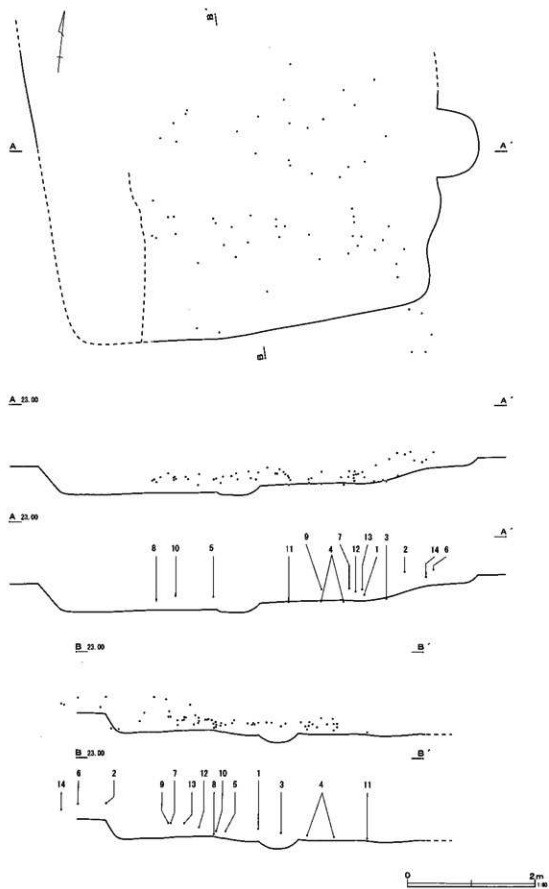


D区 S1-12

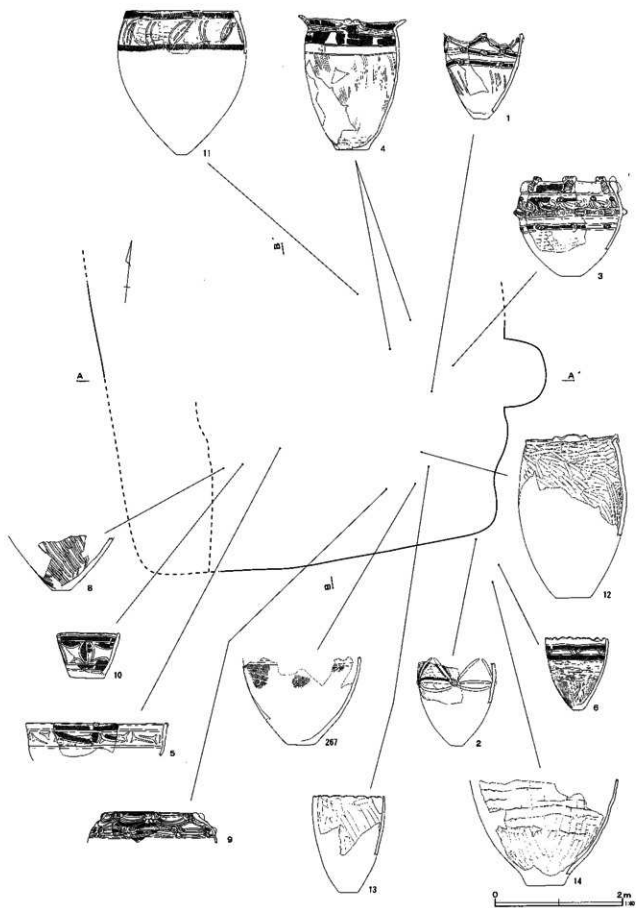
- 1 黒褐色土層 : 青灰色・黄褐色粘土・黄土・炭化物を含む 粘性あり
- 2 黒褐色土層 : 青灰色土ブロック多く含む 炭化物層含む 粘性あり
- 3 青灰色粘土層 : 炭化物多く含む
- 4 黄色土層 : 青灰色ブロック含む 炭化物層で多く含む
- 5 青灰色粘土層 : 炭層より炭化物少ない

0 2m

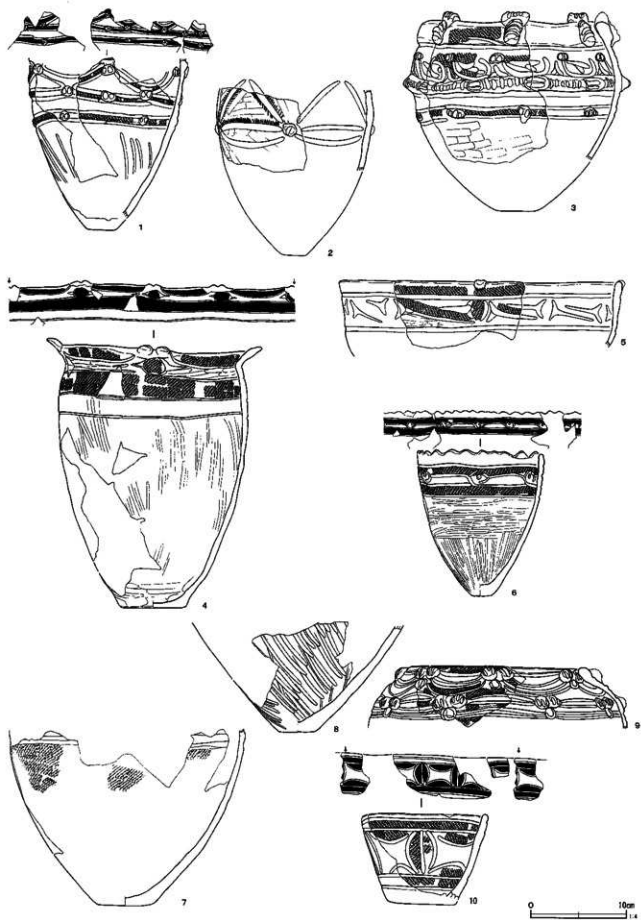
第77図 D区第12号竪穴住居跡



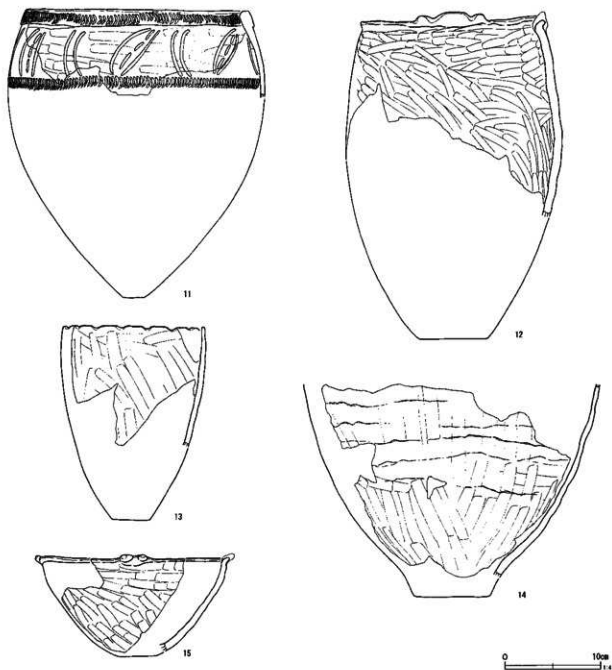
第78图 D区第12号竖穴住居出土遗物分布图(1)



第79图 D区第12号竖穴住居跡出土遺物分布圖(2)



第80图 D区第12号整穴住居跡出土土器 (1)



第81図 D区第12号竪穴住居跡出土土器 (2)

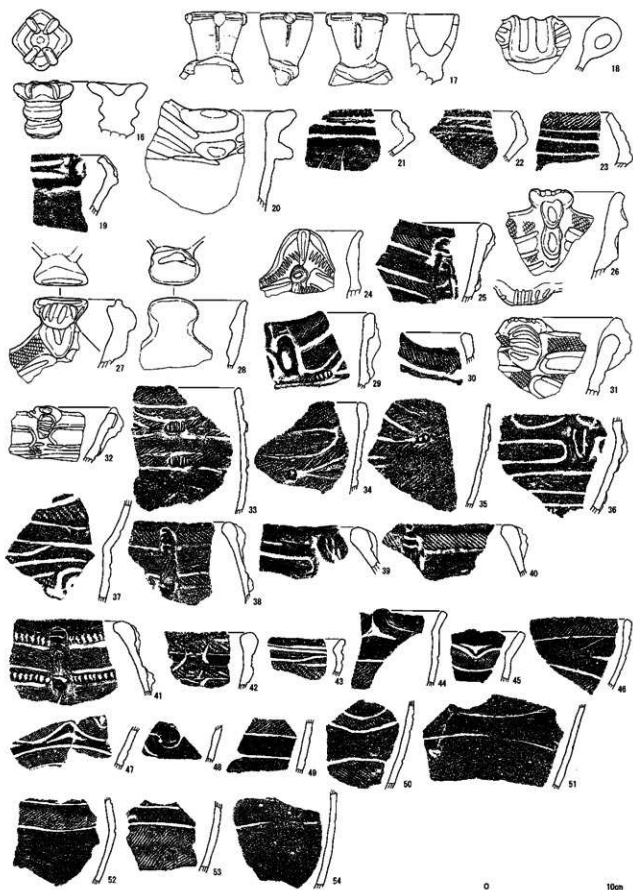
4単位に配する。突起間を弧線文で連続し、内部に縄文を施文する。突起の直下には玉抱き三叉文を配し、やはり内部に縄文を施文する。文様帯下端は幅広い帯縄文で区画し、若干の無文帯をはさんで1条の沈線を巡らせる。以下無文帯となり、縦位の研磨調整が観察される。底部の直上は筧状工具による横位の調整痕が観察され、軽微な括れを持つ。地文はLR単節横位回転の縄文である。

5は安行3a～3b式の浅鉢で、口縁部から胴上

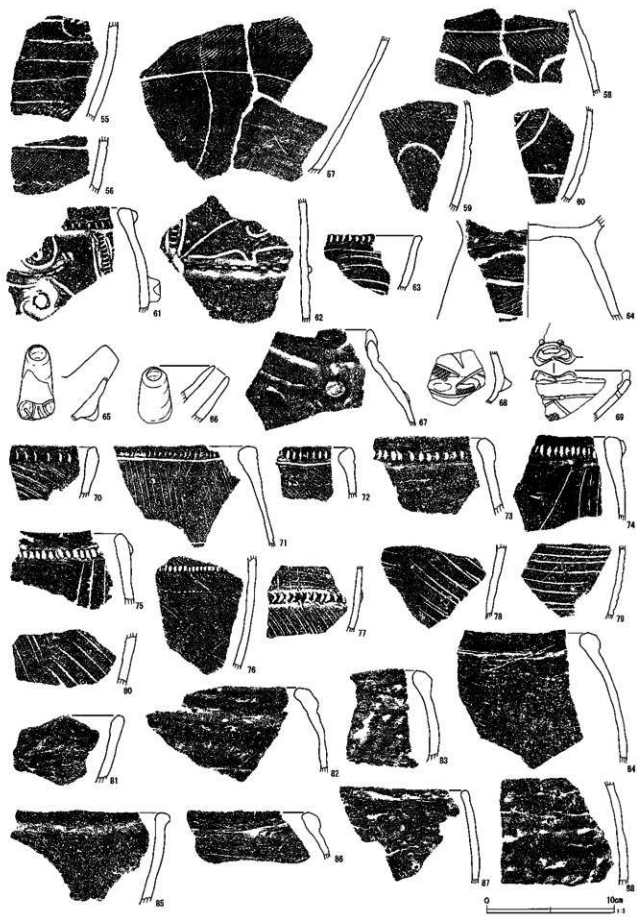
半部にかけて残存する。水平口縁で、胴部中段に屈曲を持ち、口縁部にかけて垂直に近い角度で立ち上がる。口唇部は軽微に肥厚し、上面に押圧を伴う円形の貼り瘤を配する。

口縁直下に縄文帯を持つ。胴上半部に斜位の対向弧線文が巡り、モチーフ間隙に縄文が施文される。文様帯上下は沈線により区画される。地文はRL単節横位回転の縄文である。

6は安行3a式の小型精製深鉢で、ほぼ完形の資



第82图 D区第12号竖穴住层出土土器(3)



第83图 D区第12号竖穴住居跡出土土器(4)

料である。小波状口縁をなし、底部から口縁にかけて内彎しつつ単調に立ち上がる。胴上半部に4条の平行沈線が巡り、中段2本の描線が連繋して入組状の魚眼三叉文を構成する。上下の区画内には縄文が施文され、帯縄文による区画となる。

区画から下は無文で、胴部中段付近では横位、胴下半部では縦位の磨痕調整が入念に施される。

7は精製深鉢の胴下半部である。胴部中段に平行沈線による文様帯の一部が観察される。胴下半部は縄文帯となり、L無節横位回転の縄文がごく散漫に施文される。安行3 a～3 b式期のものと考えられる。

8は深鉢底部である。全面に棒状工具による斜位の集合沈線文が施文される。晩期前葉のものと考えられる。

9は3に類似の深鉢ないし注口土器で、安行3 a式期のものであろう。口縁から胴部中段までが残存する。口縁強く内彎し、口唇部著しく肥厚して、軽微に外反する。口縁外面には隆帯が巡り、縄文が施文される。胴部中段にも縄文を持つ隆帯が巡り、両者の間で隆帯+沈線の弧状モチーフが上下対向し、やはり縄文が施文される。モチーフの接点には刻みを伴う横瘤が二個一対で配され、直下に円文が描かれる。地文はLR単節横位回転の縄文である。

10は小型の浅鉢で、安行3 a式と考えられる。底部を欠失する。

底径と口縁部最大径の差が比較的小さく、直線的に開く蕎麦猪口風の器形である。

上下を帯縄文で区画された幅広の文様帯を持ち、上下に縄文を伴う弧状の区画が対峙する。間隙には縦位の紡錘文が描かれ、中央を1条の沈線で分割する。地文はRL単節の縄文で、モチーフに沿って充填される。

11は紐線文土器である。口縁部から胴部中段にかけて残存する。

口縁内彎して口唇肥厚し、断面角頭棒状を呈する。外面には隆帯が付され、篋状工具をわずかにロッキングさせて付けた爪形文を巡らせる。胴上半部に文

様帯を持ち、平行沈線による斜位の紡錘文と弧状モチーフが交互に配され、紡錘文内部には単列の列点文が充填される。文様帯下端は口縁と同様の爪形文で区画される。地文はみられず、篋状工具による横位の調整痕が観察される。

安行3 b式期のものと考えられる。

12～15は無文の個体であり、いずれも晩期前葉のものと考えられる。

12は樽形の深鉢である。口縁から胴部中段にかけて残存する。胴部ほぼ中央に最大径を持ち、ゆるやかに内彎して口端外屈する。口縁上に台形の突起が付され、左右に山形突起が配される。厚手の器壁で、表面に篋状工具による調整痕が観察される。

13は6の精製土器に類似の器形である。口縁上に台形の突起が並ぶ小波状口縁を呈する。器面には篋状工具による調整痕がみられる。

14は胴部中段から下半部にかけて残存する。底部直上に括れを持ち、胴部は内彎しつつ立ち上がる。外面に輪積み痕を残し、篋状工具による縦位の調整痕が観察される。

15はボール状の浅鉢である。胴部は緩やかに内彎し、胴上半部に屈曲を持って、口縁は直線的に立ち上がる。口端は外屈して、二個一単位の小突起を配する。胴上半部には横位方向、下半部では斜位～縦位方向の磨痕調整が観察される。

16以下は破片資料である。16～23は高井東式である。16～20は大波状口縁深鉢、21～23は水平口縁の深鉢ないし浅鉢であろう。

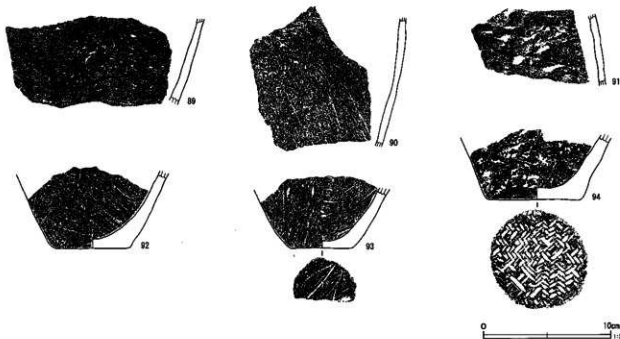
16は円柱状の突起で、上面観隅丸方形を呈する。四辺に縦瘤を配し、中央に摺鉢状の窪みを持つ。口縁との接続部分には2条の隆帯を巡らせる。

17はさかざき状の中空突起で、開口部外面に沈線を巡らせ、四方に貼り瘤と縦位のスリットを配する。

18～20は波底部の突起で、18は橋梁状把手、19はC字状小突起、20は二段の横瘤を配する。

21～23は「く」の字に内屈する水平口縁で、外面に平行沈線文が巡り、23は縄文が施文される。





第84図 D区第12号竪穴住居跡出土土器(5)

24は安行1式の大波状口縁深鉢である。

25~30は晩期安行式の大波状口縁深鉢口縁部である。胴上半部に縄文を伴う隆帯により三角形の区画を描き、交点に刻みを持つ貼り瘤や豚鼻突起を配する。形骸化した豚鼻突起を重畳させる26は安行3b式と考えたが、それ以外は安行3a式であろう。31・32は水平口縁化するものだが、やはり帯縄文による類似の区画文が描かれる。

33~37は同種の深鉢胴部である。33~35はごく扁平な隆帯で、突起も矮小化しており、安行3b式に下る可能性がある。37は胴下半部に入組三叉文の一部を見ることができる。

38~41は砲弾形深鉢の口縁部である。口縁下に刻みを持つ縦瘤が重畳し、隆帯+縄文の水平区画が巡る。41は篋状工具の刺突列を伴う隆帯である。

42・43・63は台付鉢の口縁部であろう。64は脚台部である。

44~49は安行3a式期に特徴的な磨消縄文土器群で、水平口縁上に二個一對の突起を配し、三叉文・入組文・連続弧線文などからなる文様帯が多段構成で展開する。

50~60は晩期前葉の精製深鉢に伴う胴部破片であ

る。縄文帯の下端を連続弧線で区画する58・59は安行3b式であろう。横位の結節回転文がみられる56は大洞系の個体である可能性がある。

61・62は安行3b~3c式の水平口縁深鉢で、天神原式の影響が伺える。

65~67は注口土器で、65・66は注口部である。68は「く」の字に張り出す浅鉢胴部で、横長扁平な突起が付されている。69は直線的に開く浅鉢で、対をなす突起に対応して二つの貫通孔が配され、胴部には連続弧線文が描かれる。いずれも安行3a式であろう。

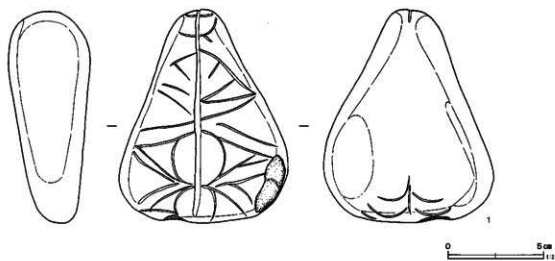
70~80は紐線文土器である。70が後期安行式、74が安行3b式に伴うほかは、大半が後期末~晩期前葉のものと考えた。

81~91は無文の深鉢で、晩期前葉に属する。篋状工具による粗い撫で調整痕やひだ状の圧着痕が観察され、しばしば輪痕を残す。1は山形波状口縁、82~84・86は肥厚しつつ強く内彎する水平口縁である。92~94は底部で、94は底面に網代圧痕が観察される。

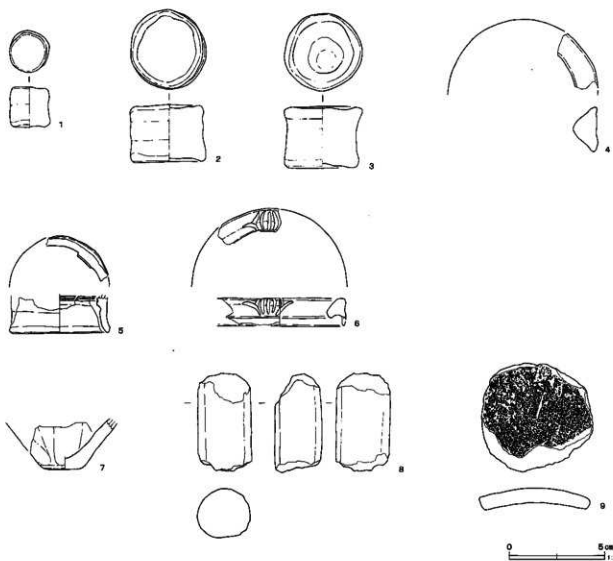
石製品

岩偶(第85図)

二等辺三角形の自然礫をおおまかに面取りして使



第85图 D区第12号整穴住居跡出土岩偶



第86图 D区第12号整穴住居跡出土土製品

用しているものとみられる。表面中央に深い線刻による正中線を描き、左右対称に菱形の区画と対弧文を配している。裏面はほぼ無文で、下端のみ上限の弧線文を重畳させている。人体のイメージを簡略に表現したものとみることができる。現存する最大高11cm、最大幅8.9cm、厚さ4.3cmを測る。重量は294gを量る。

#### 土製品

##### 耳飾（第86図1～6）

1～3は中実白形の耳飾である。

1は直径と高さの差が僅少で、側縁に縦位の研磨調整痕が観察される。完形で、最大径2.0cm、高さ2.1cmを測り、重量12.9gを量る。2は上下面に窪みを持ち、篋状工具先端による調整痕が観察される。完形で、最大径3.9cm、高さ3.0cmを測り、重量57.5gを量る。3は外観・サイズとも2に類似し、上面に成形時の指頭痕を残す。完形で、最大径4.0cm、高さ3.2cmを測り、重量60.5gを量る。

4は無文の滑車形耳飾で、断面三角形を呈する。全周の七分の一弱が残存し、最大径7.9cm、高さ2.3cmを測る（以下、破損品の最大径は推定値）。

5は有文の滑車形耳飾で、上端文様施文部を欠失するが、直下の内面に段を持って1条の沈線が巡る。下端は外反して裾広がりとなる。全周の四分の一強が残存し、最大径5.2cm、現存高1.9cmを測る。

6は断面「r」字状のタイプで、縦位の平行沈線文と三叉文からなる単位文が配される。全周の八分の一程度が残存し、最大径8.1cm、高さ1.4cmを測り、重量5.1gを量る。

##### ミニチュア土器（第86図7）

無文の深鉢底部である。篋状工具による縦位の調整痕が観察される。

##### 不明土製品（第86図8）

円柱状の土製品で、上下を欠損する。文様は施文されない。全長5.1cm、最大径2.8cmを測る。

##### 土製円盤（第86図9）

無文の胴部破片を使用する。最大径5.8cm、重量

30.2gを量る。

#### 石器

##### 石鏃（第87図1）

平基無茎の石鏃である。横長剥片を使用し、腹面に主要剥離面を残す。石材は黒曜石である。

##### 磨製石斧（第87図2）

小型精製の定角形磨製石斧である。腹面刃部上方に光沢を伴う特徴的な摩滅が観察される。

##### 打製石斧（第87図3・4）

3は横長剥片を使用し、背面のほとんどが原礫面となり、側縁の折り部のみ両面剥離によって成形する簡素な造りである。4も横長剥片で、打面である右側縁部に広く原礫面を残す。必要最小限の剥離で全体を短冊形に整えたもので、未製品と見ることできる。

##### 砥石（第87図6）

砂岩製の無溝砥石である。扁平礫を長方形に整形しており、上半部を欠損する。

##### 磨石（第87図5・7～88図11）

大半が楕円形の自然礫を無加工で使用するものである。両面使用され、10を除くすべてに赤変ないしスス状の付着物が観察される。10は叩石への転用が考えられ、また周縁部を敲打整形している可能性がある。

##### 叩石（第88図12）

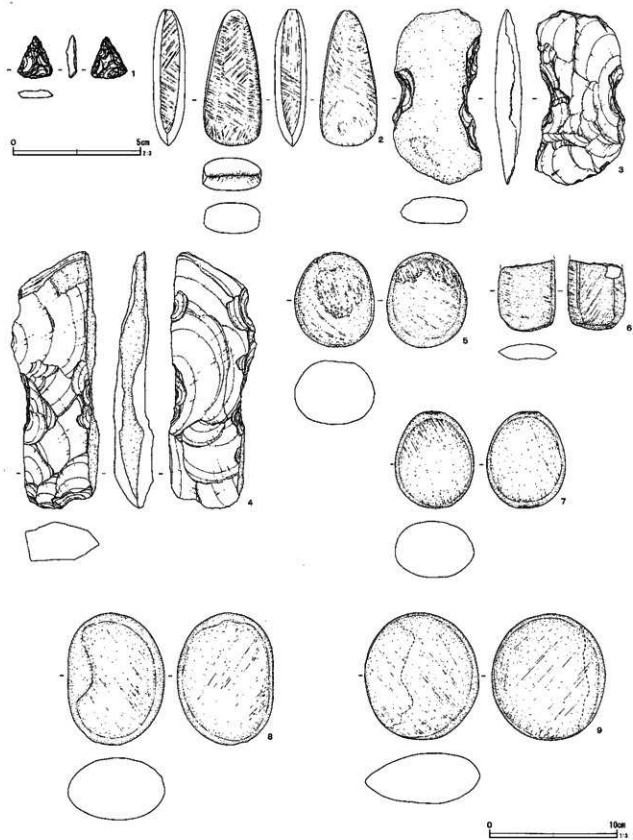
棒状の礫の両端が使用されており、また、側縁部に擦痕が残される。

##### 石錘（第88図13・14）

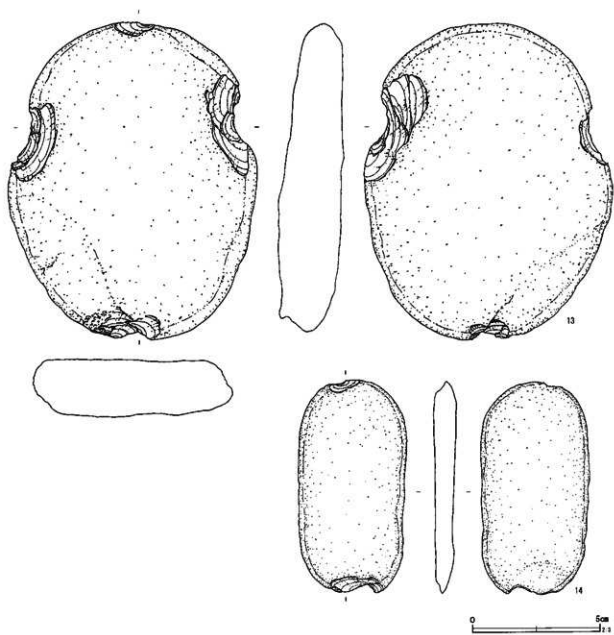
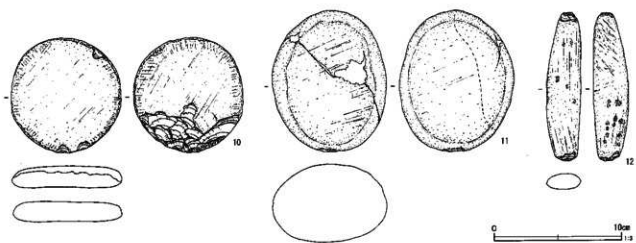
13は石錘としては破格のサイズで、重量450gを量る。扁平な自然礫の四方に、両面ないし片面の剥離によって袂りを設けている。14は長軸側のみ袂りを設ける。

##### 石皿（第89図）

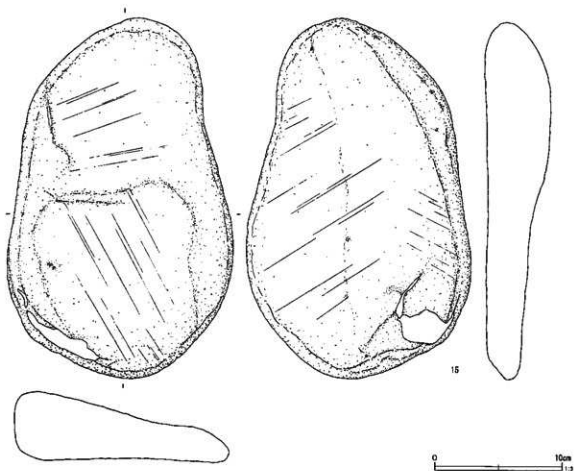
砂岩の扁平礫を無加工で使用する。両面使用されるが、使用痕は僅少である。



第87图 D区第12号整穴住居跡出土石器 (1)



第88图 D区第12号竖穴住居跡出土石器(2)



第89図 D区第12号竪穴住居跡出土石器(3)

第17表 D区第12号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.8	A 2-①	黒曜石
2	磨製石斧	10.5	4.5	2.5	184.7	A-①	緑色岩
3	打製石斧	13.6	7.1	2.1	240.1	C-①	ホルンフェルス
4	打製石斧	19.8	6.8	3.0	444.4	C-①	ホルンフェルス
5	磨石	7.4	6.2	5.1	316.9	A 2-④	砂岩
6	磨石	5.5	4.5	1.2	41.9	B-②	砂岩
7	磨石	7.5	6.1	5.0	266.5	B-②	閃緑岩
8	磨石	10.2	7.6	4.8	513.5	B 2-①	砂岩
9	磨石	9.8	8.9	3.9	411.7	A 2-①	安山岩
10	磨石	8.9	8.6	1.7	171.7	A 2-①	砂岩
11	磨石	11.0	9.0	6.1	851.6	B 2-③	閃緑岩
12	叩石	11.6	2.8	1.2	72.5	C-①	緑色岩
13	石錘	9.8	12.4	2.9	453.9	C-a-①	珪岩
14	石錘	4.3	8.3	0.9	59.1	A-a-①	緑色岩
15	石皿	28.1	17.6	6.6	3496.7	C-a-①	砂岩

## (2) 土壌 (第90図～92図)

調査区域内から多数の土壌を検出したが、当初土壌として調査を開始したものの最終的に堅穴住居跡の一部となったもの、ごく浅い染みや落ち込みと判断されたものが多く、最終的に26基が残った。所在や規模については第18表を参照されたい。

### 第31号土壌出土遺物

#### 土器 (第97図1～3)

1・2は晩期前葉で、紐線文土器の流れを汲む深鉢である。

口縁内彎して口唇断面肥厚し、棒状工具による刺

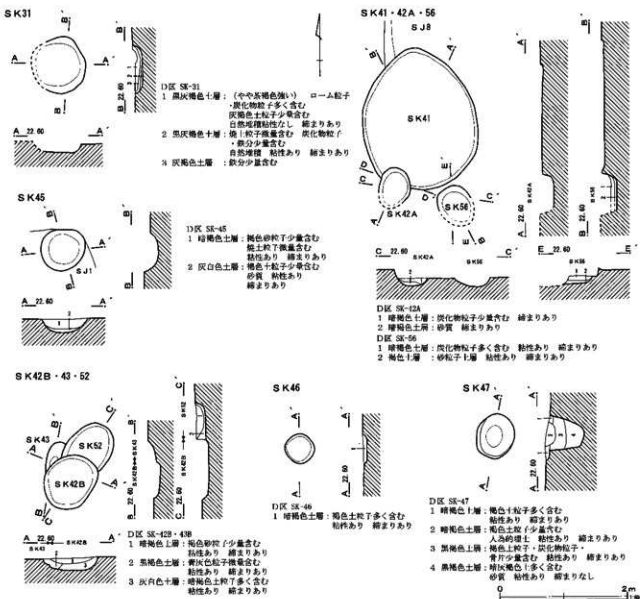
突文が巡る。1は胴部に平行沈線による横V字モチーフを描き、2は列点文が垂下する。

3は無文の口縁で、晩期前葉の粗製深鉢である。内彎する単純口縁で、表面に輪横み痕を残す。

### 第32号土壌出土遺物

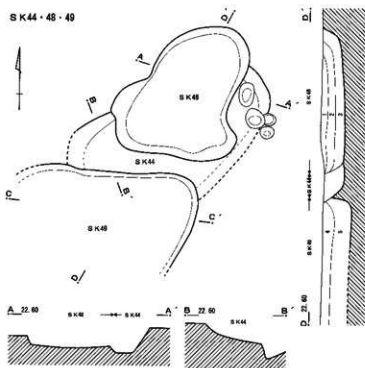
#### 土器 (第97図4)

安行2式で、大波状口縁深鉢の波底部とみられる。刻みをもつ縦縞と豚鼻突起が重疊し、折り返し口縁下端に刻みが巡る。

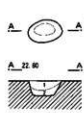


第90図 D区土壌 (1)

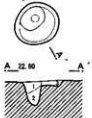
S K44・48・49



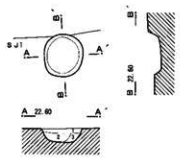
S K50



S K51



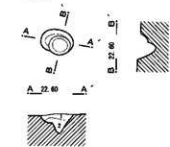
S K54



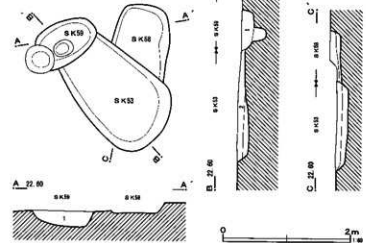
A 22.60 S K44 B 22.60 S K44



S K55



S K53・58・59



D区 SK-48・49

- 1 暗灰色土層：炭化物粒子多く含む 鉄分含む 砂質 粘性なし 締まりあり
- 2 暗灰色土層：白色土多く含む 炭化物粒子含む 粘性なし 締まりあり
- 3 暗褐色土層：黄土粒子少量含む 炭化物（植物繊維）極めて多く含む
- 4 暗褐色土層：黄土粒子・炭化物粒子少量含む
- 5 黒褐色土層：暗褐色土・炭化物粒子含む

D区 SK-50

- 1 暗褐色土層：青灰色ブロック・炭化物粒子含む
- 2 暗青灰色土層：青灰色ブロック多く含む

D区 SK-51

- 1 暗褐色土層：炭化物粒子少量含む
- 2 暗褐色土層：青灰色土粒子少量含む 砂質
- 3 暗黄褐色土層：黄褐色土ブロック含む 締まりあり

D区 SK-53・58・59

- 1 暗褐色土層：褐色土・炭化物粒子含む 人為的埋土
- 2 灰褐色土層：褐色土粒子・炭化物粒子少量含む 粘性あり 締まりあり
- 3 暗褐色土層：褐色土粒子多く含む 人為的埋土
- 4 灰褐色土層：褐色土・鉄分粒子多く含む 砂質

D区 SK-54

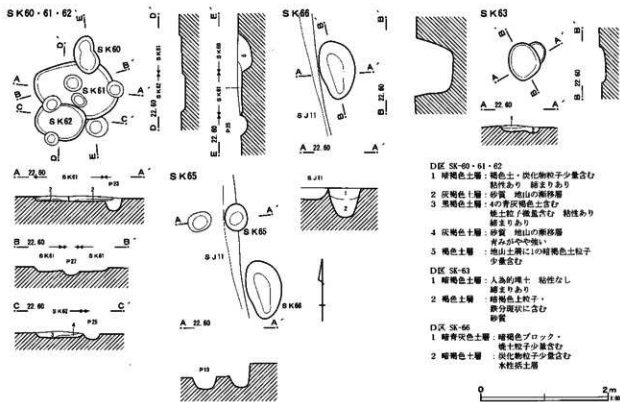
- 1 暗褐色土層：黄土ブロック多く含む 炭化物粒子少量含む
- 2 暗褐色土層：黄灰色土ブロック多く含む 黄土粒子・炭化物粒子少量含む
- 3 暗灰色土層：灰色土ブロック多く含む

D区 SK-55

- 1 暗褐色土層：炭化物粒子少量含む
- 2 暗褐色土層：粘性あり 締まりなし

第91図 D区土壌 (2)



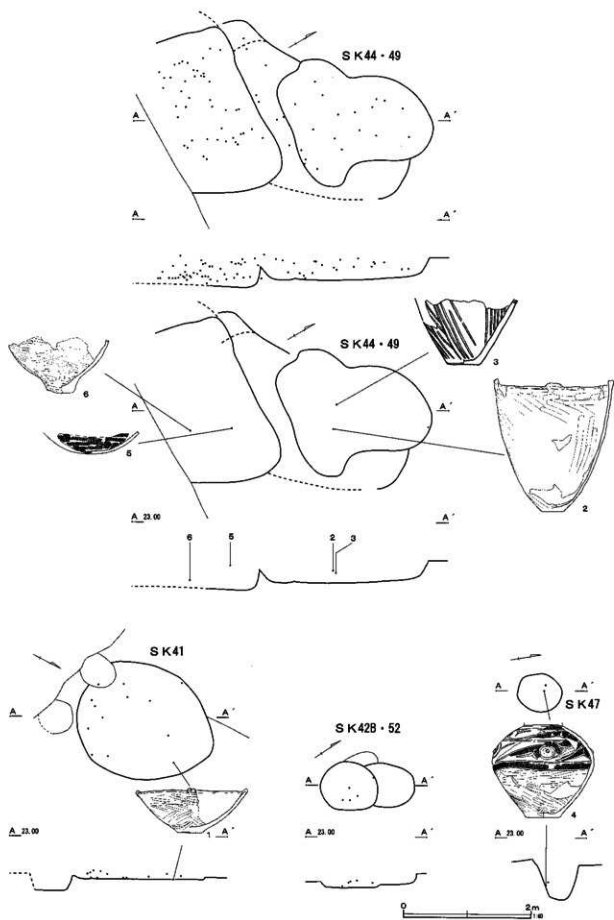


- D区 SK-60・61・62
- 1 暗褐色土層：褐色土・炭化物粒子少量含む  
粘性あり 締まりあり
  - 2 灰褐色土層：砂質 地山の漸移層
  - 3 黒褐色土層：4の青灰褐色土含む  
地土粒（煤塵）含む 粘性あり  
締まりあり
  - 4 灰褐色土層：砂質 地山の漸移層  
青みがやや強い
  - 5 褐色土層：地山土層に1の暗褐色土粒子  
少量含む
- D区 SK-63
- 1 暗褐色土層：人為的堆土 粘性なし  
締まりあり
  - 2 褐色土層：暗褐色土粒子・  
微分層状に含む  
砂質
- D区 SK-66
- 1 暗青灰色土層：暗褐色ブロック・  
地土粒子少量含む
  - 2 暗褐色土層：炭化物粒子少量含む  
水性粘土層

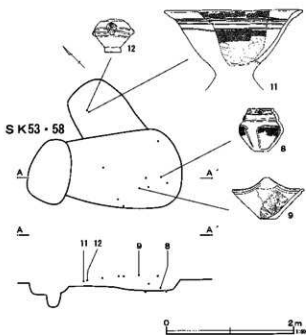
第92図 D区土壌 (3)

第18表 D区土壌跡 計測表

遺構名	所在 (グリッド)	主軸方向	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
SK31B	M-40	N-10°-E	0.90	(0.81)	0.18
SK41	L-41	N-3°-W	2.14	1.98	0.04
SK42A	L-41	N-25°-E	0.64	0.48	0.23
SK42B	L-40・L-41	N-28°-E	0.90	0.78	0.19
SK43	L-40	N-10°-E	0.55	0.34	0.18
SK44	L-40	N-47°-E	(3.36)	(1.89)	0.27
SK45	L-40	N-56°-E	0.70	0.66	0.22
SK46	L-40	N-0°-S	0.48	0.46	0.08
SK47	L-40	N-21°-E	0.68	0.60	0.53
SK48	L-40	N-52°-E	0.22	0.13	0.44
SK49	L-40	-	-	-	0.25
SK50	L-40・L-41	N-86°-E	0.50	0.32	0.23
SK51	L-40・L-41	N-53°-E	0.70	0.64	0.39
SK52	L-40・L-41	N-42°-E	1.00	0.66	0.17
SK53	L-41	N-44°-W	(2.20)	1.10	0.52
SK54	L-40	N-3°-W	0.65	0.60	0.21
SK55	L-40	N-83°-W	0.50	0.40	0.33
SK56	L-41	N-32°-W	0.58	0.56	0.13
SK58	L-41	N-11°-E	-	0.90	0.42
SK59	L-41	N-58°-E	(1.00)	0.65	0.48
SK60	L-41	N-6°-W	0.60	0.35	0.19
SK61	L-41	N-76°-W	1.25	0.90	0.12
SK62	L-41	N-80°-W	0.80	0.56	0.07
SK63	L-41	N-26°-W	0.65	0.55	0.10
SK65	L-42	N-12°-W	0.42	0.34	0.36
SK66	L-42	N-13°-W	0.90	0.55	0.57



第93图 D区土坑出土遗物分布图(1)



第94図 D区土壌出土遺物分布図(2)

#### 第40号土壌出土遺物

##### 土製品

##### 耳飾(第101図1)

磨消縄文がみられる。最大径3.5cmを測り、重量8.8gを量る。

#### 第41号土壌出土遺物

##### 土器(第95図1、第97図5~9)

第95図1は晩期前葉の無文浅鉢で、口縁から底部まで残存する。底部直上に括れを持ち、胴部緩やかに内彎しつつ立ち上がって、口縁軽微に外屈する。水平口縁上に中割れの突起を4単位配する。器表面には研磨調整が施される。

第97図5~7は高井束式の口縁部である。5・6は大波状口縁深鉢で、5は刻みを持つ2条の隆帯の間に凹縁が巡り、縦帯が配される。6は波底部で、2本隆帯を巡らせた上に対を成す縦帯が配される。

7は無文の水平口縁深鉢で、口縁外反し、口端「く」の字に内屈する。

同図8は安行1式に伴う紐線文土器である。口縁軽微に内屈して、口唇断面肥厚して口端内面突出する。口縁直下に斜位の刺突列が巡り、縦位の集合沈

線を地文とする。同図9は縄文のみ施文される深鉢底部で、後期安行式に伴うものであろうか。

#### 第42号土壌出土遺物

##### 土器(第97図10~17)

10は高井束式の口縁部である。水平口縁の深鉢ないし浅鉢で、口縁直下に段を持ち、2条の凹縁が巡る。11は安行2式で、波状口縁波頂部である。大型の突起を伴わず、前面に刻みを持つ縦帯を配する。12は同時期の水平口縁深鉢の口縁部文様帯とみられ、帯縄文により楕円形の区画が描かれる。

13は後期安行式の砲弾形深鉢口縁部である。15は後期安行式の台付鉢胴部で、筧状工具先端による結節沈線がみられる。16は安行1式の瓢形土器口縁部とみられ、帯縄文直下に斜位の刺突列が2段に巡る。

14は平行沈線の巡る口縁で、晩期前葉のものか。17は無文深鉢の口縁~胴上半部で、晩期前葉の粗製土器であろう。

#### 第43号土壌出土遺物

##### 土器(第97図18~20)

18は晩期安行式の大波状口縁深鉢口縁部であろう。19は同時期の無文粗製深鉢で、外面丸みを持った折り返し口縁を呈する。20は同種の土器の胴部破片で、筧状工具の調整痕が観察される。

#### 第44号土壌出土遺物

##### 土器(第95図2・3、第98図)

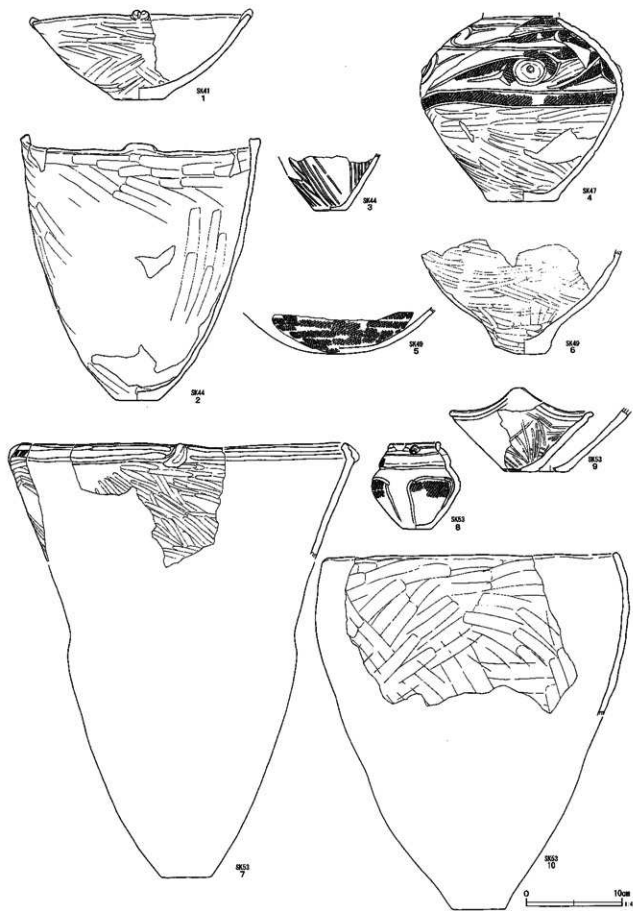
第95図2は無文の深鉢で、口縁から胴部まで残存する。晩期前葉の半粗製の土器と考えられる。

底部から胴部にかけて内彎しつつ単調に開き、口縁は直立する。

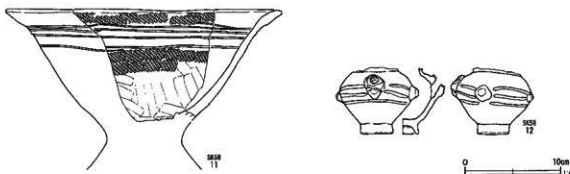
水平口縁上に上面押圧を伴う台形の突起を4単位配する。器面調整は筧状工具による撫で調整で、口縁直下では横位に、胴上半部では斜行し、胴中段から下では縦位に走っている。

同図3は深鉢底部である。縦位の集合沈線文を地文としており、紐線文土器か、精製深鉢の地文部とみられる。文様不明だが、2と同時期のものであろう。

第98図1~3・19・24・25は高井束式である。1・



第95图 D区土壕出土土器(1)



第96図 D区土壌出土土器(2)

3は水平口縁の深鉢、2は浅鉢と考えられる。

19は山形波状口縁の深鉢で、胴上半部に篋状工具による斜位の刺突が2段に巡る。24・25は無文の水平口縁深鉢だが、24における凹線の存在から同時期のものと考えた。

同図4～13・16・17は後期安行式で、7・16・17は安行2式、他は1式であろう。10・13は甌形土器とみられる。

14・15は安行3b式の波状口縁深鉢で、口縁部帯縄文の一部とみられる。18は対向弧線文内部に細密な縄文を施文するもので、同時期の深鉢胴下半部と考えた。

20～23は紐線文土器である。20・21は口縁部で、前者は刻み+沈線、後者は斜位の刺突+平行沈線で口縁直下を区画し、縦位の集合沈線を地文とする。後期安行式に伴うものと考えられる。22・23は胴部で、斜位の集合沈線文である。

26～28は底部である。いずれも浅鉢の一部と考えられ、26はRL単節横位回転の縄文がみられる。すべて後期前葉のものと考えられる。

#### 土製品

##### 土製円盤(第101図2～5)

2は後期安行式の水平口縁深鉢口縁部とみられ、最大径4.8cmを測り、重量21.0gを量る。3は安行1式の大波状口縁深鉢で、貼り瘤と帯縄文を取り込んでいる。最大径6.4cmを測り、重量41.3gを量る。4は無文の胴部で、最大径6.7cmを測り、重量42.7gを量る。

5も無文で、最大径4.9cmを測り、重量23.5gを量る。

##### 第45号土壌出土遺物

##### 土器(第97図21～25)

21は列点地文の深鉢口縁部で、安行3b式であろう。22はごく扁平な隆帯上に細密な刻みを施すもので、晩期前葉のものか。23は平行沈線文の胴部で、やはり晩期前葉と考えられる。

24・25は晩期前葉の粗製深鉢で、前者は口縁部、後者は胴部である。

#### 土製品

##### 耳飾(第101図6)

小型の滑車状耳飾で、最大径5.5cm、高さ1.5cmを測り、重量6.7gを量る。

##### 第47号土壌出土遺物

##### 土器(第95図4、第97図26～28)

第95図4は壺形土器で、口縁が欠失する。胴上半部に文様帯を持ち、上下を帯縄文で区画する。文様帯内部はさらに1条の沈線で分帯され、中央に円形刺突を伴う貼り瘤を挟んで三叉文が対峙する玉抱き三叉文が描かれ、間に縄文が充填される。

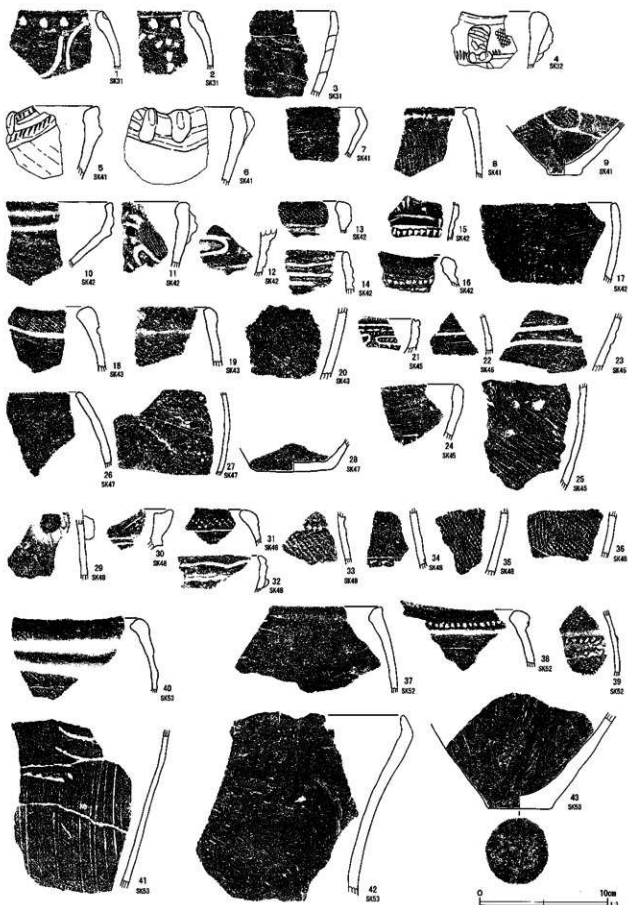
地文はLR単節横位回転の縄文である。安行3a式と考えられる。

第97図26・27は晩期前葉の粗製深鉢である。28は底部で、同時期の深鉢と考えられる。

##### 第48号土壌出土遺物

##### 土器(第97図29～36)

32は口縁直下に平行沈線と1条の隆帯が巡るもの



第97图 D区第31·32·41·42·43·45·47·48·52·53号土墙出土土器

で、後期の高井東式か。29は無文地に上面押圧を伴う  
 凹形突起を配するもので、安行3b式と考えられる。  
 30は晩期前葉の浅鉢口縁部とみられる。31は同時期  
 の精製深鉢口縁部で、口縁直下に帯縄文を配する。

33・34は紐線文土器の胴部中段で、前者は斜位の刺  
 突列、後者は刺突+沈線の区画を描き、集合沈線文  
 を地文とする。

35・36は縄文施文の胴部で、後者は磨消縄文であ  
 る。後期後葉～晩期前葉に位置づけられる。

## 土製品

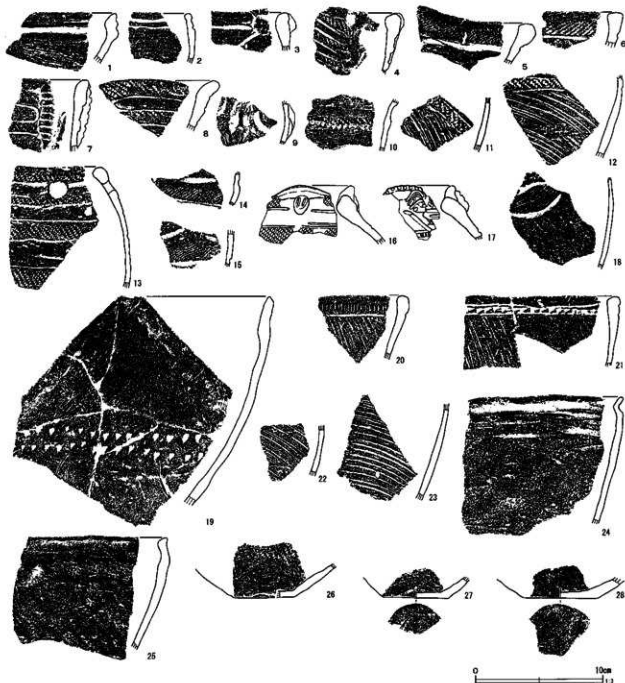
### 土製円盤 (第101図7)

晩期前葉の無文深鉢口縁部を使用する。最大径  
 5.3cmを測り、重量28.6gを量る。

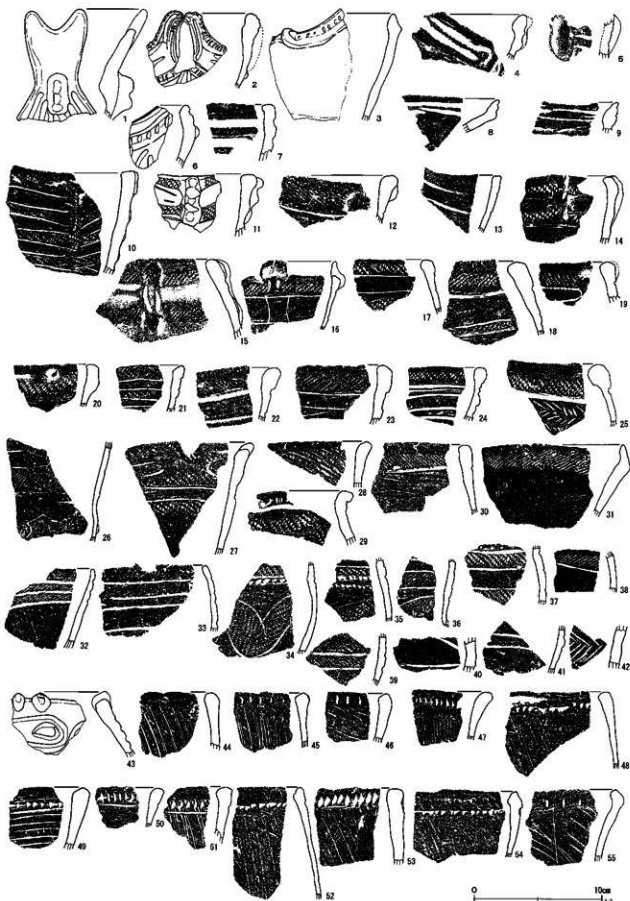
### 第49号土壙出土遺物

#### 土器 (第95図5・6、第99図・100図)

第95図5は浅鉢底部である。丸底で、内彎しつつ緩  
 やかに立ち上がる。地文はLR単節横位回転の縄文  
 で、やや疎らに施文される。後期前葉のものと考え

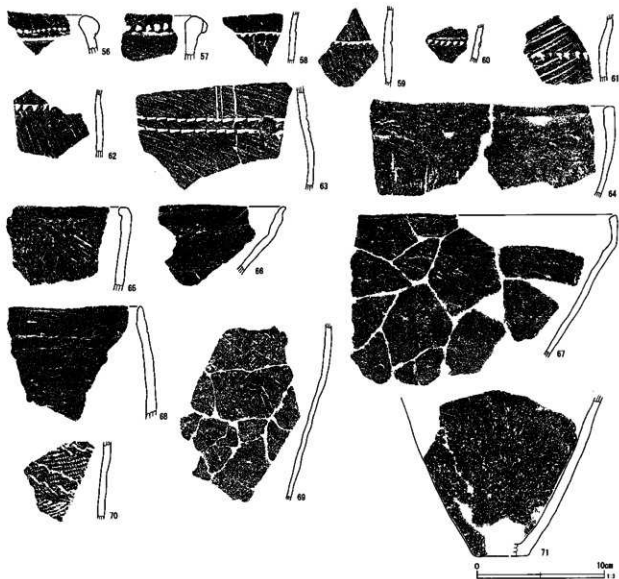


第98図 D区第44号土壙出土土器



第99图 D区第49号土填出土器(1)





第100図 D区第49号土壌出土土器(2)

られる。

6は無文の深鉢で、胴下半部から底部が残存する。底部直上に括れを持ち、胴部は球胴状に膨れる。表面に横位の研磨調整が観察される。

やはり後期前葉のもので、精製深鉢の無文部分と考えられる。

第99図1・3～9・31は高井東式である。1・3・4・6は大波状口縁深鉢で、1は二又の板状突起を配する。7・8・9は水平口縁で、7は口縁外面に3段の凹線が巡り、8・9は段を持って平行沈線が巡る。

同図2・10～30・34～42は後期安行式である。

10～12・14等は安行1式、2・16・27等は安行2式と考えられる。34・35は安行1式の甕形土器であろう。

44～63は紐線文土器である。晩期前葉に可能性のある56・57を除けば後期安行式に伴うものとみられる。刺突のみ、あるいは刺突+沈線の区画を巡らせ、大半が縦位の集合沈線を地文とする。55・63は胴上半部に文様帯を持つもので、前者は縦位の単沈線、後者は平行沈線文を描く。

32・33は多段の帯縄文を巡らせる口縁部で、33は中途に三叉文等なんらかの独立文様を配するものとみられ、口端上に小突起を配する。43は口端上に上面刻みを伴う貼り瘤を2個1単位で配し、胴部無文地に

沈線文を描く。いずれも晩期前葉のものと考えられる。

土製品

土製円盤 (第101図8・9)

8は安行1式の大波状口縁深鉢で、重畳する縦縮を中央に取り込んでいる。最大径5.6cmを測り、重量48.5gを量る。9は無文の胴部で最大径4.4cmを測り、重量26.7gを量る。

第52号土壙出土遺物

土器 (第97図37~39)

38・39は晩期前葉の紐線文土器である。前者は口縁部で、折り返し口縁上に斜位の刺突列が巡り、胴上半部は無文となる。後者は無文地に刻みを伴う隆帯

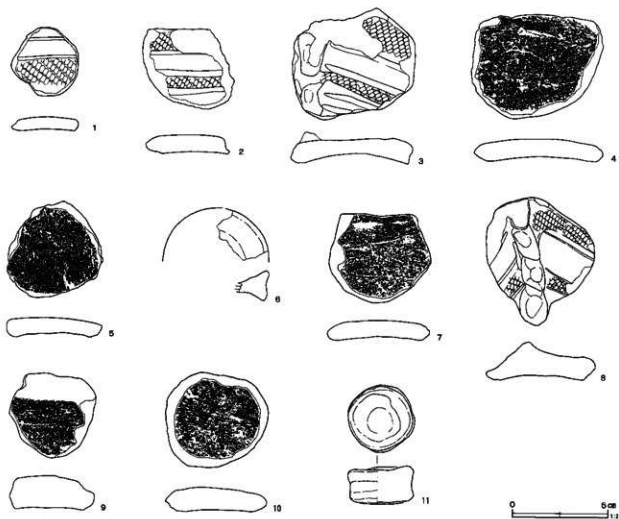
が巡る。37は無文の口縁部で、同時期の粗製深鉢であろう。

第53号土壙出土遺物

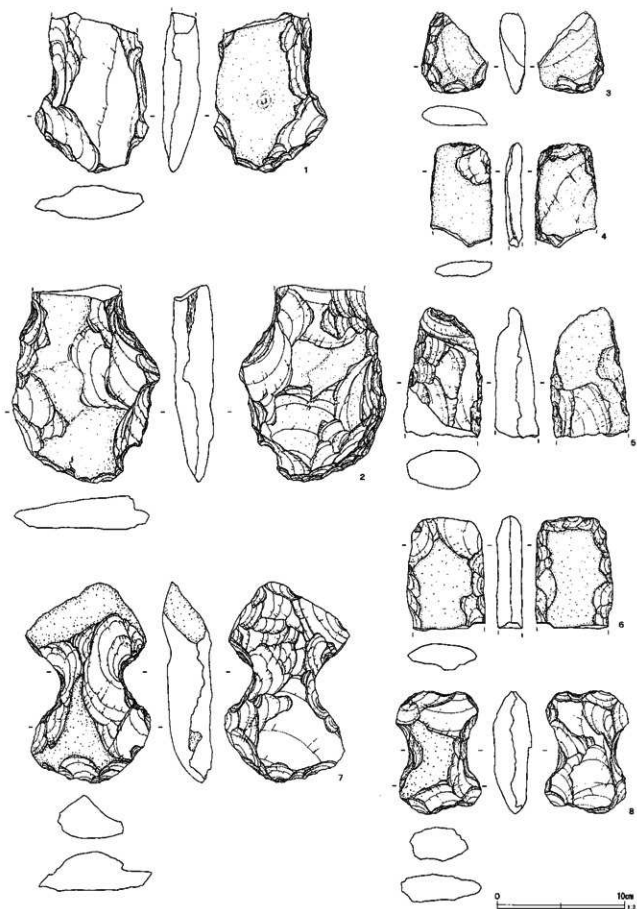
土器 (第95図7~10、第97図40~43)

第95図7は高井束式の深鉢で、口縁から胴上半部までが残存する。水平口縁でキャリバー状の器形をなすものとみられ、胴部直線的に開いて口縁「く」の字に内屈する。口縁直下に2条の凹線を巡らせ、「ノ」の字状の貼り瘤を4単位配する。凹線間には部分的に刻みを施す。胴部は無文で、斜位の研磨調整が観察される。

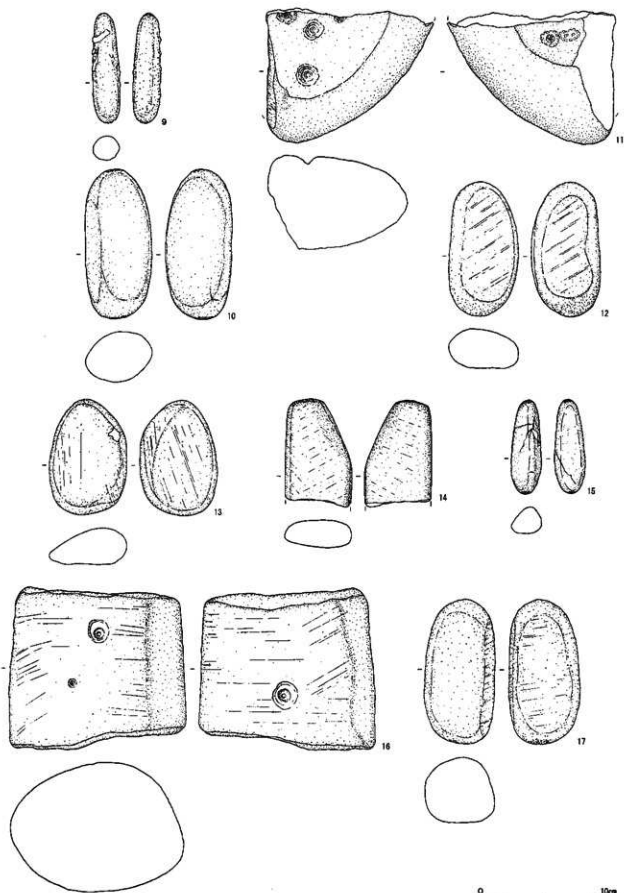
同図8は小型の瓢形土器で、口縁の一部が欠損するほかはほぼ完形の個体である。7と同時期のもの



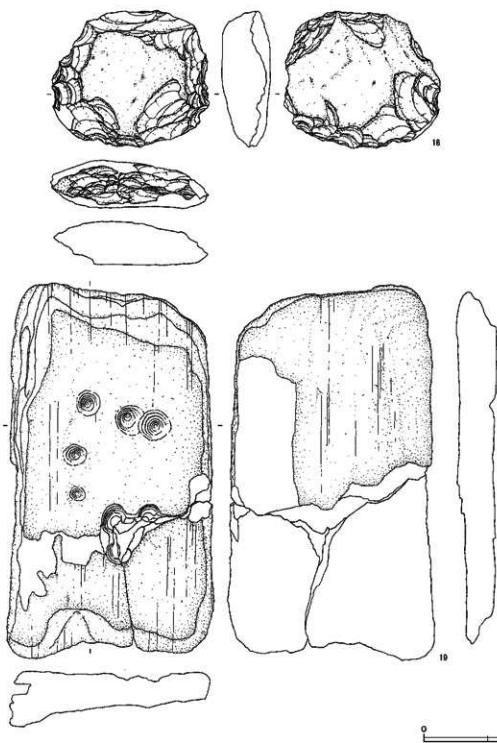
第101図 D区土壙出土土製品



第102图 D区土壤出土石器(1)



第103图 D区土填出土石器(2)



第104図 D区土壙出土石器(3)

と考えられる。胴下半部が「く」の字に張り、胴部中段に括れを持って、胴上半部はドーム状に内彎して、口縁短く直立する。

口縁直下に平行沈線を巡らせ、円形の貫通孔を配する。胴上半部は縄文帯となり、括れ部分を1条の

沈線で区画し、胴下半部には逆U字状の区画を描いて、内部に縄文を施文する。

地文はLR単節横位回転の縄文である。7と同時期のものと考えた。

同図9は小型の浅鉢である。2単位の山形波状口

第19表 D区土壌跡 石器計測表

番号	器種	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	打製石斧	SK30	(12.4)	8.8	3.0	331.8	B-②	ホルンフェルス
2	打製石斧	SK44	(15.3)	11.5	3.2	617.4	B-②	ホルンフェルス
3	打製石斧	SK41	(6.3)	5.2	2.0	66.6	D-⑤	ホルンフェルス
4	打製石斧	SK49	(8.1)	4.8	1.3	69.8	A-⑤	砂岩
5	打製石斧	SK49	(10.1)	6.1	3.4	213.9	A-⑤	緑色岩
6	打製石斧	SK57	(8.7)	6.0	2.0	123.9	A-⑤	砂岩
7	打製石斧	SK53	15.6	9.8	3.8	509.3	C-①	ホルンフェルス
8	打製石斧	SK69	9.5	6.6	3.0	196.3	C-①	ホルンフェルス
9	叩石	SK14・15	8.5	2.2	1.9	56.8	C-①	安山岩
10	叩石	SK41	11.6	5.2	4.0	350.1	C-①	安山岩
11	叩石	SK42	(10.4)	(13.1)	7.5	1040.9	A 2-b-②	砂岩
12	磨石	SK44	10.4	5.4	3.2	285.4	C-①	閃緑岩
13	磨石	SK44	9.0	6.1	3.0	133.8	B 2-①	安山岩
14	叩石	SK49	(8.3)	5.2	2.3	133.7	C-②	砂岩
15	叩石	SK49	7.3	2.4	2.1	35.3	C-①	緑色岩
16	磨石	SK53	12.6	13.9	10.1	2892.0	D-①	閃緑岩
17	磨石	SK53	11.3	5.6	5.2	542.5	C-①	安山岩
18	礫磨	SK52	12.2	10.7	3.8	589.0		珪岩
19	石皿	SK49	29.1	16.2	4.3	1980.6	B-b-①	緑泥片岩

縁をなすものとみられるが、波頂部を欠失する。口縁直下に1条の凹縁を巡らせ、胴部には研磨調整が施される。やはり高井東式期に位置づけられる。

同図10は無文の深鉢で、口縁から胴中段までが残存する。水平口縁で、胴部単調に内彎する。口唇肥厚せず、口唇断面丸頭棒状を呈する単純口縁である。

器面には篋状工具による撫で調整痕が観察される。晩期前葉の粗製土器と考えられる。

第97図40は安行1式の水平口縁深鉢であろう。縄文を伴う扁平な隆帯が多段に巡り左端には縦瘤の剥落痕が観察される。41は同時期の紐線文土器とみられるが、縦位の集合沈線文上に結節沈線で何らかのモチーフを描いている。42は無文の口縁へ胴上半部で、頸部外反した後に口縁「く」の字に内屈し、口端上に一箇所の押圧を伴っている。高井東式であろう。

#### 土製品

##### 土製円盤 (第101図10)

無文の胴部を使用し、周囲の研磨が徹底される。最大径5.2cmを測り、重量34.0gを量る。

##### 第58号土壌出土遺物

##### 土器 (第96図)

第96図11は台付鉢とみられ、口縁から脚台との接

続部直上までが残存する。ごく軽微に内彎しつつ直線的に開き、頸部屈曲して口縁外反する。口唇断面肥厚して折り返し口縁をなす。

頸部に4条の平行沈線を巡らせ、口縁及び胴上半部に縄文帯を持つ。胴中段以下は無文で、篋状工具の調整痕が観察される。晩期前葉のものとみられる。

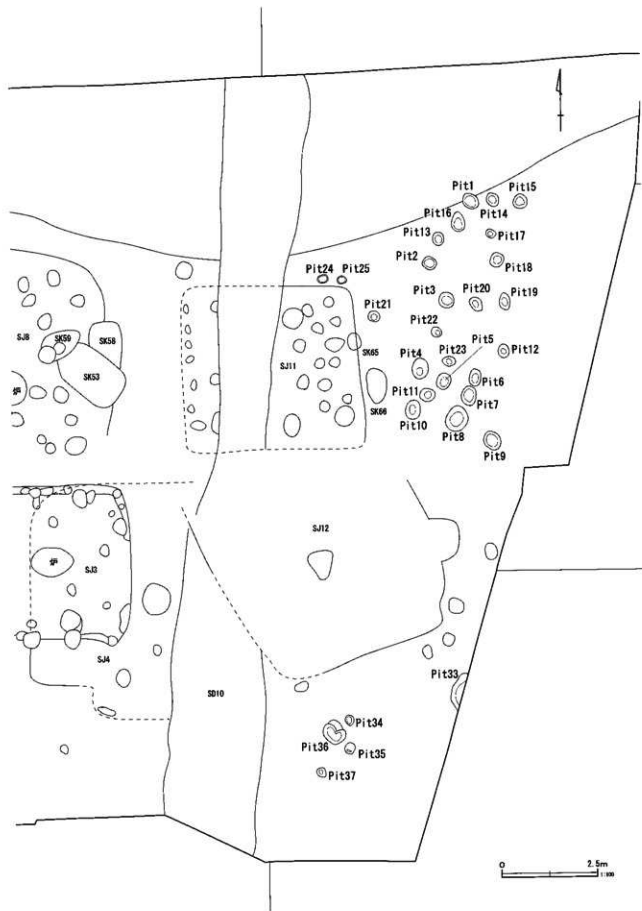
同図12は注口土器である。頸部から上を欠失する。胴中段「く」の字に張り出すソロバン玉形を呈し、底部に円形の高台を伴う。頸部は円筒状に立ち上がっていたものと考えられる。

胴中段に3本の平行沈線が巡り、円錐形の貼り瘤が4単位配され、内一箇所が注口部を伴う。縄文は施文されない。

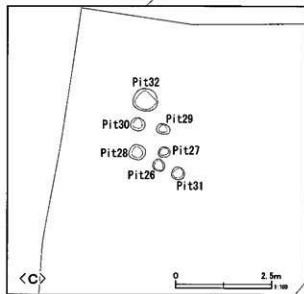
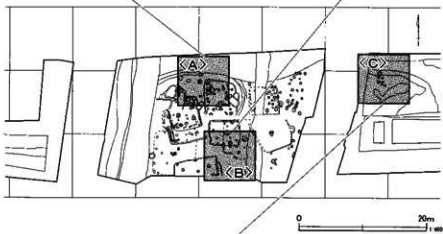
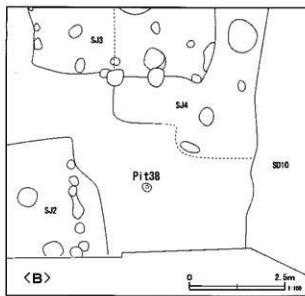
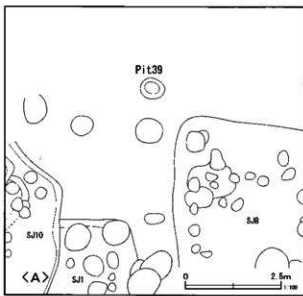
後期末葉で、東北地方の瘤付土器の影響を受けた土器である。

第100図64～69は無文の深鉢で、高井東式期のものと晩期前葉の粗製土器が混在しているものとみられる。完全に分離するのは困難であるが、口端内屈する65、口縁に段を持つ67は後期のものと考えられる。

70は縄文+結節回転文のみられる胴部で、晩期前葉に位置づけられる。71は無文の深鉢胴下半部～底部である。



第105図 D区ピット (1)



第106図 D区ビット (2)



第20表 D区ピット群 計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.42	0.41	0.22	Pit21	0.27	0.27	0.21
Pit 2	0.34	0.33	0.20	Pit22	0.27	0.26	0.27
Pit 3	0.40	0.36	0.30	Pit23	0.33	0.31	0.32
Pit 4	0.64	0.33	0.24	Pit24	0.31	0.20	0.15
Pit 5	0.45	0.41	0.29	Pit25	0.24	0.23	0.12
Pit 6	0.45	0.40	0.23	Pit26	0.28	0.27	0.19
Pit 7	0.52	0.46	0.21	Pit27	0.31	0.29	0.23
Pit 8	0.62	0.53	0.21	Pit28	0.37	0.33	0.21
Pit 9	0.44	0.39	0.11	Pit29	0.31	0.29	0.27
Pit10	0.45	0.38	0.24	Pit30	0.32	0.31	0.17
Pit11	0.38	0.36	0.20	Pit31	0.32	0.30	0.14
Pit12	0.36	0.30	0.30	Pit32	0.60	0.59	0.23
Pit13	0.38	0.35	0.22	Pit33	(1.13)	-	(0.53)
Pit14	0.39	0.38	0.22	Pit34	0.34	0.27	0.19
Pit15	0.42	0.39	0.21	Pit35	0.37	0.35	0.28
Pit16	0.42	0.35	0.21	Pit36	0.69	0.52	0.34
Pit17	0.25	0.24	0.20	Pit37	0.34	0.26	0.31
Pit18	0.37	0.34	0.31	Pit38	0.32	0.27	0.14
Pit19	0.37	0.29	0.30	Pit39	0.64	0.54	0.15
Pit20	0.37	0.29	0.19				

### (3) ピット (第105図・106図)

D区で検出されたピットのうち、竪穴住居跡との帰属関係が明らかでなかったものが39基存在した。

竪穴住居跡群の間隙でほぼ単独で検出されたPit 38・Pit39を除外すると、大きく三つのグループに分けることができる。

まず、L-42グリッド中央から北寄りにPit 1～Pit 25が南北に長く分布する(第105図上)。これらは分布の規模や密度の面から竪穴住居跡の柱穴であった可能性が考えられ、西に隣接する第11号竪穴住居跡から検出されたピットのうちのいくつかとグループを構成することが考えられる。

つぎに、竪穴住居跡群から現道部分を挟んで東の

L-43グリッド北東隅にPit27～Pit32が集中する。これは集落の存在する高まりを外れた北東向きの傾斜地にあたっており、やはり竪穴住居跡等ならんかの遺構の残欠である可能性が高い。

また、M-42グリッド西部にはPit33～Pit37がやや散漫な分布をみせている。第12号竪穴住居跡の南にあたっており、当該遺構と関連する施設である可能性がある。

これらのピットから遺物はほとんど出土していないが、周辺の状況から縄文時代後期後葉～晩期中葉のものである可能性が高い。個別のピットの規模については第20表を参照されたい。

### (4) グリッド出土遺物

#### 土器 (第107図～119図)

1～5は晩期の大波状口縁深鉢である。

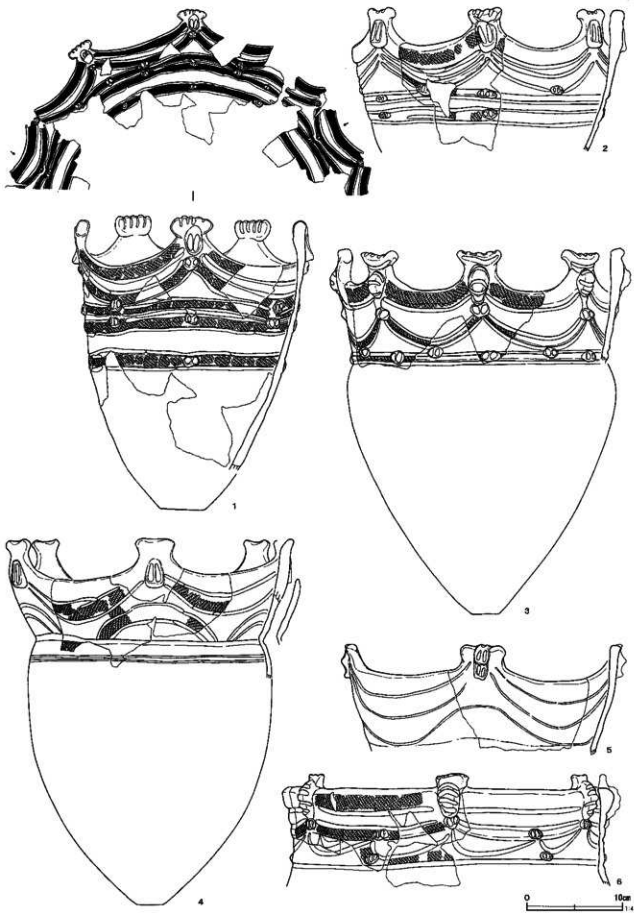
1は安行3b式で、口縁から胴下半部までほぼ全周が残存する。くびれを持たない単調な器形で、5単位の波状口縁をなす。波頂部に刻みを伴う扇形の突起を配し、直下に大小の豚鼻突起を重畳させる。口唇は肥厚して折り返し口縁をなし、縄文が施文される。

胴上半部は弧状の磨消モチーフが巡って突起間を連繫し、下端が帯縄文で閉塞されて、その接点部分にも豚鼻突起が配される。

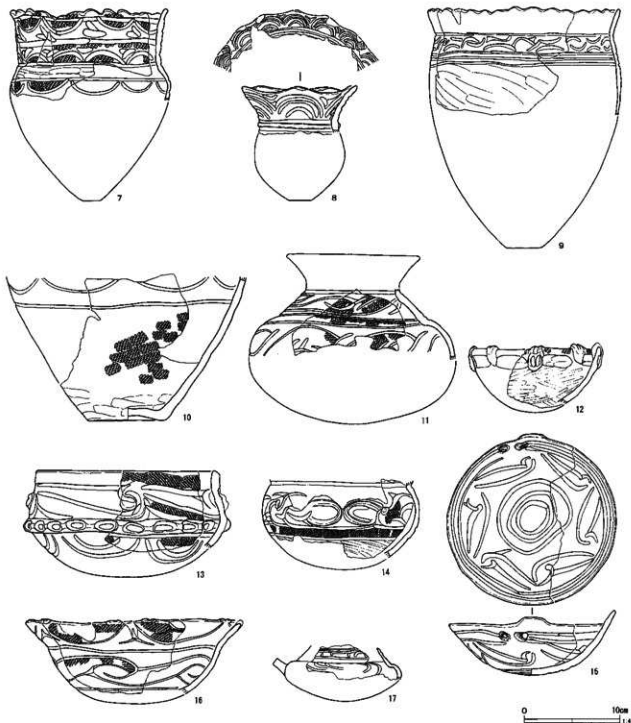
胴中段には2段の帯状文が巡り、それぞれに豚鼻突起が配される。地文はRL単節の縄文である。

2も安行3b式で、口縁から胴中段までが残存する。やはりくびれを持たない単調な器形である。

波状口縁の波頂部に刻みを伴う双頭状の突起を配



第107図 D区グリッド出土土器 (1)



第108図 D区グリッド出土土器 (2)

し、直下に縦長扁平な豚鼻突起を配する。口唇肥厚して折り返し口縁をなし、縄文が施文される。

胴部のモチーフは概ね1の個体と同様だが、縄文を伴う扁平な隆帯により文様が描かれる。地文はRL単節の縄文である。

3は口縁から胴上半部までが残存する。波状口縁

の波頂部に刻みを伴う双頭状の突起を配し、直下に刻みを持つ縦帯と豚鼻突起が重畳する。口唇肥厚して折り返し口縁をなし、縄文が施文される。

胴部のモチーフは概ね2と共通だが、突起間を連続する弧状区画が口縁から分離して独立した三角形区画を構成する傾向がみられる。地文はRL単節の縄

文である。安行3 a式か。

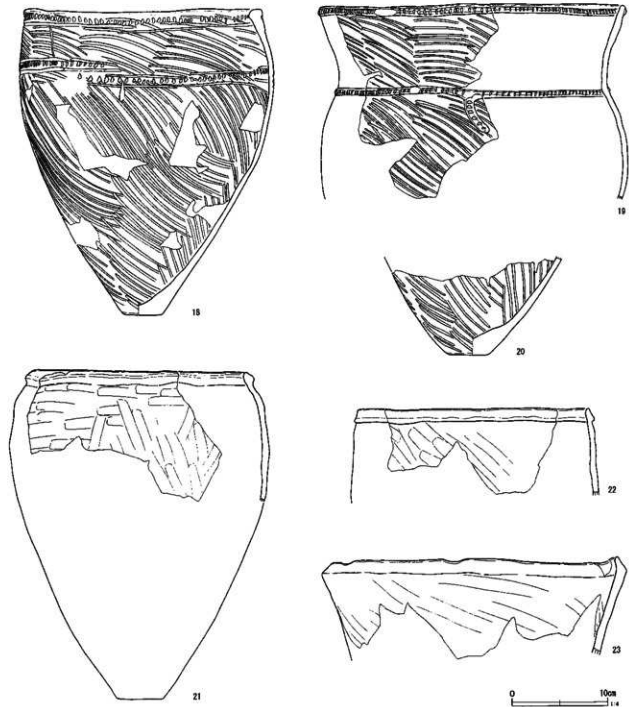
4は安行3 b式で、口縁部から胸部中段までが残存する。波状口縁波頂部の突起を欠失する。胸部中段に括れを持つ。

口唇扁平で折り返し口縁を形成せず、口縁直下の縄文帯が存在しない。胴上半部には幅広い平行沈線による弧状モチーフが巡って内部に縄文が施文される。

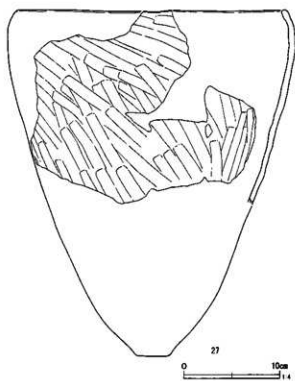
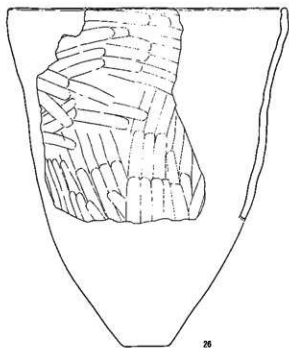
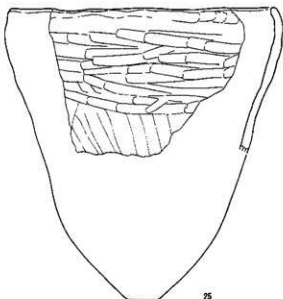
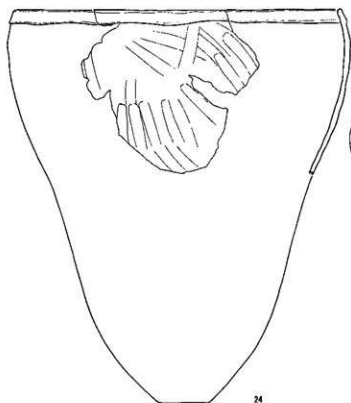
る。これと対向するように上弦の弧状モチーフが交互配置され、下端を幅広い凹線により閉塞する。地文はLR単節の縄文である。

5は安行3 b～3 c式で、口縁から胸部中段までが残存する。ごくゆるやかな波状口縁で、胸部中段に軽微な括れを持つ。

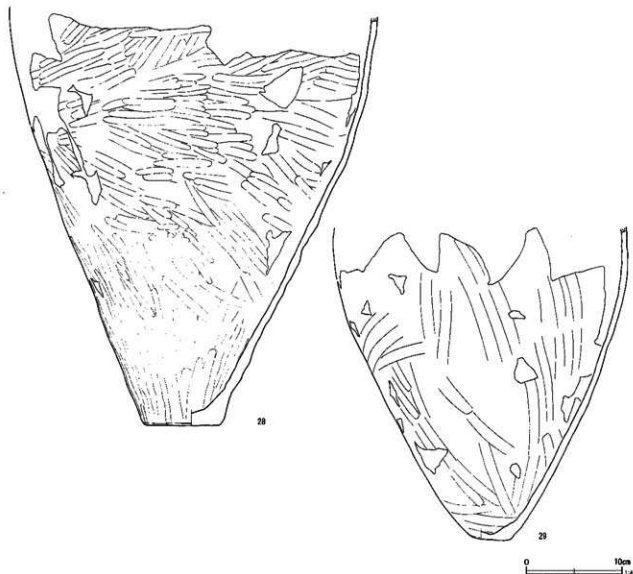
波状口縁波頂部には双頭状の突起を配し、突起前



第109図 D区グリッド出土土器(3)



第110図 D区グリッド出土土器 (4)



第111図 D区グリッド出土土器(5)

面に二段の豚鼻突起が配される。口唇扁平で折り返し口縁を構成しないが、1条の沈線を巡らせて区画の意図を伺わせる。胴上半部には幅広の並行沈線による弧状モチーフを巡らせる。縄文は施文されない。

6は水平口縁深鉢である。口縁から胴部中段まで残存する。胴下半部に最大径を持ち、胴部中段に括れを持って口縁直立する。口唇肥厚して二重口縁をなし、縄文を施文する。口端上に刻みを伴う扇状の突起を6単位配し、前面に刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起が重畳する。

口縁に沿って縄文施文する隆帯が回り、突起間を連絡する。隆帯下にはステッキ状の沈線文が回り、

下端を1条の沈線で閉塞して、両者の間にも縄文が施文される。地文はRI単節の縄文である。安行3b式と考えた。

7は安行3a式である。小波状口縁の深鉢で、突起や隆帯を伴わない磨消縄文系の個体である。胴部中段に括れを持って直下が「く」の字に張り出し、胴上半部から口縁にかけてゆるやかに外反する。

胴上半部の文様帯は上下を単沈線で区面し、半円形の磨消モチーフを上下対向させたうえで中段を一条の沈線で分帯して二段構成とし、余白に三叉文を充填する。

胴部中段に無文帯をはさんで1条の沈線を巡ら

せ、さらに半円形の磨消モチーフを配する。地文はLR単節の縄文である。

8は安行3c～3d式の小型深鉢である。口縁から胴部中段まで、ほぼ全周が残存する。ゆるやかな5単位の波状口縁をなし、胴部中段に括れを持って、1条の隆帯を巡らせる。

波頂部直下に平行沈線による大柄の重圈文を描き、余白に三叉文を充填する。縄文は施文されない。

9は小波状口縁で、頸部に括れを持って口縁外反する。胴上半部に圧縮された文様帯を持ち、上下対向する弧線文と入組文が交互に配されて、上端を1条、下端を3条の沈線で区画する。縄文は施文されない。安行3b式だが、大洞BC式の影響が窺われる。

10は深鉢ないし広口壺型土器に伴う胴下半部である。底面やや上げ底状で、胴部にかけて直線的に開く。胴部中段に弧線文が巡り、1条の沈線を巡らせて、胴下半部は疎らな縄文帯となる。地文はLR単節の縄文である。晩期前葉に位置付けられる。

11は安行3b式の壺型土器である。頸部から胴部中段の最大径の部分までが残存する。

胴部中段がドーム状に張り出して、内彎しつつ立ち上がる胴上半部との間に段を形成する。頸部は「く」の字に括れて口縁外反するものと思われる。

胴上半部および中段にそれぞれ文様帯を持って入組三叉文風の沈線文が描かれ、両者の間を帯縄文で区画する。地文はLR単節の縄文である。

12～16は各種の浅鉢で、12・16・17が安行3b式、15が3c式、他は3a式であろう。

12は丸底で口縁部分に最大径を持つ碗形の土器とみられ、口縁から底部の直上まで残存する。水平口縁上に刻みを伴う扁平な突起が配され、ひとつ置きに扁平な豚鼻突起が伴う。突起間には幅広の凹線による楕円区画が描かれる。口縁直下のみLR単節の縄文が施文され、胴部以下には研磨が徹底される。

13は胴部中段が「く」の字に張り出し、口縁直立する鉢で、口縁から胴部中段までが残存する。この種の器形としては比較的小型のものである。突起を持

たない水平口縁で、口唇肥厚して二重口縁をなし、縄文が施文される。胴上半部には隆帯+沈線で入組文が描かれ、余白に三叉文が配される。胴部中段には押圧を伴う連鎖状の隆帯が巡り、胴下半部には平行沈線による弧状モチーフが配される。地文はLR単節の縄文である。

14はやや扁平な丸胴の鉢で、口縁と底部を欠失する。頸部屈曲して口縁は直立ないしやや外反するものとみられる。胴上半部に文様帯を持ち、C字状の隆帯を背中合わせに配した「x」字モチーフを中心に、左右に盲孔をさきんで対向する三叉文が描かれる。文様帯下端は帯縄文で区画される。地文はLR単節の縄文である。

15は碗形の浅鉢である。底部を欠失するが、丸底から口縁まで内彎しつつゆるやかに立ち上がるものとみられ、水平口縁上に台形の突起を1個のみ配する。上端を平行沈線で区画した文様帯を持ち、ステッキ状の沈線と三叉文を組み合わせた入組状のモチーフを描く。底面には同心円文が描かれ、文様帯下端の区画線を兼ねている。縄文は施文されない。

16は丸胴に外反口縁を持つ土器で、丸底の浅鉢と考えたが、小型の台付鉢の可能性もある。口縁部から胴部中段までが残存する。

水平口縁上に対をなす小突起が配される。口縁下に半円状の磨消モチーフが巡り、間隙に独立した三叉文が配される。胴部の文様帯は入組三叉文が描かれ、上下を沈線で区画する。地文はLR単節の縄文である。

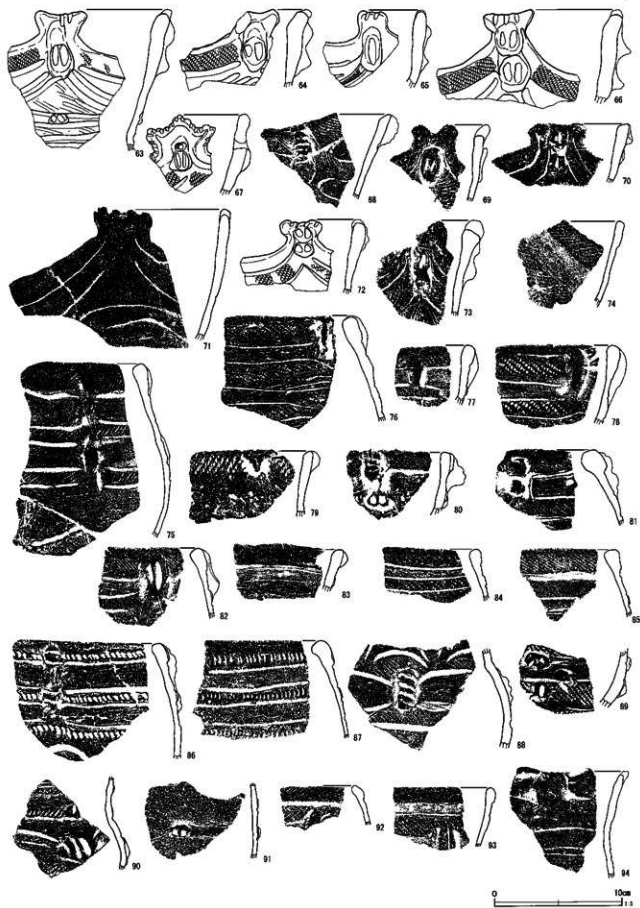
17は頸部から胴部にかけて残存する。扁平な円盤状の胴部から頸部が内傾しつつ立ち上がるもので、大洞式の影響を受けた器形であるが、施文は粗雑で、焼成も不良である。

18は紐線文土器である。口唇はいちじろしく肥厚して内面に稜を持つ。口縁直下に筧状工具による爪形文が巡り、下に1条の沈線が巡る。胴部中段にも平行沈線間に爪形文を伴う区画が巡る。地文は集合沈線文で、区画から上は横位、下では斜位に施文さ

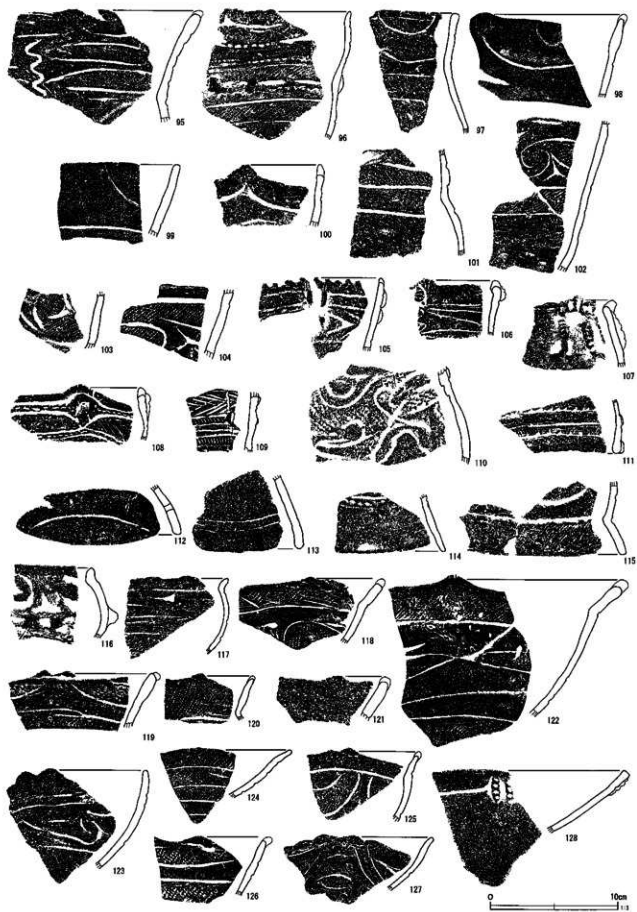


第112図 D区グリッド出土土器 (6)





第113図 D区グリッド出土土器 (7)



第114図 D区グリッド出土土器 (8)



第115図 D区グリッド出土土器(9)

れる。後期末～晩期前葉であろう。

19は紐線文系の土器である。口縁から胴下半部にかけて残存する。胴部中段に括れを持ち、頸部外反する特異な器形である。口唇肥厚せず、断面角頭棒状を呈する。口縁直下および括れの直下に刻みを伴う隆帯の区画が巡る。胴部の区画には、一箇所で分岐し垂下する鉤状のモチーフがみられる。

地文は集合沈線文で、やはり区画の上下で施文を変えている。

20は集合沈線文の胴下半部～底部で、紐線文土器に付随するか、精製深鉢の地文部とも考えられる。

21～29は無文の深鉢で、23が後期高井東式期、他は晩期前葉の粗製土器と考えられる。

23は口縁から胴上半部まで残存する。頸部ゆるやかに外反し、口縁直下で「く」の字に屈曲し、外面に稜をなす。

21は口縁から胴部中段まで残存する。口縁内彎して口唇肥厚し、折り返し口縁を形成する。22は口縁～胴上半部の破片で、口縁内彎しつつほぼ垂直に立ち上がる。口唇は扁平な折り返し口縁である。

24～26は胴部に緩い括れを持つキャリパー形の深鉢で、いずれも口縁から胴部中段にかけて残存する。口唇肥厚せず、24のみ扁平な折り返し口縁を形成する。器面に粗い無調整がみられるが、25・26は胴上半部と中段以下では調整の方向を変えている。

27も口縁から胴部中段まで残存する。頸部直下に最大径を持ち、口縁内彎する。

28・29はいずれも口縁を欠失する。28は底部から胴部中段にかけて直線的に開き、胴上半部は内彎する。29は底部から胴部中段まで内彎しつつ単調に立ち上がる。

30以下は破片資料である。

30～33は加曾利B3式で、今回の発掘調査で出土した中でもっとも古い時期の資料である。30はB2式以来の3単位突起深鉢で、頂部に一對の盲孔を配する突起部分である。31は東関東的な5単位大波状口縁の深鉢口縁部で、口縁直下に刺突列が巡り、

頸部が縄文帯となる。32は粗製深鉢の胴部で、平行沈線の区画をはさんで上下に集合沈線文が配される。33は胴部中段から底部にかけての破片で、幅広い平行沈線間に斜位の集合沈線を施文する。

34～45は高井東式である。34～42・44は大波状口縁の深鉢で、うち34～40は口縁直下に凹線を巡らせて波頂部に各種の突起を配するもの、41・42は単純な山形波状口縁の土器である。42は口縁下に平行沈線を描き、間隙に列点文を配する。

43・45は無文の水平口縁深鉢で、口縁下に突起を配する。

46～62は後期安行式の大波状口縁深鉢である。

46～49は安行1式で、波状口縁波頂部および波底部に刻みなしの縦線を配する。49は胴部に矢羽根状の集合沈線文が施文される。

50～62は安行2式で、刻みを持つ貼り瘤および豚鼻突起を配する土器である。波状口縁波頂部に扇形ないし双頭状の突起を配し、直下に貼り瘤を配する。52は鉢巻き状の隆帯を伴う突起である。59・60は突起間を刻みを持つ隆帯で連繋して三角形の区画を構成する。

63～74は晩期前葉の波状口縁深鉢で、ほとんどが安行3b式と考えられる。波頂部直下に扁平な豚鼻突起を単独または二段に配する。70・71は口縁下の縄文帯が失われ、三角形区画文の名残である幅広い帯縄文が弧状のモチーフを描く。

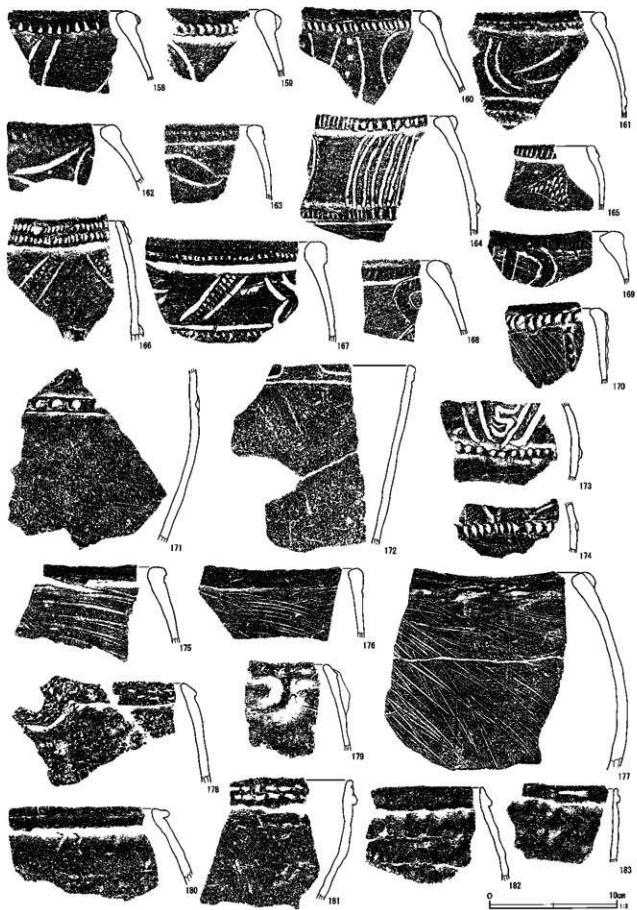
75～87は水平口縁深鉢である。

75～79は安行1式であろう。75・76は砲弾形、77～78はキャリパー形の器形で、いずれも刻み無しの縦線を配する。79は曾谷式の可能性もある。

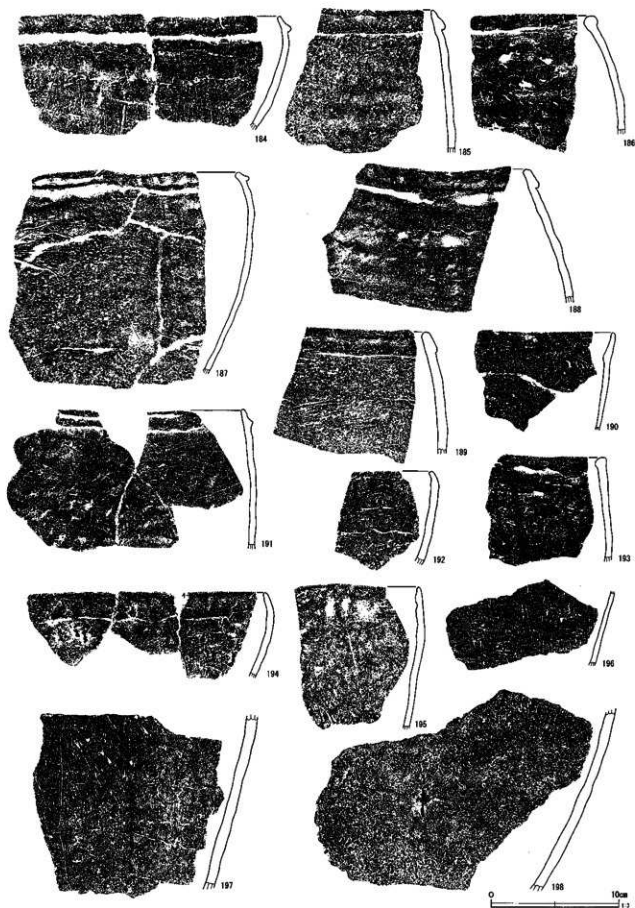
80～82は刻みを持つ貼り瘤や豚鼻突起を配するもので、80・81は安行2式、82は安行3b式であろう。86・87は安行2式で、縄文に代わって篋状工具の刺突文が施文される。

88～91は刻みを持つ貼り瘤や豚鼻突起のみられる胴部で、安行3a式であろう。

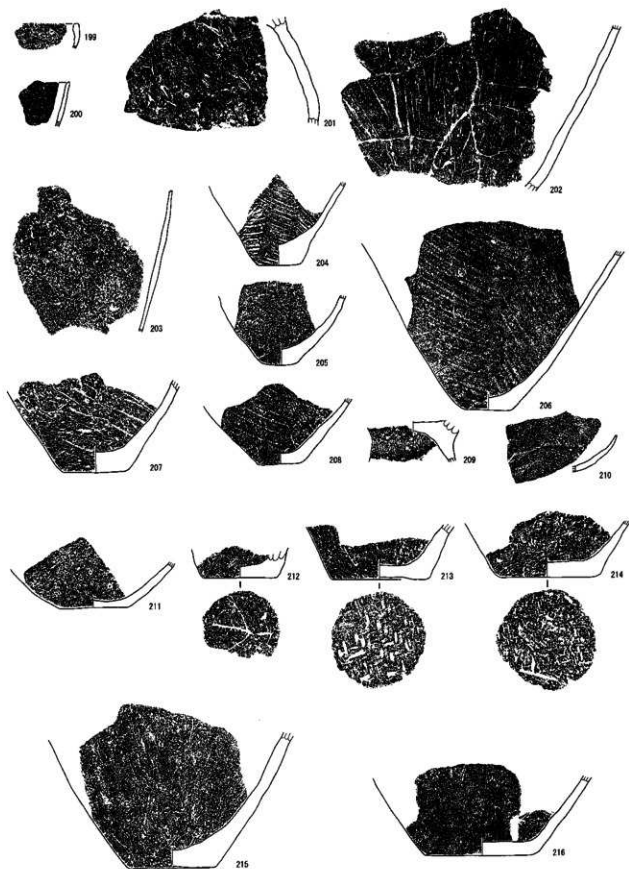
92～104は瘤を持たない磨消縄文系の深鉢で、大半



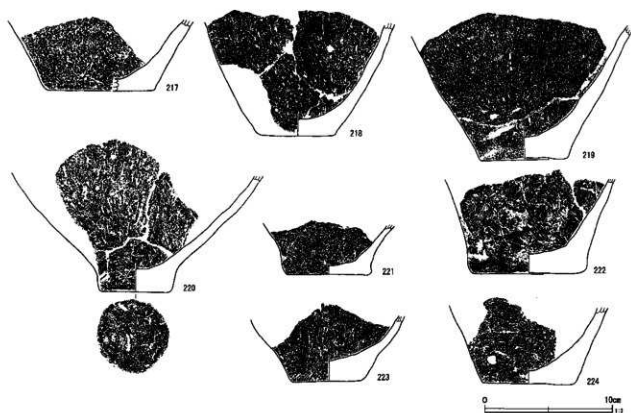
第116図 D区グリッド出土土器 (10)



第117図 D区グリッド出土土器 (11)



第118図 D区グリッド出土土器 (12)



第119図 D区グリッド出土土器(13)

が安行3 a式と考えられる。

92~94は水平口縁下に縄文帯を持ち、三叉文が左右対峙する。97~99は半円形のモチーフがめぐる間隙に独立した三叉文が描かれる。100は対をなす山形波状口縁の一部であろう。101~104は胴部破片で、上下を沈線や帯縄文で区画した中に各種の人組文・三叉文が描かれる。95は連結弧線文の深鉢、96は胴部中段に円形の貼り瘤が巡り、口縁に三叉文が描かれる。

107は無文の深鉢で、口縁上に刻みを持つ横瘤が配され、直下に一对の縦瘤が並ぶ。安行3 b式か。105・108も安行3 b式とみられ、天神原式の影響が窺える。

106は瘤付土器の影響が伺われる後期末葉の土器である。109は安行2式の台付鉢胴部であろう。110~115は脚台で、111は安行1式、その他は晩期前葉のものと考えられる。

116~132は浅鉢である。文様不明なものもあるが、すべて晩期前葉のものと考えられる。

116は胴部中段が「く」の字に張り出す浅鉢で、安行3 a式である。117は安行3 a式新段階から3 b式のものともみられ、扁平な丸胴で短い外反口縁が付く。118~122・125は胴部内彎しつつ立ち上がり、頸部屈曲して口縁外反するもので、安行3 a式であろう。128は刻みをもつ縦瘤に接して三叉文が描かれる。

125は平行沈線の弧状区画文が描かれる。127は平行沈線の弧状区画文の間隙に紡錘文が配される。いずれも安行3 b式であろう。

130~132は浅鉢胴下半部である。いずれも晩期前葉の土器で、丸底を呈するものとみられ、130は胴部との境に段を持ち、以下に縄文が施文される。

133~139は注口土器である。133~136は貼り瘤や帯縄文の土器で、安行3 a式であろう。137は同時期における磨消縄文系の土器で、対向三叉文の一部がみられる。138・139は注口部で、後者は刻みを持つ横瘤が配される。いずれも後期前葉のものか。

140~142は大洞系の影響が窺われる。140・141は精



製深鉢の口縁部で、大濶BC式期のものか。142は縄文のみの胴下半部で、横位の綾織り文がみられる。

143～166・168～170・173・174は紐線文土器である。

143はほぼ直立する口縁部で口唇断面肥厚し、斜位の刺突列が巡って、地文は縦位の集合沈線文である。安行1式に伴うものか。

144・145・147は口縁下に斜位の刺突列や刻みが巡り、これに沿って1条の沈線が巡る。146・148は刺突+平行沈線の区画である。いずれも口唇断面肥厚し、大半が直立ないしごく軽微な内彎口縁である。地文の集合沈線は縦位ないし斜位に施文される。後期末～晩期初頭のものと考えられる。

149以下は胴上半部に文様帯を持つ。口唇はいちじらしく肥厚し、ときに折り返し口縁を形成する。口縁および胴上半部の区画は刻みやひだ状の押圧を伴う隆帯である。150は後期末葉の可能性があるが、他は晩期前葉の土器であろう。

156は縦位の弧線文間に小波状の沈線が垂下する。160は紡錘形の区画内に列点文が施文される。165は三角形の区画内に鋭利な刺突が充填されるもので、安行3b式に伴うものであろう。174は平行沈線間に縄文が施文されるもので、やはり安行3b式と考えられる。

167は安行3c式である。胴部の隆帯は失われ、平行沈線間に列点文が充填される。

172は直線的に開く深鉢で、口縁直下に圧縮された弧状区画文と1条の沈線が巡る。晩期前葉の土器であろう。

178～202は無文の深鉢で、晩期前葉の粗製土器である。内彎しつつ立ち上がる比較的単調な器形で、器壁に篋状工具による粗い無で調整とひだ状の圧着痕を残し、しばしば輪積み痕をも残している。

178～189・191は折り返し口縁である。多くは口唇断面肥厚しない扁平なつくりで、180～185・187等は段上に指頭のなぞりが加えられて、折り返し部分が外へと反り返る。178・179は段の一部が分岐した鉤状のモチーフがみられる。181は段上に二段の押し文が

巡る。186は口縁内彎して口唇断面が肥厚する。復元個体21のような砲弾形深鉢になると思われる。

190～195は折り返しを構成しない深鉢口縁部である。器形や器面調整のうえでは折り返し口縁のものと異なる点はみられない。190・195は内側に段を持つ。193は口唇断面肥厚する。

199・200はいわゆる製塩土器の口縁部である。さわめて薄手の器壁で、199は口唇が軽微に肥厚する。

196～198・201～203は無文粗製深鉢の胴部破片である。

204以下は底部の破片を一括した。204～208は集合沈線文の底部で、復元個体18のような砲弾形深鉢に伴うものであろう。209は台付き土器で、胴部と脚台の接続部分である。210は丸底の浅鉢底部で、胴部との境に段を持つ。211は無文平底の浅鉢底部である。212以下は無文の深鉢底部である。大半は晩期の無文粗製深鉢に伴うものと考えられる。212は底面に木葉痕が、213・214は縄代圧痕が観察される。

## 土製品

### 土偶 (第120図)

1は顔面や乳房の表現をもたない省略型の土偶である。左腕と両足を欠損する。頭部がやや後に反り、背面扁平である。現存する最大高7cm、最大幅4.1cm、厚さ1.9cmを測る。赤褐色を呈し、砂質の脆弱な器壁である。

2は小型土偶の左脚部である。爪先部および踵が欠失する。沈線文とおよび篋状工具先端による刺突文がみられ、足裏にも施文される。

現存する最大高2.3cm、最大幅1cm、厚さ1.3cmを測る。淡い褐色を呈し、一部に赤彩痕を残す。緻密な胎土で、焼成は良好である。後期後半～末葉のものと考えられる。

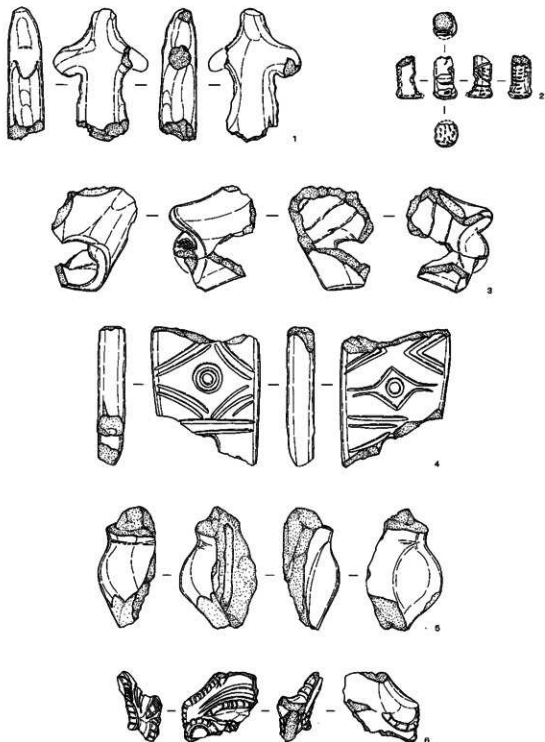
3は中空の個体で、上腕部と考えられる。先端部にわずかな突起を持ち、ここにRL単節の縄文が施文される。現存する最大高5.5cm、最大幅4.5cm、厚さ4.4cmを測る。晩期のミミズク型中空土偶の変形と考えられる。

4は板状の土偶であり、土板との中間形態を示している。上半身と両脚を欠損する。

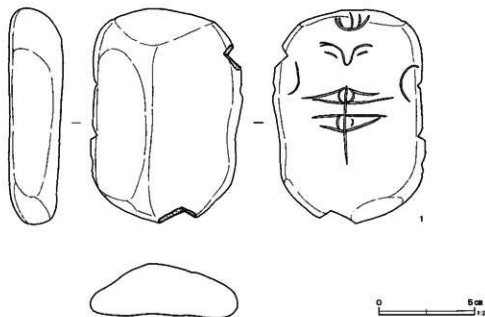
腹面に比し背面やや扁平である。両面とも円文を中心に平行沈線による菱形区画が描かれる。現存する最大高7.2cm、最大幅5.7cm、厚さ1.5cmを測る。胎土

砂質だが、焼成は良好である。

5は右腰部とみられる。破断面の中央に木芯状のものが存在した痕跡が観察される。現存する最大高6.3cm、最大幅4cm、厚さ3cmを測る。淡褐色を呈し、胎土は砂質である。後期のものであろうか。



第120図 D区グリッド出土土偶



第121図 D区第57号土壌出土岩版

6はミミズク土偶の頭部で、頭頂部から右耳にかけて残存する。現存する最大高3.6cm、最大幅4cm、厚さ2.5cmを測る。

#### 岩板 (第121図)

扁平な自然礫の一面を平坦に加工した上に、ごく浅い線刻によって人面その他の文様が描かれる。

人面はU字状の線刻によって眉と鼻を表現し、短い線刻によって眼を表している。胴部は中央に正中線を抜き、左右対称に菱形の区画と対弧状モチーフを配している。左右に腕とみられる弧状の線刻がみられる他、頭頂部にも弧状の線刻が施される。

線刻された面が全体に黒変しており、加熱を受けた痕跡が伺われる。背面は無文である。

現存する最大高11.1cm、最大幅8cm、厚さ2.8cmを測る。重量は189.2gを量る。

#### 耳飾 (第122図1～第123図28)

1～5は無文中実のタイプである。

1は白状の耳飾で、上下面が窪み、側縁に緩やかな抉りを持って上下端が張り出す。完形で、最大径2.9cm、高さ1.7cmを測る。重さは17.0gを量る。

2は白状の耳飾で、上下面に窪みを持つ。側縁に抉りがみられず、断面下端のみ突出するが上端は直

行する。完形で、最大径3.3cm、高さ1.9cmを測る。重さは23.5gを量る。

3は大型の耳栓と考えられる。下半部を欠失するが、上半部がより大きく、中段に括れを持つものとみられる。上面はドーム状に張り出し、側縁には縦位の研磨調整痕が観察される。

全周の二分の一弱が残存する。最大径4.1cm、現存高4.0cmを測る(以下、破損品の最大径は推定値)。

4は白状の耳飾である。上面がドーム状に張り出し、下面のみ緩やかに窪む。側縁はごく軽微な抉りを持つ。完形で、最大径3.4cm、高さ2.4cmを測る。重さは37.9gを量る。

5も白状の耳飾であるが、上下面とも深い窪みを持ち、全体に扁平な造りである。側縁にごく緩やかな抉りを持つ。完形で、最大径3.2cm、高さ1.5cmを測る。重さは17.1gを量る。

7・9～20は無文の滑車状耳飾である。

7・11・13・14・20は内面中段が鋭角に張り出す断面三角形のタイプである。

7は左右に平坦部を持ち、上面観が完全な円形を呈さない。断面三角形で内面中段が張り出す。側縁にごく軽微な抉りを持つ。ほぼ完形で、最大径3.0cm、

高さ1.6cmを測る。重さは9.7gを量る。

11は肉厚で、断面上下端とも丸みを持ち、側縁に緩やかな抉りを持つ。完形で、最大径3.4cm、高さ1.6cmを測る。重さは16.9gを量る。

13は側縁にごく緩い抉りを持つ。最大径5.4cm、高さ1.6cmを測る。14は側縁にほとんど抉りを持たない。最大径4.9cm、高さ1.7cmを測る。20は大型品で、全周の四分の一強が残存し、最大径7.5cm、高さ1.9cmを測る。

9・10・12・15～19は断面上端が内側へと折り返す、断面「r」字状のタイプである。

9は側縁中段が「く」の字に括れ、下半が直線的に開く。全周の四分の一強が残存し、最大径5.7cm、高さ1.9cmを測る。10は側縁にゆるやかな抉りを持つ。全周の四分の一強が残存し、最大径6.2cm、高さ1.9cmを測る。

12は折り返し部の肥厚が著しい。全周の八分の一弱が残存し。最大径4.9cm、高さ1.5cmを測る。

15は折り返し部扁平で、上端が軽微に外屈する。全周の八分の一弱が残存し、下端部を欠失する。最大径8.1cm、現存高2.2cmを測る。16は折り返し部分が三角形に突出する。全周の八分の一程度が残存し、最大径7.1cm、高さ1.6cmを測る。

17は側縁断面が「く」の字に外反する。全周の五分の一程度が残存し、最大径6.6cm、高さ1.9cmを測る。

18は全周の四分の一弱が残存し、下端部を欠失する。最大径7.4cm、現存高1.7cmを測る。

19は断面三角形タイプとの中間形態である。側縁の抉りをほとんど持たない。全周の四分の一弱が残存し、最大径8.9cm、高さ2.0cmを測る。

6・8・21～28は有文の個体である。

8・23は断面扁平で、内面上半部に文様帯を持つものである。8は断面扁平で、直径と高さの差が少ない円筒状のタイプである。側縁断面直直し、下端部のみ軽微に外屈する。全周の四分の一程度が残存し、最大径3.5cm、高さ1.8cmを測る。

23は上端に細密な刻みが施され、内面に沈線が巡

る。全周の四分の一強が残存し、最大径5.6cm、高さ2.1cmを測る。

6は中空だが貫通孔を持たないタイプで、下面のみさかずき状の窪みを持つ。上面に文様帯を持ち、溝文を描いたのちに沈線内部に刺突が施される。完形で、最大径4.6cm、高さ2.2cmを測る。重さ44.1gを量る。

21・22は内面上端および外縁部にそれぞれ文様帯を持ち、下端が「く」の字に外屈する。いずれも外縁部に段を持って三角形陰刻文が巡り、内面には三叉文が描かれる。21は四分の一弱が残存し、最大径3.7cm、高さ1.9cmを測る。22は全周の五分の一程度が残存し、最大径4.1cm、高さ2.0cmを測る。

24は上面に透かし彫り文様が配され、外縁部は小突起を挟んで三叉文が対向する。地文として鋭利な工具による刺突文が用いられる。最大径3.1cm、高さ1.9cmを測る。

25は断面「r」字状のタイプで、折り返し部の上面に一条の沈線が巡る。全周の六分の一程度が残存し、最大径6.6cm、高さ2.0cmを測る。

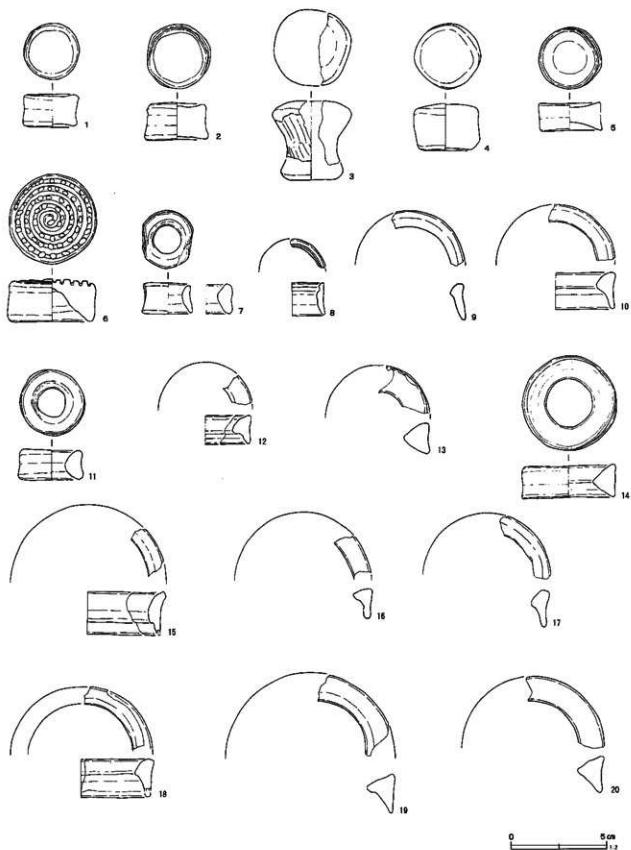
26～28は断面三角形のタイプである。内面上半部に文様帯を持つ。26は縦位の沈線文がみられる。全周の十分の一程度が残存し、最大径7.9cm、高さ1.7cmを測る。27は横位のわらび手沈線が描かれる。最大径7.5cm、高さ2.1cmを測る。

28は隆帯+沈線によるV字モチーフが描かれ、左右に三叉文が配される。全周の六分の一弱が残存し、最大径7.4cm、高さ2.0cmを測る。

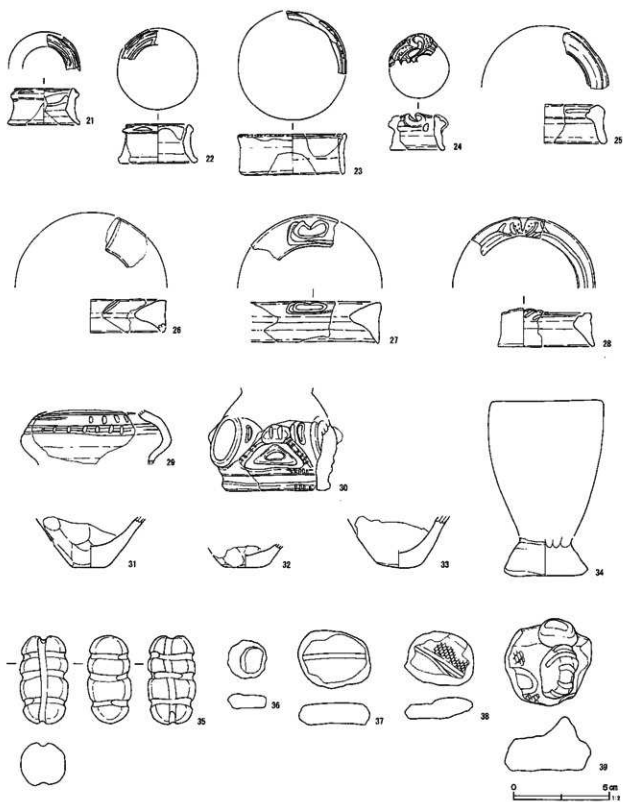
ミニチュア土器 (第123図29～34)

29は大罫式の注口土器をかたどったものとみられる。円盤状に張り出す胴部中段が残存し、刻みを伴う平行沈線が多段に巡る。復元径7.8cm、現存高2.4cmを測る。

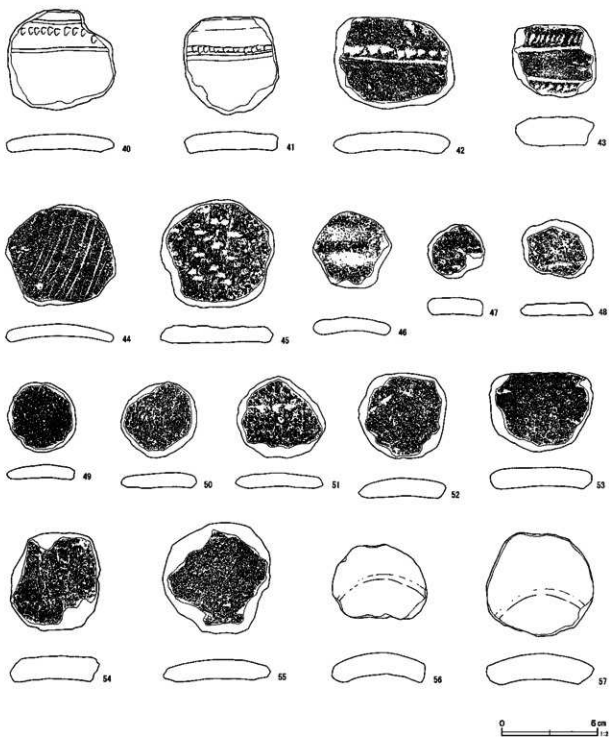
30は安行2式の異形台付土器脚部をかたどったものである。四方に円窓を配し、間隙に刻みを伴う隆帯によって三角形の区画が描かれ、交点に豚鼻突起が配される。復元径7.0cm、現存高3.7cmを測る。



第122図 D区グリッド出土土製品 (1)



第123図 D区グリッド出土土製品(2)



第124図 D区グリッド出土土製品 (3)

31～33は無文の深鉢底部と思われる。34は台付土器で中実の円錐形脚部である。

#### 土錘 (第123図35)

棒状の土錘で、長軸方向に1条、短軸方向に3条の沈線が巡る。長さ4.6cm、最大径2.5cmを測り、重さ27.3gを量る。

#### 土製円盤 (第123図36～第124図57)

36は隆帯の側縁部が残存する。最大径2.0cmを測り、重さ3.4gを量る。37は横位の沈線文がみられる。最大径3.8cmを測り、重さ14.9gを量る。

38は晩期安行式の大波状口縁深鉢の口縁部を使用する。最大径3.6cmを測り、重さ10.1gを量る。

39は安行2式の水平口縁深鉢口縁部を使用する。口唇上の突起と全面の刻みを持つ縦縞を中央に取り込んでいる。最大径4.5cmを測り、重さ36.1gを量る。

40～44は紐線文土器の破片を使用する。40は胴部中段の区画帯部分を使用する。最大径5.6cmを測り、重さ25.2gを量る。41～43はいずれも口縁部で、41は最大径4.9cm、重さ32.2g、42は最大径6.1cm、重さ37.0g、43は最大径4.3cm、重さ23.9gである。44は集合沈線文がみられる胴部破片で、最大径5.6cmを測り、重さ26.1gを量る。

51は表面の風化が著しいが、中段に斜位の刺突列をみることができ、やはり紐線文土器の胴部と考えられる。最大径4.6cmを測り、重さ13.4gを量る。

45は縄代疋痕を持つ底面を使用する。最大径5.9cmを測り、重さ34.7gを量る。

46は幅広い凹線がみられ、高井東式の口縁部を使用したものとみられる。最大径4.1cmを測り、重さ13.2gを量る。

47～50・52～55は無文の口縁部、胴部破片を使用する。56・57は胴下半部から底部にかけての破片であり、比較的屈曲の少ない浅鉢等の底部を使用しているものとみられる。法量は次の通りである。

47：最大径2.9cm・重さ7.5g

48：最大径3.8cm・重さ7.1g

49：最大径3.6cm・重さ10.5g

50：最大径3.9cm・重さ12.4g

52：最大径4.6cm・重さ22.2g

53：最大径5.3cm・重さ26.4g

54：最大径4.6cm・重さ31.8g

55：最大径5.6cm・重さ36.3g

56：最大径4.9cm・重さ26.1g

57：最大径5.5cm・重さ41.0g

#### 石器

##### 石鏃 (第125図1・2)

1は凸基有茎の石鏃である。左右対称の端正な造りで、両側縁がゆるやかなカーブを描く。横長剥片を使用し、腹面に主要剥離面を残す。

2は石鏃未製品に分類したが、天地に原礫面を残しており、石核とも考えられる。

##### 石鏃 (第125図3)

凸基有茎の石鏃に類似するが、茎部に相当する部分が長大で、ほぼ上下対称であること、石鏃としては肉厚で断面棒状に近いことなどから、上下に錐部を持つ石鏃として分類した。握み部の左右が三角形に突出し、平面十字形を呈する。

##### スクレイパー (第125図4)

楕円形の横長剥片を使用し、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残す。右側縁のみ両面からの剥離によって刃部を造り出している。

##### 打製石斧 (第125図5～126図18)

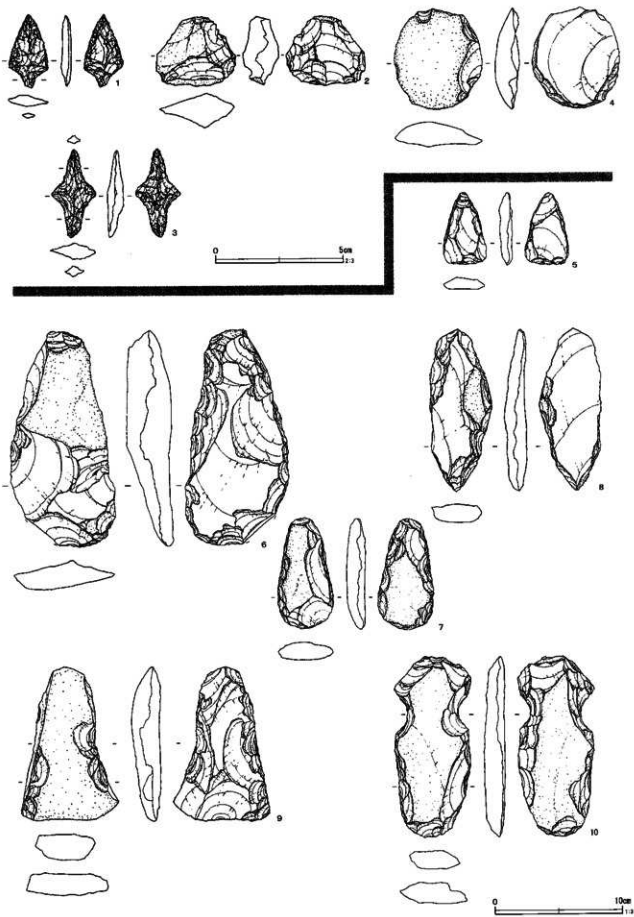
5～7・9は楕形、10～18は分銅形の打製石斧である。

5はミニチュアの打製石斧である。緑泥片岩の板状礫を使用し、細かな剥離調整により二等辺三角形を造り出している。刃部断面鈍角で摩擦が著しく、実用品とは考え難い。

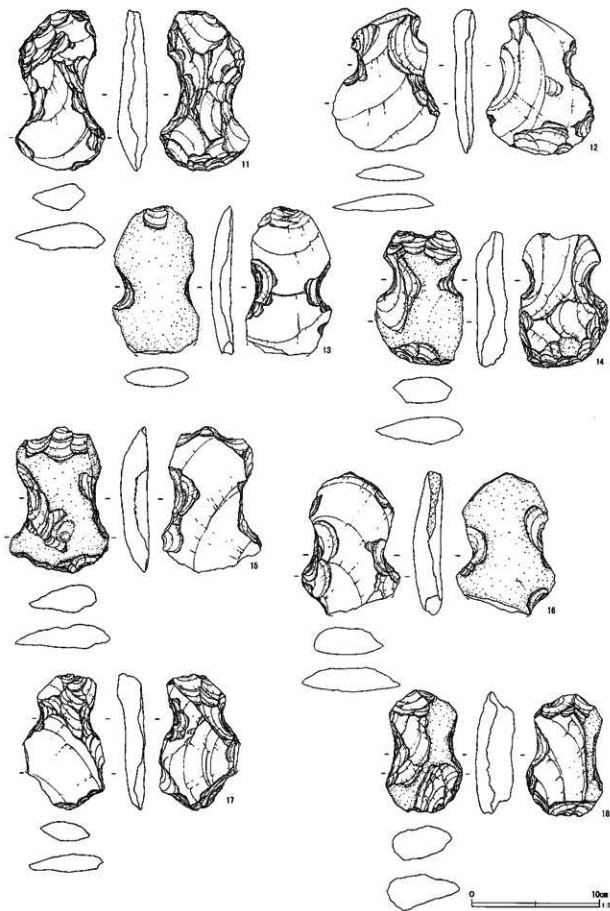
6は刃部右縁が突出したいびつな楕形で、破損品を再生している可能性もある。縦長剥片を使用しており、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残す。刃部は背面左右からの大まかな剥離で概形を造り出し、腹面の細かな剥離により整形を施している。

7は小型の打製石斧である。扁平な自然礫を素材

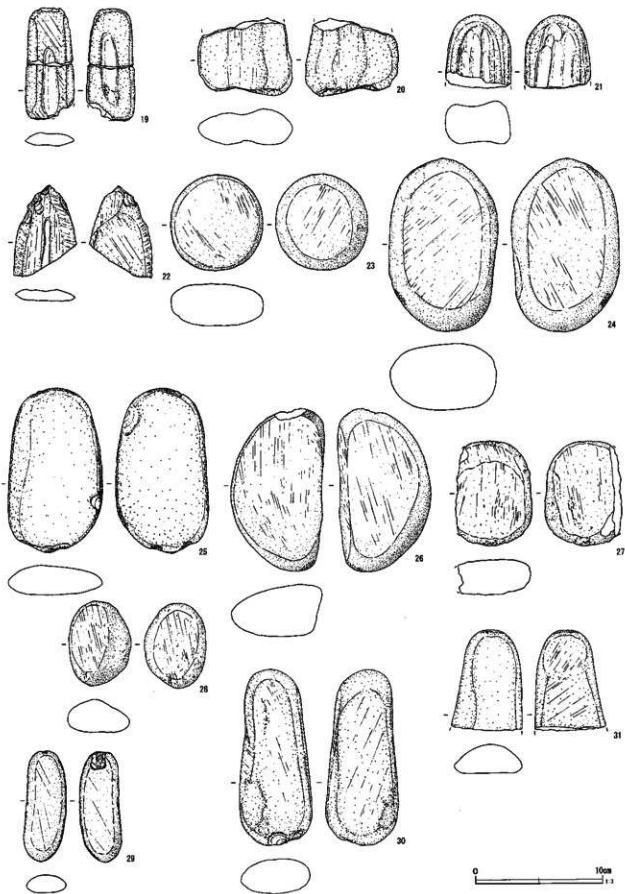




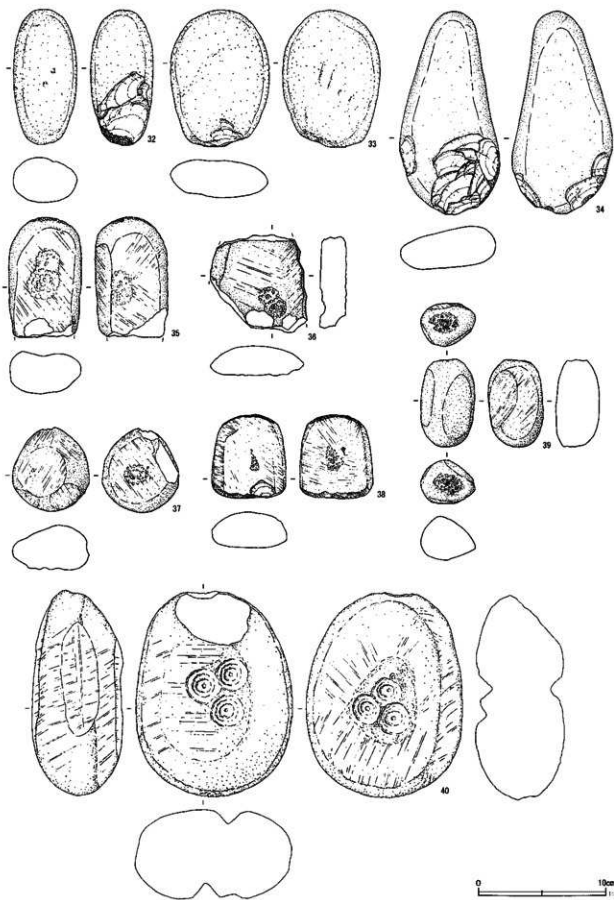
第125図 D区グリッド出土石器 (1)



第126図 D区グリッド出土石器 (2)



第127図 D区グリッド出土石器(3)



第128図 D区グリッド出土石器 (4)

とするものとみられ、表裏に原礫面を残している。側縁は細かな両面剥離で成形し、背面側の多数回の剥離によって片刃の刃部を造り出す。

8は不整形な石斧である。緑泥片岩の板状礫を素材としており、右側縁は両面、それ以外は背面のみの剥離によって成形している。刃部は二等辺三角形を呈するが断面鈍角で、未製品の可能性も考えられる。

9は刃部水平で末広りの楕形を呈する。横長の剥片を使用し、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残す。左側縁は剥片採取以前のものともみられる広い剥離面をそのまま使用し、腹面側のみ細かな剥離を施している。右側縁は両面剥離によりゆるやかなカーブを造り出す。刃部はほぼ一回のみの剥離で成形される。

10は楕形の打製石斧だが、コンパクトな基部に対し刃部が長大になっている。片岩の板状礫を素材とし、表裏に広く摂理面を残している。

11は縦長の剥片を使用し、背面刃部寄りに主要剥離面を残す。12は断面扁平で、表裏にそれぞれ広い剥離面を残すが、腹面側のもが主要剥離面と考えられる。横長剥片を使用し、挟り部のみ両面剥離によって成形されるが、刃部は腹面側に若干の剥離がみられるのみである。基部末端に原礫面が残る。

13は縦長剥片を使用し、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残す。両面剥離により挟りを造り出すのみの簡素なもので、刃部を欠損する。14は背面に原礫面を残す。両面からの細かな剥離により断面鈍角の刃部を作り出している。

15は横長の剥片を使用し、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残す。刃部は片刃で、背面のみ細かな剥離が施される。

16は縦長剥片を用い、背面に主要剥離面、腹面に原礫面を残すほか、基部側縁にも原礫面(ないし節理面)が残される。加工は挟り部に集中し、それ以外は簡素な造りとなっている。刃部の大半を欠損する。

17は横長剥片を使用し、腹面に主要剥離面を残す。加工はやはり挟り部および基部に集中し、刃部の加

工は比較的簡素で断面鈍角である。

18は扁平な円礫を素材とするものとみられ、背面および腹面右側縁部に原礫面を残している。全体に肉厚で刃部の加工も粗雑であり、未製品の可能性も考えられる。

#### 砥石 (第127図19~22)

いずれも砂岩製の有溝砥石である。19が板状礫を平面長方形に整形している他は、基本的に自然礫を無加工で使用したものとみられる。

#### 磨石 (第127図23~31)

いずれも自然礫を無加工で使用している。すべて表裏面とも使用するが、側縁を使用するものは少ない。29・30等棒状のものは叩石からの転用が考えられる。27・28は軽石製で、他とは異なる用途が想定される。

#### 叩石 (第128図32~34・第129図41・44)

すべて自然礫を無加工で使用するものである。32は剥離面の上に細かな敲打痕が密集して形成されており、数回の打撃→連続的な敲打という作業工程が想定し得る。44は棒状の礫の側面に剥離・敲打が集中する。

#### 凹石 (第128図35~40)

いずれも磨石からの転用品である。39は軽石製で、棒状の磨石の長軸側両端が使用される。他は表裏の平坦な磨面に対して単独ないし複数の凹部が設けられる。

#### 礫器 (第129図42・43・46)

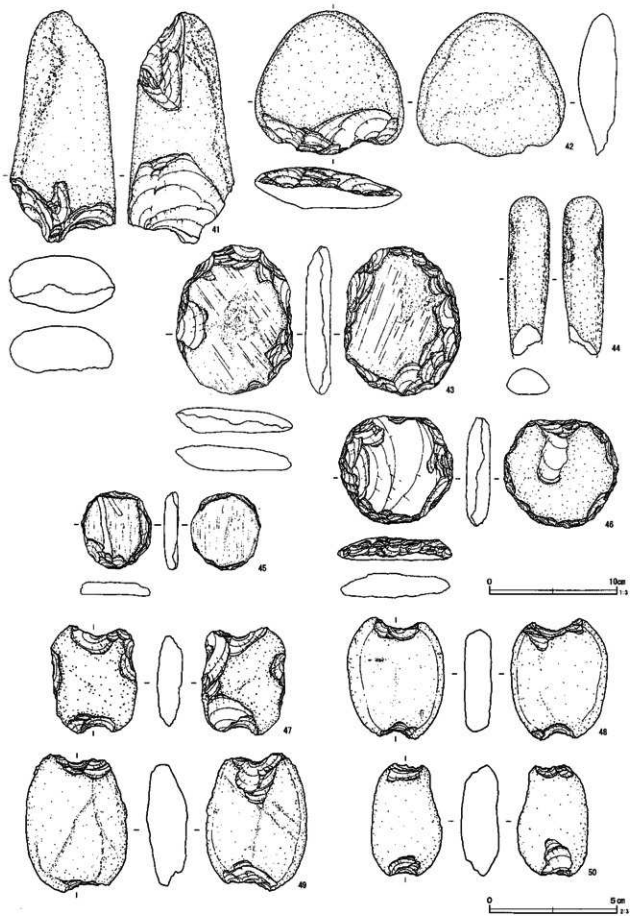
42は円礫の側縁に片刃の刃部を造り出す。43は磨石ないし石皿片からの転用で、全周にわたって両面加工の刃部を持つ。46は大型の剥片を素材とするものとみられる。

#### 石製円盤 (第129図45)

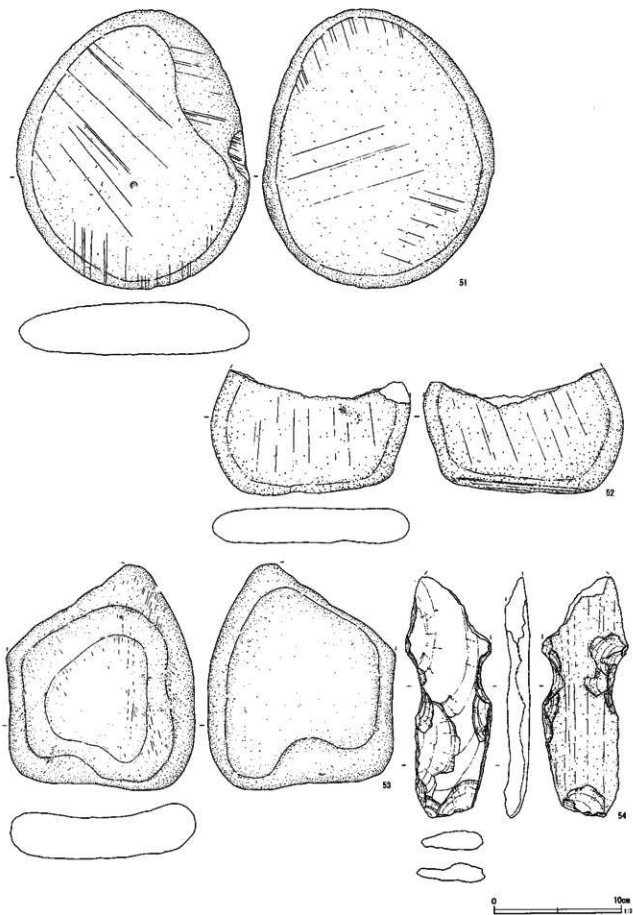
緑泥片岩の板状礫を円形に整形したもので、礫器に似るが刃部を持たない。表面平滑であり、石皿からの転用が考えられる。

#### 石錘 (第129図47~50)

楕円形の自然礫に両面剥離による挟りを設けたも



第129図 D区グリッド出土石器(5)



第130図 D区グリッド出土石器 (6)

のである。47は長軸側・短軸側にそれぞれ抉りを持ち、十字に結束して使用したものとみられる。48～50は長軸側のみ加工される。

#### 石皿 (第130図51～53)

51・52は扁平な自然礫を無加工で使用したものと恐れ、両面使用される。52は上三分の一を欠失する。53は表面中央に窪みを持ち、この面のみ使用されている。

#### 独鈷石 (第130図54)

粗製の独鈷石である。片岩の板状礫を短冊形に整形し、側縁部に抉りを設けている。裏面に原礫面を残し、平滑に研磨している。

#### 石棒・石剣 (第131図55～58)

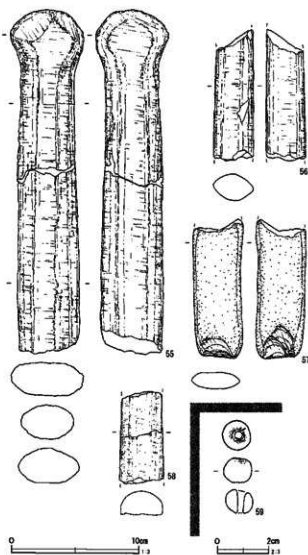
55は粗製の有頭石棒である。基部を欠損する。絹雲母片岩の板状礫を使用し、表裏に平坦面を持つ。頭部と胴部の境に段を持たず、比較的なだらかに推移している。表面の頭部から胴部にかけて部分的な赤変と著しい風化が観察される。

56は胴部破片で、側縁断面始刃状を呈する。57は基部の破片で、硬質な砂岩が使用され、断面扁平で反りを持つ。下端部表裏に研磨整形以前のものとみられる剥離が観察される。

58は胴部破片で、やや多孔質の安山岩が使用される。断面楕円形を呈するが、裏面が剥落している。長軸方向の擦痕が顕著にみられ、部分的に赤変が観察される。

#### 垂飾 (第131図59)

黒色の滑石を用いた玉である。中央に貫通孔を持ち、全面良好に研磨されている。



第131図 D区グリッド出土石器 (7)



第21表 D区グリッド 石器計測表

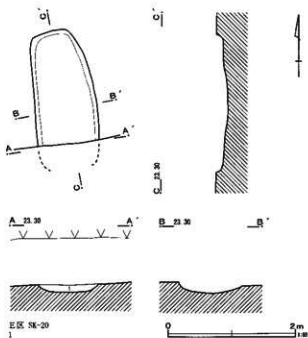
番号	器種	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石鏃	L40	2.8	1.5	0.4	1.6	A-①	凝灰岩
2	石鏃?	M41-13	2.7	3.1	1.9	9.0	E-⑧	チャート
3	石鏃	M40-14	3.5	1.7	0.6	2.4	A-①	チャート
4	スクレイパー	M41-18	7.8	6.9	1.9	115.3	B1-c-①	砂岩
5	打製石斧	M41-14	5.6	3.4	1.0	24.5	B-①	緑泥片岩
6	打製石斧	L39	16.7	8.1	3.5	448.4	B-①	ホルンフェルス
7	打製石斧	M40	8.6	4.4	1.5	69.4	B-①	頁岩
8	打製石斧	SD12	12.6	4.8	1.7	119.8	E-①	緑泥片岩
9	打製石斧	SD12	12.0	7.5	2.3	202.6	B-①	ホルンフェルス
10	打製石斧	M40-9	14.0	6.0	1.7	188.4	C-①	ホルンフェルス
11	打製石斧	L40	12.5	7.0	2.3	164.7	C-①	ホルンフェルス
12	打製石斧	M40-14	11.2	8.4	1.7	136.8	C-①	ホルンフェルス
13	打製石斧	M45	11.6	6.7	1.7	144.9	C-①	ホルンフェルス
14	打製石斧	M41-18	10.5	6.3	2.4	214.8	C-①	ホルンフェルス
15	打製石斧	SD24	11.3	7.7	2.1	188.6	C-①	ホルンフェルス
16	打製石斧	L40-5	(11.1)	7.7	2.2	221.4	C-①	砂岩
17	打製石斧	L40-8	10.5	6.3	2.2	118.5	C-①	黒色頁岩
18	打製石斧	L48-18	9.5	6.0	3.0	175.4	C-①	砂岩
19	砥石	M40-6	(8.7)	3.8	1.0	39.5	A-①	砂岩
20	砥石	M40	(6.0)	7.3	2.8	134.2	A-②	砂岩
21	砥石	L41-12	(5.7)	5.2	3.5	122.4	A-②	砂岩
22	砥石	M40-4	(7.2)	4.9	9.0	36.7	A-②	砂岩
23	磨石	M40	7.5	7.2	3.3	273.2	A2-①	閃輝岩
24	磨石	M40	13.5	8.5	5.6	949.9	B2-①	安山岩
25	磨石	M41-14	12.8	7.4	2.4	364.0	B2-①	砂岩
26	磨石	M40	12.7	7.3	4.3	539.6	B2-①	砂岩
27	磨石	SD11	8.2	(6.0)	2.9	98.5	B2-②	安山岩
28	磨石	M40-3	6.6	4.9	2.7	37.3	B2-④	安山岩
29	磨石	M40-9	8.6	3.3	1.5	71.3	C-①	緑色岩
30	磨石	M40	13.7	5.7	3.1	365.2	C-①	ホルンフェルス
31	磨石	M41-13	(7.9)	5.5	2.4	129.6	C-②	砂岩
32	甲石	M40-3	10.6	4.9	3.5	254.5	①	砂岩
33	甲石	L40	10.7	7.7	3.0	353.8	B1-①	砂岩
34	甲石	L40	15.8	7.9	4.1	560.4	C-①	砂岩
35	凹石	L40	(9.4)	5.7	3.9	261.1	C-b-②	砂岩
36	凹石	SD35	(7.7)	7.7	2.4	176.1	A1-b-②	砂岩
37	凹石	SD35	6.6	6.0	3.5	70.3	A1-a-①	安山岩
38	凹石	L41-8	6.5	5.8	2.8	156.0	A2-a-①	砂岩
39	凹石	M37-14	6.8	4.3	3.4	55.2	C-①	安山岩
40	凹石	一括	16.2	12.1	6.8	1937.5	B2-b-①	砂岩
41	敲石	L40-10	18.0	8.2	4.5	879.8		緑色岩
42	礫器	L40	11.2	11.7	3.2	502.0		砂岩
43	礫器	L40	11.6	9.1	2.0	291.8		ホルンフェルス
44	甲石	M40-14	12.4	3.3	2.1	146.0	C-②	緑色岩
45	石製円盤	SD11	6.0	5.4	1.1	55.1		緑泥片岩
46	礫器	M41	8.4	8.9	1.8	209.7		砂岩
47	石鏃	L40-17	3.3	4.2	1.0	19.7	C-a-①	砂岩
48	石鏃	M40-5	3.8	4.8	1.1	32.5	A-a-①	砂岩
49	石鏃	M40	4.0	5.4	1.6	51.0	A-a-①	珧岩
50	石鏃	M40	2.8	4.4	1.5	27.5	A-a-①	砂岩
51	石皿	M40	21.7	18.1	4.1	2485.1	A-a-①	閃輝岩
52	石皿	L40	(9.7)	15.5	3.1	734.2	C-a-②	閃輝岩
53	石皿	M40	(17.5)	14.7	4.5	1431.7	C-a-①	閃輝岩
54	独鈷石	L40-22	(18.6)	6.7	2.0	218.0		崩壊片岩
55	石棒	L40	(26.8)	5.7	2.8	659.6	②	緑泥片岩
56	石剣	SD13・14	(10.3)	3.1	2.1	121.4	③	緑泥片岩
57	石剣	L40	(10.8)	4.0	1.8	113.4	②	砂岩
58	石棒	M40-4	(7.2)	3.5	(2.1)	81.9	④	安山岩
59	産錐	SD5・24・17	1.1	1.1	0.9	1.5	③	滑石

## 2. E区の遺構と遺物

### (1) 土坑

#### 第20号土坑 (第132図)

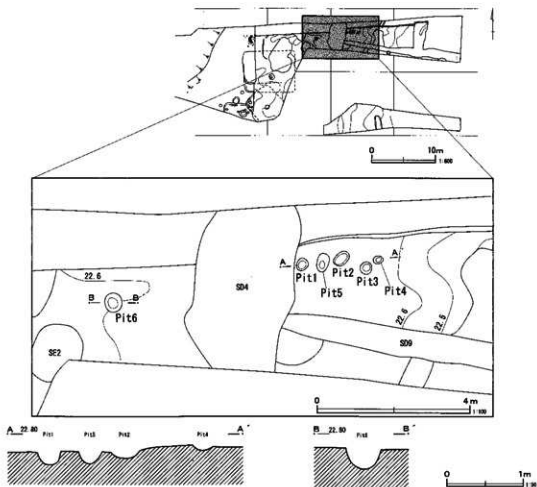
M-31グリッドに所在する。南壁が調査区域外に存在している。長軸1.76m、短軸0.96m、深さ22cmを測る。主軸はN-10.5°-Wを指す。隅丸長方形を呈するものと思われる。底面は中央がやや下がっている。遺物は出土しなかった。



第132図 E区第20号土坑

### (2) ビット

集落域から東の低地部へと至る斜面で合計6基のビットを検出した。Pit 1～Pit 5 はほぼ一直線上に並んでおり、周辺の等高線が開いていることから住居跡などの遺構の一部である可能性がある。遺物は出土しなかった。



第133図 E区ビット

第22表 E区ピット群 計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.32	0.30	0.16	Pit 4	0.26	0.21	0.05
Pit 2	0.45	0.30	0.09	Pit 5	0.47	0.30	0.18
Pit 3	0.32	0.31	0.33	Pit 6	0.49	0.45	0.29

### (3) グリッド出土遺物

(第141図～143図)

調査区全域から多量の遺物が出土した。主体を占めるのは復元個体を含む多量の縄文土器であり、土器形式の上では後期の高井東式から晩期安行3c・3d式までがみられたが、安行3a式・3b式が特にまとまっている。その他に石器、土偶など土製品、石製品、礫などが出土した。

遺物の分布はL・M-29、L・M-30の微高地上で特に密であり、L・M-30の低地部、特に22.5mの等高線より下では極めて希薄となっていた。

F区から連続する遺構群が存在した可能性が高いが、調査時点ではプランを確認することはできな

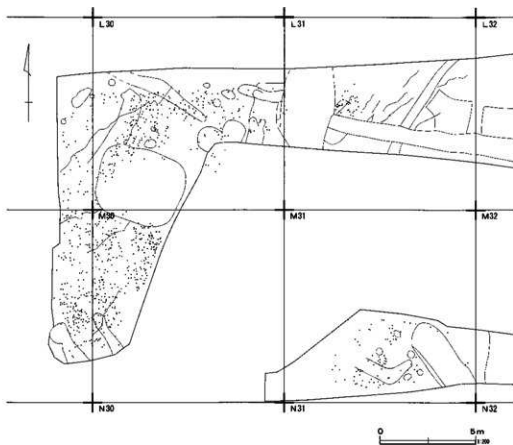
かった。

土器 (第144図～181図)

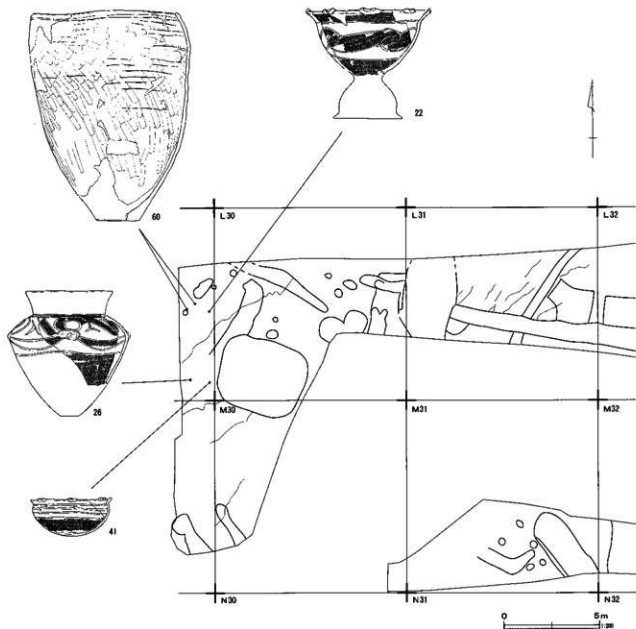
1～4は高井東式の4単位大波状口縁深鉢である。口縁直下に幅狭の文様帯を持ち、胴部は無文地に沈線文が描かれる。

1は文様帯下端を刻みを持った隆帯で区画する。区画内部は縦位の二本隆帯で分割され、平行沈線による楕円文が描かれる。波頂部の突起を欠失するが、波底部外面には縦位の円盤状突起が配されている。胴部には3本沈線で窓枠状や稜形状の幾何学文様が描かれている。

3は文様帯下端を、棒状工具の押圧を伴う隆帯で



第134図 E区遺物分布図(1)



第135図 E区遺物分布図(2)

区画し、内部に2本の凹線が巡る。波状口縁の波頂部には横位の貫通孔を伴う横円筒状の突起が配され、縦位の凹線が巡る。波底部には縦瘤が配される。

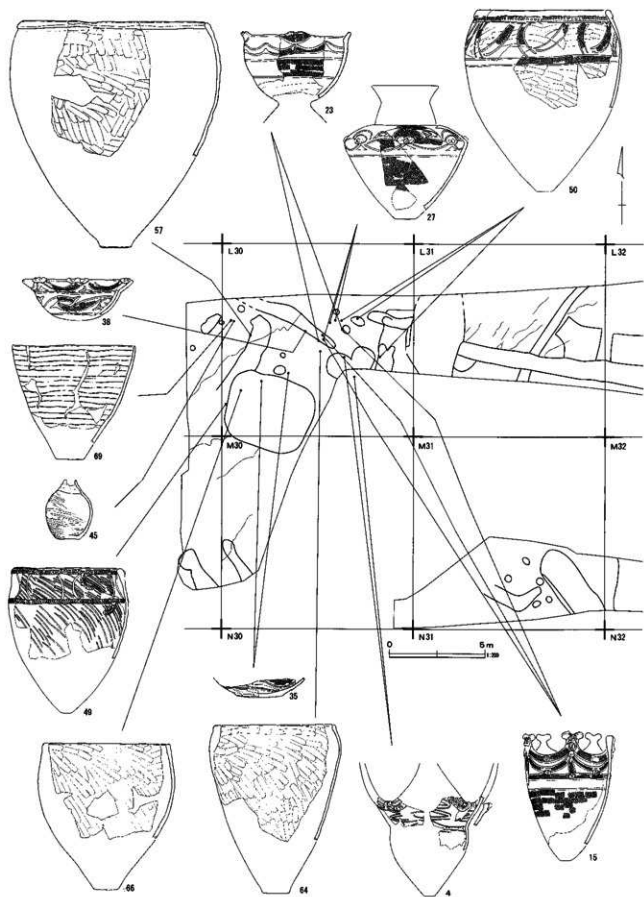
胴部中段には横位の平行沈線による区画が設けられ、胴上半部には単沈線の鋸歯文が描かれる。

4は口縁の一部から胴部中段までが残存する。口縁直下の文様帯は刻みを伴う隆帯で区画され、波底部では区画が左右に分離する。胴上半部には平行沈線による鋸歯文が描かれ、胴部中段には平行沈線+刺突列の区画が設けられる。

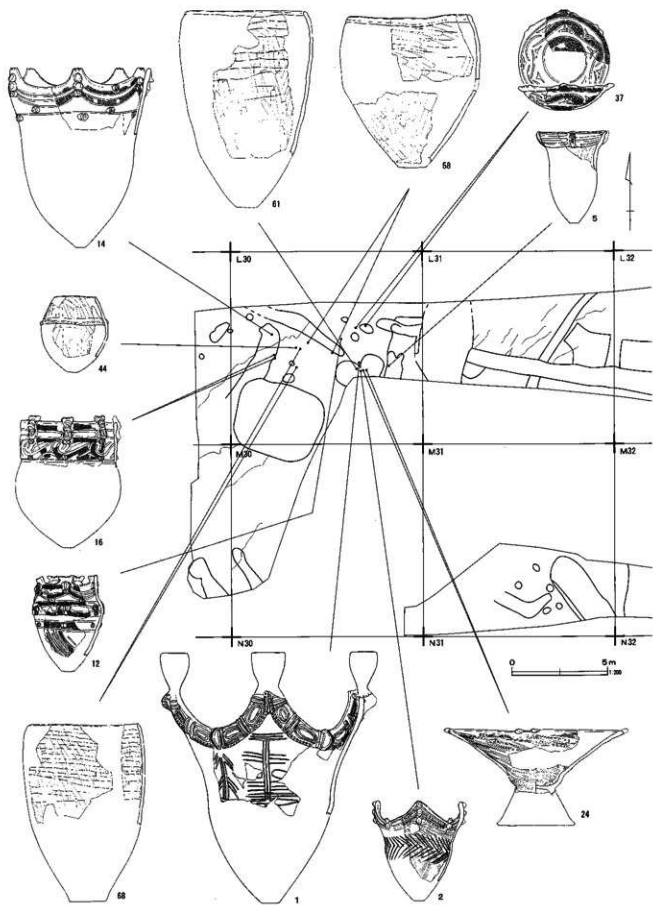
2も波状口縁深鉢であるが、山形波状口縁で波頂部の突起を伴わない。波頂部に縦3段、波底部に縦2段の貼り瘤を配し、両者の間に沈線による楕円形の区画が配されて、これに沿って列点文が施文される。胴部は研磨され、綾杉状の沈線文が巡る。

5・6は同時期の水平口縁深鉢である。5は口縁外反して直下に段を持ち、縦瘤が4単位配される。突起間には3本の凹線が巡っている。

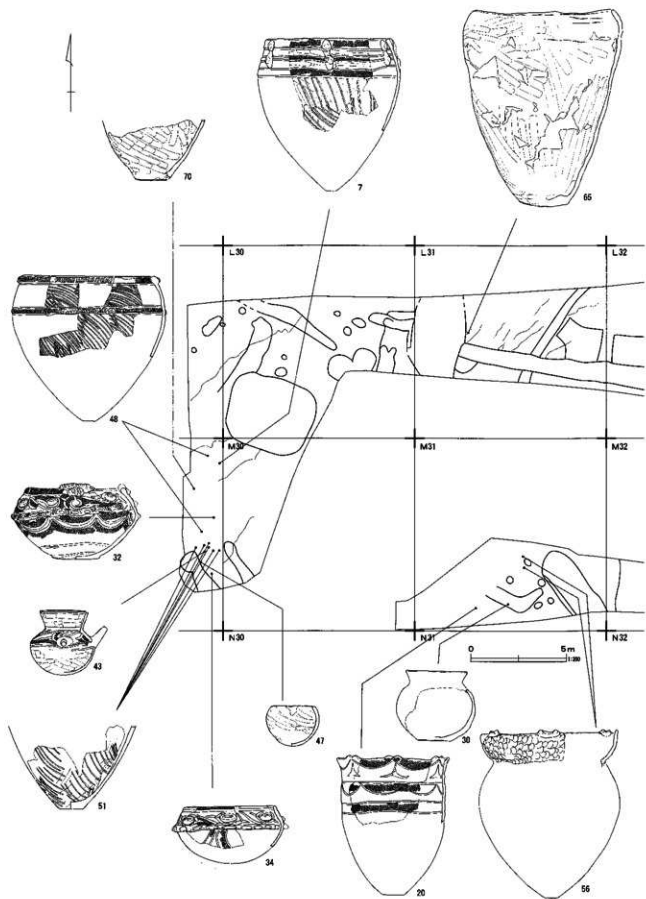
6は口縁内彎し、上下を刻みを伴う隆帯で区画した文様帯を配する。隆帯間には単沈線による横楕円



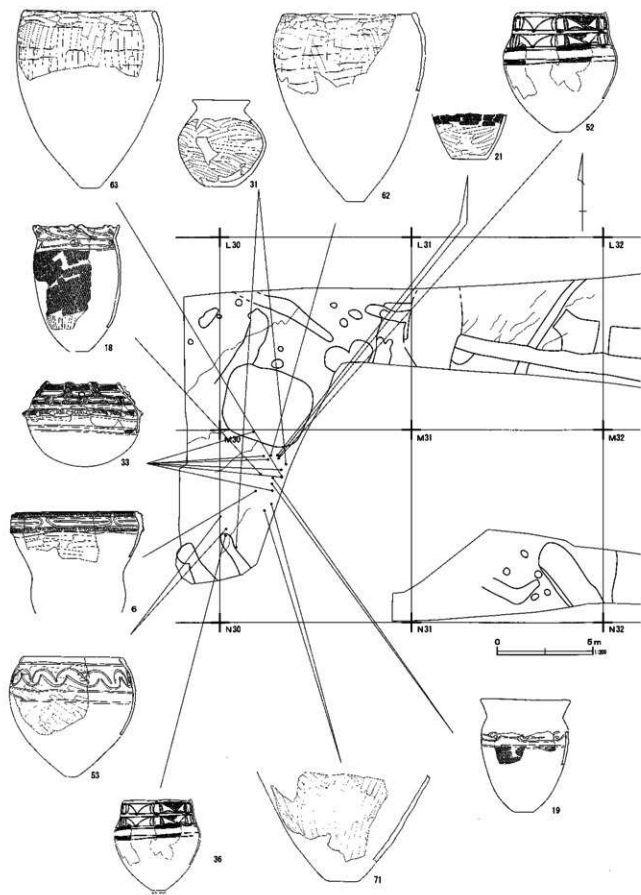
第136图 E区遗物分布图(3)



第137图 E区遗物分布图(4)

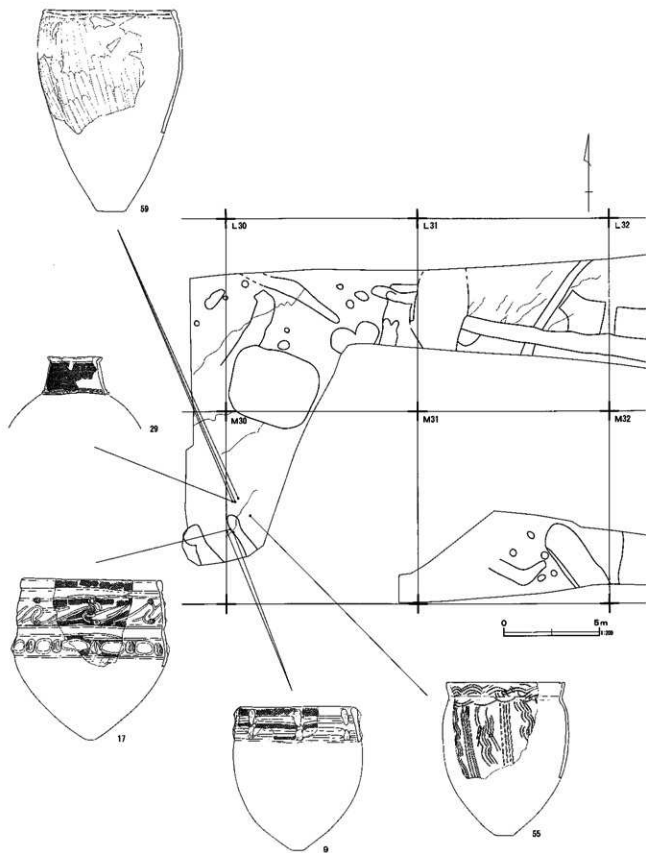


第138图 E区遗物分布图(5)

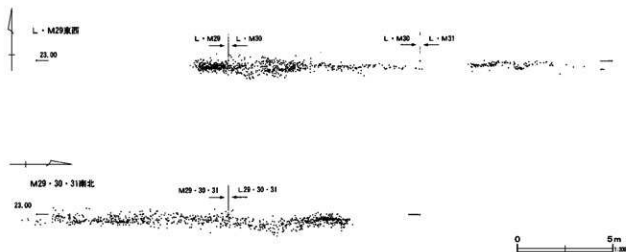


第139图 E区遺物分布图(6)





第140图 E区遗物分布图(7)



第141図 E区遺物分布図(8)

文が並び、内部に1条の沈線が充填される。

7～10は安行1式の砲弾形精製深鉢である。いずれも口縁直下に3段の帯縄文が巡り、縦長の突起が配される。胴部が残存するのは7・8のみだが、前者では斜位の集合沈線文が描かれ、後者は無文で篋状工具による撫で調整痕が観察される。地文はすべてRL単節の縄文である。

11は安行2式期の砲弾形深鉢で、口縁下に刻みを持つ横長の貼り瘤を配し、直下に沈線の楕円文をはさんで豚鼻状突起を配する。突起に接する帯縄文の末端は上下連繫して楕円形区画を形成している。地文はRL単節の縄文である。

12～14は大波状口縁深鉢で、後期安行式の流れを汲むものだが、掲載の資料はいずれも晩期段階のものと思われる。

12は5単位のやや矮小化した波状口縁である。波頂部直下に刻みを持つ貼り瘤と豚鼻突起が重畳し、頸部には弧線化した帯縄文が巡って三角形の区画を構成する。胴部中段には楕円形の区画帯を配し、胴下半部にも1段の帯縄文を配して、以下底部までは斜位の集合沈線で埋めている。口縁～頸部の造りがやや寸足らずなぶん、腰高な印象を与える土器である。地文はRL単節の縄文を使用する。安行3a式である。

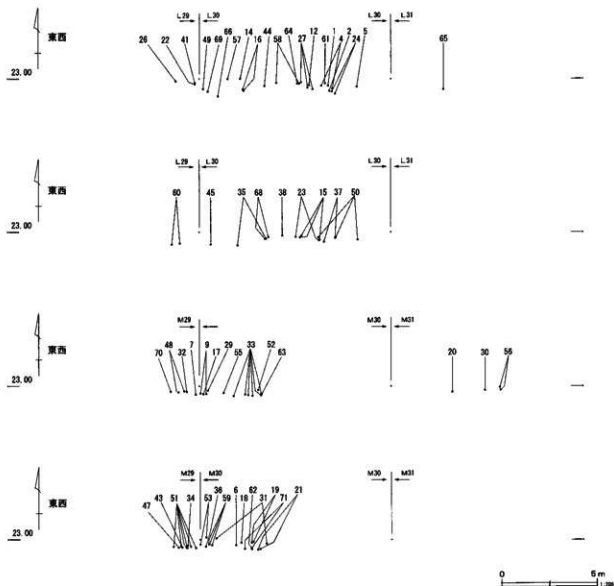
13は口縁から胴上半部までが残存する。5単位の

大波状口縁で、波頂部に二叉の突起と2段の豚鼻突起が配される。口縁下に縄文帯を持ち、頸部は帯縄文による三角形区画を構成している。地文はRL単節の縄文である。やはり安行3a式と考えられる。

15もこれに類似するが、三角形区画の内部に縦位の平行沈線が垂下して縄文が充填される。胴部中段に1条の沈線が巡り、以下は縄文帯となる。地文はRL単節の縄文である。安行3b式であろう。

14は口縁から胴上半部までが残存する。5単位の山形波状口縁で、波頂部には1対の刻みがみられるのみで、突起を持たない。押圧ある突起2個と豚鼻突起が重畳し、波底部にも豚鼻突起が配される。頸部の三角形区画の底辺を支える帯縄文は1条の沈線に置き換えられ、胴部以下は無文化するものと思われる。斜位の帯縄文は下端の区画から独立して、口縁に沿って巡る弧状モチーフとなっている。地文はLR単節の縄文である。安行3b式である。

16・17は水平口縁深鉢で、いずれも安行3a式であろう。16は口縁から胴部中段の括れまでが残存する。口縁が垂直に立ち上がり、胴下半部が張り出す下膨れの器形である。水平口縁上に二叉の突起が巡り、縦長の豚鼻突起と接続する。口縁下には楕円形の区画が巡り、胴上半部には対向三叉文にステッキ状の沈線を組み合わせた入組状のモチーフが配される。地文はRL単節の縄文である。



第142図 E区遺物分布図(9)

17は口縁から胴部中段まで残存する。口縁がすぼまり、胴部中段に括れを持つ甔形土器の流れを引く深鉢である。口縁突起を持たず、頸部に無文帯が巡る。胴上半部には対向三叉文を斜沈線で連繋する入組状モチーフが巡る。胴下半部には楕円形の区画帯が置かれ、縦長の豚鼻突起が配される。地文はRL単節の縄文である。

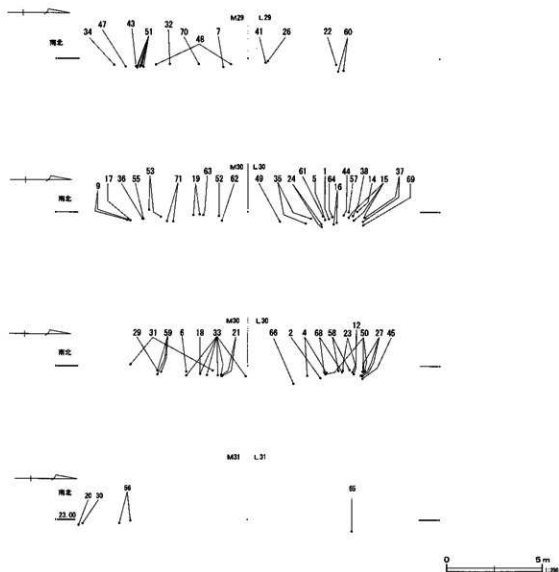
18~20は安行3a式の磨消縄文系深鉢である。やや寸胴で頸部に括れを持ち、口縁外反する深鉢で、貼り瘤を持たず、磨消文様が展開する。

18は口端上に対をなす小突起を配する。口縁部と

胴上半部に文様帯を持ち、口縁部の文様は首孔の左右に三叉文を配する魚眼三叉文、胴上半部の文様は、形骸化した入組文で首孔を連繋する。胴部中段以下は縄文帯となる。地文はLR単節の縄文である。

19もこれに類似するが、やや幅広い文様帯を持つものとみられる。魚眼三叉文の一端が延びて左右と連繋する入組文的な構成をとる。胴下半部は縄文帯となる。地文はLR単節の縄文である。

20は口縁から胴部中段まで残存する。対をなす小波状口縁で、口縁に沿って弧状の区画が構成され、余白を独立の三叉文で埋めている。胴上半部にも同



第143図 E区遺物分布図(10)

様の弧線文が巡り、文様帯下端を帯縄文で区画する。地文はLR単節の縄文である。

21は同種の深鉢底部とみられる。底面が比較的広くなっており、底部直上の無文部には横位の篋撫でが観察される。地文はLR単節の縄文である。晩期前葉とみられる。

22～25は台付鉢で、すべて晩期段階のものである。

22・23は磨消縄文の土器で、胴張りで頸部に括れを持つ金魚鉢形の器形である。22は脚台との接合部から下を欠失する。水平口縁上に対を成す小突起が付される。口縁下に縄文帯を持ち、胴部に入組文が描

かれる。地文はLR単節の縄文である。安行3a式であろう。

23はやはり脚台を欠失する。口縁上の小突起を中心に弧線文を描き、頸部には平行沈線による弧状の磨消モチーフが巡る。隣り合う弧線の接続部分に三叉文が取り込まれているのは、深鉢20のような弧線十三叉文のモチーフからの変異であろうか。胴部には幅広い帯縄文が巡り、胴下半部は無文化する。地文はLR単節の縄文である。安行3a式新段階ないし3b式と考えられる。

24は脚台部を欠失する。鉢状に張る胴部に、ゆるや

かに外反する長大な頸部～口縁部が接続する。水平口縁上には対を成す小突起が配されている。無文の土器で、全体に横位～斜位の研磨が徹底される。安行3b式～3c式とみられる。

25は口縁から胴部中段まで残存する。単調に内彎して立ち上がるボウル状の器形で、口縁には台形の突起が巡る。胴部無文で、中央に指頭押圧を伴うボタン状の貼付文が付される。安行3b式期のものであろう。

26～29は広口壺形土器である。いずれも胴部最大径の部分に中央押圧を伴う横長の貼り瘤が付されるのを特徴とする。文様不明の29以外は安行3a式と考えられる。

26は肩部から胴下半部まで残存する。胴上半部に同心円文と斜位の帯縄文を組み合わせた片流れ状の文様が描かれ、余白に三叉文が描かれる。同心円文の下位に貼り瘤が位置しており、弧状の磨消モチーフで横位に連繫される。胴下半部は縄文帯となっており、上端を1条の沈線で区画する。地文はLR単節の縄文である。

27は肩部から底部の直上まで残存する。貼り瘤と同心円文が融合し、レンズ状の磨消モチーフで左右連繫される。余白には三叉文が描かれる。胴下半部は縄文帯で、上端を1条の沈線で区画する。地文はLR単節の縄文である。

28は肩部から胴部中段まで残存する。同心円文は玉抱きの入組三叉文へと変化し、貼り瘤は上弦の連続弧線文によって左右連繫している。地文はLR単節の縄文である。

29は頸部～口縁部である。口縁は「く」の字に屈曲して外反し、1条の沈線が巡る。頸部は縄文帯となり、胴部との境は2段の隆帯で区画している。地文はLR単節の縄文である。

30・31も壺形土器だが、無文で丸胴の単純な器形である。晩期前葉～中葉のものであろう。いずれも肩部から底部まで残存する。30は若干上げ底状を呈する。31は胴部中段が「く」の字に張る。

32～48は鉢および浅鉢で、器形や文様構成のうえていくつかのタイプが存在する。

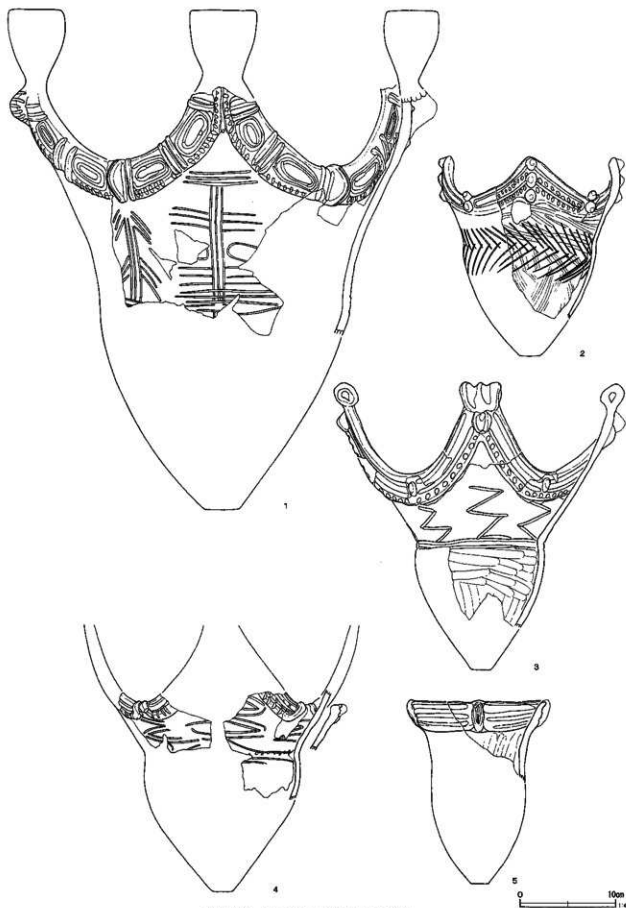
32は口縁から底部まで完存する。胴部がソロバン玉状に張り出す鉢である。口縁肥厚して、刻みを持つ横瘤が二段配される。胴部最大径の部分には同様の横瘤が連続して配され、上下の文様帯を分離している。胴上半部には短沈線を伴う横瘤を配し、これを中心に対向三叉文が描かれ、ステッキ状の沈線で横に連繫されている。胴下半部には平行沈線による弧線文が横位連続して描かれ、地の部分に縄文が施文される。底部は丸底で直上に段を持ち、周囲に沈線が巡る。地文はRL単節の縄文である。安行3a式と考えられる。

33は胴部から胴下半部まで残存する。胴部中段に刻みを持つ横瘤が巡ることから32に類似の鉢と考えたが、底部に向かう彎曲が弱く、砲弾形の深鉢である可能性もある。口縁には豚鼻突起が3段に配され、胴上半部には横楕円形の区画が巡って、交点ごとに豚鼻突起が配される。胴下半部には帯縄文が巡っている。地文はRL単節の縄文である。安行3b式であろうか。

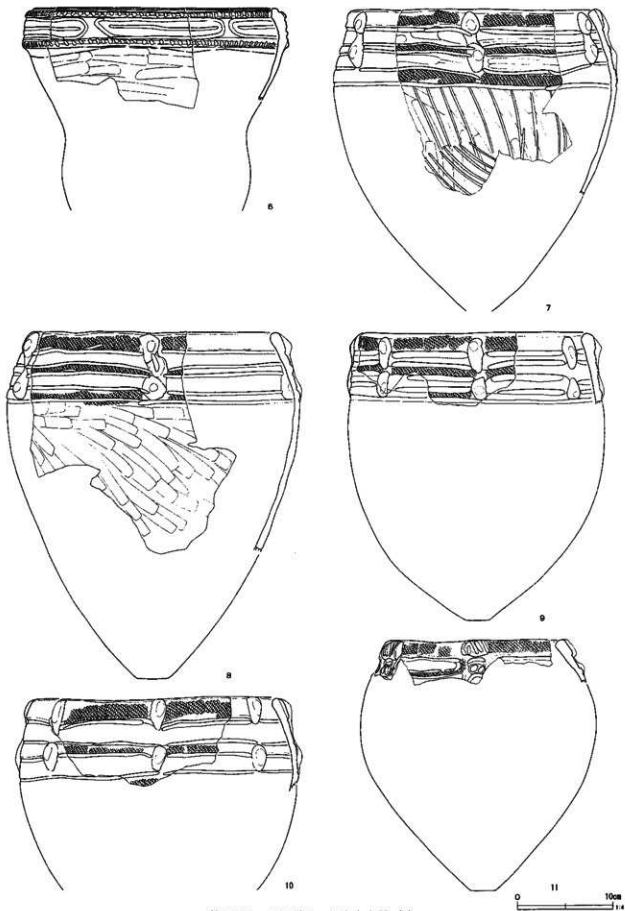
34は口縁から胴下半部まで残存する。32に似るが、やや簡略な構成をもつ。胴部中段には幅広の押圧を伴う隆帯が巡り、胴上半部には横瘤を中心に対向三叉文が描かれて、斜沈線で横位連繫される。胴下半部には大柄の弧状モチーフが巡るものとみられる。安行3a式である。

35は同種の鉢の底部である。丸底で、直上に段を持ち、1条の沈線が巡る。胴下半部には弧状の磨消モチーフが巡るものとみられる。底面には篋状工具による粗い撫で調整が観察される。晩期前葉に位置づけられる。

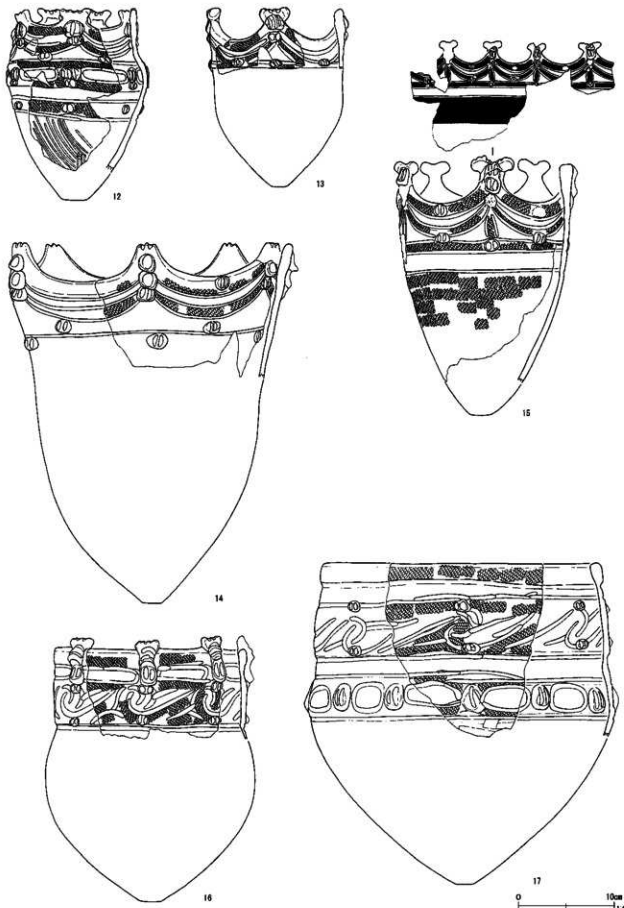
36は晩期前葉の円口方底土器で、胴下半部から下のみ残存する。丸底状で直上に強い段を持ち、この部分が隅丸方形になっている。四辺には幅広の凹線が巡り、コーナー部分に外向きの弧線文が配される。底面は良く磨かれている。地文はRL単節の縄文であ



第144図 E区グリッド出土土器 (1)



第145図 E区グリッド出土土器 (2)



第146図 E区グリッド出土土器 (3)



る。

38~41は丸底の浅鉢で、頸部が長く、幅広い胴部文様帯を持つもの(37~39)と、頸部が短く、胴上半部に圧縮された文様帯を持つもの(40・41)の二種類の器形が存在する。

37は扁平な皿状の浅鉢である。口唇肥厚して内面に稜を持つ。水平口縁上に3個ないし2個一組の小突起を配する。口縁下および胴下半部に縄文帯を持ち、それぞれ1条の沈線で区画される。胴部中段が文様帯となり、上下に入組む弧線文が描かれる。余白には三叉文が充填される。地文はLR単節の縄文である。安行3a式であろう。

38は底部欠失する。水平口縁で、縦刻みを持つ横瘤が付される。頸部と胴部にそれぞれ文様帯を持ち、前者には平行沈線の弧状モチーフと間隙を埋める三叉文、後者には入組三叉文が描かれる。地文はLR単節の縄文である。安行3b式であろう。

39は波状口縁で、幅広いU字形の貼付文が付される。口縁部に無文帯、頸部に縄文帯を持つ。胴上半部には平行沈線による弧状モチーフが巡るが、外周部の描線に棘刺状の短沈線が付され、変形の三叉文となっている。地文はLR単節の縄文である。安行3a式新段階ないし3b式と考えられる。

40は扁平なさかざき状の器形で、口端が強く外反する。口縁上に対を成す小突起が付されている。胴上半部には平行沈線が巡るが、中段の描線の末端が上下に交差している。口縁直下および胴下半部は縄文帯となるが、底部周辺は無文となり、境界を1条の沈線で区画している。地文はLR単節の縄文である。安行3a式であろう。

41は文様・器形とも40に類似するが、口縁部に縄文帯を持たない。胴上半部の文様帯は、やはり末端交差する沈線文である。地文はLR単節の縄文である。安行3a式と考えられる。

42・43は注口土器で、いずれも安行3a式だが、明確な系統差がみられる。

42は口縁が肥厚しつつ内彎する。口縁上に縦瘤と

横瘤が重畳し、胴部中段にも刻みを伴う幅広い横瘤が巡る。頸部無文で、胴上半部には対向三叉文と単沈線の入組文を組み合わせた片流れの文様が描かれる。地文はRL単節の縄文である。

43は瘤をもたない磨滑縄文系の土器である。頸部に括れを持ち、口縁はやや外反して直立する。胴上半部に文様帯を持ち、42に共通の対向三叉文+入組文が描かれる。地文はRL単節の縄文である。

44~47はそれぞれ特異な器形を示す無文土器群である。晩期前葉ないし中葉に位置づけられる。

44は倒卵形の小型深鉢で、胴上半部にたが状の隆帯が巡る。

45は細口壺で、口縁が欠失する。胴部は横位の研磨が徹底され、頸部には輪積み痕を残している。

46は坏状の浅鉢である。口縁は内彎しつつ立ち上がり、胴部中段が「く」の字に張る。篋状工具による横位の粗い撫で調整が顕著にみられる。

47は碗形の土器で、胴部球状に張り出す単調な器形である。

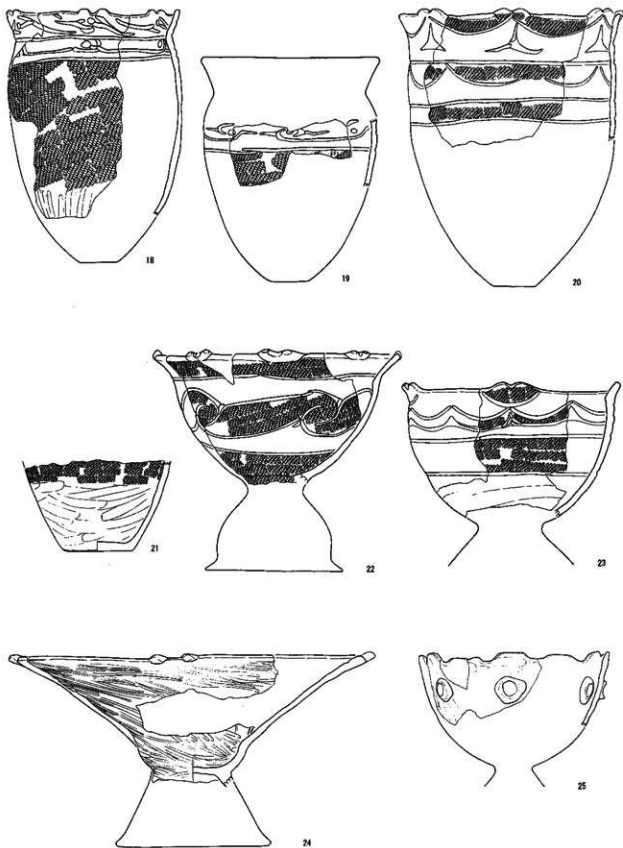
48~51は紐線文土器である。胴下半部を欠失する。48は口唇肥厚して口縁内彎する。口縁と胴部にそれぞれ刻みをもつ幅広い隆帯が巡る。地文の集合沈線は一様に右下がりて施文され、部位ごとの変化はみられない。後期末~晩期前葉に位置づけられる。

49も胴下半部を欠失する。隆帯の一部が鉤状に垂下する。胴上半部には対弧状の沈線文が描かれる。晩期前葉であろう。

50は磨滑縄文の土器で、胴下半部を欠失する。口縁下に段を持って、三角形の刺突文が巡る。胴部中段に帯縄文が巡って、胴上半部には「ノ」の字状の磨滑モチーフが対向して配される。地文はRL単節の縄文で、集合沈線文はみられない。安行3b式期のものであろう。

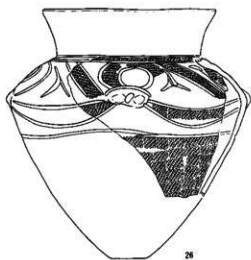
51は底部から胴部中段にかけて残存する。やはり紐線文土器に伴うものとみられ、全面に集合沈線文だけが施文される。

52は安行3b式の細密沈線文土器で、胴下半部を

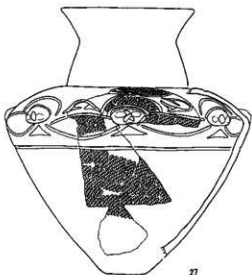


0 10cm  
1:4

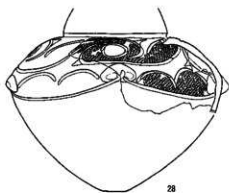
第147図 E区グリッド出土土器 (4)



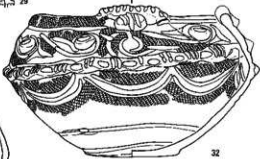
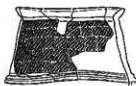
26



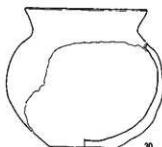
27



28



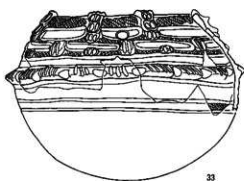
32



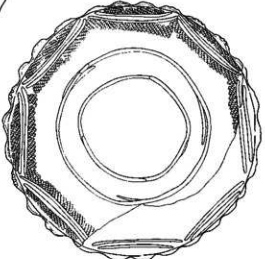
30



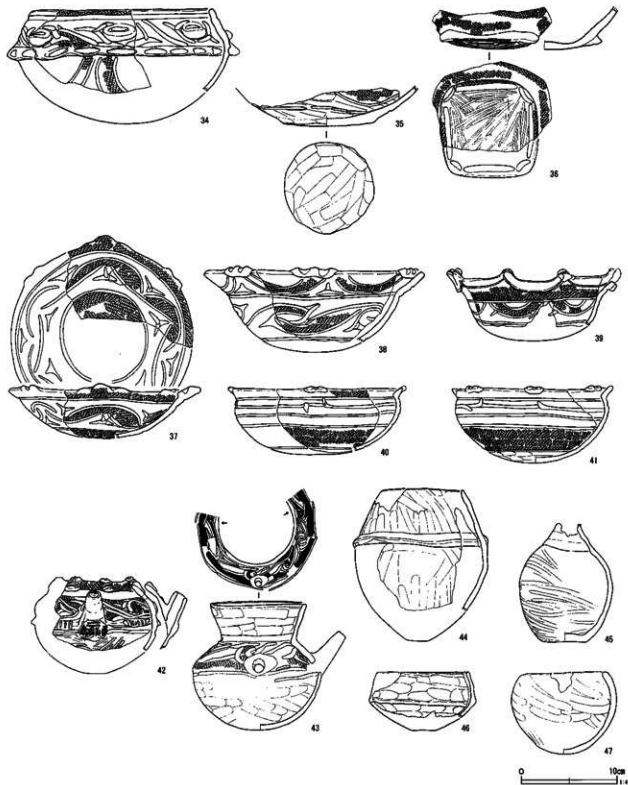
31



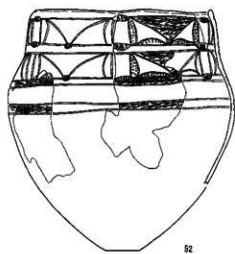
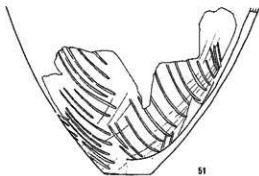
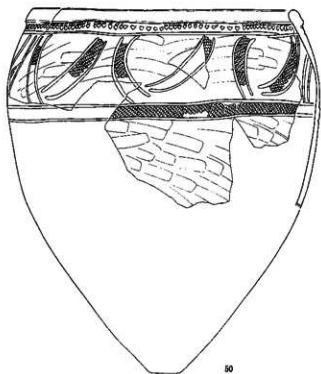
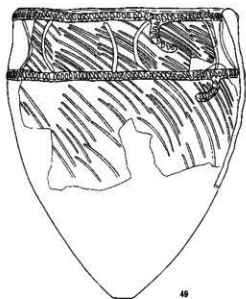
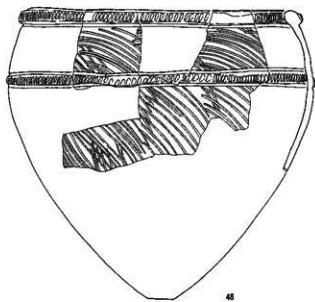
33



第148図 E区グリッド出土土器 (5)



第149図 E区グリッド出土土器 (6)



第150図 E区グリッド出土土器 (7)

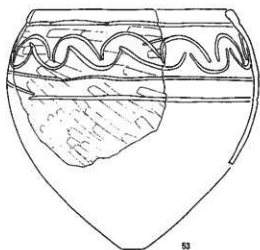
欠失する。きわめて薄手の器壁で、胴部中段に括れをもつ瓢型の深鉢である。文様帯は二段構成をとり、弧状沈線を組み合わせた幾何文が重畳して、扁平な豚鼻突起が配される。地文は部分的に三角形の刺突文に置き換えられている。

53は紐線文土器の特徴を残す安行3c式期の深鉢である。胴下半部を欠失する。砲弾形の器形で、口唇肥厚しつつ内彎する。胴上半部に文様帯を持ち、連続する弧線文が上下に入組んで施文される。文様

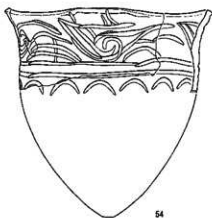
帯下端は平行沈線で区画される。

54は口縁から胴部中段までが残存する。緩やかな波状口縁を呈し、口唇は断面角頭棒状を呈する。口縁直下から胴上半部を文様帯として、入組三叉文を中心に集合沈線文が描かれる。文様帯下端は平行沈線で区画され、区画の直下には連続する弧線文が巡る。安行3d式である。

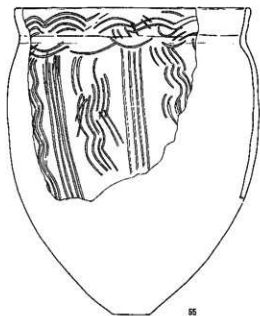
55・56は晩期前葉の半粗製の深鉢である。



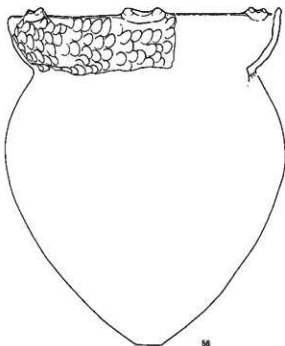
53



54



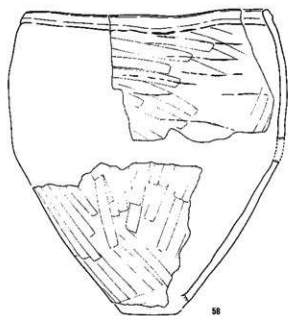
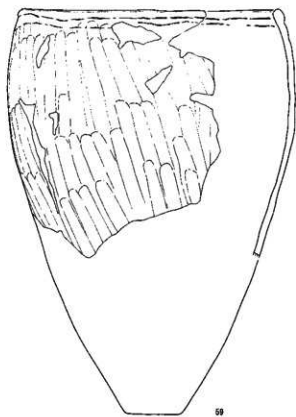
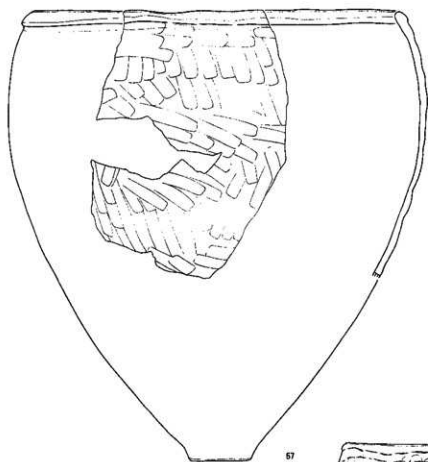
55



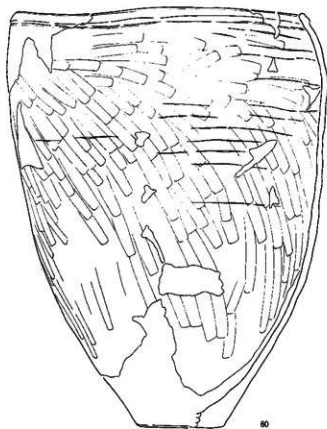
56



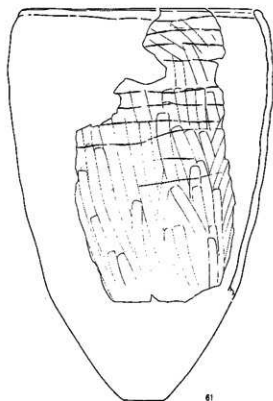
第151図 E区グリッド出土土器(8)



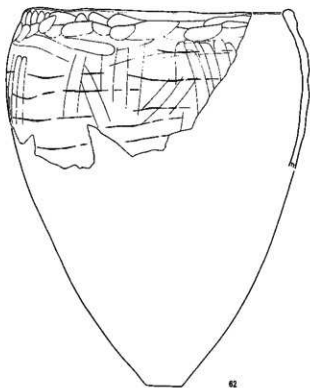
第152図 E区グリッド出土土器(9)



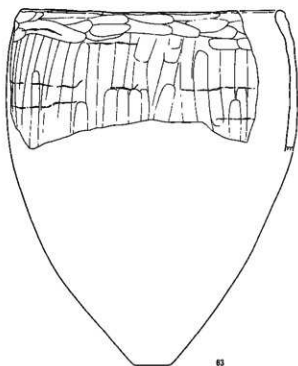
60



61



62



63



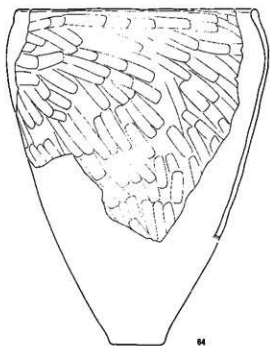
第153図 E区グリッド出土土器 (10)



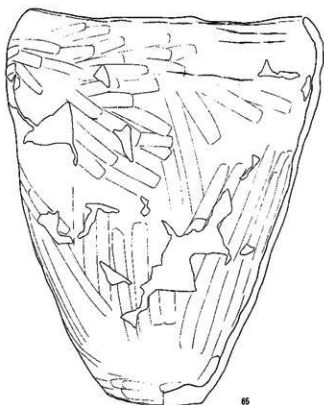
55は口縁から胴下半部まで残存する。寸胴で頸部が括れ、口縁がやや開きつつ直行する。半截竹管状工具による平行沈線文を地文とし、口縁から頸部では横位の対向弧線文、胴部は直線と波状の懸垂文を交互に描いている。

56はキャリバー形の深鉢で、口縁から頸部の括れ部分までが残存する。水平口縁で、口端に対をなす突起を配する。全面に指頭による整形痕を残している。

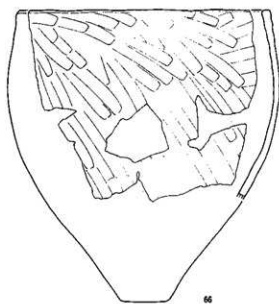
57~71は晩期前集の粗製深鉢である。地文を持た



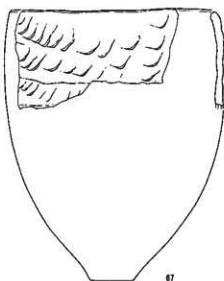
54



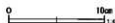
55



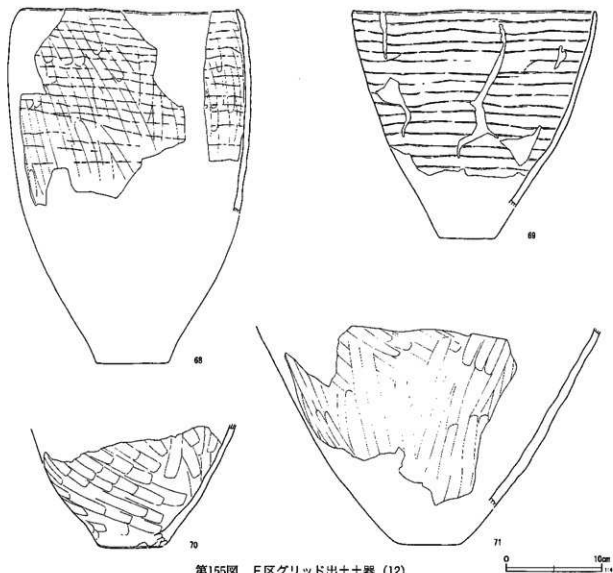
56



57



第154図 E区グリッド出土土器(11)



第155図 E区グリッド出土土器 (12)

ず、全面に篋状工具による粗い撫で調整痕を残している。器形は寸胴気味で口縁が内彎するものが一般的だが、64・65のように直線的に開いて胴上半部に最大径を持ち口縁内屈するもの、69のように内彎しつつ単調に開くものが存在する。

57～60は口唇断面が肥厚して外面に段を持つ。62・63は段は持たないが口唇肥厚して、口縁直下のみ横位の撫で調整が施される。

58・60～63・68・69は輪轆み痕を残している。67は篋状工具によるひだ状の圧着痕が全面に残される。

72以下は破片資料を一括した。

72は加曾利B式の口縁突起で、今回出土した資料中最も古い時期のものである。横位の条線を地文と

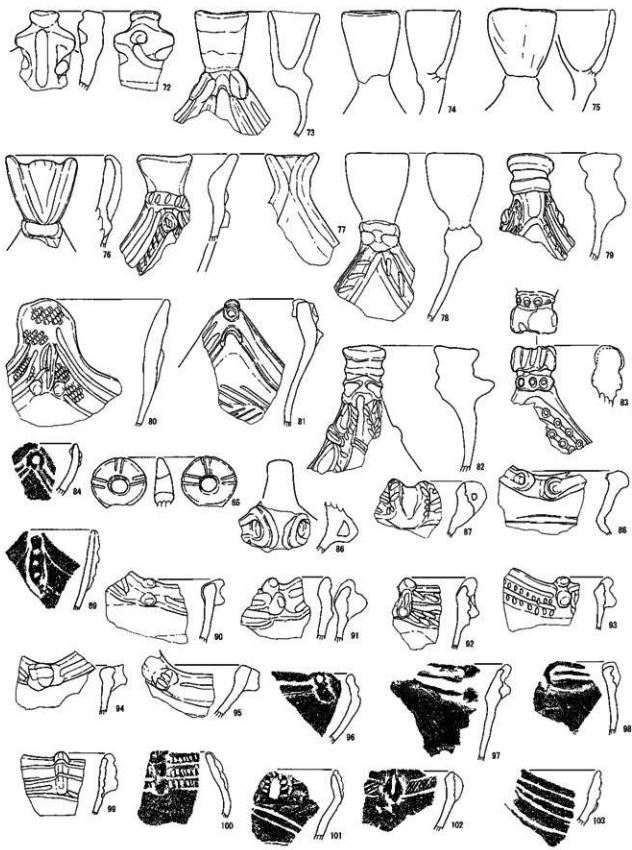
する3単位波状口縁の深鉢で、加曾利B2式期に盛行し、B3式期にも一部が残存する。前回報告された諏訪木遺跡A地点において主体を占める土器群である。

73～134は高井東式である。

73～79・82・83・85は4単位大波状口縁深鉢の突起部分である。

73～75はこの器種にもっとも多くみられるさかざき形の突起である。76・77はこれを扁平にした扇形の突起で、76は両側に隆帯を伴い、77は裏面が左右を巻き込んだような造りになっている。

80はやや簡略な杓子状の突起で、表面にLR単節の縄文が施文されている。突起下部には縦長の貼付文



第156図 E区グリッド出土土器 (13)

と左右一対の小突起が付されている。

79・82は上下に「たが」状の隆帯を巡らせた円柱状の突起である。83はこれが横置きにされたもので、「たが」を持たず、縦位の沈線をもって類似の効果を出している。85は中央に貫通孔を持つ環状の突起である。

突起の直下にはしばしば86のような橋梁状の把手を配するが、形骸化して横位の貫通孔を失うものも多い。87～102は波底部に配される小突起・把手である。87は波頂部のもとの対をなす橋梁状把手で、88はこれが形骸化したものとみることができ、90～94・97等は上下一対の小突起を配するもので、92は突起間に縦長の刺突を加えている。94・95は突起上に横刻みや短沈線を加えることで縦並びの突起を簡略に表現している。99・100は縦長の突起状を沈線が横切ることで縦3つ並びの突起を造りだしている。101は逆U字形の隆帯に刻みを加える。102は楕円形の貼付文を縦刻みで分割する。

103～111はこれら大波状口縁深鉢にともなう口縁部の破片である。口縁下に段を持って幅狭の文様帯を構成し、数段の凹線を巡らせて、下端は多く刻みを伴う隆帯で区画される。105は凹線に沿って円形竹管状工具の刺突列が巡るもので、同様の刺突列は83の波頂部にも見えている。

胴上半部の文様は、81・110・111では矢羽根状の集合沈線文が施文されるが、これは72のような波状口縁深鉢の流れを汲むものである。101は平行沈線により縦位の鋸歯文を描くもので、復元個体4に典型を見ることができ、82・114にも類似の沈線文の一端が見えている。

81・84・89は突起の発達しない山形大波状口縁の土器である。81は表裏に盲孔を伴う円形貼付文を付し、表面のみ逆U字形の隆帯を重畳させている。84は円形貼付文、89は縦長の貼付文に縦並びの刺突を加えている。81は口縁下に有段の文様帯を持っているが、84・89はより簡略な表現となっている。112～117も山形波状口縁の土器である。112は口縁下に凹線を巡ら

せ、上下に刺突列を沿わせている。114は口縁下に斜位の列点を伴う平行沈線文を巡らせたうえで、下端を同種の平行沈線文で閉塞し、三角形の区画を形作っている。

115・116は波頂部下に水平方向の集合沈線を施文するもので、沈線間には斜位の列点文を充填する。

118以下は水平口縁の深鉢である。口縁下に幅狭の文様帯を持つ点は波状口縁深鉢と共通である。

118～122・126は口縁下に小突起を伴っている。118は幅広の凹線が途切れる部分に縦長の貼付文を配する。120は同種の貼付文が対をなし、左右が楕円形の区画となっている。121は上下一対の刺突を伴う縦長突起、122は盲孔を伴う円形貼付文である。126は曾利式にみられるC字状の小突起を配する。

123・124は口縁下に有段の文様帯を配する土器で、キャリパー形の深鉢と考えたが、浅鉢の可能性もある。125・127はより緩やかな段をもつ口縁部文様帯である。128・129は段のみで文様帯を持たない無文の口縁である。

130・131は口唇内面に粘土紐を貼り付けることで二重の口唇をつくりだし、左右を縦の貼付文で止めている。

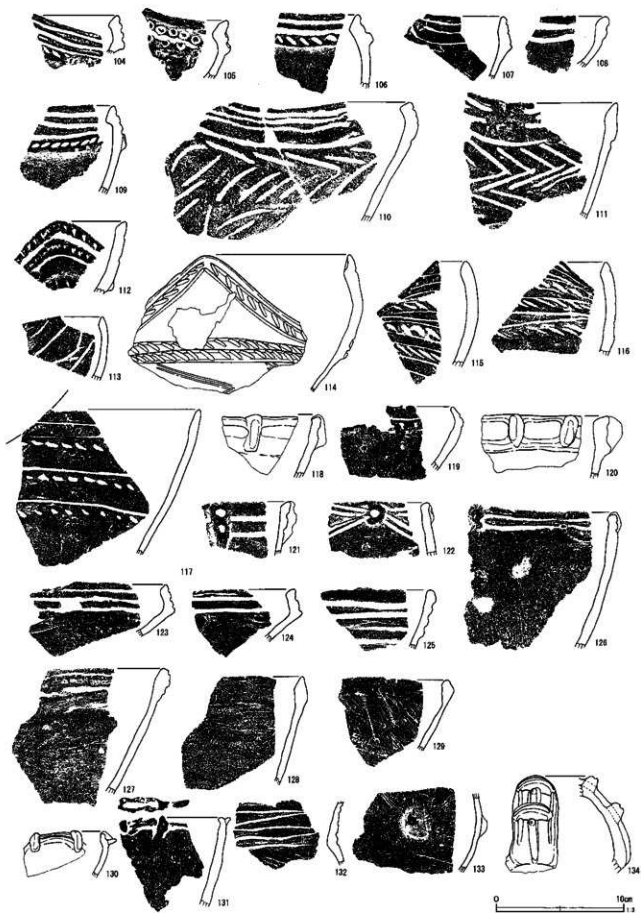
132は胴部中段の括れ部分で、横位の集合沈線文を描いている。133は独立した瘤を配する胴部中段である。

134は吊手土器の吊手部分である。背面に巡る凹線と、これを横切る背割れの円盤状突起が、復元個体1や破片82の口縁に共通するため同時期のものと考えた。円盤状突起の中央には、紐通しとみられる縦の貫通孔が穿たれている。

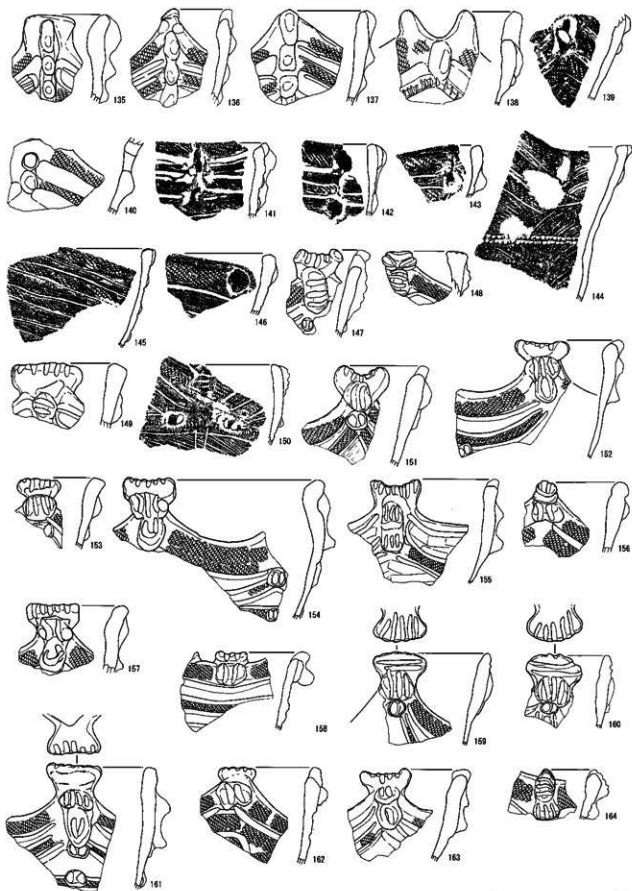
135以降は安行式である。後期安行1式から晩期の3c・3d式までの各時期のものが出土したが、晩期前葉のものが量的にも主体を占めている。

135～194は大波状口縁深鉢である。135～146は安行1式である。

135～138は波状口縁波頂部である。刻みなしの縦帯が重畳し、左右に帯縄文が巡る。138は単独の縦帯



第157図 E区グリッド出土土器 (14)



第158図 E区グリッド出土土器 (15)

で、下端に刻みを持つ隆帯が巡り、口縁の縄文帯との間に楕円形の区画を造りだす。

突起は135が扇状突起、136は矮小な円柱状の突起が付される。138は波頂部が二叉に分離して突起化する。139・140は口縁部文様帯の一部で、140は縦瘤間に貫通孔を穿っている。

141～144・146は波底部で、やはり縦瘤が重畳する。144は胴下半部までが残存しており、胴部中段の括れ部分に2段の刺突列が巡っている。145は多段化する帯状文である。

147～150・164は刻みをもつ縦瘤と豚鼻突起を配する口縁で、安行2式である。193も同時期のものであろう。突起は、147が二叉の触角状の突起、148は左右に鱗状の突出を伴う円柱状の突起、149は刻みをもつ扇形の突起である。

150は波状口縁波底部である。帯縄文に代わり刻みを持つ隆帯で区画が構成され、連結部に豚鼻突起が配される。164も波底部で、刻みをもつ縦瘤の貼り瘤が重畳する。

151～195は晩期前葉の土器で、155・157・159・161・163・168～182・184・185・194が安行3b式、他は3a式と考えられる。波状口縁波頂部下に刻みをもつ横瘤や豚鼻突起が重畳し、帯縄文による三角形区画が形成される。

突起はいずれも頂部に縦の刻みを伴っている。152～154・157・161等は扇状突起、151・155・168・169等はこれから派生した二叉の突起であり、159・160・175～177は扁平な杓子状の突起である。165～167は波底部に付される円柱状の突起である。169・172・173等は2段の豚鼻突起が中央押圧を伴う受け口状の突起へと変化する。182・184・186は波状口縁波底部にも豚鼻突起が配される。

胴部文様まで見通せるのは154・161・169・183～195等で、波頂部下に展開する三角形区画文をみることが出来る。184では三角形区画の斜辺の部分が底辺の区画から分離して、口縁下を巡る弧線文へと変化している。186ではこの斜辺の部分が口縁部の縄文帯と

同一化してしまい、底辺の部分だけが独立した区画として胴部中段を巡っている。胴部に描かれる入組三叉文とも併せ、文様規制からの逸脱が著しい土器といえる。

196～244は水平口縁深鉢である。口縁外反するキャリバー形の深鉢と、内彎する砲弾形深鉢の二者が存在する。

196～202・205・209・210・241～243等はキャリバー形深鉢口縁部で、刻みなしの縦瘤を配する安行1式である。口縁下の帯縄文は単段で区画文を構成し、胴上半部には弧線文内に縄文を充填した半円形の区画が巡る。200は極端に開く器形で、浅鉢の可能性もある。203・204は対をなす舌状の突起を配する口縁で、安行2式であろう。

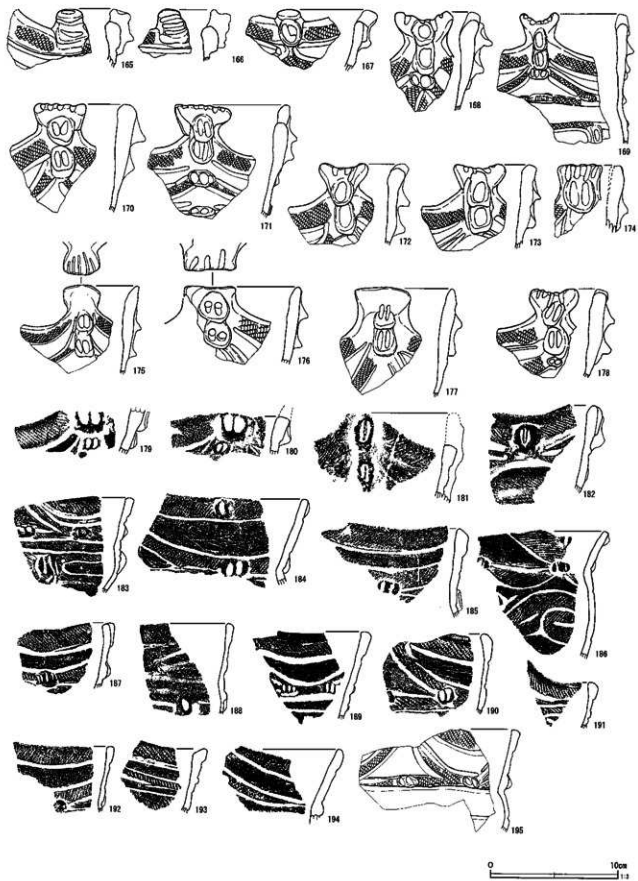
206・207・211～240は砲弾形深鉢の口縁部である。212までは刻みなしの縦瘤を配する安行1式、それ以降の刻みや押圧を伴う縦瘤と豚鼻突起を配するものは安行2式以降の土器と考えられる。213のように帯縄文末端の沈線が上下連続して楕円形区画を生成するものも安行2式であろう。

突起は縦瘤のみか、縦瘤上の口端に横瘤や円柱状突起を付するものが多くみられる。225は胴部に楕円形区画文が並んで隙間に縦瘤を配する土器で、大波状口縁深鉢に由来する文様構成ということが出来る。

230・233は口縁部の区画文の直下に対向三叉文が描かれる。安行3a式であろう。232も同時期のものと考えられる。

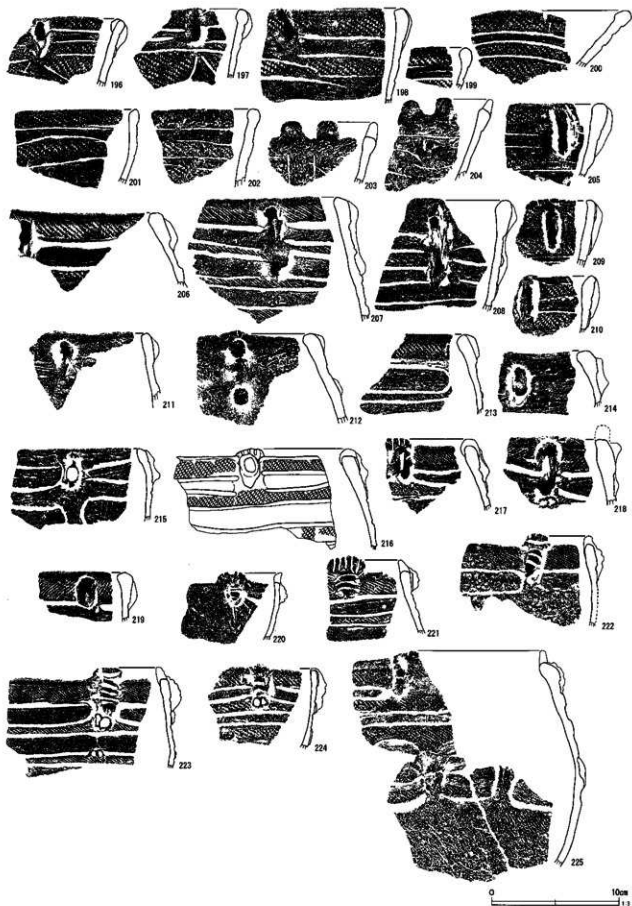
245～276は深鉢胴部破片である。245～248は後期の土器で、深鉢ないし瓢形土器胴部中段のくびれ部分である。平行沈線や列点文が巡って文様を上下に分帯し、胴下半部には上下対向する弧線文が描かれて内部に縄文が充填される。

249以降は安行3a・3b式の胴部で、大半が波状口縁深鉢に伴うものである。波頂部下に帯縄文による三角形区画を配し、胴部中段に楕円形区画ないし1段の帯縄文を巡らせる。

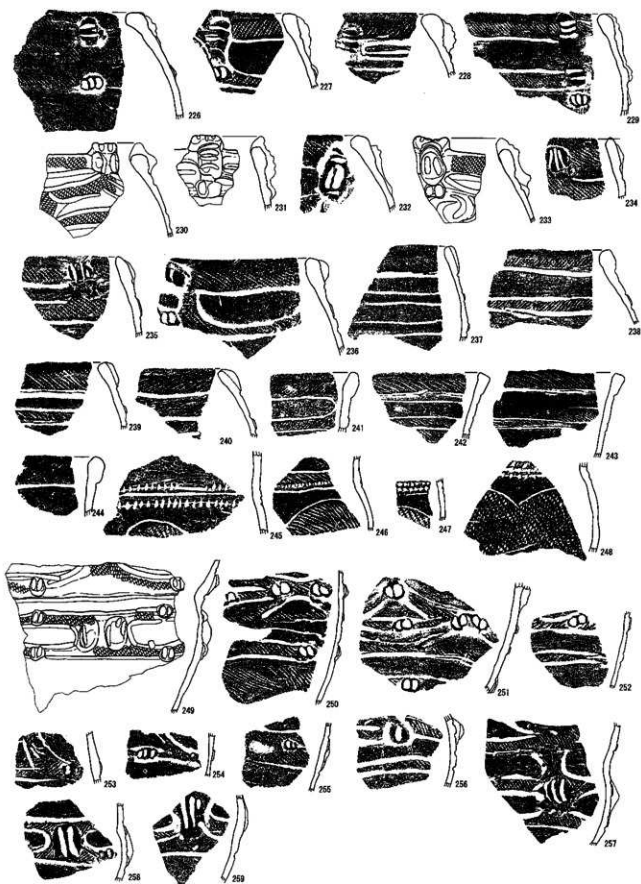


第159図 E区グリッド出土土器 (16)





第160図 E区グリッド出土土器(17)



第161図 E区グリッド出土土器 (18)

250・251は三角形区画の底辺と胴部中段の区画が斜位の帯縄文で連繋しており、多段の三角形区画帯を構成している。安行3 a式と考えられる。

249は三角形区画が磨消帯化する。257は楕円形区画帯が多段化して三角形区画底辺と融合している。いずれも安行3 b段階とみられる。

249は三角形区画内側の描線が失われ、上辺の弧状区画のみが残されている。

その他、253・255・258・259等が安行3 b式、それ以外は大半が3 a式段階のものと考えられる。

264~276・311~315は胴下半部の破片である。大半が晩期前葉のものと考えられる。264~268は対向弧線文が描かれる土器で、この下位に沈線や帯縄文等の区画が巡って、縄文帯の上端を閉塞する。315は二重の波状文が交錯してレンズ状の区画を構成する。

277~279は安行1式の甌形土器口縁部である。薄手の器壁で口唇が極端に肥厚し内彎する。277は口縁上に円形の貼付文を単独で配し、1段の帯縄文を巡らせる。278は帯縄文とこれに並行する斜位の刺突列が多段に巡る。279は口縁部の文様帯が圧縮され、胴上半部に無文部を持つ。

280~286は後期安行式の台付鉢である。280・281は安行1式、283・286は安行2式と考えられる。

280はやや直線的に開く口縁部である。水平口縁上に半円形の突起を配し、以下に円形の貼り瘤が3段重畳する。貼り瘤の左右には帯縄文が展開するが、描線の末端が上下連繋して楕円形区画を形成しつつある。

281は口縁が内彎しつつ立ち上がる。水平口縁で、刻み無しの縦瘤が複列で3段重畳し、左右に帯縄文が描かれる。

282は体部の腰が「く」の字に張り出し、胴部が垂直に立ち上がって口縁外反する典型的な台付鉢に伴うものとみられる。屈曲部分に刻みを伴う隆帯が巡り、区画から上には横位の条線、下には斜位の条線が施文される。

283は280同様単調に開く器形で、刻みをもつ隆帯が多段に巡って豚鼻突起を配し、脚台との接続部付近は縄文帯となる。286は平行沈線による幾何文を描いて縄文を充填する。

284・285は脚台部である。284は幅広の凹縁で隔られた帯縄文が多段に巡り、扁平な縦瘤が配される。285は平行沈線による帯縄文が巡る。

287~310は安行3 a式段階で出現する磨消縄文系の深鉢で、隆帯による帯縄文や貼り瘤を持たない。

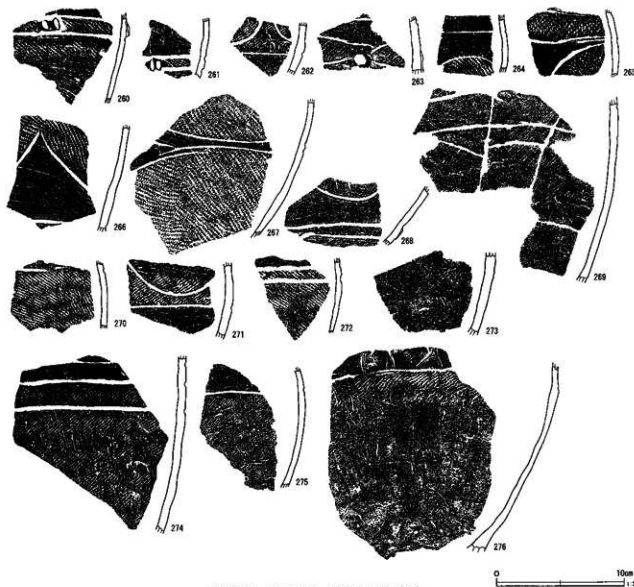
287~299はゆるやかな波状口縁で、波頂部が二叉に別れ、これを起点として左右に弧線文が巡って半円形の区画を構成する。

287~290は盲孔を中心として対向三叉文を描く魚眼三叉文で、291は盲孔が沈線による円文に置き換えられている。292・293・296~298は半円形区画接点の空隙に独立した三叉文が描かれる。294は半円形区画が省略されるもの、298はネガポジの関係に乱れが生じたものである。299もネガポジ反転し、かつ三叉文が省略される。

300~302は頸部が括れて口縁下に縄文帯をもつ土器で、口端上に対をなす小突起が配される。303・304は無文の口縁で、前者はU字形沈線を伴う突起が配される。304は胴部に入組三叉文が描かれる。

305~315は胴部破片である。三叉文は磨消モチーフの間隙を単独で埋めるもの(303・305・306等)、入組文化してそれ自体が文様主体となるもの(304・308等)が存在する。309は安行3 b式に下る可能性があり、波頭文の末端に付される棘刺状モチーフに三叉文の名残りが窺える。

316~320は安行3 b式の大波状口縁深鉢で、蛇山系の文様である。波状口縁の波頂部には形骸化した豚鼻状突起が配される。突起間を連繋していた帯縄文は上下対向する弧線文として文様の一部に取り込まれる。316・317は波頂部直下に大柄の三叉文が左右対峙する。319では対弧上の沈線間に列点文が垂下する。320は口縁に沿った弧状区画のみが残存するもので、安行3 c式の可能性がある。



第162図 E区グリッド出土土器 (19)

321~326は安行3 b 式期の水平口縁深鉢である。砲弾形の器形で胴上半部に文様帯を持つ。

321・322は姥山系文様の水平口縁深鉢で、口端上に刻みを持つ小突起を配する。322は口縁下に貫通孔を有する。

325・326は細密沈線を地文とする土器である。文様は左右対向する弧状モチーフで、上下二段に施される。

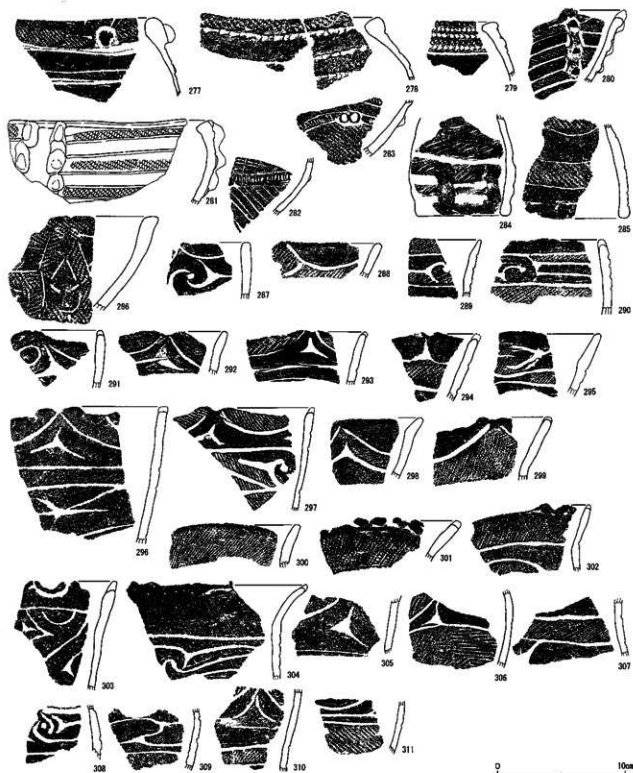
327~335は鋭利な工具の先端による刺突文を地文とする土器で、安行3 b~3 c 式期に位置付けられる。

327・328は天神原式で、楕円文を中心に三叉文が左

右対向する。329は波頂部に二叉の突起を持ち、直下に渦巻き文が描かれる。

330は波状口縁波頂部に二叉の突起を持ち、直下に背割れの楕円形貼り付け文一對を配する。突起の左右には316等に類似の弧状モチーフを描く。刺突文は弧状モチーフ内部のほか、貼り付け文上にも施される。331は同種の波状口縁の波底部であろう。335は隆帯装飾を伴う口縁で、全面に刺突文がみられる。器形等不明だが、地文の特徴から同時期に含めた。

336は水平口縁の深鉢で、口縁直下を平行沈線で区画した下に「の」の字状の磨消モチーフが描かれる。337・338は無文地に背割れの楕円形貼り付け文が施



第163図 E区グリッド出土土器 (20)

される土器である。337は内彎したのちに直立する口縁部で、広口壺的な器形をなすものとみられる。338は「く」の字に張り出す胴部最大径の部分に貼り付け文が施される。いずれも安行3b式と考えた。

339～342は胴部文様帯下端を地文縄文を伴う連続弧線文で閉塞するもので、安行3b式である。

343～347は浅鉢口縁部である。口縁直下に文様帯を持ち、下端を平行沈線によって区画する。343は波



第164図 E区グリッド出土土器 (21)

状口縁で、波頂部直下を基点に直線的な入組文を描く。344～347は平行線による弧状モチーフで、344は下弦、345・346は上弦の弧線文。347は弧線文が上下交互に配置される。安行3b式と考えたが、一部3c式に下る可能性もある。

348～372は安行3c式である。

348～350は短い口縁が「く」の字に外反する深鉢である。胴上半部に文様帯を持つ。353は屈曲部内面がT字状に強く張り出して稜をなす。文様は349が上下に入り組む弧線文、350は平行沈線による弧線文が横位に展開する。

351は軽微に外反しつつ内傾する口縁で、胴中段の張り出す広口壺型の土器とみられる。352は小型の台付鉢の脚台部で、半円形の透かし穴を持ち、下端に弧線文が巡る。356～360は円形竹管状工具による刺突文を地文とする。358は単列の刺突列を描き、それ以外は区画内部に刺突を密集させる。

361は外反する口縁部に楕円形の列点文が密集し、頸部の括れ部分に1条の沈線が巡る。362～370は単沈線による入組文や三叉文を描く土器で、365は円形刺突文、366・368は楕円形の列点文が伴っている。371・372は文様帯下端の区画帯で、平行沈線間に複列の列点文が巡り、下に弧線文が巡る。

373～391は晩期前葉の台付鉢である。文様を知りうるものは大半が安行3aに位置付けられる。体部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる浅鉢形で、頸部に括れを持って「く」の字に外反する。口縁部と胴上半部に文様帯を持ち、胴下半部は縄文帯となる。

口縁部の文様帯は、下弦の弧線文が巡るもの(374・375・377)、弧線文でネガポジ反転するもの(378)、弧線文の間に三叉文が描かれるもの(380)、縄文のみ施文されるもの(376・381)などのバリエーションが存在する。

胴上半部に多く入組文が描かれるが、376は空隙に三叉文が描かれ、375は入組文の描線の一部として三叉文が取り込まれる。381は平行沈線による弧状モチーフが巡り、隙間に三叉文が配される。

379は頸部の括れが強く、口縁部に三叉文が描かれるもので、注口土器の口縁部である可能性もある。382・383は括れをもたず単調に内彎して立ち上がる器形で、口縁部～胴上半部の文様帯と胴下半部の縄文帯が1条の沈線で区画される。文様は弧線文が巡り、383は扁平な豚鼻突起が重畳する。安行3b式であろう。

384～391は脚台部およびその接続部である。無文のものについては時期が下る可能性がある。

385は接続部直上の破片で、胴下半部の縄文帯と胴上半部の入組文の一部が観察される。386・387は接続部を平行沈線で区画し、内部に横位の列点文が巡る。384は脚台部にたすき状の平行沈線が描かれる。

388はごく短い高台風の脚台で、全面に縄文が施文されて、下端に1条の沈線が巡る。体部との境は輪積み部分で剥離しており、破断面にひだ状の圧着層が観察される。389～391は無文の接続部である。

382～404は胴中段がソロバン玉状に張り出す鉢で、やはり大半が安行3a式に位置付けられる。口縁は内傾するものと軽微に外反するものが存在する。底部破片は存在しないが、周縁に段を持った丸底か、ごく径の小さい平底となる可能性が高い。

胴上半部に扁平な豚鼻突起が配され、これを起点として三叉文や入組文が描かれる。胴中段には押圧を伴う連鎖状の隆帯が巡って文様帯を上下に分離する。胴下半部には平行沈線の弧状モチーフが巡るものが多く、下端を沈線で区画して以下縄文帯となる。

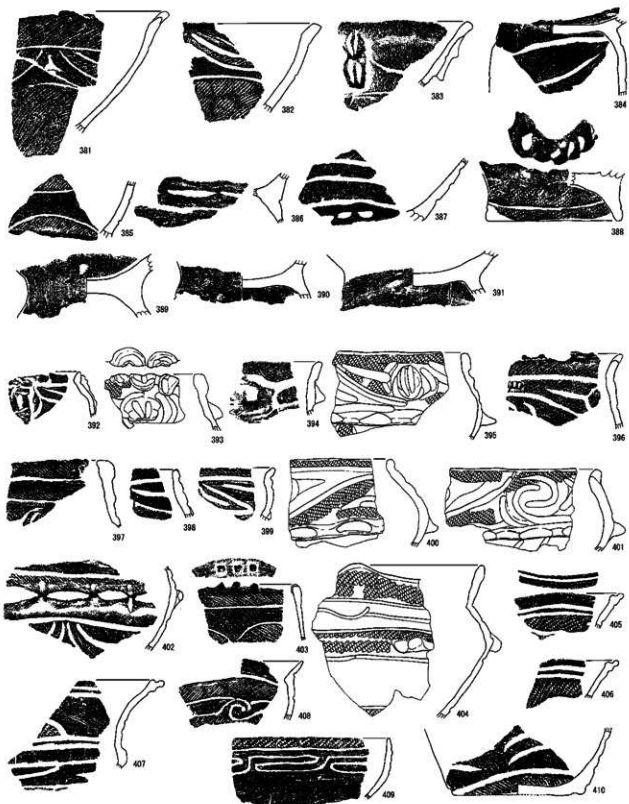
404は例外的に波状口縁を呈し、頸部が「く」の字に屈曲する。胴中段には幅広い縄文帯が巡り、壺型土器にみられる椋長の突起が配される。胴上半部には形骸化した入組文が描かれ、胴下半部は幅広い無文帯を持って、底部付近は縄文帯となる。安行3b式であろう。

405～421はその他の浅鉢型土器を一括した。非常にバリエーションに富んでおり、いずれも晩期前葉に位置づけられる。



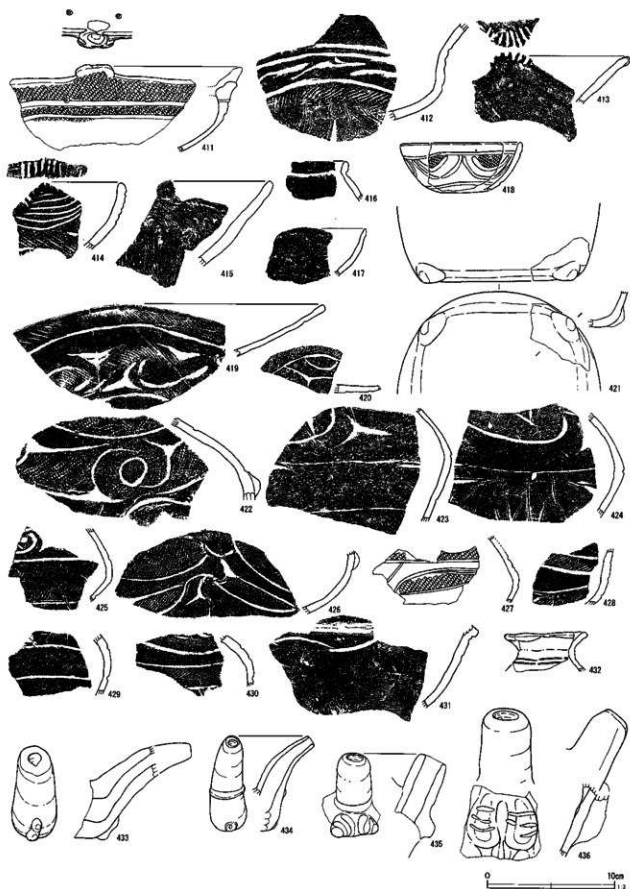
第165図 E区グリッド出土土器 (22)





第166図 E区グリッド出土土器 (23)





第167図 E区グリッド出土土器 (24)

405・406・407・411・412は胴部に屈曲を持って頸部外反する丸底の浅鉢である。口唇は肥厚して、外面および口端上に沈線が巡る。405・407は頸部に文様帯を持ち、半円形の磨消モチーフが上下対向する。412は胴上半部に圧縮された文様帯を持って扁平な三叉文を配する。411は口縁突起の左右に一对の貫通孔を配し、口縁下から頸部にかけて帯縄文を巡らせる。安行3 a式であろう。

408は内彎する胴部に短く外反する口縁部が付されるもので、胴部には入組文が描かれる。409は単調に内彎して口縁直立する浅鉢で、口縁直下に縄文帯を持って、胴上半部に扁平な波頭文を巡らせる。安行3 b式である。

410は底部の破片で、胴部に弧状モチーフを巡らせて底部直上を縄文帯とし、底面にも1条の沈線を巡らせる。安行3 b式か。418はこれに類似の文様構成をもつ小型の浅鉢である。

413・414は5単位の波状口縁を持つ楕円形の浅鉢とみられる。413は波頂部に刻みを持つ半円形の突起を配し、胴部は無文。414は刻みを持つ山形波状口縁で、前面に重層文を描き、胴部に磨消文様が描かれる。晩期前葉に位置付けられる。

415~417は無文の浅鉢で、415は水平口縁上に小突起を配し、416は内彎して直立する折り返し口縁である。晩期前葉と考えられる。

419は外面に入組文+三叉文が描かれる土器で、浅鉢ないし台付鉢であろう。420は皿とも考えられ、底面を1条の沈線が巡って内部に弧線文や三叉文が描かれている。安行3 a式である。

421は後期前葉の円口方底土器で、四隅に突起を配する。

422~432は安行3 a式の壺型土器である。文様は入組文と三叉文が複合するもので、胴上半部に文様

帯を持って胴下半部は帛縄文化するもの(423~425等)と、上下に文様帯を重畳するもの(426~428)が存在する。422は口文を中心に三叉文が対向する玉抱き三叉文である。425は円形刺突を中心に入組三叉文を描く。422・426・431の胴部中段には舌状の突起が配される。432は口縁部で、頸部直下に平行沈線が巡る。

433~457は注口土器である。

442までは注口部で、うち433~436は下面に貼り輪を伴う。胴部文様不明だが、後期末葉~晩期前葉に位置付けられる。440は胴部に磨消文様が展開する晩期前葉の土器である。

443~448は口縁部および胴部で、443~445が安行2式、446~448は安行3 a式ないし3 b式である。

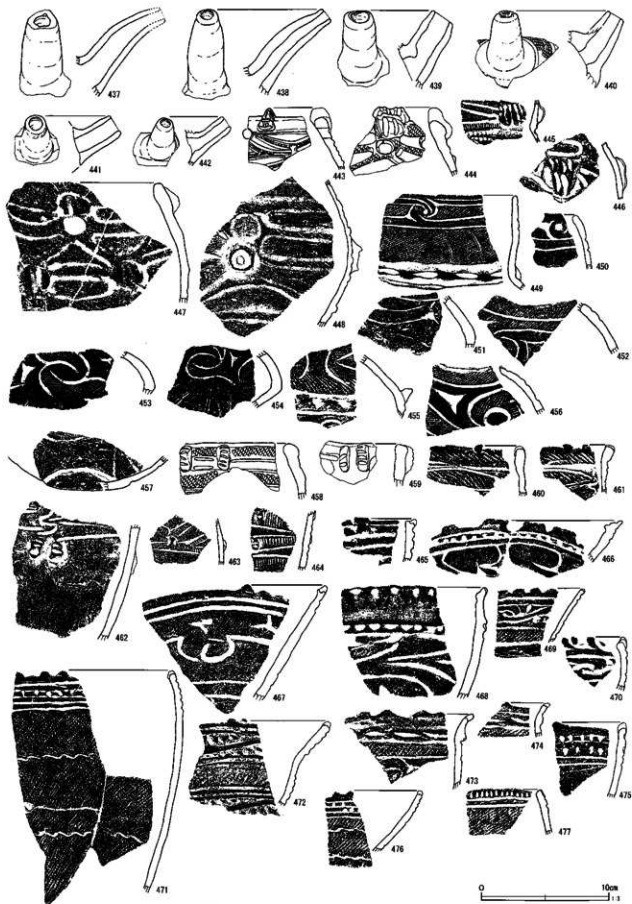
449以下は磨消文様を描く安行3 a式の注口土器である。449・450は軽微に内彎しつつ直立する口縁で、口縁直下に対向三叉文を配する。449は頸部と胴部の境に連鎖状の隆帯を巡らせる。

451~456はソロバン球状に張り出す胴部で、入組文および三叉文が描かれる。457は丸底の底部~胴下半部で、1条の沈線が巡る。

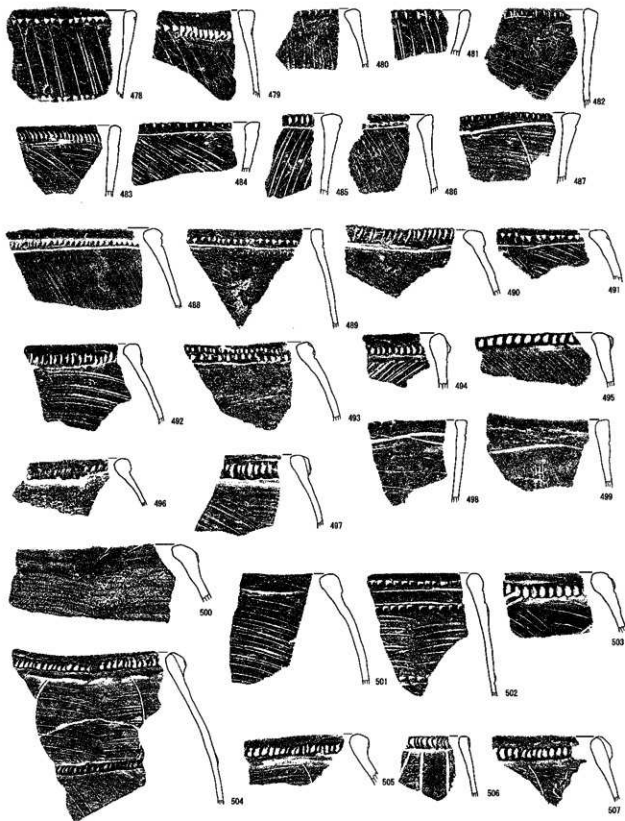
458~464は後期末葉の瘤付土器およびその影響下にある土器である。465~477は亀ヶ岡系の土器で、大洞BC式期を中心にその前後の時期が存在する。

478~547は紐線文土器である。集合沈線文を地文として、口縁および胴部中段に刺突列や隆帯による区画を持つ。

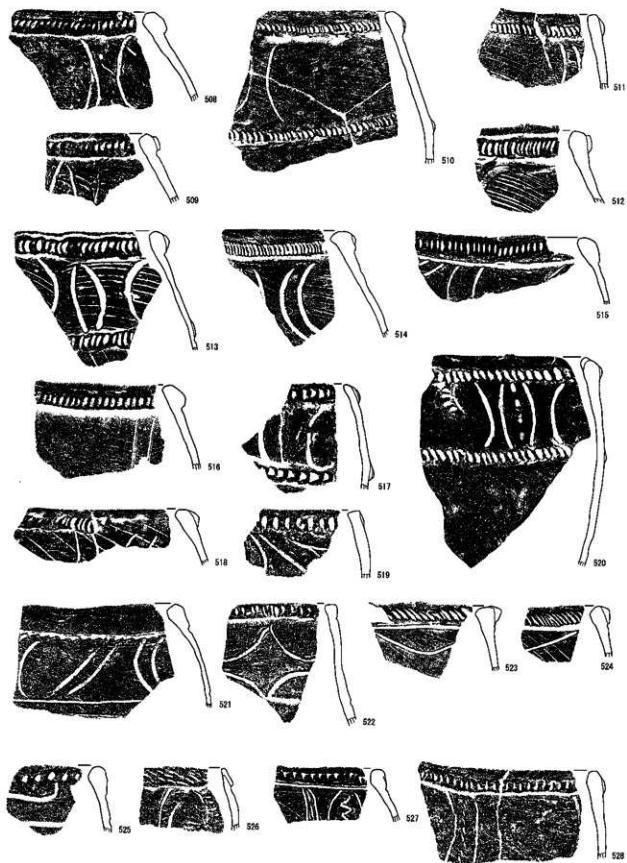
478~487は口縁直立か、やや外反する。口縁肥厚するが隆帯の貼り付けを伴わない。斜位の列点ないし篋状工具による刻みを巡らせて区画とし、483以下はこれに沿って1条の沈線が巡る。後期安行式に伴うものであろう。



第168図 E区グリッド出土土器 (25)



第169図 E区グリッド出土土器 (26)



第170図 E区グリッド出土土器 (27)



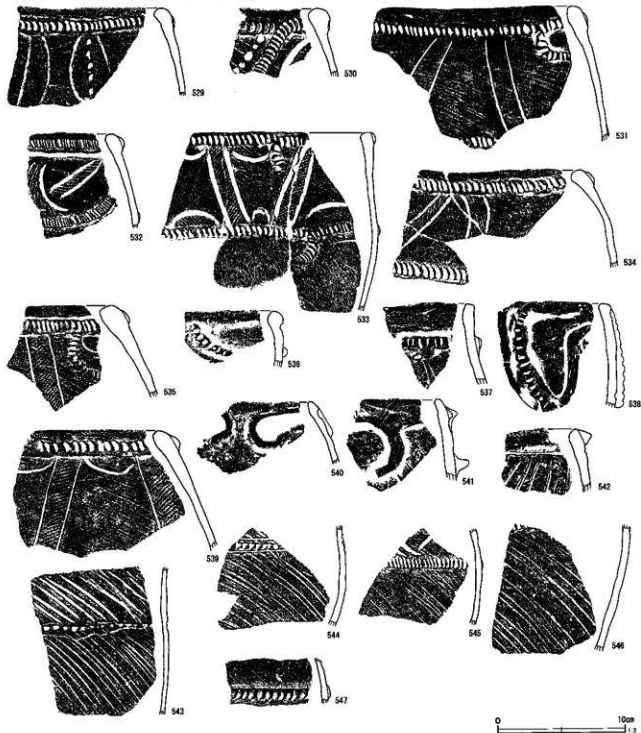
488~497は口縁肥厚して強く内彎する。区画には、刺突+沈線(488~493)、刻みや押圧を伴う隆帯(494~497)が存在する。493は刺突が複列になっている。492は折り返し口縁の段の部分に刻みが巡る。後期末~晩期前葉に伴うものであろう。

498~501は刺突や刻みを伴わない口縁である。498・499は直立に近い口縁で、1条の沈線が巡る。後

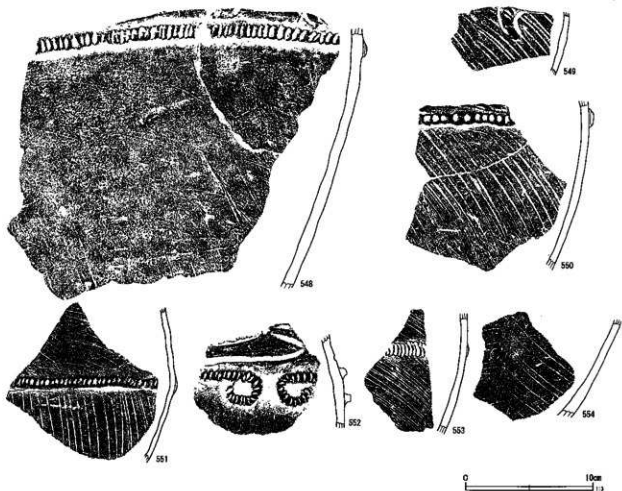
期安行式に伴うものか。501は折り返し口縁で、後期末~晩期前葉のものであろう。

502は口縁下に間隔をあげた二段の刺突および沈線を巡らせて区画を構成している。後期の土器で、瓢形となる可能性がある。

503~532・539は胴上半部に文様帯を持つ。大半が晩期前葉に属するものであろう。



第171図 E区グリッド出土土器(26)



第172図 E区グリッド出土土器 (29)

503～519・521～525は沈線文が描かれる。文様は外反する対弧モチーフがもっとも多く、514は平行沈線で描かれる。515・519・521は平行沈線による縦位の弧線文と「ノ」の字状モチーフの組み合わせであり、519では間隙に横位の弧線文が介在する。

522～524は横位の弧線文が上下対向する。525は斜行沈線の末端が切れ上がるステッキ状のモチーフがみられる。いずれも精製土器の文様との類似から安行3b式と考えられる。口縁直下の区画は刻みないしひだ状の連続押圧を伴う隆帯が主体であるが、521は折り返し口縁の段の内部に連続刺突が巡る。

520・526～530は沈線文と列点文が併用される。安行3b式期のものとみられ、文様構成的には平行沈線間に縦位の列点文が充填される例がほとんどである。527は沈線による紡錘形の区画内に蛇行沈線が描かれ、蛇山文様からの影響が窺われる。

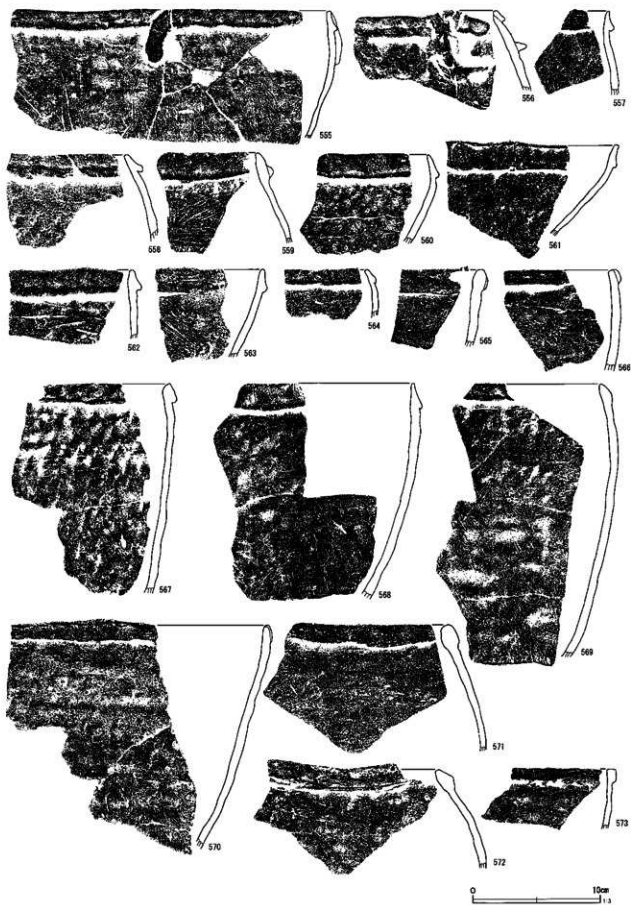
区画は刺突+沈線のもと、刻みやひだ状の連続押圧を伴う隆帯のものが存在する。520は口縁の隆帯が鈎状に垂下している。

526は沈線に直交する横位の列点文である。口唇が肥厚しない扁平な折り返し口縁で、篋状工具による斜位の刺突が複列で巡る等、むしろ後段で触れる無文の粗製土器群に類似する。

531～535・539は平行沈線間に磨消縄文がみられる安行3b式期の土器群である。モチーフ的には沈線のみ土器と共通するが、これに横位の弧状モチーフを組み合わせてより複雑な文様を描いている。533は小振りの半円文を中心に左右に斜めの帯縄文が配され、波状口縁深鉢の文様構成が意識されているようだ。

区画はすべて刻みないしひだ状の連続押圧を伴う隆帯で、鈎状のモチーフがひんぱんに使用される。



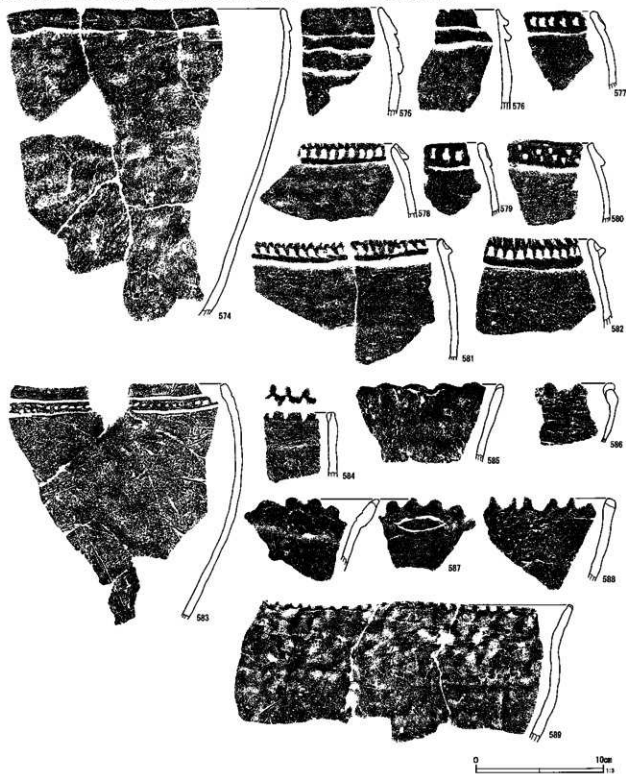


第173図 E区グリッド出土土器 (30)

543～554は同種の胴部破片である。胴部中段に刺突+沈線ないし刻みつき隆帯の区画が巡る。地文の集合沈線文は、区画の上下にわたり連続して施文されるものと、上下で施文方向を変えるものが存在し、後者は胴上半部の文様帯を意識したもので、より新

しい要素といえる。

545は区画から上に沈線文が描かれる。549は区画の一部が鉤状モチーフとして垂下する。552は区画の一部が切れて、末端が左右対称に反転する眼鏡状のモチーフを構成する。



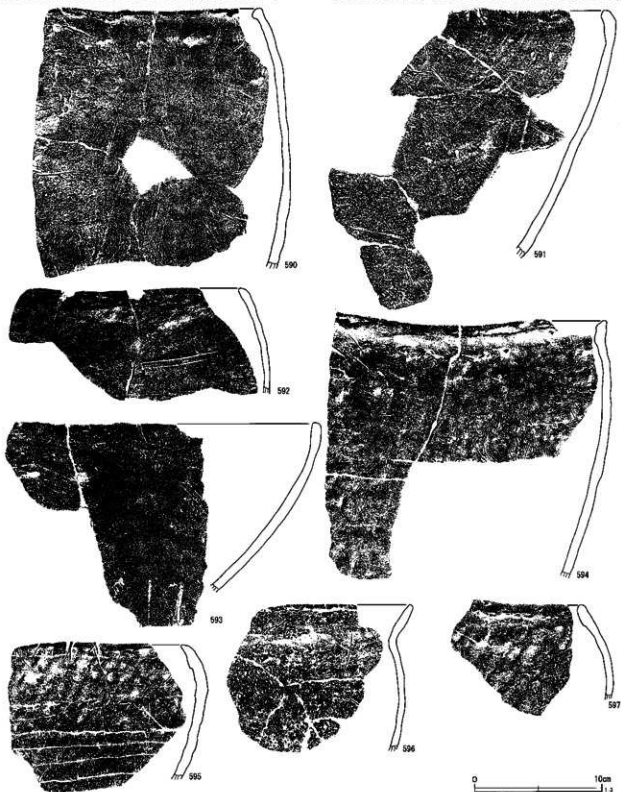
第174図 E区グリッド出土土器(31)

555～631は第152～155図と同様の無文土器で、晩期前葉の粗製土器である。

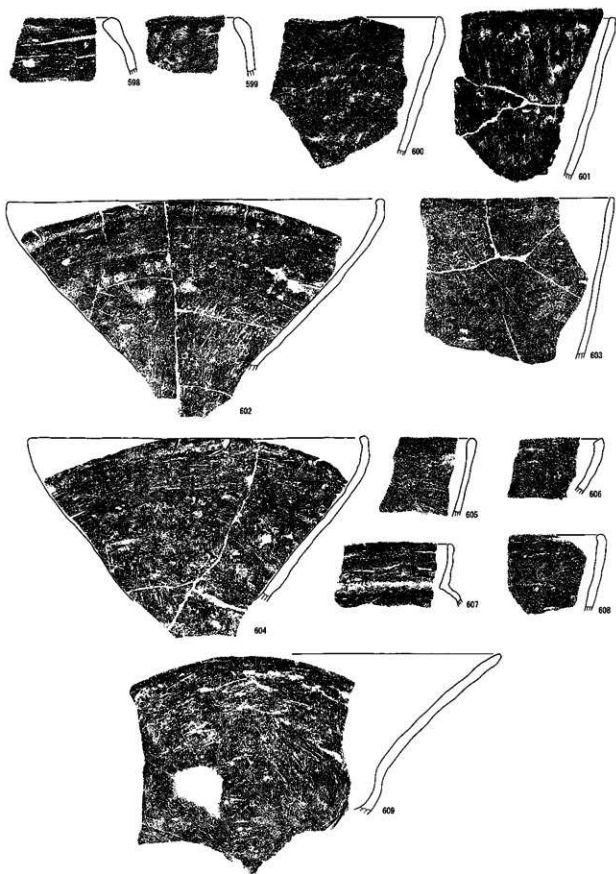
深鉢は内彎しつつゆるやかに立ち上がる単純な器形であり、外面に篋状工具による調整痕を残している。

口縁部の造作や器面調整にいくつかのタイプが存在する。

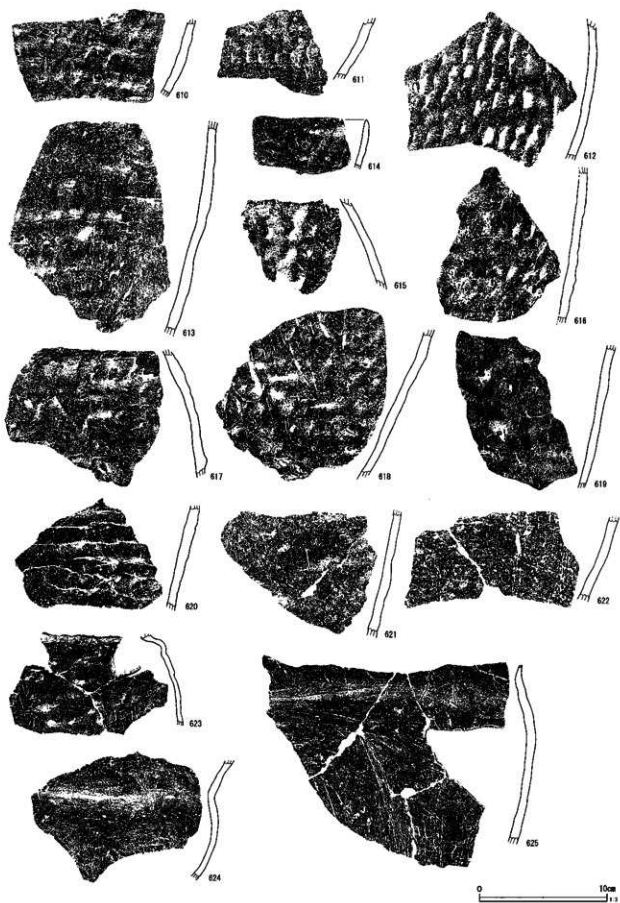
555～564・568・574は折り返し口縁で口唇が肥厚せず先細りとなる。折り返しの段部分は指頭によるな



第175図 E区グリッド出土土器 (32)



第176図 E区グリッド出土土器 (33)



第177図 E区グリッド出土土器 (34)

ぞりが加えられて下端が外へと反り返る。555・556は段の一部が分離して、胴部に鈎状に垂下する。

器面調整は篋状工具による粗雑な無で調整がみられるほか、555・560等は同種の工具によるひだ状の圧着痕がみられ、560は外面に輪横み痕を残している。

565～567・569～573は折り返し口縁で口料が肥厚する。断面形には単純に肥厚して頂部平坦になるもの(565～567・570・573)、いちじろしく肥厚して丸頭になるもの(571)、先細りで内外に稜を形成するもの(572)等が存在する。器面にはやはり篋状工具による撫で調整やひだ状の圧着痕がみられ、部分的に輪横み痕を残すのも同様である。

575・576は多段の折り返し口縁で、いずれも断面先細りで段の部分が反り返る。

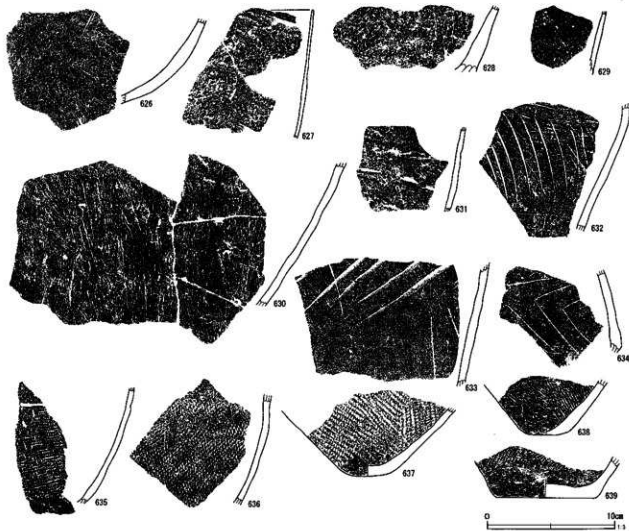
577～582は折り返し口縁で、段上に篋状工具先端による斜位の刺突列が巡る。578・581・582は口縁上に同一工具の刻みが巡る。580は幅の狭い施文具による交互刺突である。

583は口縁直下に平行沈線が巡り、間隙に列点文が施される。口唇断面角頭棒状でわずかに肥厚し、内面に稜を形成する。

584～589は口唇上に刻みや小突起を持つ。

584は内外面から交互の刻みが施される。587は波状口縁の波頂部とみられ、内面にレンズ上の沈線文が描かれる。589は唯一器形を知りうる資料で、頸部に括れを持ち、胴上半部が張り出す。器面にはひだ状の圧着痕がみられる。

590～609は口縁装飾を持たない一群で、深鉢以外



第178図 E区グリッド出土土器(35)

に浅鉢も存在する。器面調整は篋状工具による粗い撫で調整で、しばしばひだ状の圧着痕が残る。輪積み痕を残す破片も多く、595では特に明瞭にみられる。

口唇断面は軽微に肥厚して内面に稜を形成するものがやや目立つ。深鉢の器形は内彎しつつ単調に開くものが大半だが、594は極端に内彎して口縁が直立する。596は頸部に括れをもって、口縁「く」の字に外反する。607は薄手の器壁で、口縁直立する広口壺型の器形である。

602・604は浅鉢である。胴部は直線的に開いて、口縁内屈する。593も浅鉢の可能性もある。609はやや特異な器形の浅鉢で、台付鉢の可能性もある。胴下半部が丸く張り出し、中段に括れを持って、胴上半部から口縁にかけてゆるやかに外反する。

610～631は胴部破片である。器面調整は篋状工具による粗い撫で調整で、胴下半部では縦位方向だが、胴上半部から口縁付近では横位方向となることが多い。土器成型時の粘土紐圧着痕がひだ状の痕跡となって残る例が多い。620は輪積み痕を残す。

623～625は頸部ないし胴上半部に括れを持つ。623は器壁が薄く、胴部が極端に内彎しており、607の口縁と同一個体の可能性もある。

626は浅鉢・台付鉢などの器形となる可能性が高い。627は極端に薄手の器壁で、いわゆる製塩土器であろう。

632～634は胴部中段に斜行ないし矢羽状の沈線が巡るもので、加曾利B3式～高井東式の深鉢とみられる。

635～639は縄文のみ施文される胴下半部および底部である。635は1条の沈線が巡るが、区画から上にも縄文が施文される。636は緻密な縄文が横位回転で施文されており、亀ヶ岡系の個体である可能性もある。

640～647は斜位の集合沈線を地文とする底部で、紐縄文土器ないし精製深鉢の胴下半部であろう。642・646・648は底面に網代圧痕がみられる。

648～679は無文の底部を一括した。底部の直上が括れて裾が張り出すもの(650・653・655～658他)が目立つほかは器形の上での特徴に乏しい。器面には粗い撫で調整が施され、648～650等には指頭ないし篋状工具先端による圧着痕が残される。

650・653・655～660・670・671・676・679は底面に網代圧痕がみられる。654の底面には3条の棒状のものゝの圧痕が観察される。わずかに角度を違えた重複がみられることから、敷物ないし作業台の痕跡である可能性がある。

## 土製品

### 土偶(第182図1～第183図9)

1は土偶と土版の中間的な形態である。扁平で背面へと反っており、後頭部に凹みを持つ。

T字状の隆帯で眉から鼻を造出するが、眼の表現はみられない。眉の左右の突起は矮小な腕の表現とみられる。鼻には鼻彫の表現も残されている。全体に赤彩痕を残す。

現存する最大高3.9cm、最大幅7.2cm、厚さ2.8cmを測る。上下2つの粘土塊から成形されていたものとみられ、その接合部から剥離している。

2はミズク土偶の頭頂部で、頭部との接合部で剥離している。

中央に円錐状の突起と、これをはさんで一対の楕円形の突起が配され、全体を花卉状の突起が囲繞している。

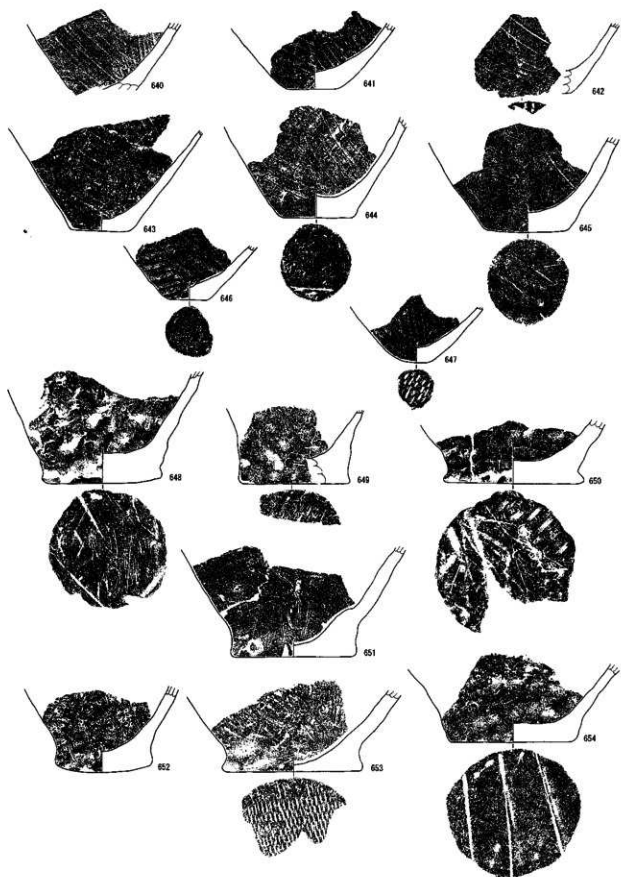
現存する最大高1.4cm、最大幅4.1cm、厚さ3.1cmを測る。緻密な胎土で焼成は良好、一部に赤彩痕を残している。後期末葉のものと考えられる。

3はミズク土偶で、頭部のみ欠損する。

肩は幅広で、先端に矮小な腕が付きされる。肩から続く隆帯の先端に乳房が表現され、中間に独立して臍を表現したとみられる突起が存在する。

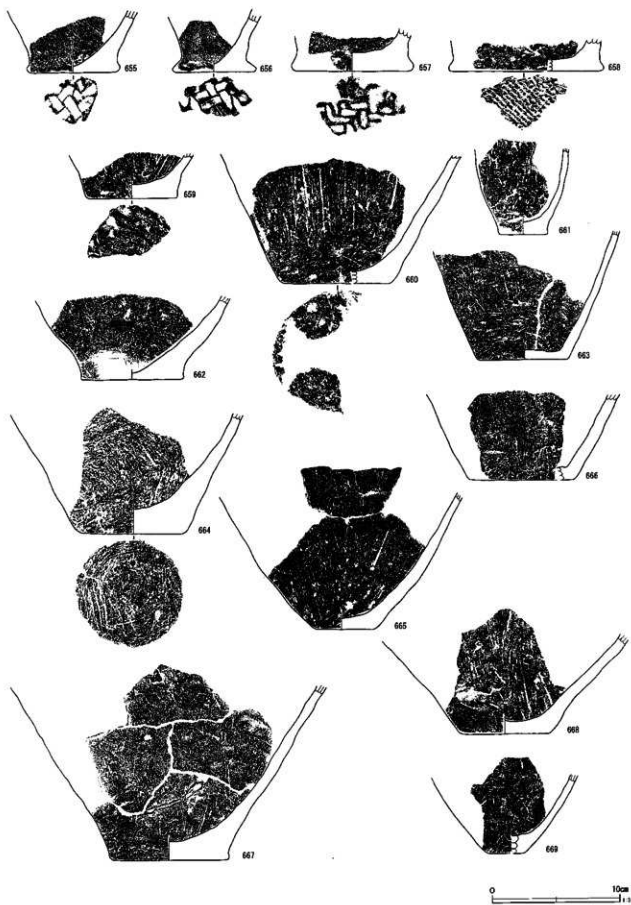
現存する最大高10cm、最大幅10.4cm、胴厚2.4cm、最大厚3.4cmを測る。R1単節の縄文を地文とし、各所に赤彩の痕跡を残す。安行3a式期のものと思われる。

4はミズク型中空土偶で、胴下半部の背面のみ

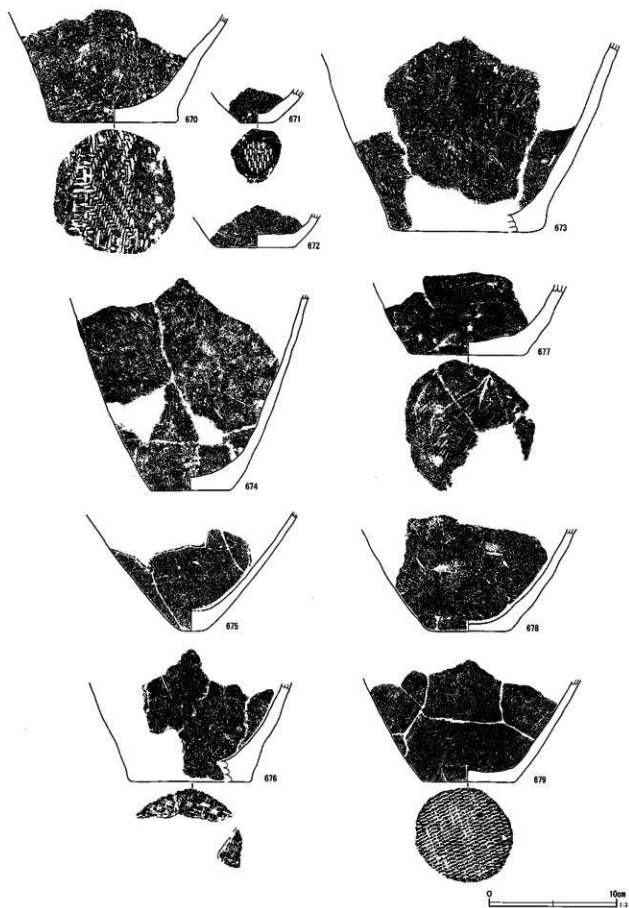


第179図 E区グリッド出土土器 (36)





第180図 E区グリッド出土土器 (37)



第181図 E区グリッド出土土器 (38)

残存する。

中央に貫通孔を持ち、これを取り巻くように円文と三叉文が描かれる。地文はRL単節の縄文である。

現存する最大高6.7cm、最大幅6.7cmを測る。完存すれば30cm近い大型の土偶となったと考えられる。

暗褐色を呈し、胎土は砂質だが焼成は良好である。内面に輪積み痕を残し、上端部は輪積の接着面から剥離している。安行3 a 式期のものと思われる。

5はミミズク土偶の左腕である。

肩から腕にかけてゆるやかなカーブを描いており、側縁に刻みを伴う。前面には腕のカーブに沿って刻みを伴う隆帯が貼り付けられ、胸部へと続いている。肩部背面には水平方向の隆帯がみられる。

現存する最大高3.8cm、最大幅1.9cm、厚さ1.9cmを測る。黒褐色を呈し、焼成は良好。全体に赤彩痕が残る。安行3 a 式期のものと考えられる。

6は右腕部である。胴部との接合面で剥離している。鋭利な断面角状の工具による刺突文が施文される。

7は左腕部であるが、先端部を欠損している。

胴部との接合部分で剥離しており、破断面の観察から、粘土板を丸めるようにして成型していることがわかった。

表裏に鋭利な断面角状の工具による刺突列が施文される。

現存する最大高5.4cm、最大幅4cm、厚さ2.8cmを測る。焼成は良好である。曾谷式期のものと考えられる。

8は遮光器系土偶の右脚部である。中空で、内面に輪積み痕を残す。

大腿部の表裏に入組文を描き、LR単節の縄文を施文する。爪先に短沈線による足指の表現を持つ。

現存する最大高9.7cm、最大幅5.5cm、厚さ4.2cmを測る。安行3 b 式期のものと思われる。

9は右脚部である。無文で、表面に成形時の指頭痕を残す。

現存する最大高4.6cm、最大幅1.8cm、厚さ2.2cmを測

る。後期のものと考えられる。

岩版 (第183図10)

1点のみ出土している。

楕円形の岩版であったとみられるが、左下側縁部のみが残存する。前面に単沈線の巴文が描かれ、背面上にも沈線文がみられる。

現存する最大高8.7cm、最大幅6.6cm、厚さ2.7cmを測る。石材は白色の凝灰岩を使用する。

耳飾 (第184図1~186図56)

56点が出土し、すべてを掲載した。

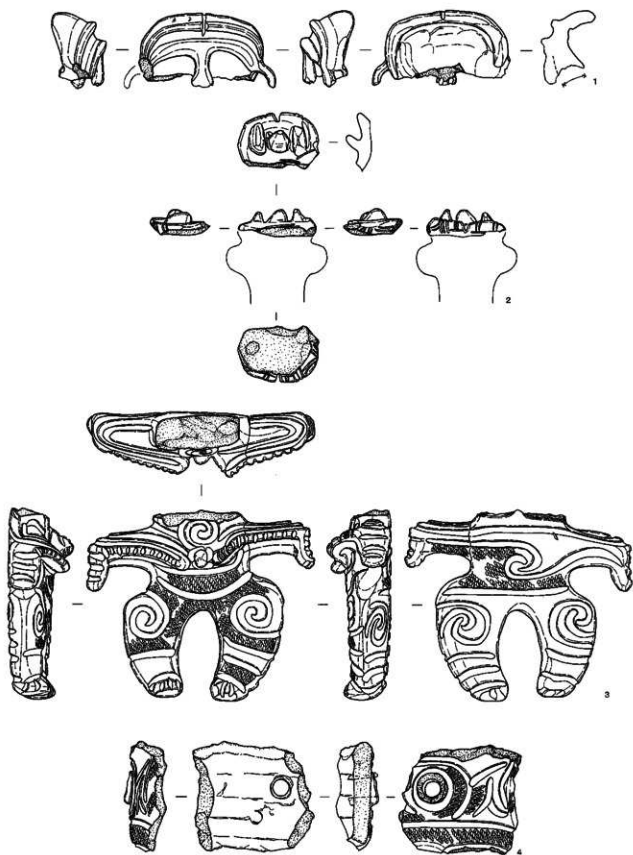
サイズや断面形・施文により様々なタイプが存在するが、まず文様の有無で二分した。

1~31は無文の個体である。

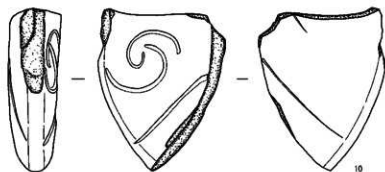
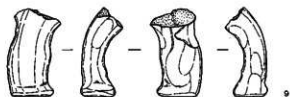
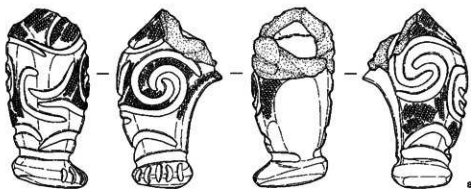
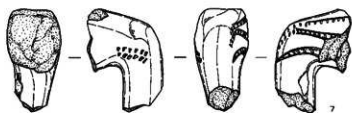
1・2は小型円柱状で、貫通孔を持たないタイプである。1は上面のみごく軽微な凹みを持ち、側縁に抉りを持つ。最大径2.2cm、高さ1.8cmを測る。重量9.2gを量る。2は上下面に凹みを持ち、側縁の上下が軽微に張り出す白型に近いプロポーシオンである。最大径2.4cm、高さ2.3cmを測る。重量13.7gを量る。

3・4は小型円柱状で貫通孔を持つタイプである。いずれも断面三角形を呈する。最大径1.7cm、高さ1.4cmを測る。重量2.8gを量る。3は側縁の抉れをまったく持たないタイプで、4は上下が張り出す臼状に近いタイプである。最大径2.4cm、高さ1.9cmを測る。重量6.6gを量る。

5~9は中型で貫通孔を持たず、器高より直径が卓越する円盤状のタイプである。5は上下面が平坦で、側縁に深い抉りを持つ。最大径2.9cm、高さ1.5cmを測る。重量11.2gを量る。6~9は上下面が凹み、側縁に軽微な抉りを持つ。6は上面の凹みを加工した時のものと思しき工具痕が観察される。最大径3.0cm、高さ1.1cmを測る。重量10.9gを量る。7は上面の縁辺を一部欠失する。最大径3.1cm、高さ1.7cmを測る。重量18.0gを量る。8・9は中実の耳飾としては比較的大型の個体である。8は最大径4.4cm、高さ2.4cmを測る。重量52.1gを量る。9は最大径4.8cm、



第182図 E区グリッド出土土偶 (1)



第183図 E区グリッド出土土偶(2)

高さ2.2cmを測る。重量61.5gを量る。

10は上下に深い凹みを持ち、側縁が抉れる臼状の耳飾であったとみられるが、乾燥前に加えられた圧力により全体がいちじるしく歪んでいる。

上面に凹み成形時の指頭圧痕を残していることから、製作の過程でラインから外された「B級品」が何らかの理由で焼成にまわされたものと考えられる。最大径3.7cm、高さ2.1cmを測る。重量17.9gを量る。

11～19は中型で中央に貫通孔を持つ滑車状の耳飾である。

11～14は断面内側の張り出さない扁平な造りである。

11は全周の四分の一程度が残存する。外面はほぼ平出で、内面のみ上下端が打ち削ぎ状を呈する。最大径3.2cm、高さ1.5cmを測る（以下、破損品の最大径はすべて推定値）。

12はやや厚手の器壁で、上下端が「く」の字に外屈する。最大径3.9cm、高さ2.1cmを測る。重量23.2gを量る。

13・14はいずれも全周の四分の一程度が残存する。扁平な造りで、断面軽微に外反するが、上端がより強い屈曲を示す。現存部分の法量は、13が最大径6.1cm、高さ2.2cmを測る。14は最大径6.4cm、高さ2.1cmを測る。

15・16は内面上段が内側へと折り返し、断面「r」字状を呈する。15は先形品で最大径4.5cm、高さ1.6cmを測る。重量20.2gを量る。16は全周の四分の一程度が残存する。内面の張出部分は扁平で先端部分が欠失しており、貫通孔を持たない可能性もある。最大径3.5cm、高さ1.6cmを測る。

17～19は断面中段が内側へと突出するタイプである。17は側縁寸胴で抉りをほとんど持たない。内面は緩やかに張り出して稜を形成しない。最大径3.0cm、高さ1.8cmを測る。重量11.3gを量る。18は内面が断面三角形に張り出して稜を形成する。最大径3.5cm、高さ1.4cmを測る。重量12.4gを量る。19は薄身に側縁に

深い抉りを持ち、断面上端が肥厚して外屈する。最大径3.3cm、高さ1.7cmを測る。重量5.6gを量る。

20～31は大型滑車状の耳飾である。20～30は断面「r」字状のタイプである。20は全周の四分の一程度が残存する。内面の折り返しが貧弱で、断面下端部分が打ち削ぎ状になる。最大径6.9cm、高さ2.0cmを測る。21は全周の五分の一程度が残存する。折り返し部分は肥厚して、上端に平坦部を有する。最大径7.5cm、高さ1.9cmを測る。

22は全周の四分の一弱が残存する。折り返し部分がいちじるしく肥厚して丸みを持ち、下端部は扁平でゆるやかに内彎する。最大径8.2cm、高さ2.1cmを測る。23はこれに類似するが、側縁の抉りが弱く、上端のみ軽微に外反する。全周の五分の一程度が残存し、最大径7.8cm、高さ2.0cmを測る。

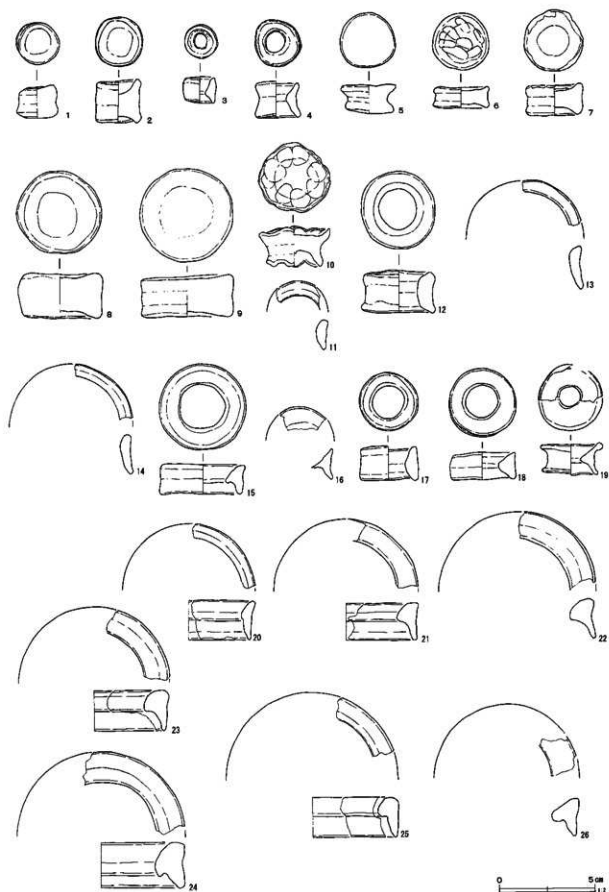
24～28は折り返し部の先端が下垂して、貫通孔周縁に凹線を形成する。

24は折り返し部が肥大して全体の三分の二を占める。下半部も肉厚で、直線的に外反している。全周の四分の一強が残存し、最大径8.7cm、高さ2.3cmを測る。25は全周の七分の一程度が残存する。折り返し部がコンパクトで、下半部は先細りしつつ直行する。最大径8.9cm、高さ2.1cmを測る。26は全周の八分の一弱が残存する。折り返し部の上面が打ち削ぎ状となり平坦部を形成する。最大径7.5cm、高さ2.0cmを測る。

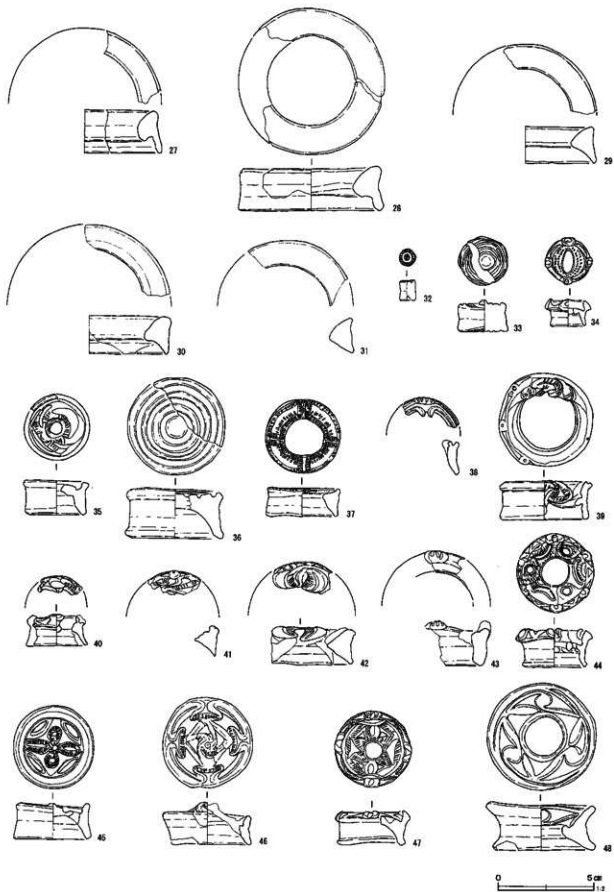
27は全周の六分の一強が残存する。折り返し部に比較して下半部は扁平で、軽微に内彎する。最大径7.9cm、高さ2.2cmを測る。28は全周の四分の三弱が残存する。断面下端部が肥厚して直線的に外反する。最大径7.6cm、高さ2.3cmを測る。

29～31は断面三角形を呈するタイプである。

29は全体の四分の一強が残存する。内面突出部から下が軽微に内彎し、r字形タイプとの中間形態を示している。最大径7.4cm、高さ1.9cmを測る。30もこれに類似の断面形状で、全体の四分の一弱が残存し、最大径8.4cm、高さ2.0cmを測る。31は断面三角形で、

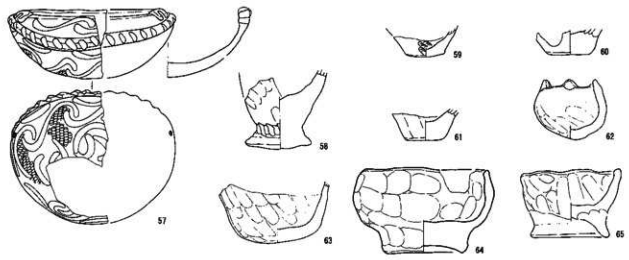
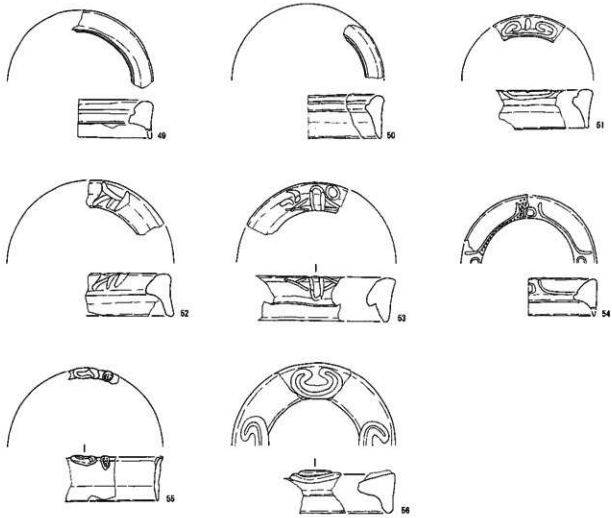


第184図 E区グリッド出土土製品 (1)

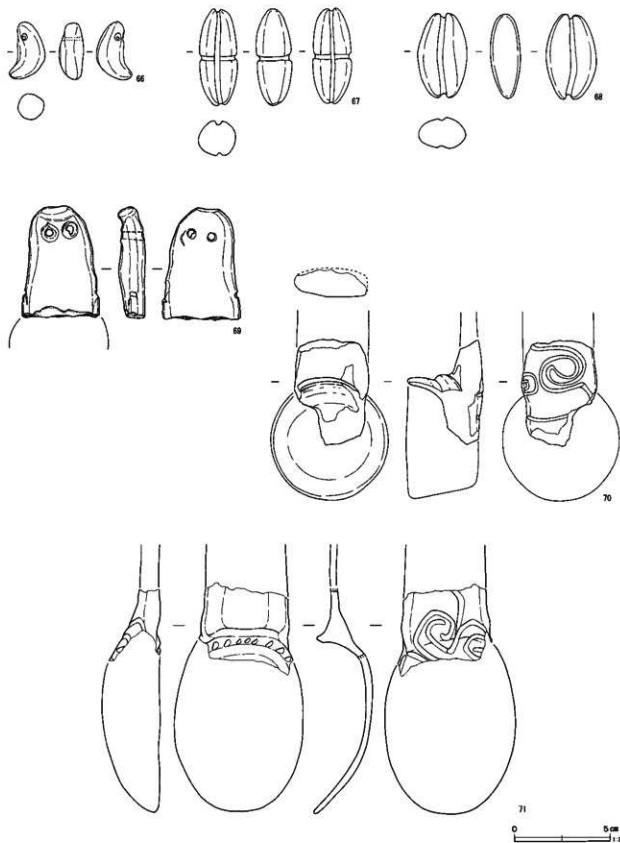


第185図 E区グリッド出土土製品(2)





第186図 E区グリッド出土土製品 (3)



第187図 E区グリッド出土土製品(4)

上端および下端が軽微に外屈する。最大径7.0cm、高さ1.8cmを測る。

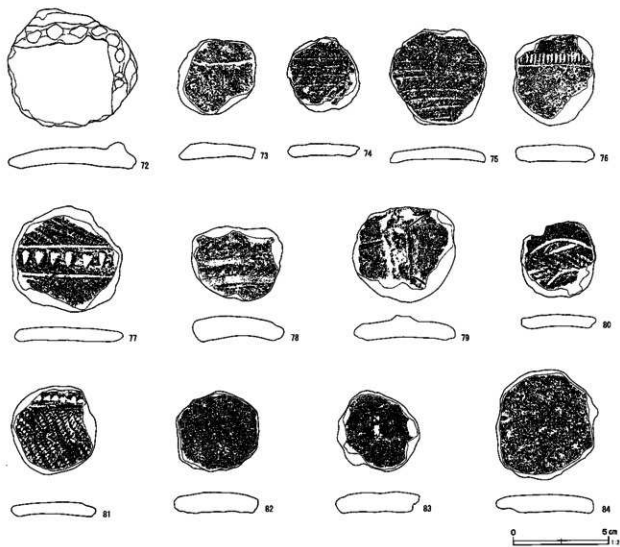
32～56は有文の耳飾である。

32は直径より器高が卓越する小形円柱状のタイプである。上面には沈線による円文が描かれ、鋭利な工具による刻みが施される。裏面には掘り鉢状の凹みを持つ。最大径0.9cm、高さ1.1cmを測る。重量は1.0gを量る。

33は中型・臼状で中実のタイプである。上面は円形の貼り瘤を中心に同心円文が描かれ、底面はやや上げ底で、やはり同心円文が描かれる。最大径2.6cm、高さ1.7cmを測る。重量は9.9gを量る。

34・36・44～48は中型・臼状で中空となり、上面に透かし文様が描かれるタイプである。地文として鋭利な工具による細密な刺突や刻みが特徴的に用いられ、土器に共通の文様要素として三叉文や入組文・波頭文が頻繁に用いられる。

34はレンズ状のスリットの左右に刺突列が配され、外面に4単位の小突起を持つ。最大径2.4cm、高さ1.4cmを測る。重量は3.7gを量る。35は円孔を中心に三日月状のスリットを配する。最大径3.4cm、高さ1.8cmを測る。重量は9.5gを量る。44は中央に大型の円孔を配し、周囲に小型の円孔と三日月状のスリットを交互に配する。周縁には4単位の小突起を配し、



第188図 E区グリッド出土土製品(5)

三角形の陰刻文が巡る。全体の二分の一強が残存し、最大径4.0cm、高さ2.1cmを測る。

45は中央に円形とレンズ状の隆帯文様が対向して配され、四方にレンズ状のスリットが配される。最大径4.1cm、高さ1.9cmを測る。重量は23.1gを量る。46は四方から伸びる扇状の突起が方形の枠を支持し、中央に巴状の隆帯モチーフが配される。透かし彫り部分の一部が欠失する。最大径4.6センチ、高さ2.3cmを測る。重量は18.5gを量る。47は円孔を中心にレンズ状のスリットと三叉文が対峙し、間隙に三叉状のスリットが配される。外延は4単位の小突起が配される。最大径4.0cm、高さ1.7cmを測る。重量は15.2gを量る。

48は大型の円孔の周囲に内影による入組文が3単位配される。最大径5.6cm、高さ2.6cmを測る。重量は36.5gを量る。

36は上面に同心円文を描くものである。33との関連から中央に貼り瘤を持つものと考えたが、円孔となる可能性もある。全体の三分の一強が残存し、最大径5.0cm、高さ2.6cmを測る。

37～43・49～56は中央に貫通孔を持つ滑車形の有文耳飾である。37～43の中型品は白状タイプの透かし文様に通じる立体モチーフが特徴的にみられるが、49以降の大型品は沈線や部分的な隆帯による簡素な施文が目立つ。

37は刻みをもつ縦瘤が二個一対で4単位配される。最大径4.0cm、高さ1.5cmを測る。重量は14.9gを量る。38は内面に双頭状の小突起が配され、外面に刻みが施される。全周の四分の一強が残存し、最大径3.8cm、高さ1.8cmを測る。

39は外縁に魚眼三叉文が巡っていたとみられるが、大半が欠損する。内面の箇所に対向三叉文を中心とした隆帯モチーフが配される。最大径4.9cm、高さ2.0cmを測る。重量は23.5gを量る。

40～42もこれに類似の隆帯モチーフを配する。40は断面下端が直線的に外反する。全体の四分の一程度が残存し、最大径3.2cm、高さ1.7cmを測る。41は隆

帯文様の頂部に小突起をはきんだ対向三叉文が対峙する。全周の五分の一弱が残存し、最大径4.8cm、高さ1.6cmを測る。42は外縁に対向三叉文が巡るものとみられる。全周の五分の一弱が残存し、最大径5.1cm、高さ2.0cmを測る。

43は断面上端内面に「受け」を形成し、刻みを持つ横瘤を配する。全周の十分の一強が残存し、最大径5.6cm、高さ2.2cmを測る。

大型品のうち、49～54は断面「r」字状をなして上面内側に文様を描くタイプである。

49・50は中央の貫通孔に沿って1条の沈線が巡る。49は上半の折り返し部分のみ全周の四分の一程度残存する。最大径7.6cm、高さ1.9cmを測る。50は折り返し部分が比較的小さく、下半部は先細りしつつ直行する。全周の八分の一強が残存する。最大径7.9cm、高さ2.3cmを測る。

51は横位の蕨手沈線が配される。全体の六分の一強が残存し、最大径6.8cm、高さ2.6cmを測る。52は左に開口する三叉文が重畳して描かれる。全体の六分の一弱が残存し、最大径8.7cm、高さ2.3cmを測る。

53は楕円文を中心として対向三叉文や円文による左右非対称のモチーフが構成される。全周の五分の一強が残存し、最大径8.3cm、高さ2.3cmを測る。

54は4単位の円文を末端外屈する沈線文が連携し、鋭利な工具による刺突文が充填される。全体の五分の一強が残存し、最大径7.0cm、高さ2.0cmを測る。

55は断面扁平かつ薄手で、上端に三叉文および刺突文をともなう小突起を配する。全体の十分の一程度が残存し、最大径8.0cm、高さ2.5cmを測る。56は断面「r」字状のタイプだが上面扁平かつ幅広で、隆帯+沈線による外向きのC字モチーフが配される。全周の七分の一弱が残存し、最大径8.5cm・高さ2.3cmを測る。

#### ミニチュア土器 (第186図57～65)

57は上面観がいびつな楕円形を呈するもので、二枚貝を模した土製品とも考えられるものである。口

縁直下に単沈線の入組文が巡り、胴部との境を刻みを持つ隆帯で区画する。胴部中段には入組文が描かれ、RL単節の縄文が施文される。底面は丸底で、巴文の一部が観察される。長軸側の両端に一对の貫通孔を持つものとみられ、蓋の可能性もある。

長径8.7cm、短径3.6cm、器高3.6cmを測る。

58～61は深鉢形土器の底部であろう。ほとんどは底部から胴部へと単純に開く器形であるが、58は底部が裾広がりととなり、胴部との境に括れを持つ台付鉢風の器形である。59はL無節縦位回転の縄文がみられる。

62は口縁内彎する尖底の鉢で、水平口縁上に4単位の小突起を配し、文様を持たず、底部から胴部中段にかけて篋状工具による調整痕が観察される。最大径3.8cm、器高3.1cmを測る。

63も鉢の底部とみられる。丸底で、胴部は比較的急角度で立ち上がる鍋底状の器形である。胴部無文で、篋状工具の調整痕が観察される。最大径5.7cm現存高3.2cmを測る。

64は高台付の鉢である。水平口縁で、底部から口縁にかけて内彎しつつ立ち上がる鉢形の器形である。高台部は肉厚で、底面がゆるやかに凹んで上げ底状になる。文様は施文されず、成形時の指頭痕が観察される。最大径5.7cm、器高4.4cmを測る。

65も高台付の鉢とみられるが、高台部分が欠失する。水平口縁で、底部から口縁にかけて内彎しつつ立ち上がる。外面に篋状工具による縦位の調整痕が観察される。最大径5.2cm、現存高3.5cmを測る。

#### 垂飾 (第187図66)

勾玉形の垂飾である。長軸3.0cm・短軸1.3cmの三日月形を呈し、上端に横位の貫通孔を持つ。重量は5.7gを量る。

#### 土錘 (第187図67・68)

67は紡錘形の土錘である。長軸・短軸側それぞれに挟りを持ち、表面は十字方向・裏面は横方向のスリットがみられる。長軸5.1cm、短軸1.5cm、厚さ1.8cmを測る。重量は17.7gを量る。

68は扁平な紡錘形を呈する。長軸側のみ挟りを持ち、表裏に縦方向のスリットがみられる。長軸4.5cm、短軸1.5cm、厚さ1.8cmを測る。重量は16.6gを量る。手觸形土器 (第187図69・70)

69は把手部分のみ残存する。平面形はやや末広がりの隅丸長方形へ台形を呈し、上端がわずかに前屈して、一对の貫通孔を有する。文様はみられない。現存部分の長さ5.9cm、最大幅4.1cm、厚さ1.3cmを測る。

70は容器部分と把手の接続部が残存する。容器部分は平面ほぼ円形を呈するものとみられ、口縁水平で軽微に内彎しつつ開く。文様はみられず、把手との接点部分にたが状の隆帯が巡る。

把手は表面および側縁が広く剥落しているが、裏面になかば満巻文化した波頭文をみる事ができる。容器部分の器高3.9cm、把手部分の最大幅3.9cm、厚さ1.5cmを測る。

#### スプーン状土製品 (第187図71)

容器部分と把手の接続部のみが残存する。

容器部分はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁水平で口端に棒状工具による斜位の刻みを施す。把手部分は扁平で、両側縁が内彎して断面U字形を呈する。表面は無文、裏面は70に類似の波頭文が斜め方向に重畳して描かれる。

把手部分の最大幅3.9cmを測る。

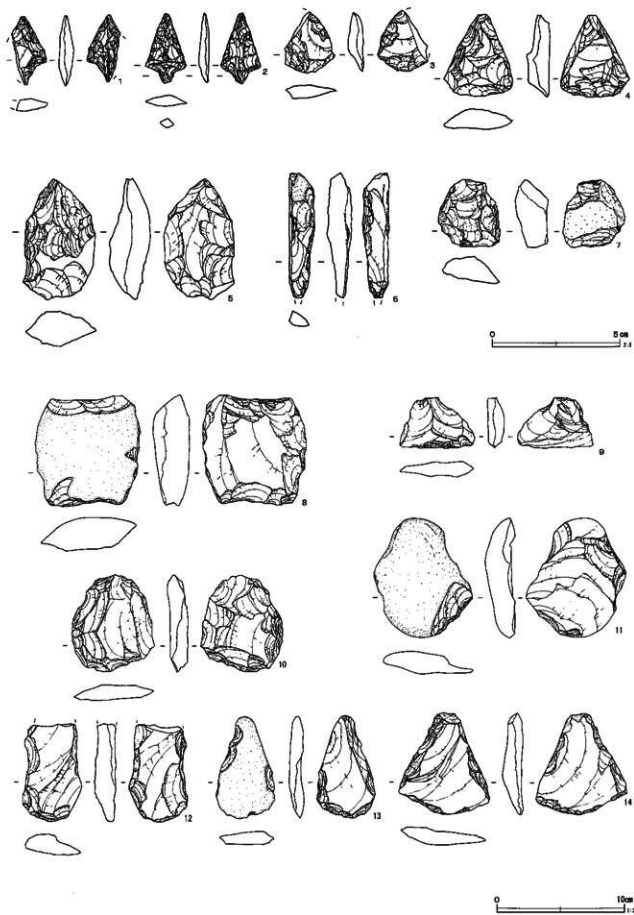
#### 土製円盤 (第188図72～84)

72は晩期の半粗製深鉢で、刻みを持つ隆帯区画部分を使用する。73～78は紐線文系深鉢の破片を使用しており、76は口縁部の破片を使用する79は後期安行式の縦縮を中央に取り込んでいる。80は磨消状文の破片、81は安行1式の結節沈線区画がみられる。

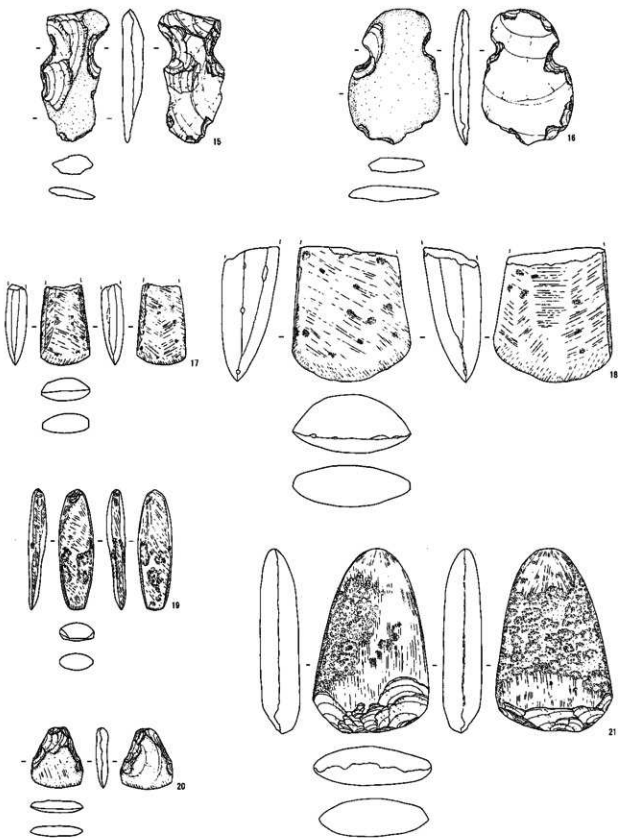
#### 石器

#### 石鏃 (第189図1～5)

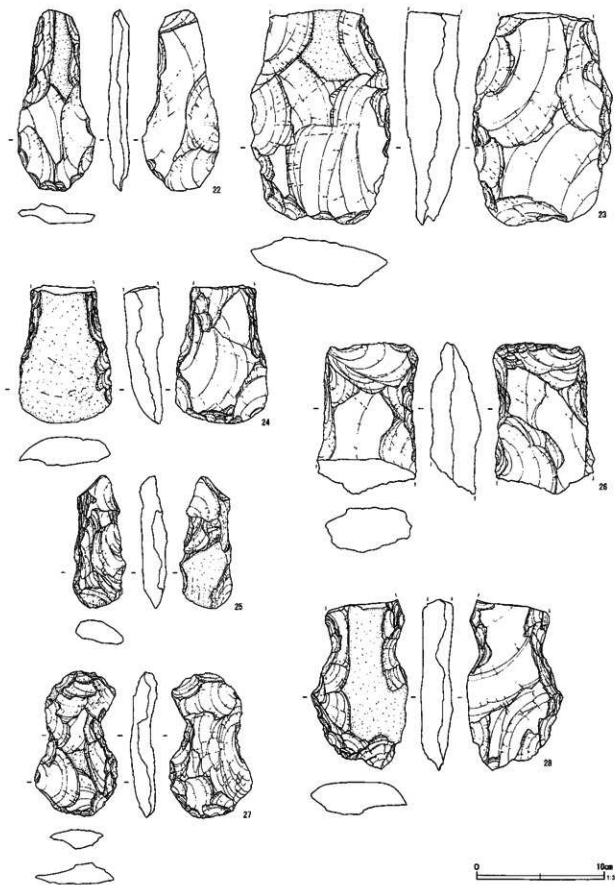
1は石鏃で、左側縁部を広く欠損する。横長の剥片を使用するものとみられ、背面中央部に主要剥離面を残している。2も凸基有茎で、二等辺三角形の端正な造りである。



第189図 E区グリッド出土石器(1)

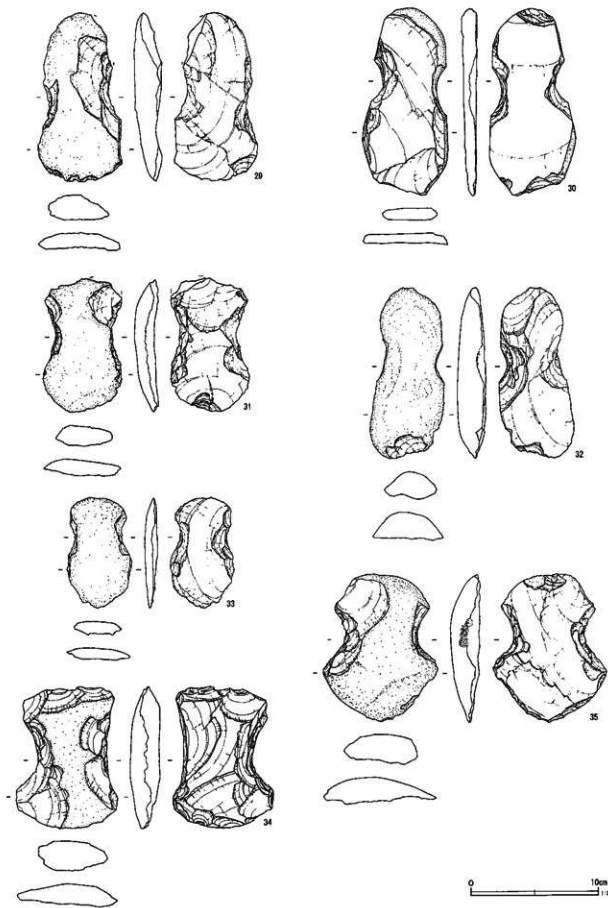


第190図 E区グリッド出土石器 (2)

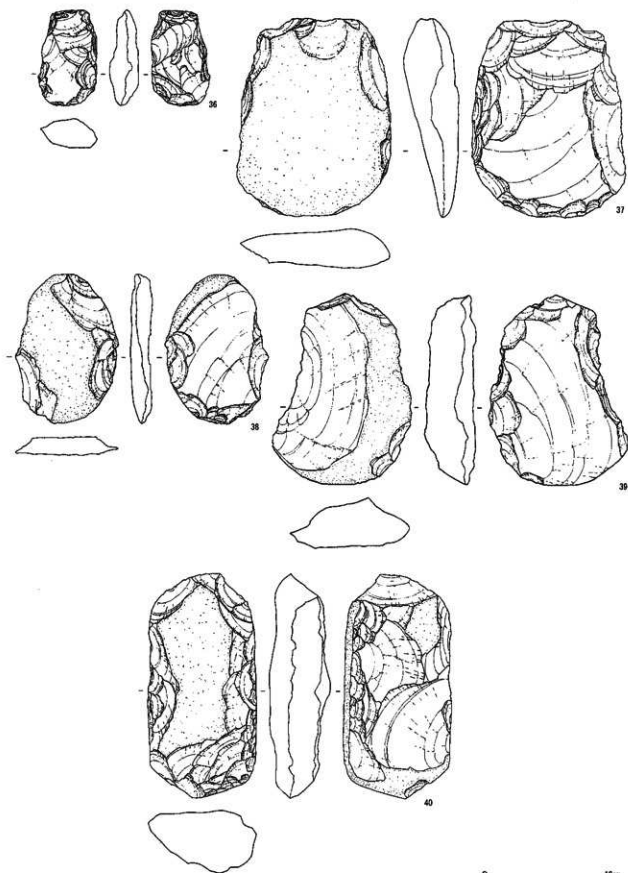


第191図 E区グリッド出土石器(3)

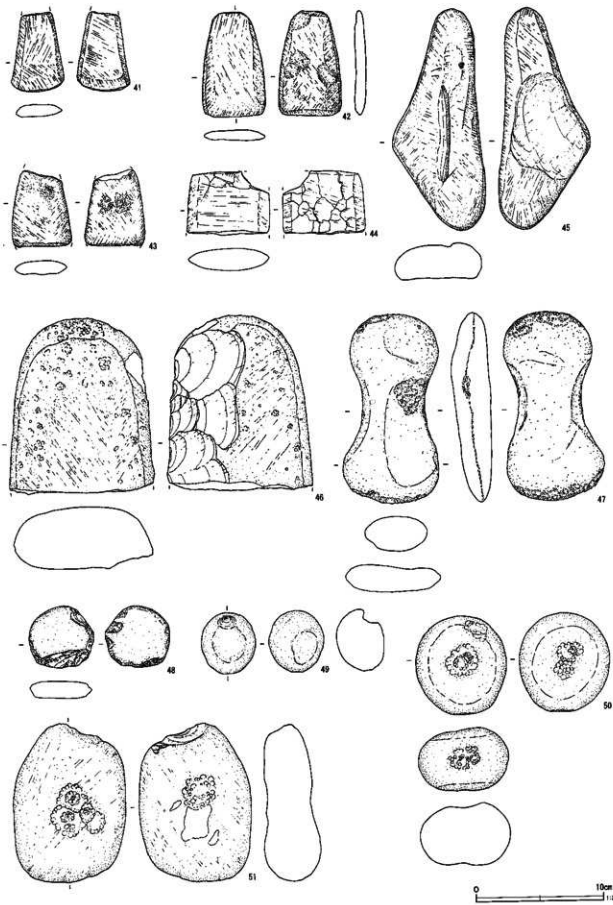




第192図 E区グリッド出土石器(4)



第193図 E区グリッド出土石器 (5)



第194図 E区グリッド出土石器(6)

3は製作過程で先端から左側縁が折損した未製品と考えたが、このまま使用に供した可能性もある。平基無茎で、両面に広い剥離面を残す。4も平基無茎で、腹面側の側縁加工がほとんどなされず、先端が鈍角であるため未製品と考えた。

5は水滴形を呈する大型の石鏃ないし尖頭器で、やはり未製品であろうか。

#### 石鏃 (第189図6)

握み部を持たない棒状の石鏃である。左側縁部に広い剥離面を残し、断面三角形を呈する。先端部を欠損する。

#### くさび形石器 (第189図7)

背面に原礫面および節理面を残す。石材はチャートを使用する。

#### スクレイパー (第189図8～190図16)

8は横長の剥片を使用し、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残す。平面「H」字形を呈し、上下辺に内彎する刃部を造り出す。9は三角形の剥片の底辺が片刃の刃部となっている。10は円形の剥片の全周を刃部加工している。

11は背面に原礫面を残す縦長剥片で、右下の側縁部に両面剥離による刃部を持つ。12は横長剥片を長方形に整形し、下端に刃部を造り出す。

13は横長剥片で背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残し、左および下方の側縁に刃部加工を施している。14は二等辺三角形で、3つの辺それぞれを刃部としている。

15・16は握み部の造作を持つ所謂石匙である。15は横長剥片を素材とし、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残す。握み部と刃部の境に両面剥離による抉りを造り出すが、刃部の加工は簡略である。

16は縦長剥片を簡略に整形して用いたもので、石鏃の可能性もある。

#### 磨製石斧 (第190図17～21)

17・18は定角形の磨製石斧で、いずれも基部を欠損する。19は扁平かつ細身で平面紡錘形を呈する。20は剥片素材の小型品で、基部を両面剥離で造り出し、

刃部のみ磨削している。

21は敲打調整痕を残す粗製の石斧で、刃部を折損した後に叩石として再使用されている。

#### 打製石斧 (第191図～193図)

22～26は楕形ないし短冊形である。22は網雲母片岩の板状礫を素材とする扁平な石斧である。

23は完存すれば全長30cm近い大型の打製石斧であったと思われる。24は背面に広く原礫面を残し、両面剥離によって両側縁にゆるやかなカーブを造り出す。25は棒状の石斧で、腹面に節理面を多く残している。26は長方形に張る基部である。

27～35は側縁に抉りを持つ分銅形である。加工は主として抉り部分に集中し、刃部の加工はいずれも比較的簡素である。

27は横長剥片を素材とし、腹面に主要剥離面を残している。28・29・31～33・35等も剥片素材とみられ、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残している。

30は網雲母片岩の板状礫を素材としており、基部から胴部右側縁、刃部左側縁にかけて原礫面を残しており、やや扁平な円礫を節理面に沿って縦割りにしたものが素材となっている。

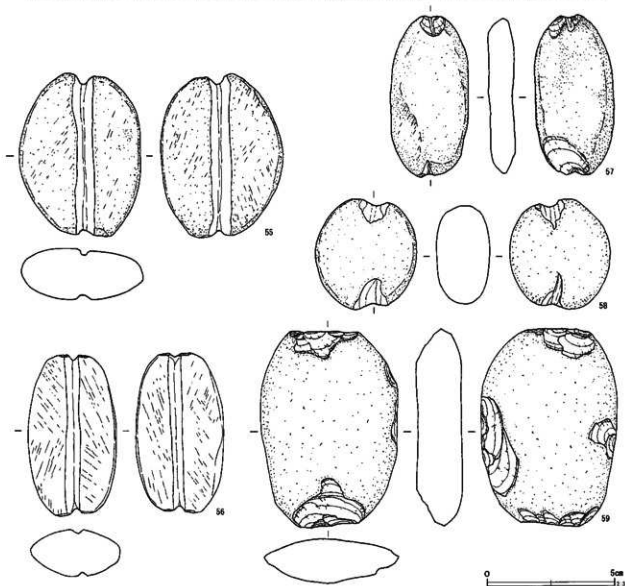
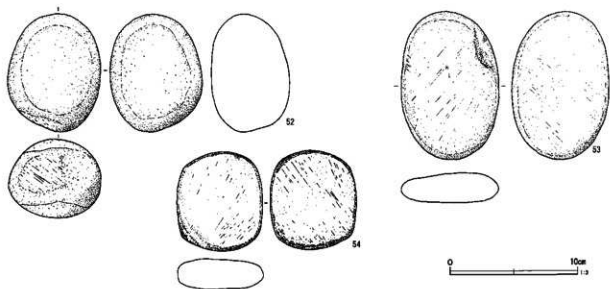
36～39は長径と短径の差が比較的小さく、側縁の抉りを持たない平面楕円形のタイプである。一部、折損した石斧の再生品が含まれる可能性がある。

入念な両面加工がみられる36を除けばいずれも大型の剥片を素材とするものとみられ、背面や側縁の一部に原礫面が残される。37は基部方向から数度の打撃によって丸みを持たせ、握りを造り出している。

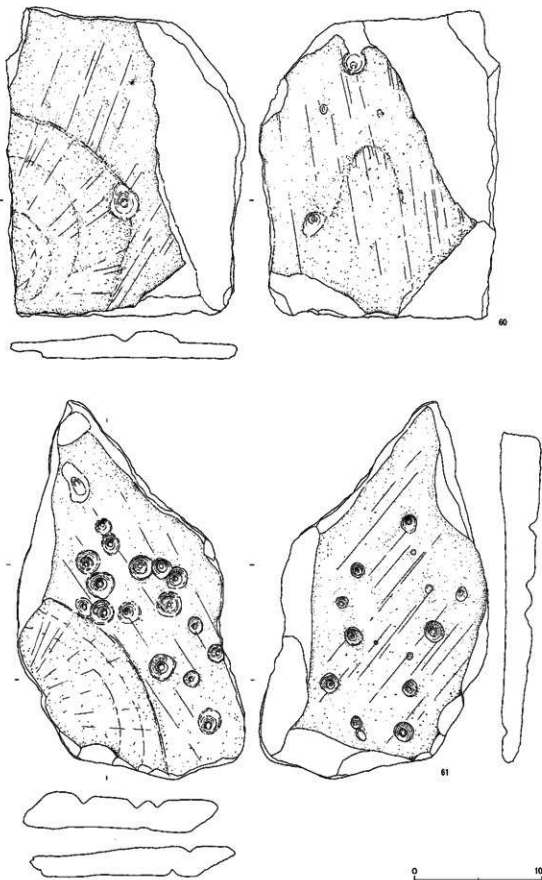
40は背面および側縁部に広く原礫面を残しており、未製品と考えられる。

#### 砥石 (第194図41～45)

41～44は台形ないし長方形の無溝砥石で、扁平な原礫を擦り切って整形しているものと思われる。側縁断面鋭角で、ほぼ全面に擦痕が観察される。43は表裏の平坦面にあばた状の敲打痕が残る。44は破断面を含め全体にスズ状の付着物が観察され、亀裂が走っている。



第195図 E区グリッド出土石器(7)



第196図 E区グリッド出土石器(8)

45は三角形の自然礫を用いた磨石の一面に溝がみられる有溝砥石である。

叩石 (第194図46~48)

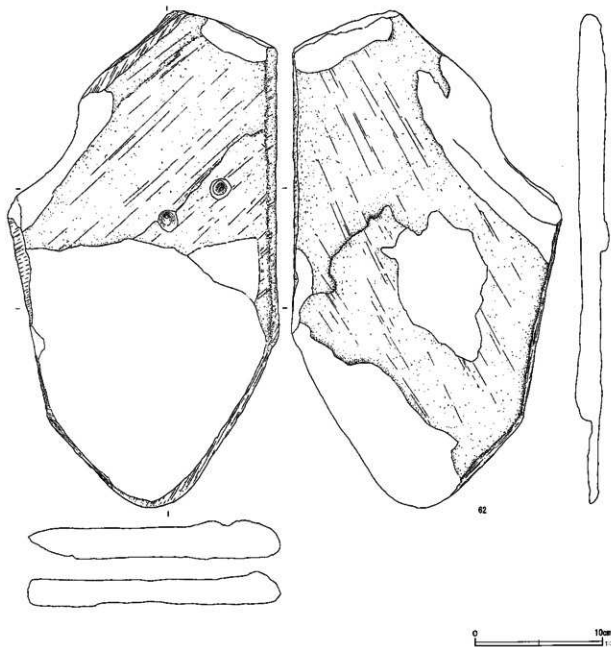
46は磨石転用の叩石で、右側縁に剥離が集中し、下半部を欠失する。47は分銅形の自然礫の長軸側両端に敲打痕が集中するほか、側縁の挟り部分にも若干の敲打が観察される。48は扁平な円礫の3辺に細か

な剥離と敲打がみられる。

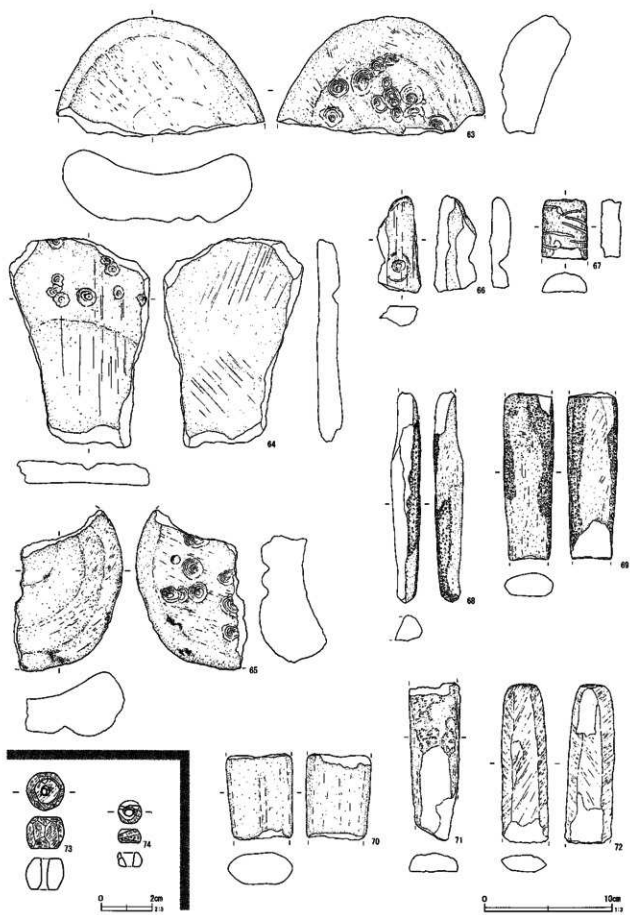
凹石 (第194図49~51)

49は礫岩の球状礫を使用する。礫の脱落痕に生じた円孔を使用したものとみられ、他に加工痕はみられない。

50は円礫使用の磨石を転用したもので、表裏の平坦面および下側縁に凹部を設ける。51は凝灰岩の楕



第197図 E区グリッド出土石器 (9)



第198図 E区グリッド出土石器 (10)



第23表 E区グリッド 石器計測表

番号	器種	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石鏃	L30	2.7	(1.4)	0.6	1.6	B3-⑨	チャート
2	石鏃	L30	2.7	1.6	0.4	1.2	B3-①	黒曜石
3	石鏃	M31	2.3	(2.0)	6.0	2.4	A2-⑧	チャート
4	石鏃	M31	3.2	2.8	0.9	7.5	A2-⑥	チャート
5	石鏃	L30	4.7	2.8	1.6	17.9	E-⑥	チャート
6	石鏃	M29	(4.9)	1.0	0.9	5.2	B-⑦	ホルンフェルス
7	くさび形石鏃	L30	2.6	2.4	1.3	8.8		チャート
8	スクレイパー	SK18	8.6	8.1	2.8	25.4	B2-b3-①	ホルンフェルス
9	スクレイパー	M31	3.9	6.0	1.3	26.2	B1-b2-①	珪質頁岩
10	スクレイパー	L29	7.5	6.4	1.6	74.7	B2-c-①	ホルンフェルス
11	スクレイパー	SX1	9.3	7.7	2.3	448.4	B1-a1-①	砂岩
12	スクレイパー	SK1	(7.5)	4.6	1.6	64.8	B2-b3-②	ホルンフェルス
13	スクレイパー	M29	7.9	4.6	1.1	41.8	B1-b1-①	ホルンフェルス
14	スクレイパー	M31	7.8	7.1	1.6	69.0	A2-b1-①	ホルンフェルス
15	スクレイパー	M30	10.3	5.3	1.7	77.7	A1-b1-①	ホルンフェルス
16	スクレイパー	一垢	10.6	7.1	1.3	104.0	A1-a1-①	ホルンフェルス
17	磨製石斧	M30	(6.3)	3.8	1.7	66.7	A-②	緑色岩
18	磨製石斧	M31	(10.4)	9.3	4.5	574.6	A-④	緑色岩
19	磨製石斧	M31	9.3	2.7	1.4	53.1	A-①	緑色岩
20	磨製石斧	一垢	4.7	4.1	0.9	22.8	C-①	緑色岩
21	磨製石斧	M31	14.4	9.2	3.1	595.5	B-①	緑色岩
22	打製石斧	M30	14.0	6.0	1.7	114.7	B-①	網罟母片岩
23	打製石斧	L30	(16.5)	11.0	4.4	926.0	B-②	砂岩
24	打製石斧	L30	(10.7)	7.2	3.0	283.8	B-②	ホルンフェルス
25	打製石斧	M31	10.2	4.1	2.2	84.0	A-①	珪岩
26	打製石斧	M30	(11.7)	7.9	3.9	391.8	A-⑤	砂岩
27	打製石斧	M30	11.3	6.5	2.0	136.9	C-①	ホルンフェルス
28	打製石斧	M30	(13.1)	7.6	2.6	280.4	C-②	網罟母片岩
29	打製石斧	M30	13.1	6.5	2.2	177.0	C-①	砂岩
30	打製石斧	M30	14.5	6.7	1.2	136.8	C-①	網罟母片岩
31	打製石斧	M30	10.3	6.2	1.9	124.5	C-②	ホルンフェルス
32	打製石斧	M30	13.2	5.9	2.3	183.9	C-①	ホルンフェルス
33	打製石斧	M29	8.6	5.0	1.0	47.1	C-①	砂岩
34	打製石斧	SD8	10.9	7.9	2.4	231.2	C-①	ホルンフェルス
35	打製石斧	M30	11.5	8.9	2.4	230.9	C-①	砂岩
36	打製石斧	L30	7.4	4.6	2.3	81.6	D-①	ホルンフェルス
37	打製石斧	L30	15.4	12.1	4.3	883.6	D-①	ホルンフェルス
38	打製石斧	M30	11.5	8.1	1.7	206.0	D-①	ホルンフェルス
39	打製石斧	M31	14.8	10.9	4.0	672.9	D-①	ホルンフェルス
40	打製石斧	L29	17.8	8.5	4.8	967.0	E-①	安山岩
41	礫石	L29	(6.2)	4.1	1.0	25.1	B-②	砂岩
42	礫石	L29	8.2	5.0	0.9	47.0	B-②	砂岩
43	礫石	L29	(6.0)	4.7	1.3	40.1	B-②	砂岩
44	礫石	SD4	(5.0)	6.5	1.8	70.6	B-②	砂岩
45	礫石	L30	17.2	7.2	3.6	425.6	A-①	砂岩
46	叩石	M29	(13.6)	11.4	5.0	1003.0	B2-②	砂岩
47	叩石	一垢	14.7	7.7	3.1	415.5	C-①	砂岩
48	叩石	SX1	4.7	5.1	1.5	203.4	A2-①	砂岩
49	凹石	L31	4.8	4.3	3.7	91.9	A1-a-①	礫岩
50	凹石	SX1	7.8	7.1	4.9	395.4	A2-b-①	閃緑岩
51	凹石	M29	12.3	8.8	4.4	420.0	B2-b-①	燧灰岩
52	磨石	M30	9.1	7.3	6.1	555.3	B1-①	閃緑岩
53	磨石	M30	11.5	7.6	2.7	339.8	B2-①	閃緑岩
54	磨石	M30	7.8	6.7	2.5	218.5	B2-①	閃緑岩
55	石鏃	L29	4.8	6.4	2.0	65.1	A-b-①	安山岩
56	石鏃	SD7	3.5	6.3	1.9	59.1	A-b-①	網罟母片岩
57	石鏃	L30	3.2	6.3	1.3	35.6	A-a-①	砂岩
58	石鏃	M29	4.0	4.3	2.1	45.3	A-a-①	砂岩
59	石鏃	SD9	5.4	7.8	1.8	116.3	C-a-①	砂岩
60	石鏃	L30	(24.2)	(18.8)	2.3	1533.6	D-a-④	緑泥片岩
61	石鏃	M30	(29.4)	(17.8)	3.4	2027.4	D-a-④	緑泥片岩
62	石鏃	SD4	(38.6)	(21.2)	3.0	2902.0	C-a-④	緑泥片岩
63	石鏃	L31	(9.4)	(16.2)	5.6	801.2	A-a-②	安山岩
64	石鏃	M31	(16.2)	(11.0)	2.1	513.0	C-a-④	緑泥片岩
65	石鏃	M30	(12.4)	(8.6)	5.2	359.7	A-a-④	安山岩
66	石鏃	L30	(7.5)	(3.4)	(1.7)	82.0	D-a-④	緑泥片岩
67	石鏃	M31	(4.7)	3.6	(1.6)	42.5	③	安山岩
68	石鏃	SD4	(16.4)	2.3	(2.3)	100.9	④	安山岩
69	石鏃	SD9	(12.9)	4.0	2.3	181.2	③	安山岩
70	石鏃	SX1	(6.7)	5.1	2.5	162.1	③	緑泥片岩
71	石鏃	M30	(12.3)	4.0	(1.5)	118.9	③	緑泥片岩
72	石鏃	M29	(12.2)	3.8	1.4	108.5	②	緑泥片岩
73	重錐	M31	1.5	1.5	1.2	3.9		滑石
74	重錐	L30	0.9	0.9	0.5	0.4		網罟

円礫の表裏を使用する。

#### 磨石 (第195図52~54)

52・53は自然礫を無加工のまま使用するものである。54は扁平な円礫の4側縁を研磨し、胴張りの長方形に整形したものである。

#### 石錘 (第195図55~59)

多孔質安山岩の55、絹雲母片岩の56は全面を研磨して紡錘形に整えたうえで表裏に長軸方向のスリットを設けている。

一方、砂岩製の57・58は楕円形の自然礫の長軸方向両端に打撃・研磨による抉りを造り出しており、石材による加工方法の違いが看取される。

また、大型品の59は砂岩の楕円礫の長短軸側それぞれに抉りを設けており、サイズによる差異も存在する。

重量では59の116.3gが飛びぬけているが、それ以外の個体の平均値は51.2g、最小値は35.1g、最大値は65.1gを量る。

#### 石皿 (第196図60~198図66)

60~62・64・66はいずれも緑泥片岩の板石を素材とする。60・61は中央に磨面の窪みを持つ。全体の四分の一程度が残存するものとみられるが、周縁部がすべて欠損するため原形は不明である。裏側平坦面にも研磨痕を残しており、また表裏の磨面以外の部分を多孔石として使用している。

62は側縁部を比較的良く残しており、板状礫をある程度面取りしていびつな平行四辺形に整形していることがわかる。表裏に使用痕がみられるが、窪みを形成するには至っていない。表面に多孔石への転用がみられる。

64・66は同種の石皿片である。64は表面に窪みを持ち、平坦部を多孔石へと転用しており、裏面にもごく浅い窪みを持つ。66は表面に窪みの一部と多孔石への転用がみられ、上側縁に原礫面を残す。

63・65は多孔質安山岩の円礫を使用する。表面に磨面の窪みを持ち、背面も平坦に研磨され、多孔石への転用がみられる。

#### 石棒・石剣 (第198図67~72)

68は胴部から基部にかけて残存し、長軸方向に割裂している。全面に赤変が観察され、表面の風化が著しい。69・70も胴部のみ残存し、やはり赤変と風化が観察される。

71はやや基部に近い部分で、やはり若干の赤変がみられる。72は基部ないし無頭石棒の端部とみられ、表面の研磨が徹底される。

#### 垂飾 (第198図73・74)

73は滑石製の玉で、灰白色を呈する。両面穿孔され、内部に紐擦れによる磨耗が観察される。74は翡翠製とみられる緑色の玉で、片面から穿孔され、穿孔面側縁の一部を破損する。

### 3. F区の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

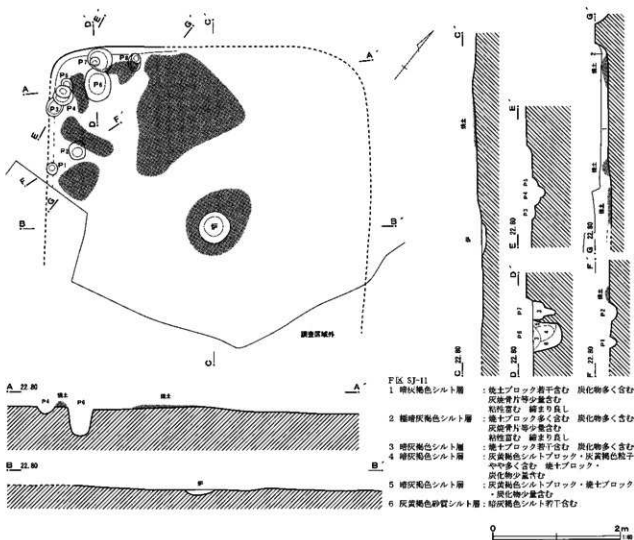
F区第11号竪穴住居跡 (第199図・200図)

M-29グリッドで、E区とF区にまたがって存在している。F区第14号竪穴住居跡を切っており、またF区第11・12号竪穴住居跡とも切り合い関係にあるものとみられる。また、南東壁はすべて調査区域外に存在している。

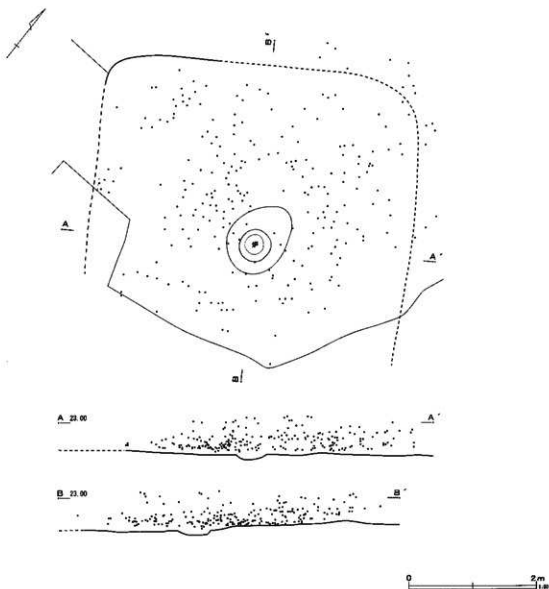
E区において炉跡が検出され、F区において西コーナー部分の壁を検出した。北西-南東に主軸を持ち、短軸約5m程度の隅丸長方形を呈する竪穴住居跡であったと推定されるが、正確な形態・規模は不明である。深さ最大23cmを測る。主軸方向はN-36°-Wを指すものとみられる。

第24表 F区第11号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.20	0.16	0.09	Pit 5	0.20	0.20	0.09
Pit 2	0.30	0.28	0.11	Pit 6	0.50	0.40	0.43
Pit 3	0.22	0.26	0.06	Pit 7	0.40	0.34	0.37
Pit 4	0.30	0.30	0.21	Pit 8	0.26	0.18	0.22



第199図 F区第11号竪穴住居跡



第200図 F区第11号竪穴住居跡出土遺物分布図

床面は平坦で、南に向かって緩やかに傾斜している。炉跡周辺および西側角の床面上に顕著な焼土の堆積が観察された。F区において8本のピットが検出された。うちPit 6は主柱穴、残る7本は壁柱穴と考えられる。

ピットはいずれも床面焼土が切れる部分から検出されており、柱材が残った状態で焼土が形成されたことが考えられる。

出土遺物は土器の小破片が中心で、主体をなすのは晩期前葉の土器片である。

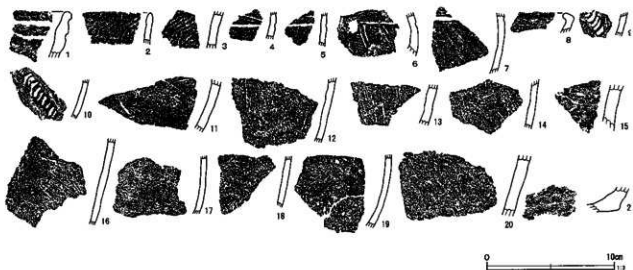
#### F区第11号竪穴住居跡出土遺物

#### 土器 (第201図)

1は高井東式の深鉢口縁部である。口縁直下に幅広い凹縁が2段巡る。

2は縄文施文される口縁で、安行3a～3b式の大波状口縁深鉢に属するものであろう。口唇断面肥厚せず口端先細りとなり、LR単節横位回転の縄文が施文される。3は縄文施文の胴部で、やはり同時期のものと考えられる。4～7は横位の帯縄文がみられる。

9・10は晩期前葉の紐線文土器で、胴上半部の文様帯の一部とみられ、刻みを持つ扁平な隆帯が曲線文



第201図 F区第11号竪穴住居跡出土土器

を描く。

11~20はいずれも無文の胴部破片で、晩期前葉に属する粗製深鉢であろう。篋状工具の粗雑な調整痕がみられ、しばしば輪積み痕を残している。21は底部破片である。

#### 土製品

##### 土偶 (第202図1)

右脚部で、爪先を欠く。上端の割れ口に剥離痕を残す。膝前面に沈線文がみられる。現存する最大高4.5cm、最大幅2.3cm、厚さ2.3cmを測る。後期のものとみられる。

##### 耳飾 (第203図1)

無文・小型の滑車状耳飾である。断面扁平で、中段で「く」の字に屈曲し、上下端が外反する。全周の約六分の一が残存し、復元最大径5.2cm・現存高2.1cmを測る。

#### 石器

##### 打製石斧 (第204図1)

撥形の打製石斧である。大型の剥片を素材とし、腹面に主要剥離面を持ち、背面に広く原礫面を残す。左右両側縁部のやや基部寄りに細かな両面剥離で抉りを形成する。

##### 環状石斧 (第204図2)

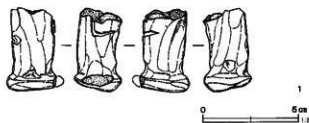
扁平な自然礫を用いたものとみられ、表裏両面に自然面を残す。平面形はいびつな円形で、両面からの剥離により比較的鈍角の刃部を作り出す。中央貫通孔は両面から穿孔されている。

##### 石皿 (第204図3)

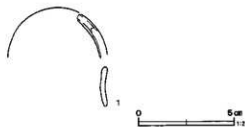
扁平な河原石を無加工で使用している。表裏両面に擦痕が観察され、表面に緩やかな凹みを持つ。

##### 磨石 (第204図4・5)

いずれも楕円形の自然石を無加工で使用し、表裏両面を使用している。5は表面の磨面中央と下方側縁部に敲打痕が集中してみられ、凹石・敲石への転用が考えられる。



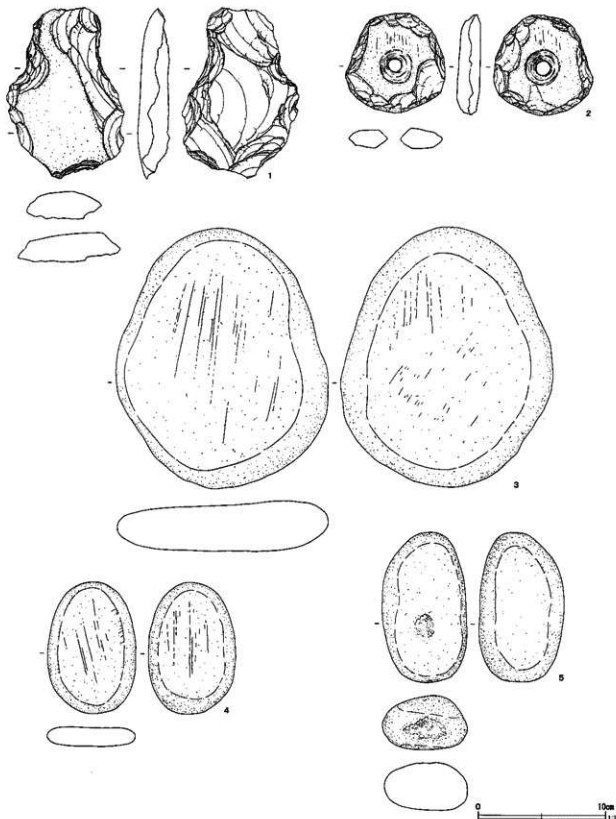
第202図 F区第11号竪穴住居跡出土土偶



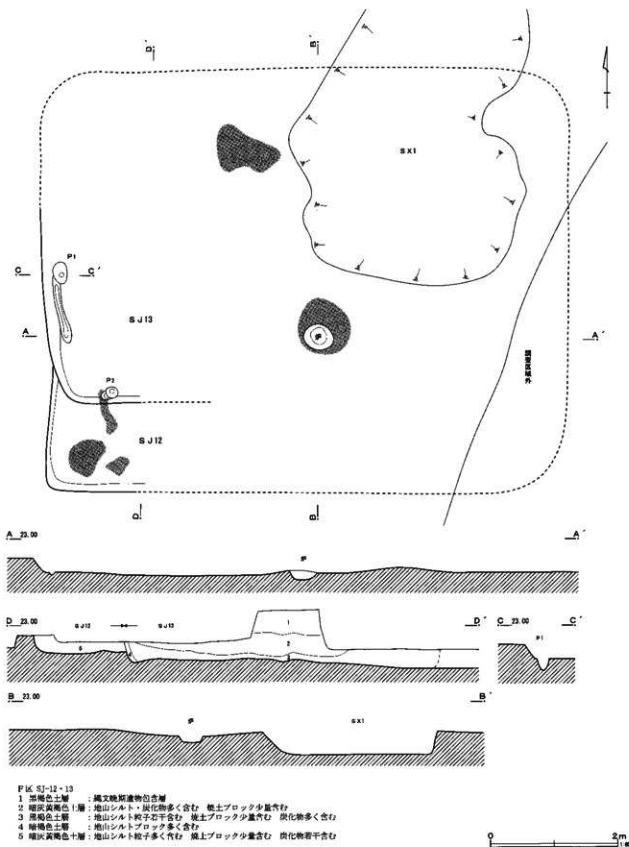
第203図 F区第11号竪穴住居跡出土土製品

第25表 F区第11号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	分類	石材
1	打製石斧	13.3	9.1	2.5	284.9	B-①	ホルンフェルス
2	薄状石斧	7.8	7.8	1.7	127.0		砂岩
3	石皿	20.2	16.5	4.0	1996.2	A-a-①	閃緑岩
4	磨石	10.1	6.8	1.5	185.2	B 2-①	閃緑岩
5	磨石	11.5	6.6	4.2	434.9	B 1-a-①	安山岩



第204図 F区第11号竪穴住居跡出土石器



第205図 F区第12・13号竪穴住居跡

第26表 F区第13号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.33	0.22	0.18	Pit 2	0.26	0.18	0.32

## F区第12・13号竪穴住居跡 (第205図～207図)

L-29・M-29グリッドで、E区とF区にまたがって存在している。

当初、単独の遺構として調査を開始したが、床面の高さに差異がみられ、隅丸方形の竪穴住居跡2軒が西壁を共有して重複しているものと考えた。新旧関係は、第13号が第12号を切っている。

いずれもほぼ南北に主軸を持つが、第13号竪穴住居跡の主軸がわずかに西へと振れている可能性がある。

F区第12号住居跡は深さ最大28cmを測る。検出されたのは南西コーナー部分のみで、それ以外の大半をF区第13号竪穴住居跡に切られている。隣接するF区第11号竪穴住居跡とも重複関係にある可能性が高いが、新旧関係は不明である。

床面平坦で、わずかな起伏を持つ。柱穴や壁溝は検出されなかった。床面上に焼土の堆積が観察された。

F区第13号竪穴住居跡は深さ最大44cmを測る。

検出されたのは西壁および南西コーナー部分のみで、北半部分については検出面の状態が不安定であり、土層断面においても正確な立ち上がり特定するに至らなかった。

床面は平坦で、北に向かって緩やかに傾斜している。2本のピットが検出され、いずれも壁柱穴と考えられる。西壁直下において部分的に壁溝が検出された。

隣接するE区部分において地床炉1基を検出した。位置関係から、第12号・13号いずれかの住居跡に属するものと考えたが、床面中央部に位置するものと仮定した場合に竪穴住居跡そのものの規模がやや大きくなりすぎる傾向がみられ、別個の住居跡に伴うものである可能性も考慮したい。

覆土中からは高井東式から安行3b式にかけての

土器が出土している。後期末および晩期初頭のものがそれぞれ多数を占めるが、第207図にみられる復元個体の出土状況から、安行3a式の新段階の範囲内における切り合いと判断した。

F区第12・13号竪穴住居跡出土遺物  
土器 (第208～210図)

1は第12号住居跡から出土した大波状口縁深鉢である。口縁直下に縄文帯を持ち、胴上半部に単沈線の三角形区画を描いて内部に縄文を施文する。

胴部中段には横位の平行沈線が巡り、上下の連続弧線文との間に生じた半円形の区画内部に縄文が施文される。

胴下半部は縄文帯となり、上端を1条の沈線で区画する。地文はRL単節横位回転の縄文である。

口縁直下の帯縄文による区画は、単沈線による三角形の単位文へと変化し、描線の末端が鉤状のモチーフをとる等、比較的新しい要素を備えつつも、全体の構成は後期以来のものを踏襲している。

時期的には安行3a式の新段階と考えた。

2以下はいずれも13号住居跡からの出土である。

2は大波状口縁の小型精製深鉢である。5単位の波状口縁をなすものとみられ、波頂部に刻みをもつ扇状の突起を持ち、直下に刻みを持つ横瘤と豚鼻突起が重畳する。

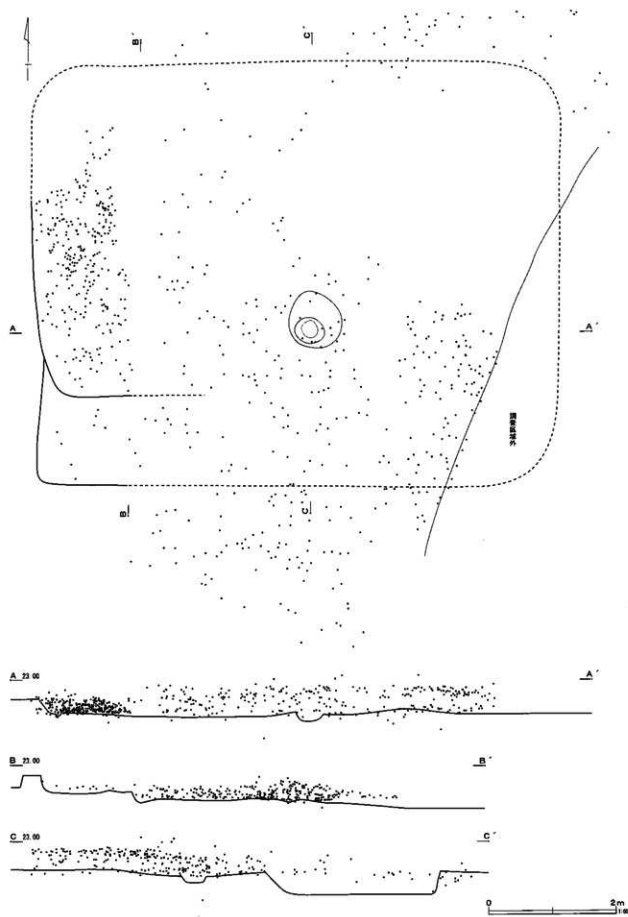
胴上半部の三角形区画は波状の磨消区画文へと変化しており、区画の交点となる波頂部直下では対向三叉文を構成している。

胴部中段には横位の楕円区画文を巡らせるが、通常とネガボジが反転しており、無文地に縄文施文の紡錘文が巡り、上端を帯縄文、下端を単沈線で区画している。地文はRL単節横位回転の縄文である。

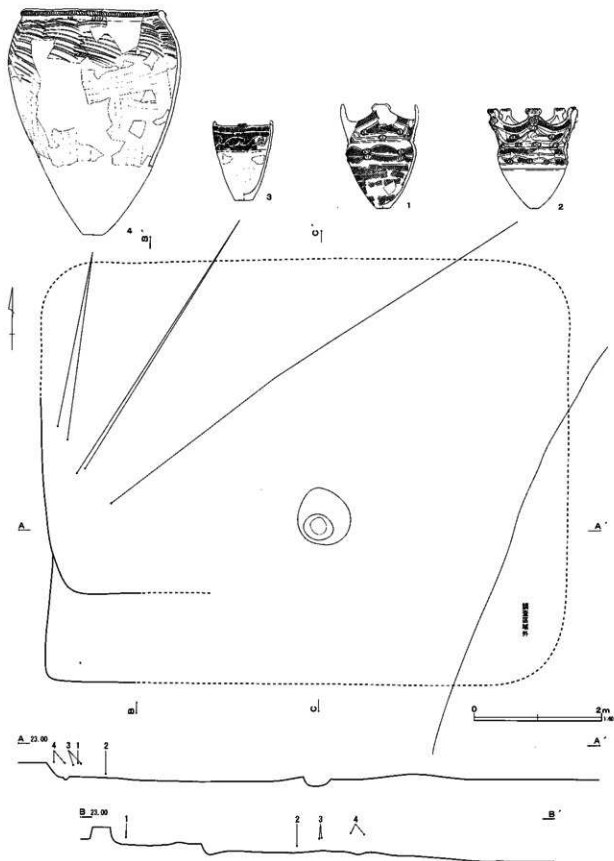
やはり新旧の要素の混在する個体とみることができ、1と同様に安行3a式新段階と考えた。

3は水平口縁の精製深鉢である。胴上半部に平行





第206图 F区第12·13号竖穴住居跡出土遺物分布圖(1)

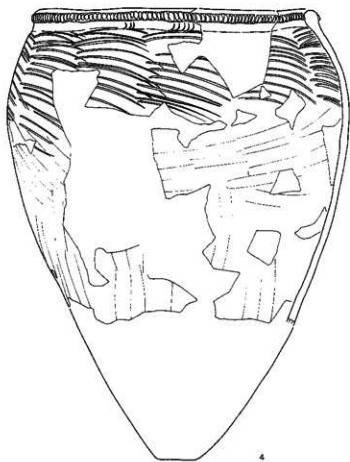
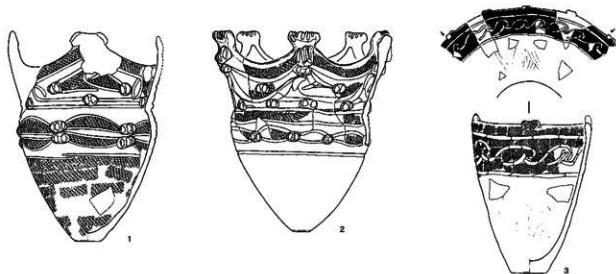


第207图 F区第12·13号竖穴住居跡出土遺物分布图(2)

沈線を巡らせ内部に横S字文と三叉文を組み合わせた入組文を施文する。口縁直下から文様帯下端にかけてRL単節横位回転の縄文を施文し、胴下半部は無文帯となる。1・2と同時期のものであろう。

4は紐線土器である。口縁肥厚して強く内彎し、刻みを持つ隆帯を巡らせる。胴上半部には横位の集合沈線が施文される。

胴部中段以下は無文帯となっており、篦状工具に



第208図 F区第12・13号竪穴住居跡出土土器(1)

よる撫で調整が、胴部中段では横位、胴下半部では縦位方向に施される。

一見後期末葉以来のオーソドックスな器形・施文であるが、構成上は文様帯の意識を露わにした個体とみることができる。さらに無文土器への接近等、晩期前葉でも比較的新しい様相を持った土器と考えることができよう。

安行3 a 新段階ないし3 b 式と考えられる。

5以下は破片資料である。5～7は高井東式で、大波状口縁深鉢口縁部である。8は安行1式の水平口縁深鉢である。9は安行2式の大波状口縁深鉢で、波底部に刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起が重畳する。

10～17は安行3 a～3 b 式の大波状口縁深鉢で、胴上半部に弧状の区画文が描かれ、豚鼻突起が配される。

18～20は砲弾形の水平口縁深鉢で、刻みを伴う縦瘤が重畳しており、安行2式期に位置づけられる。21は水平口縁深鉢で、安行3 a 式である。復元個体3に類似するが、口縁やや内湾し、口唇肥厚して折返口縁をなす。

22は安行3 a 式の注口土器胴上半部で、単沈線の入組文と魚眼三叉文が複合的に描かれる。23は文様帯下端を連続弧線文により閉塞する安行3 a 式、25・26も同時期の深鉢胴部と考えた。

27～29は注口土器口縁部で、28は注口部の剥落痕が観察される。頸部に磨消文様と小入組文を配する28は安行3 a 式、他は安行2式と考えた。

30・31は安行3 a～3 b 式の浅鉢で、胴部中段がソロバン玉状に張り出し、連鎖状の隆帯が巡る。

33～36は後期末葉の瘤付土器の流れをくむ土器群である。33はレンズ状の磨消モチーフの間に蛇行沈線文が垂下する。34にも類似の文様が描かれる。35は半粗製的な深鉢で、口端に刻みが巡り、刻みを持つ縦瘤が二個一対で配され、平行沈線の弧線文が巡る。36は横位の平行沈線上に刻みを持つ縦瘤が二個一対で配される。

37は安行3 b 式期の土器で、北関東系の天神原式

である。水平口縁上の深鉢で、口縁突起直下の渦巻文を中心に文様帯が展開し、鋭利な工具先端による刺突文および列点文を地文とする。

38～46は晩期前葉の紐線文土器である。口縁直下および胴上半部に刻みを伴う隆帯で区画した文様帯を持ち、平行沈線による弧状モチーフが巡る。磨消縄文を持つ40・42・43は安行3 b 式期の土器と考えられる。

47～57は晩期前葉の粗製深鉢である。大半が無文で、器形の変化に乏しい。50は内湾口縁で外面に隆帯が巡る。51は折返口縁である。

58はRL単節の微細な縄文が施文される。晩期前葉の精製深鉢胴下半部であろう。59は非常に薄手の器壁で、いわゆる製埴土器とみられる。

60～62は底部破片を一括した。篋状工具による複雑な調整痕が特徴的にみられる。

#### 土製品

##### 土偶 (第212図)

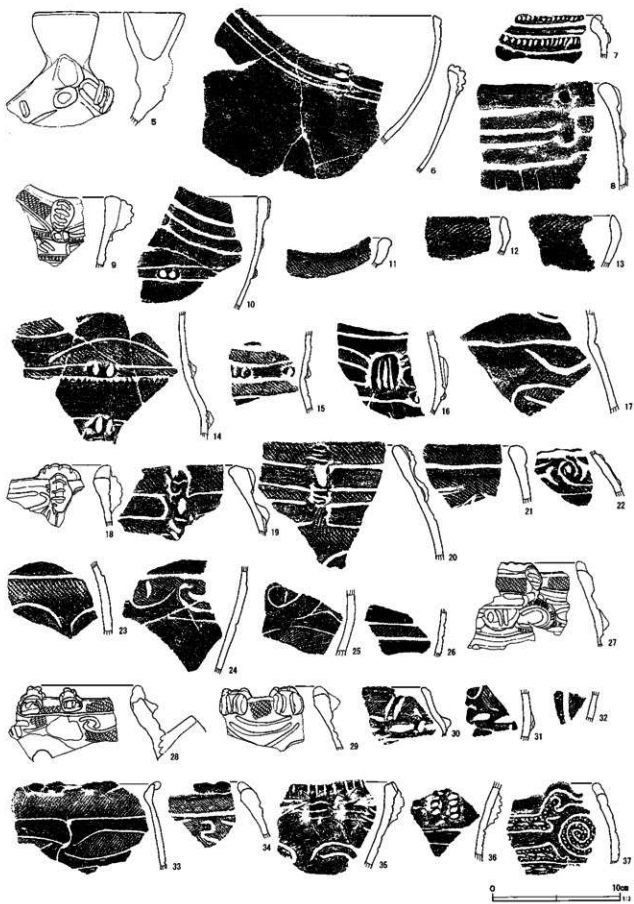
1はミミズク土偶の頭部で、頭頂部および顔面右下半部を欠失する。刻みを伴う隆帯によって顔の輪郭・目・耳を表現している。冠部前面に結節沈線文、背面に縦位の集合沈線のみみられる。地文はRL単節の縄文である。現存する最大高5.4cm、最大幅7.4cm、厚さ2.3cmを測る。明赤褐色を呈し、焼成は良好で、部分的に赤彩痕らしきものを残す。

2はミミズク型中空土偶の背面の一部と考えられ、短沈線状の刻みをともなう隆帯のみみられる。器壁は薄手で、内面には成形時の指頭圧痕が観察される。現存する最大高4.3cm、最大幅2.6cm、厚さ1.1cmを測るが、完存すればかなり大型の土偶となったと考えられる。

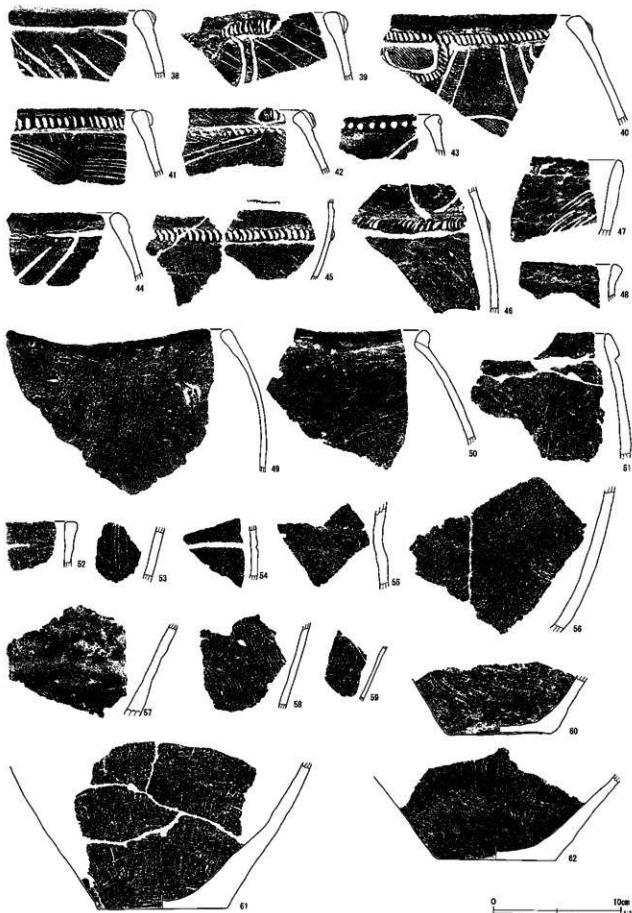
3は右脚部である。前後方向に扁平な造りで、外側へと彎曲する。文様をもたない。現存する最大高5.2cm、最大幅1.6cm、厚さ2.6cmを測る。淡褐色を呈し、胎土は砂質である。晩期のものと思われる。

##### 耳飾 (第211図1～4)

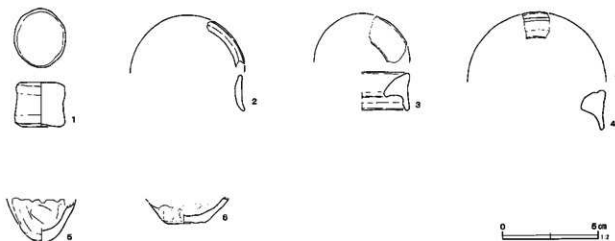
1は中実白形の耳飾である。無文で、表面平坦、



第209图 F区第12·13号竖穴住居跡出土土器(2)



第210图 F区第12·13号整穴居跡出土土器(3)



第211図 F区第12・13号竪穴住居跡出土土製品

裏面に凹みを持つ。側縁に抉りを持ち、上下端が突出する。完形で、最大径2.7cm・現存高2.3cmを測り、重さ25.3gを量る。

2～4は中央に貫通孔を持つ滑車形の耳飾である。

2は断面扁平で上下端が外反する。全体の七分の一弱が残存し、最大径6.0cm・現存高1.9cmを測る（以下、破損品の最大径は推定値）。

3は断面r字形を呈し、内面折り返し部分が強く張り出している。全周の五分の一強が残存し、最大径5.0cm・現存高2.0cmを測る。

4も断面r字状のタイプで、上面に1条の沈線が

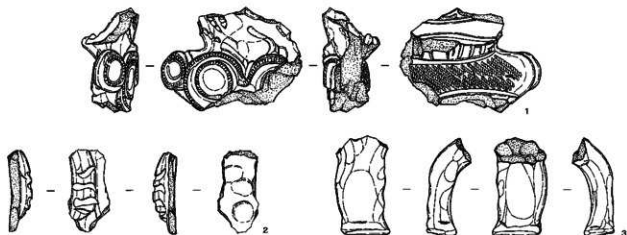
巡る。残存状態はきわめて断片的で、最大径7.2cm・現存高2.1cmを測る。

石器

打製石斧（第213図1・2）

1は分冊形の打製石斧未製品として分類したが、独結石となる可能性もある。扁平棒状の原礫を用い、背面に広く自然面を残す。側縁中段には両面加工による抉りを造り出す。

2は短冊形の打製石斧で、やはり棒状扁平な自然礫を使用する。表裏に広く自然面を残し、両側縁および先端部に両面加工がみられる。剥離による成形は最小限にとどまっております、原礫の形状を生かした



第212図 F区第12・13号竪穴住居跡出土土製品

造りということが出来る。

石皿 (第213図3)

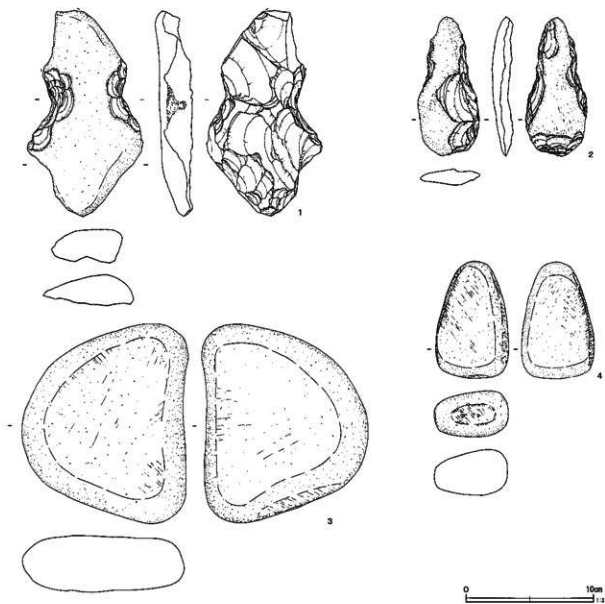
平面台形の自然礫をほぼ無加工で使用している。表裏とも擦痕が観察され、一部側縁にも摩擦がみられる。

磨石 (第213図4)

平面台形を呈する。表裏および両側縁・下面が使用され、それぞれ著しい摩滅がみられる。下面および側縁は敲石としても使用された可能性がある。

第27表 F区第12・13号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	打製石斧	15.9	9.0	2.9	379.1	C-①	緑色岩
2	打製石斧	10.8	4.8	1.6	84.1	B-①	砂岩
3	石皿	15.5	13.0	4.3	1388.3	C-a-①	閃緑岩
4	磨石	9.1	5.7	3.5	279.8	B2-①	閃緑岩



第213図 F区第12・13号竪穴住居跡出土石器





第14号住居跡出土遺物

土器 (第216図・217図)

1は安行3a式の水平口縁深鉢である。口縁から胴下半部にかけて残存する。

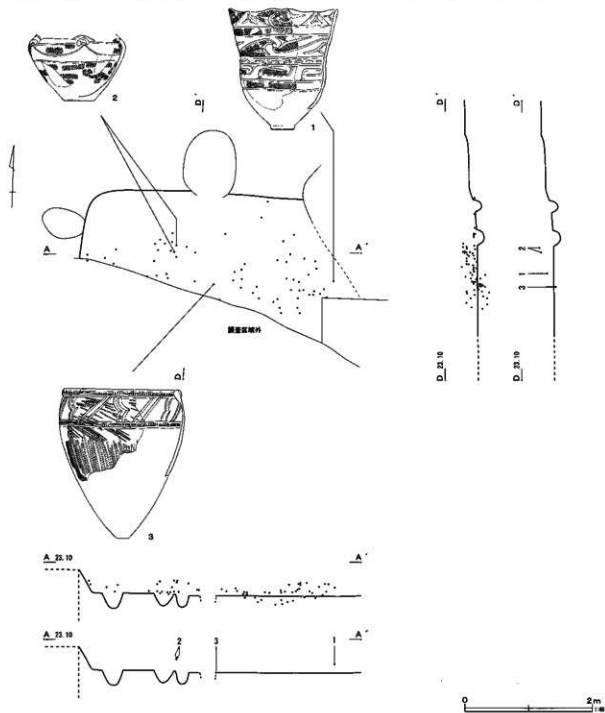
頸部に平行沈線による帯縄文、胴部中段の括れ部分には連鎖状の隆帯が巡って文様帯を区画する。

口縁部の文様帯はたすき状の沈線により文様帯内

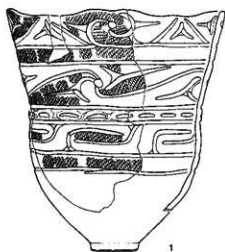
部が鋸歯状に区画され、円形刺突をはさんだ対向三叉文と独立の三叉文が交互に配される。

胴上半部の文様帯には同種の対向三叉文と単沈線の入組文が複合的に描かれる。胴下半部にはクランク状の沈線を上下交差させた直線的な入組文を描いて間隙に縄文が充填され、下端を帯縄文で区画する。

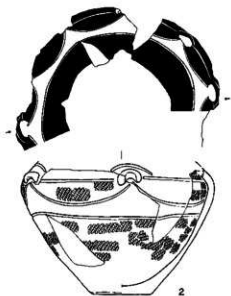
地文はLR単節横位回転の縄文である。



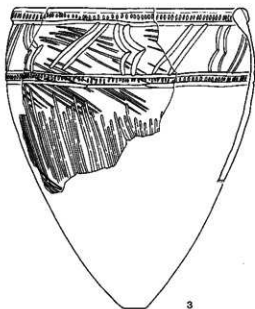
第215図 F区第14号竪穴住居跡出土遺物分布図



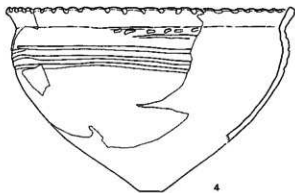
1



2



3



4



第216図 F区第14号竪穴住居跡出土土器(1)

2は広口壺形土器で、やはり安行3a式であろう。胴部中段から底部にかけて残存する。

胴部中段に紡錘形の磨消モチーフが回り、中央を1条の沈線が横断する。接点には逆U字状の小突起が配される。胴下半部は縄文帯となり、上端を1条の沈線で区画する。地文はLR単節横位回転の縄文である。

3は晩期前葉の紐線文土器である。口縁直下に断面台形の隆帯が回り、篋状工具先端の刻みが施される。胴上半部の文様帯には平行沈線による斜位のた

すき状モチーフと縦位の連弧状モチーフが交互に配される。文様帯下端は刻みを伴う平行沈線により区画される

集合沈線文を地文とし、文様帯周辺では横位ないし斜位、胴下半部では縦位方向に施文される。

4は半粗製の浅鉢である。口縁から胴下半部にかけて残存する。頸部に括れを持ち、口縁外反する。口縁無文で、口唇上に棒状工具の刻みが施される。頸部には列点文が巡って、胴部との境を1条の沈線で区画する。胴上半部には3条の平行沈線文が巡る。

地文を持たず、焼成はやや不良で、器表面の風化が著しい。

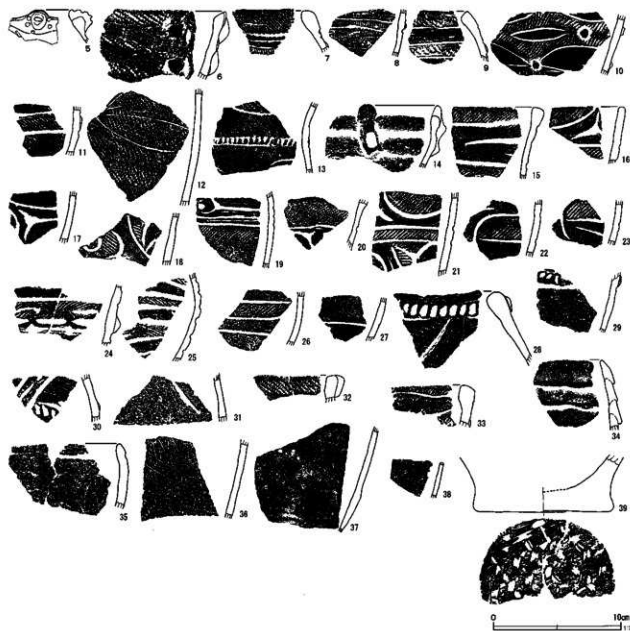
5以下は破片資料である。5は高井東式の深鉢口縁部で、刺突列を伴う小突起が配される。6は安行1式の水平口縁深鉢で、縮縮を中心に帯縄文が巡る。7・8は安行2式で、7は砲弾形深鉢の口縁部、8は刻みを持つ隆帯の巡る胴部破片である。

9以下は晩期前葉の土器群と考えられる。9は砲弾形の水平口縁深鉢口縁部で、扁平な隆帯上に縄文を施文する。32・33は大波状口縁深鉢口縁部、13は胴部中段の括れ部分である。

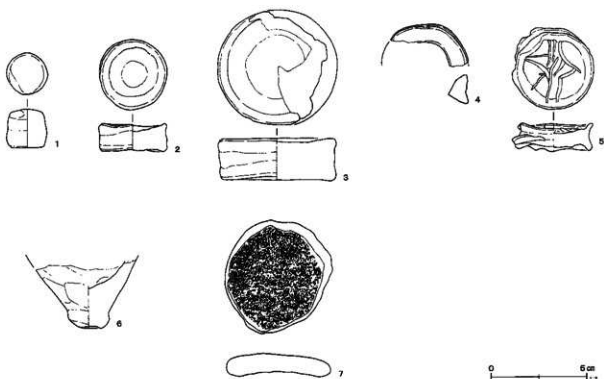
15～27は復元個体1に類似の水平口縁深鉢で、やはり安行3a式と考えられる。三叉文と入組文を主体とする文様が描かれる。24は文様帯を区画する連鎖状の隆帯である。

28～31・36は晩期前葉の紐線文土器である。刻みを伴う隆帯区画内部に平行沈線文が描かれ、集合沈線文を地文とする。

34・35は無文粗製深鉢で、34は多段の折り返し口縁、35は口縁直下に1条の沈線が巡る。37・38は無文の深鉢胴部。39は底部で、底面に縄代圧痕がみられる。



第217図 F区第14号竪穴住居跡出土土器(2)



第218図 F区第14・15号竪穴住居跡出土土製品

土製品

耳飾 (第218図1~5)

1は中実白状の耳飾で、直径と高さがほぼ等しい円筒形を呈する。側縁の袢りはほとんどみられず、むしろ胴張りとなっている。完形で、最大径2.2cm、高さ2.0cmを測り、重量10.4gを量る。

2・3は直径が卓越し、やや扁平な白状耳飾である。2は完形で、最大径3.5cm、高さ1.5cmを測り、重量17.8gを量る。3は全周の二分の一強が残存し、最大径6.2cm、高さ2.2cmを測る。

4は無文の滑車形耳飾で、断面三角形を呈する。全周の三分の一弱が残存し、最大径4.5cm、高さ1.5cmを測る。5は扁平な白状耳飾で、上面中央の窪み部分に十字状の沈線モチーフが描かれる。胎土乾燥前に圧力が加えられたものとみられ、下面の縁辺部が著しく歪んでいる。完形で、最大径4.1cm、高さ1.5cm

を測り、重量20.1gを量る。

ミニチュア土器 (第218図6)

無文の尖底で、円形の高台が付される。

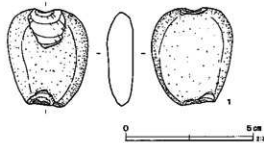
土製円盤 (第218図7)

無文の胴部破片を用いる。最大径5.6cmを測り、重量32.5gを量る。

石器

石錘 (第219図)

不整形円形の頭を用い、長軸両端に両面剥離による袢りを持つ。



第219図 F区第14号竪穴住居跡出土石器

第29表 F区第14号竪穴住居跡 石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	分類	石材
1	石錘	3.2	3.8	1.0	18.0	A-a-①	砂岩

## (2) 炉跡

### F区第1号炉跡 (第220図)

M-29グリッドに所在する。不整形円形を呈し、長軸1.0m・短軸0.8m、深さ9cmを測る。主軸方向はN-20°-Eを指す。遺物は出土していない。

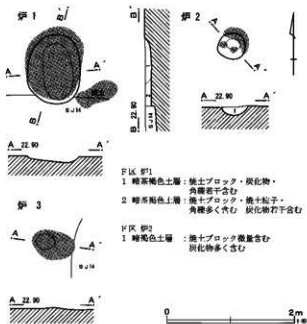
### F区第2号炉跡 (第220図)

M-29グリッドに所在する。不整形円形を呈し、長軸0.4m・短軸0.4m、深さ22cmを測る。主軸方向はN-25°-Wを指す。遺物は出土していない。

### F区第3号炉跡 (第220図)

M-29グリッドに所在する。地山黄褐色シルト上に焼土面を検出した。黒色土中に掘り込まれていたものとみられ、壁の検出に至らなかった。

長軸0.3m・短軸0.2mの不整形円形を呈するものとみられ、深さは不明である。主軸方向はN-82°-Wを指すものとみられる。遺物は出土していない。



第220図 F区炉跡

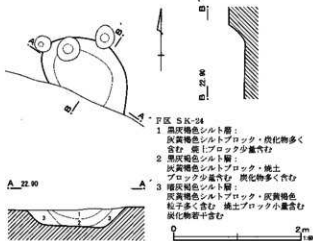
## (3) 土壌

### F区第24号土壌 (第221図)

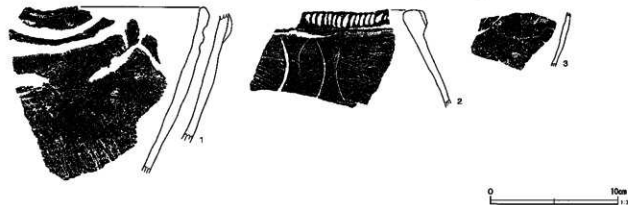
M-24グリッドに所在する。第14号壁住居跡の覆土中で検出され、床面を切って掘り込まれている。南西壁が調査区域外に存在する。

長軸1.5m・短軸0.8mの不整形円形を呈するものとみられ、深さ28cmを測る。主軸方向はN-50°-Wを指す。

底面は平坦で、東に向かって傾斜している。遺物は後期後葉から晩期前葉の土器片が出土しているが、住居跡との切り合いから判断して、土壌の時期は晩期前葉と考えられる。



第221図 F区第24号土壌



第222図 F区第24号土壌出土土器

## F区第24号土壌出土遺物

### 土器 (第222図)

1は高井東式の大波状口縁深鉢で、口縁部の破片である。波頂部を欠失するが、直下に縦溝を配し、口縁に沿って2条の凹縁が巡る。

## (4) 配石遺構

今回調査された範囲の縄文時代包含層中からは多量の礫が出土した。それらのなかで、竪穴住居跡の炉跡を構成するもの以外で唯一面的なまとまりを持ち、人為的な石組みと考えられたものについて「配石遺構」と呼んで報告することとした。

### F区第1号配石遺構 (第223図・224図)

L-29グリッドに所在する。長軸4m・短軸2.5mの範囲に40個程の礫が集中している。

礫のサイズは長軸60cmを測るものから鶏卵大まで様々であるが、扁平な河原石や板状・柱状の垂角礫が多用される。

遺構の北西縁を通る断面B-B'上では礫は東西方向に軸を揃えた小口立となっており、一方、南

2は晩期前葉の紐線土器で、口縁に刻みを持つ隆帯が巡り、胴上半部の地文集合沈線文上に対弧モチーフが2つ並ぶ。3は無文の胴部破片で、いわゆる製塩土器である。

東縁断面D-D'上では南北方向の小口立となっていて、全体として中央の空白部分を二方向から取り囲むような構成をなしている。

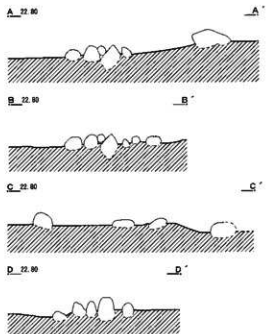
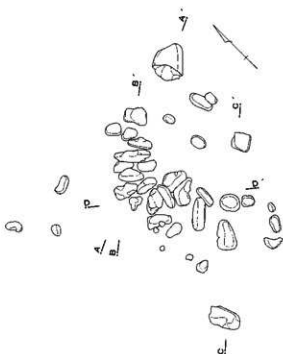
このため、石組みそのものは長軸をほぼ南北に向けているが、N-47-Eを指す方形の遺構の南西隅部分が残存したとみることできる。

配石面から若干の土器片の出土がみられた。遺構の時期は第225図1の復元個体から、安行3a式と考えられる。

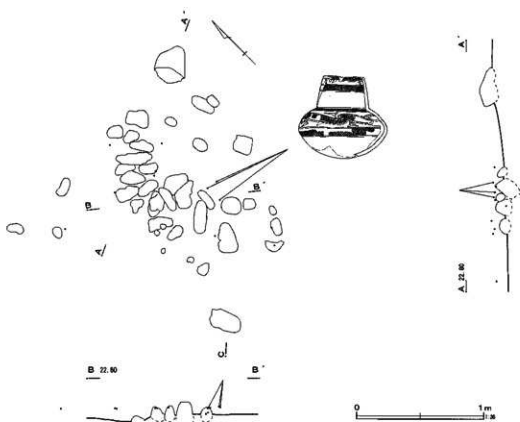
### F区第1号配石遺構出土遺物

#### 土器 (第225図)

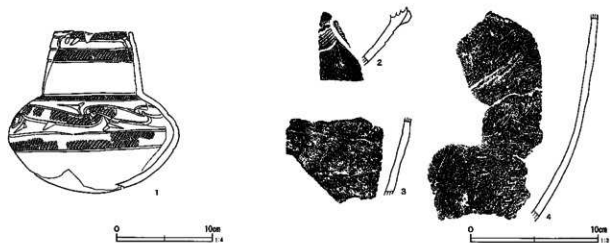
1は壺形土器で、安行3a式である。中段がやや鋭角に張り出すソロバン球の胴部に、やや内傾する



第223図 F区第1号配石遺構



第224図 F区第1号配石遺構遺物分布図



第225図 F区第1号配石遺構出土土器

円柱状の頸部～口縁部が付属する。

口縁直下に2段の帯縄文が巡り、中間の区画線の一部分が魚眼三叉文に変化する。胴上半部に上下を帯縄文で区画した文様帯を持ち、円形刺突を基点とする入組文が巡る。間隙には三叉文が充填される。胴下半部は無文である。

地文はLR単節横位回転の縄文である。

2以下は破片資料である。2は晩期前葉の壺形土器の胴下半部とみられる。張り出しの直下に貼り瘤を持ち、直下に弧線文が交差して、内部にLR単節の縄文が施文される。

3・4は晩期前葉の粗製土器で、無文の深鉢胴部



である。3はひだ状の圧着痕が残り、4は篋状工具

の調整痕が観察される。

### (5) 土器埋設遺構

#### F区第1号土器埋設遺構 (第226図)

M-29グリッド北端に所在する。遺物包含層中に掘り込まれたピット内部に第227図1の浅鉢を逆位で埋置し、周囲を同図2の深鉢大破片で被覆したものと考えられる。

土器の取り上げ後、地山シルト面を精査したところ、掘りかたとおぼしきピットを検出した。直径36cmの不整形形のピットで、出土土器の最高点から墳底までの深さは42cmを測る。

#### F区第1号土器埋設遺構出土遺物 土器 (第227図)

1は完形の浅鉢で、安行3b式である。扁平で中段が丸く張り出す鉤状の胴部で、頸部「く」の字に屈曲し、口縁は軽微に外反しつつ直線的に開く。底部は丸底で、直上に段を持つ。

水平口縁で、刻みを持つ扁平な突起が三個一単位

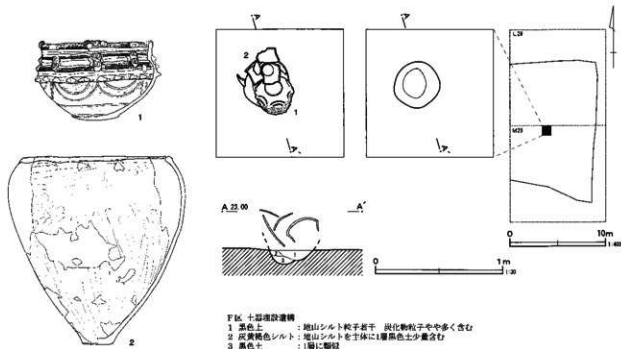
で配される。口縁直下に縄文帯を持ち、1条の沈線  
で区画される。

胴上半部には2条の帯縄文が巡り、中間に二段の  
豚鼻突起を配して、突起間に横楕円形の区画を形成  
する。胴部中段に押圧を伴う隆帯が巡って器面を分  
帯し、胴下半部には平行沈線の弧状区画が巡って、  
下端を1条の沈線で閉塞する。地文はRL単節横位回  
転の縄文である。

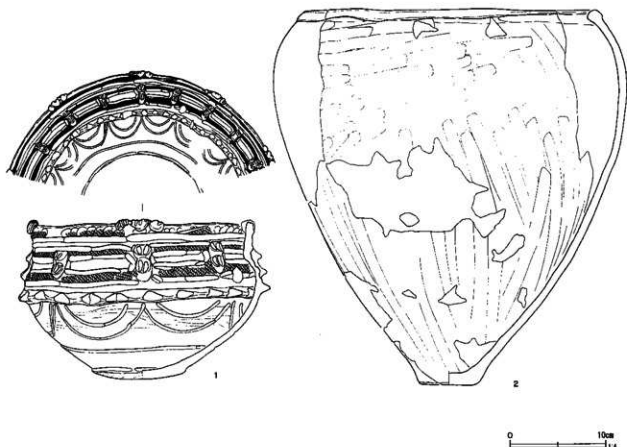
2は無文の粗製土器で、1と同時期のものとみら  
れる。口縁から底部まで残存する。

口縁に比較して底径が小さく、胴上半部に最大径  
を持ち、口縁が極端に内彎する砲弾形の深鉢である。

丸みを持った折返口縁で、口唇断面肥厚する。胴  
上半部には篋状工具による横位の撫で調整痕が観察  
され、中段以下には同様の調整痕が縦方向に密集す  
る。



第226図 F区第1号土器埋設遺構



第227図 F区第1号土器埋設遺構出土土器

## (6) グリッド出土遺物

土器 (第233図~258図)

1~6は後期安行式の系譜を引く大波状口縁深鉢である。

1は口縁から胴下半部にかけて残存する。5単位の波状口縁をなし、波頂部には二又の突起が配され、前面に二段の豚鼻状突起を配する。

口縁下に帯縄文による三角形区画文を配し、胴部中段の楕円形区画帯をはさんで直下にも同様の三角形区画文を重畳させている。区画を構成する帯縄文の交点には豚鼻状の貼付文を配している。

胴下半部は無文で、上端を1条の沈線で区画する。地文はLR単節横位回転の縄文である。安行3a式と考えられる。

2は口縁から胴部中段にかけての部分が残存する。やはり5単位の波状口縁をなすものとみられ、

波頂部直下前面に扁平な縦瘤を配する。

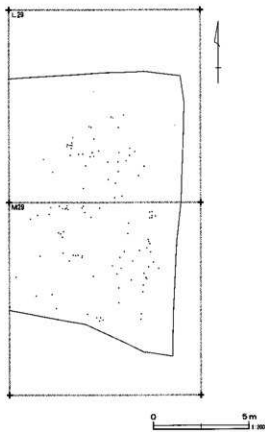
胴上半部には帯縄文による三角形区画文、胴部中段には楕円形区画帯が巡り、交点には豚鼻突起が配される。地文はRL単節横位回転の縄文である。

安行3a式と考えられる。

3は口縁から胴部中段まで残存する。4単位の波状口縁をなすものとみられ、波頂部直下前面に2段の豚鼻状突起を配する。波底部にも単独の突起が配される。

1・2で帯縄文を構成していた隆帯は平行沈線化し、磨消縄文化している。口縁下の三角形区画文は弧状の帯縄文へと分離し、下端を横位の帯縄文で閉塞して、接点に豚鼻状突起を配する。

胴部中段の楕円形区画帯はネガポジ逆転して横位連続する紡錘文となって、やはり連結部分に豚鼻状



第228図 F区グリッド遺物分布図(1)

突起が配される。地文はLR単節の縄文である。

安行3 b式に位置づけられる。

4は口縁から胴下半部まで残存する。5～6単位の波状口縁をなすものとみられ、波頂部には二又の突起が配され、前面に二段の豚鼻状突起を配する。波底部にも同様の突起が配される。

胴上半部の三角形区画は解体され、左右の斜辺は口縁部の縄文帯下端の区画線と同化している。底辺は横位に連続する半円形区画へと変化しているが、これは3の個体にみられたネガポジ反転した区画帯に類似する。

胴中段には入組三又文が横位連続して描かれる。胴下半部は縄文帯となり、上端を1条の沈線で区画する。

地文はLR単節の縄文である。安行3 b式と考えられる。

5は口縁部から胴上半部のみが残存する。ごく緩い波状口縁の波頂部に扁平な四又の突起が配され、

前面に二段の豚鼻状突起を配する。

口縁部直下の縄文帯は消失し、三角形区画の成れの果てである弧状の帯縄文が巡っている。地文はLR単節の縄文である。安行3 b式である

6は口縁から胴下半部まで残存する。4単位の波状口縁をなす。

波頂部には二又の突起が配され、前面には二段の指頭押圧を伴う縦縮が付されるが、これは4・5のような二段の豚鼻突起から変化したものとみられる。波底部にはごく扁平な二個一對の貼り瘤が配される。

口縁下には不連続な1条の沈線が巡る。胴上半部には平行沈線による弧状の区画が巡って、下端を横位の平行沈線で区画する。沈線間にはいずれも単列の列点文が充填されている。

胴中段には上下の連続弧線文が交互配置され、コンパス状の入組文となっている。胴下半部は無文で、篋状工具による縦位の撫で調整が観察される。

縄文は施文されない。安行3 c式のごく古い段階に位置づけられる。

7・8は小型の水平口縁深鉢である。

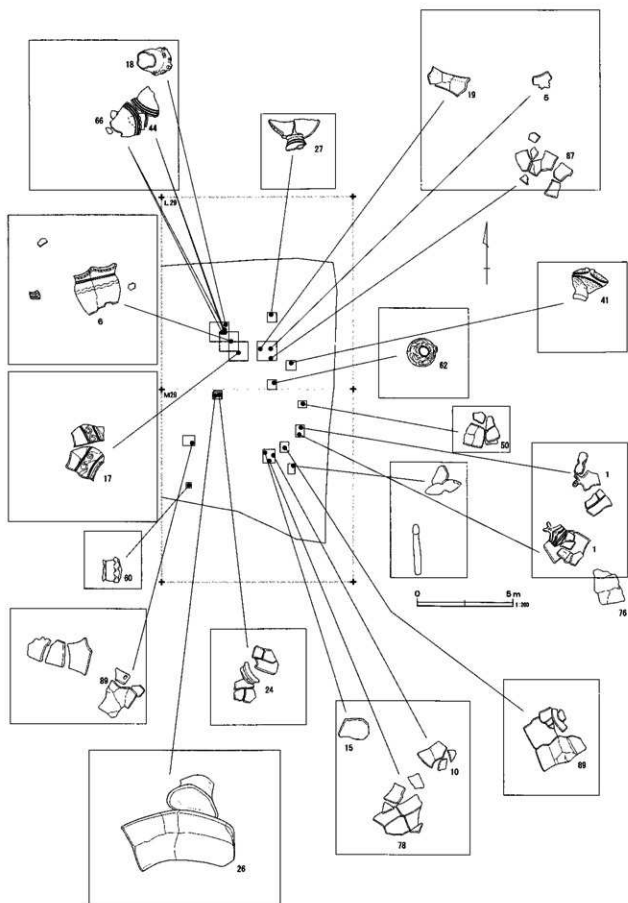
7は口縁直下に刻みをとまなう縦長の突起と横位の豚鼻状突起がならび、突起間には帯縄文による楕円形の区画が形成される。

地文はRL単節横位回転の縄文である。安行3 a式であろう。

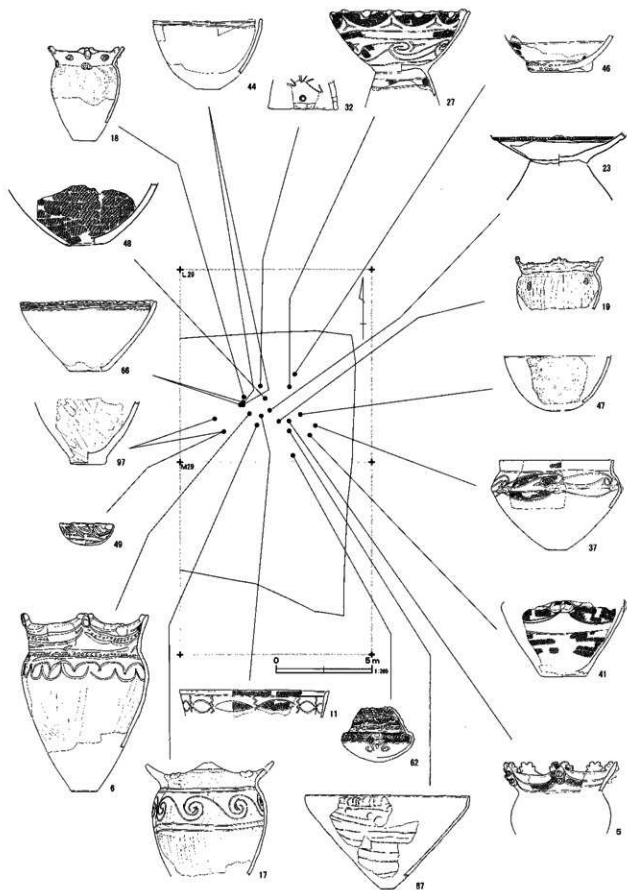
8は中段に押圧を伴う縦長突起のみが配され、横位の帯縄文間に二段の楕円形区画が形成される。地文はRL単節横位回転の縄文である。安行1式と考えられる。

9は安行3 a式の磨消縄文系深鉢である。口縁から胴中段まで残存する。

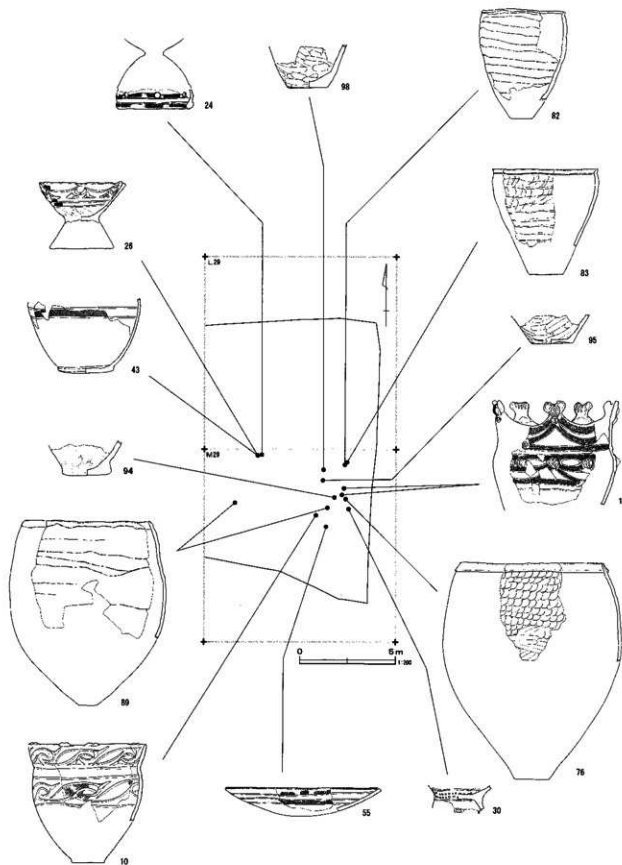
多単位の山形波状口縁をなす。口縁下に縄文帯を持ち、下端を弧状の沈線で区画する。直下には横位の帯縄文が巡り、両者の間の無文部には三又文が充填される。



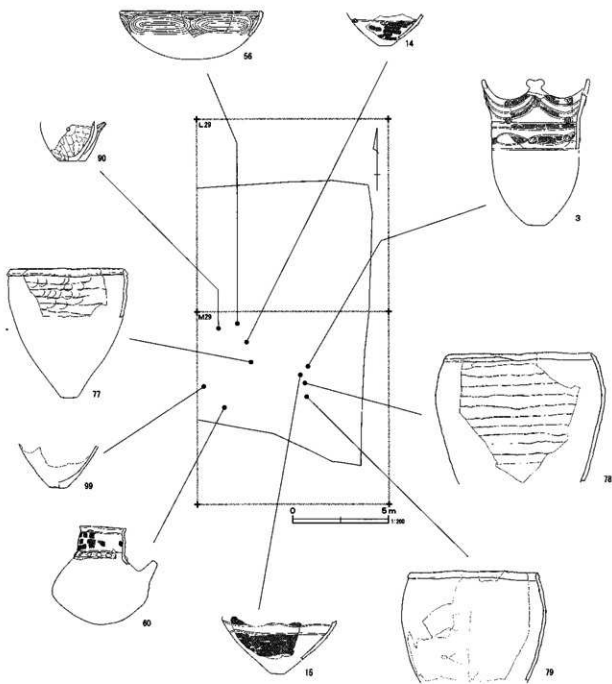
第229図 F区グリッド遺物分布図(2)



第230图 F区グリッド遺物分布図(3)



第231図 F区グリッド遺物分布図 (4)



第232図 F区グリッド遺物分布図(5)

胴部には横位の入組文と三叉文がやや崩れたモチーフとなって描かれ、文様帯下端を横位の帯縄文により区画している。地文はLR単節の縄文である。

10は水平口縁深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。口端に二個一対をなす小突起が配される。口縁部直下と胴部中段に文様帯を持ち、それぞれに横位の入組三叉文が描かれる。胴部の文様帯のみかすかにLR単節の縄文が残る。安行3 a式である。

11は水平口縁の深鉢で、東北地方の埴付土器の影響下にある連結弧線文系の土器である。口縁から胴上半部が残存する。

口縁下に縄文帯を持ち、下端を1条の沈線で区画する。胴上半部には横位の紡錘文が巡り、モチーフの接点には波状の沈線が垂下する。地文はRL単節の縄文である。安行3 a式であろう。

12は小波状口縁の深鉢で、口縁から底部直上まで残存する。ゆるやかに内彎しながら立ち上がる単調な壺形で、帯縄文が3段にわたって重畳する。胴下半部は縄文帯となるが、上端に何ら区画を伴わない。地文はLR単節の縄文である。晩期前葉の土器と考えられる。

13~15は深鉢胴下半部で、1~5のような波状口縁深鉢に伴う可能性が高い。

13は胴部の文様帯下端を区画する波状の沈線がみられ、直下にRL単節の縄文が施文される。胴下半部は無文化し、篋状工具による横位へ斜位の撫で調整が観察される。安行3 b式であろうか。

13は胴下半部に縄文帯を持ち、上端を1条の沈線で区画したうえで、横位の豚鼻状突起を配している。地文はRL単節の縄文である。時期は晩期前葉である。

15は下端を沈線で区画された胴部文様帯の一部と、上端を沈線で区画された胴下半部の縄文帯がみられる。地文はLR単節の縄文である。深鉢と判断したが、胴部中段が張り出す浅鉢や、40のような広口壺である可能性もある。晩期前葉、おそらくは安行3 a式と考えられる。

16は小波状口縁の深鉢である。口縁から胴部中段にかけて残存する。頸部に二段の列点を伴う平行沈線が巡って文様帯を大きく上下に分帯している。口縁部には横位の入組三叉文が巡る。胴部にも類似の文様が描かれるものとみられる。安行3 c式である。

17は4単位の山形波状口縁の深鉢である。口縁から胴下半部まで残存する。頸部に強い括れを持ち、口縁は肥厚しつつ直線的に開く。波状口縁の波頂部を欠失するが、波底部には二個一対をなす小突起が配されている。胴上半部に文様帯を持ち、大柄の入組文が描かれる。文様帯の上下は平行沈線で区画される。口縁部から頸部には横位の研磨、胴部には篋状工具による縦位の撫で調整が観察される。安行3 c式である。

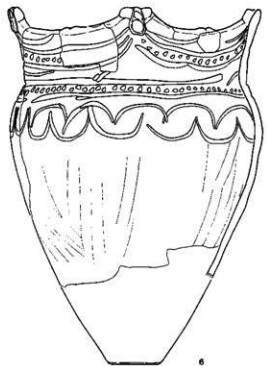
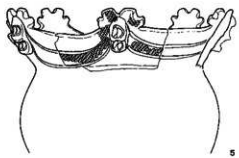
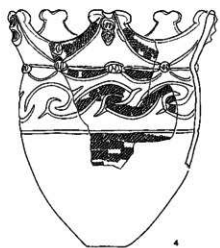
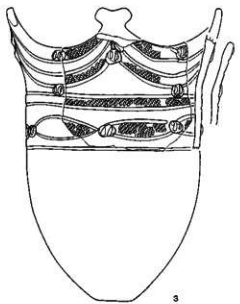
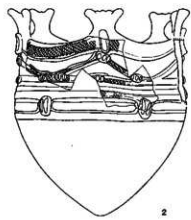
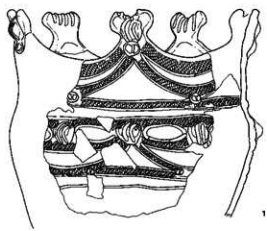
18・19は無文地に突起のみを配した深鉢である。晩期安行式の大波状口縁深鉢のイメージを簡略に表現した一群で安行3 b式と並行する北関東系の土器群とみられる。

18は水平口縁上に三叉をなす山形突起を5単位配し、前面には中段に押圧を伴う縦長の貼付文を配する。頸部と胴部との間に強い括れを持ち、これに沿った口縁突起直下に豚鼻状突起を配する。また、突起どうしの中間点における頸部中段にも豚鼻状突起を配している。地文を持たず、胴部には縦位の研磨が観察される。

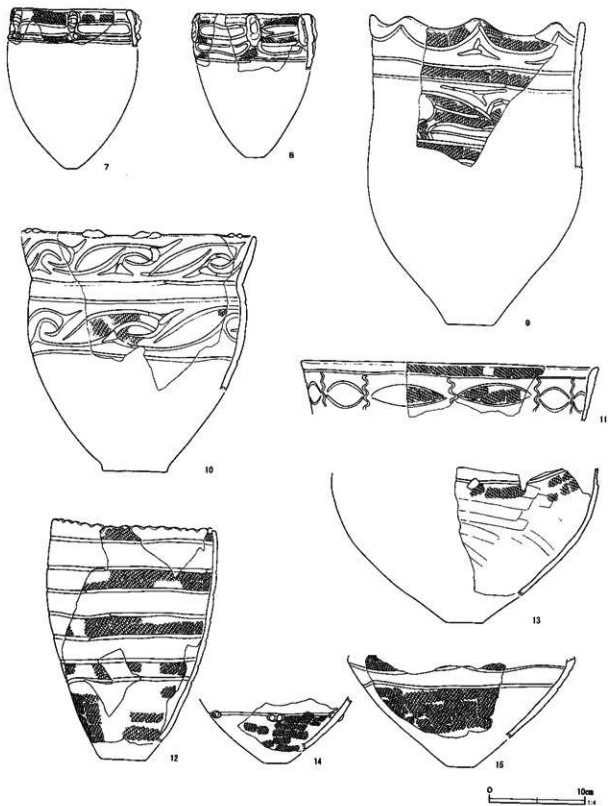
19は口縁から胴部中段までが残存する。水平ないしごく緩やかな波状口縁をなし、波頂部に三叉の山形突起を配する。また、波底部にも二個一対の小突起を配している。頸部と胴部の境には強い屈曲を持ち、波底部突起に対応する部分の胴部中段には中央に押圧を伴うボタン状の貼付文が配される。

20・21は砲弾形の無文深鉢に突起だけが付されるもので、やはり安行3 b式期のものである。いずれも口縁直下に上下一対の押圧を伴う縦長の貼付文を配し、この貼付文どうしの中間点にあたる胴上半部には、中央に押圧を持つボタン状の貼付文が配される。20は口縁から胴下半部まで残存する。21は口縁か

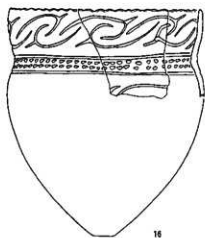




第233図 F区グリッド出土土器 (1)



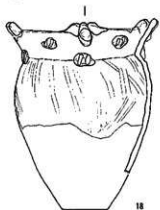
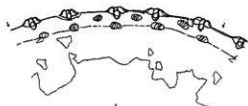
第234図 F区グリッド出土土器 (2)



16



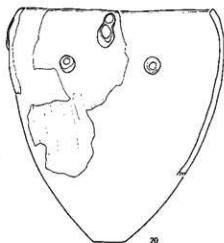
17



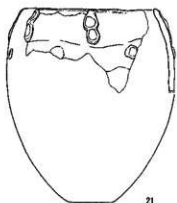
18



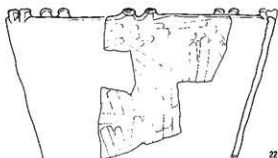
19



20



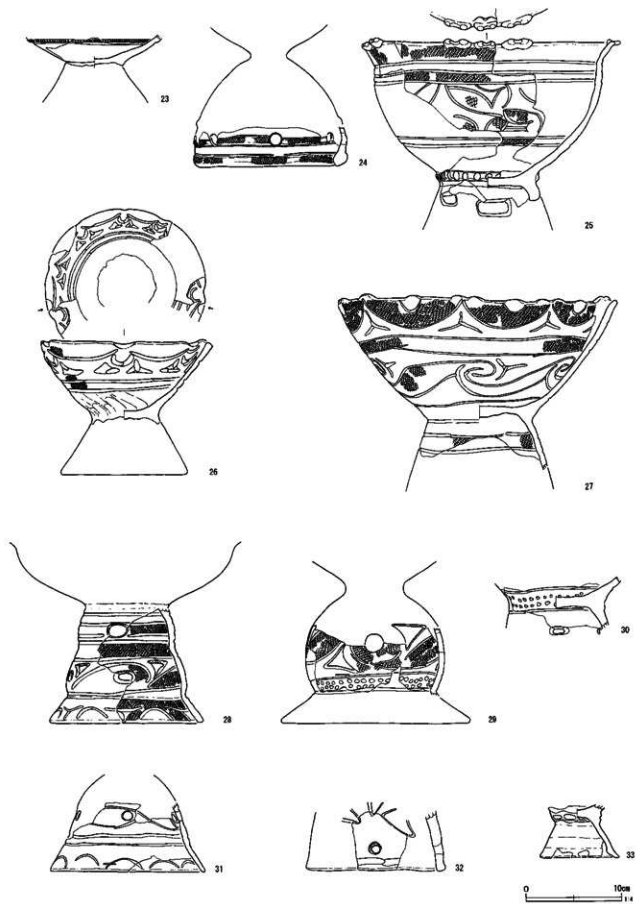
21



22



第235図 F区グリッド出土土器 (3)



第236図 F区グリッド出土土器(4)

ら胴部中段付近まで残存し、内外に輪積痕を残している。

22は水平口縁深鉢で、口縁から胴部中段にかけて残存する。バケツ状に直線的に開く器形で、口端が僅かに内屈して内面に稜をなす。上面に押圧を伴う円柱状の突起が口端上に二個一対で配される。晩期前葉のものか。

23～33は台付鉢である。21は胴部下半から脚台への接続部まで残存し、胴下半部に刻みを伴う隆帯が巡る。後期安行式に伴うものであろう。23はドーム状に膨れる脚台で、2段の帯縄文が巡り、円形の透かし孔が穿たれる。安行1式期のものか。

25は安行3a式で、口縁から脚台の一部までが残存する。体部は口縁直下に括れを持つ金魚鉢形で、水平口縁上に3対の小突起が配される。口縁下に縄文帯を持ち、下端を1条の沈線で区画する。胴部の文様帯は上下を帯縄文で区画し、内部に崩れた入組弧線文を配する。

脚台は円錐形で方形の透かし孔を穿ち、体部との境を押圧をとまう隆帯で区画している。地文はLR単節の縄文である。

26・27は体部がさかざき形に開く台付鉢である。26は口縁から脚台との接続部分までが残存する。水平口縁上に5～6単位の凹部を配する。口縁直下に縄文帯を持ち、下端を弧状沈線で区画する。口縁の凹部に対応する部分では弧線が切れ、直下にU字状の短沈線が挿入されて、左右に三叉文が配される。文様帯の下端は平行沈線で区画されて、以下は無文となる。地文はLR単節の縄文である。安行3a式であろう。

27は口縁から脚台の中ほどまでが残存する。水平口縁上に半円形の小突起が並ぶ、口縁下には弧状の区画が巡って内部に縄文が充填される。区画の接点には三叉文が描かれる。

胴部文様は平行沈線による入組文で、余白に三叉文が充填される。文様帯上下は平行沈線によって区画される。脚台部は軽微に内彎する円錐形で、帯縄

文帯が巡る。地文はLR単節の縄文である。安行3a式である。

28は鳳状の括れを持つ脚台部である。帯縄文によって器面がいくつかに分帯されており、下端の膨れ部分には鉤状の弧線文化した入組文が描かれて、楕円形および三角形の透かし孔が穿たれる。

裾部には弧線文と三叉文が交互に配される。地文はLR単節の縄文である。安行3a式新段階と考えられる。

29は球脚状の脚台部で、ほぼ中段部分が残存する。体部との接続部分からドーム状にふくれた後いったん括れ、裾部が直線的に開くものとみられる。文様は平行沈線による入組文が描かれ、円窓と三角形の透かし孔が魚眼三叉文風に配置される。

文様帯下端は平行沈線によって区画され、複列の列点文が充填されている。地文はLR単節の縄文である。安行3a式であろう。

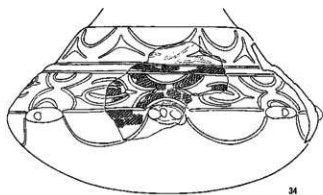
30は体部と脚台部の接続部分のみ残存する。複列の列点文を伴った平行沈線の区画が巡り、脚台部には横楕円形の透かし孔が穿たれている。後期前葉のものか。

31はドーム状の脚台である。中段にごく簡略化した入組文が描かれ、円形の透かし孔が穿たれる。文様帯下端は平行沈線で区画され、裾部には下弦の弧線文が巡る。地文を持たない。安行3b式と考えられる。

32は円錐状の脚台で円形および三角形の透かし孔が穿たれる。33は小型円錐形の脚台で、体部との接続部分には連鎖状の隆帯が巡る。いずれも晩期前葉のものか。

34～41は広口壺ないし鉢で、いずれも断片的な資料である。

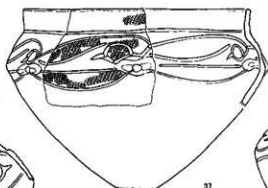
34は胴部破片である。中央に押圧を伴う横長の突起を中心に、X字モチーフと対向三叉文によって文様が構成され、上を平行沈線、下を半円形の磨消文様によって区画する。頸部には連続弧線文と三叉文が描かれる。地文はLR単節の縄文である。安行3a



34



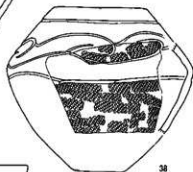
35



37



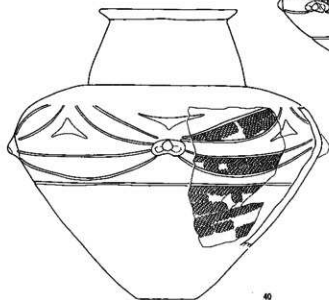
36



38



39



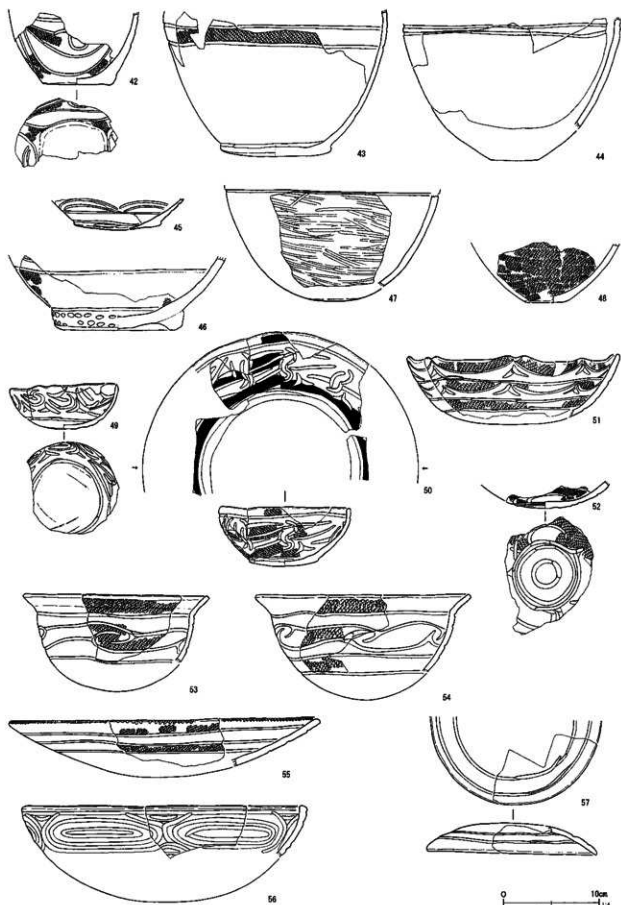
40



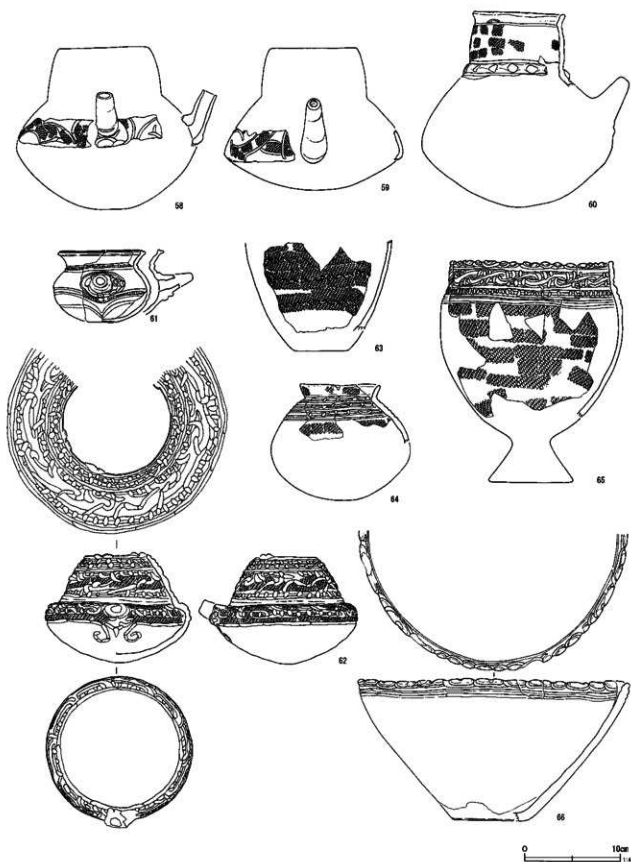
41



第237図 F区グリッド出土土器(5)

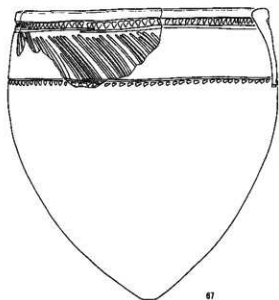


第238図 F区グリッド出土土器 (6)

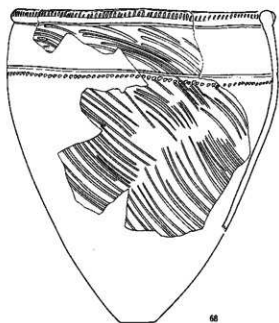


第239図 F区グリッド出土土器 (7)

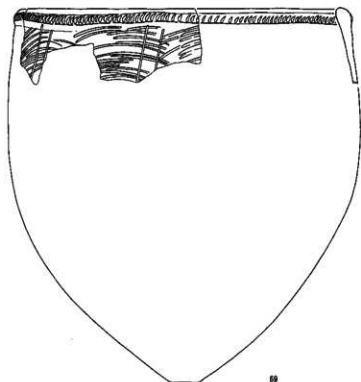




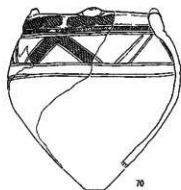
67



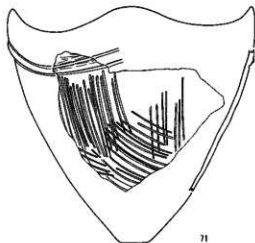
66



68



70



71



第240図 F区グリッド出土土器 (8)

式と考えられる。

35は口縁から胴上半部までが残存する。口縁部に縄文帯を持ち、頸部に対向三叉文が巡る。胴部との境は帯縄文で区画している。安行3 a式と考えられる。

36は頸部から胴上半部まで残存する。頸部と胴部にそれぞれ文様帯を持って入組三叉文が描かれ、両者の境を帯縄文で区画している。地文はLR単節の縄文である。安行3 a式である。

37は胴上半部に最大径を持ち、短い頸部が直立する鉢である。口縁から胴部中段までが残存する。胴部が最も張り出す部分に横長の突起を配し、突起間を直線と弧線を組み合わせた半月形のモチーフで連繫する。安行3 a式である。

口縁は下端を沈線で区画した縄文帯となっており、両者の間に文様が展開する。モチーフは直線化した入組三叉文の変形である。地文はLR単節の縄文である。安行3 b式と考えられる。

38は胴部中段が「く」の字に張り出す鉢ないし壺である。胴部最大径よりやや下に1条の沈線が巡り、以下底部までは縄文帯となっている。胴上半部には直線的な入組文が描かれている。地文はLR単節の縄文である。安行3 b式と考えられる。

39は壺で、胴部やや扁平で、底部が丸底に近くなるものとみられる。やはり胴部最大径の部分に横長の突起を持ち、これを帯縄文で連繫している。胴上半部には弧状のモチーフが並んで上端を沈線で閉塞し、胴下半部は1条の沈線が巡って無文である。晩期前葉に位置づけられる。

40は胴上半部に最大径を持つ腰高の器形でやはり壺とみられる。半月状の磨消モチーフが左右に連繫し、余白に三叉文が充填されるものとみられる。胴下半部は縄文帯で、上端を1条の沈線で区画している。地文はLR単節の縄文である。安行3 a式と考えられる。

41は胴部中段から底部の直上までが残存する。最大径の部分に配される横長の突起を半月状のモチ

フで連繫し、胴下半部は縄文帯で、上端を1条の沈線で区画している。地文はLR単節の縄文である。晩期前葉に位置づけられる。

42～57は鉢および皿である。いずれも晩期前葉のものと考えられる。

42は円口方底型の鉢で、安行3 b式期のものであろう。底面の四隅から胴部に向かって縄文帯が立ち上がり、器面をパネル状に四分割する。区画内部には変形の入組文が描かれるようだ。地文はRL単節の縄文である。

43は丸底の鉢で底部から胴部中段までが残存する。胴部中段に帯縄文が巡り、文様帯下端を区画するものとみられる。底部の直上に段を持つ。44は胴部のみ残存する。胴部中段に平行沈線が巡り、やはり文様帯下端を区画するものとみられる。

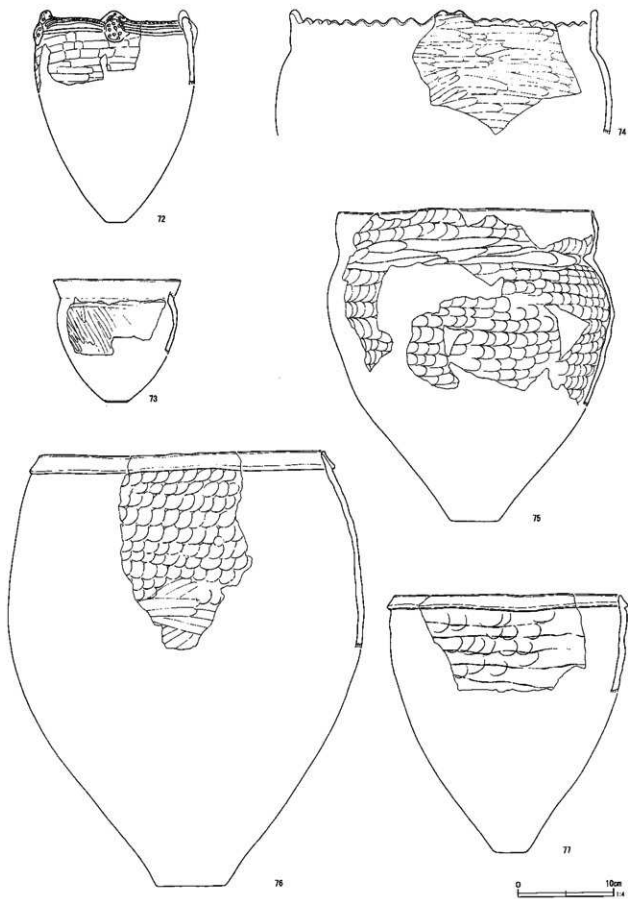
45は43に類似の段を持つ底部で、胴下半部に二重の弧線文を巡らせる。46は上げ底状の底部で、高台部分に複列の列点文を巡らせる。胴下半部は縄文帯となり、上端を1条の沈線で区画する。地文はLR単節の縄文である。

47は無文の胴下半部で、破片上単に1条の沈線が巡り、胴部の文様帯との間を区画するものとみられる。底部は丸底か、43に類似の段をなすものとみられる。

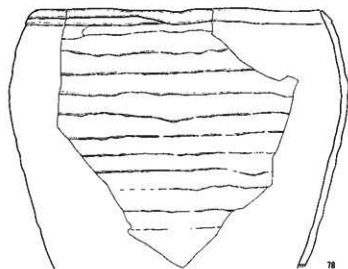
48は縄文のみ施文される底部で、地文はLR単節の縄文である。49は碗形の土器である。小波状口縁をなし、底部は丸底である。胴部に複合的な対向三叉文を描き、文様帯下端を1条の沈線で区画する。地文はみられない。安行3 a式期のもと考えられる。

50もこれに類似の鉢で、やはり安行3 a式とみられる。水平口縁で丸底、底部直上には段を有する。入組状の弧線文が垂下し、これと対向弧線文が複合している。文様帯の上下は単沈線で区画される。地文はRL単節の縄文である。

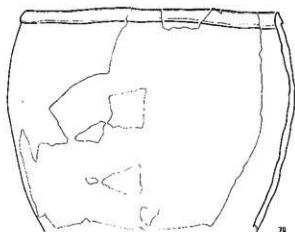
51はやや扁平な碗形の鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。小波状口縁で波頂部双頭状をなす。弧線文と余白を充填する三叉文が二段に巡らされ、下



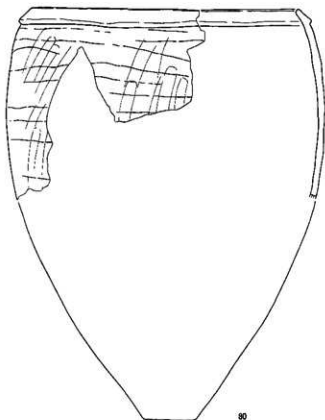
第241図 F区グリッド出土土器 (9)



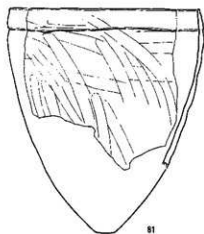
78



79



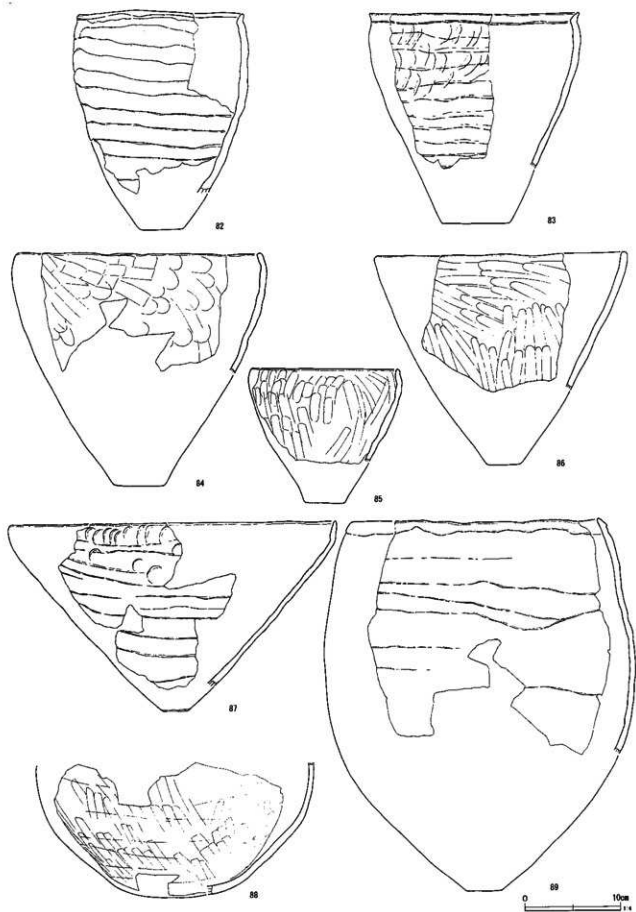
80



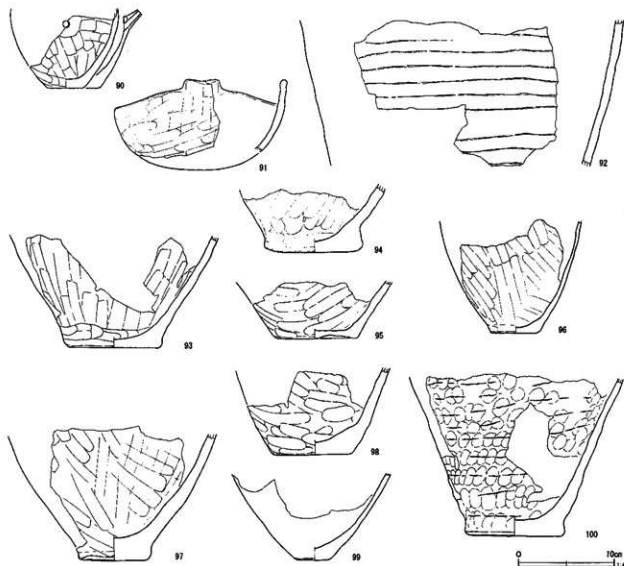
81



第242図 F区グリッド出土土器 (10)



第243図 F区グリッド出土土器 (11)



第244図 F区グリッド出土土器 (12)

端を帯縄文で区画する。安行3 a式であろう。

52は丸底の鉢で、底部のみ残存する。底面に同心円文が描かれ、周囲に磨消文様が展開する。地文はLR単節の縄文である。安行3 a式期のものか。

53・54は扁平な入組文の土器で、安行3 b式である。丸胴で頸部が直線的に外反する特徴的な器形である。口縁下に縄文帯を持ち、胴部に入組文が描かれる。54では文様帯下端を帯縄文により区画する。

55は皿型土器で、口縁に刻みを持つ。口縁および胴部に帯縄文を巡らせる。

56は扁平な同心円文が描かれる。安行3 c式期のものか。57は蓋として図化したが、皿の可能性もあ

る。安行3 bないし3 c式と考えられる。

58～60は注口土器である。58は安行3 a式期のもので、胴部中段と注口部が残存する。磨消縄文による弧線文と三叉文が複合して描かれる。地文はLR単節の縄文である。

59は胴部中段のみ残存するもので、安行3 a式期のものであろう。腰の部分が「く」の字に張り出すソロバン玉状の器形を呈する。磨消縄文による入組文が描かれ、地文はLR単節の縄文である。60は円筒状に立ち上がる口縁部～頸部で、全面縄文が施文され、胴部との境を刻みを伴う隆帯で区画する。地文はLR単節の縄文である。晩期前葉に位置づけられ

る。

61～66は大洞式の影響を受けた土器である。61は大洞B式の注口土器で、注口部の周囲に小突起が配される。64は短頸壺で口縁から胴部中段まで残存する。大洞BC式期のものか。

65は大洞BC式である。口縁下に羊歯状文を描く鉢で、台付土器と思われる。62は注口土器で、肩部および頸部に崩れた羊歯状文が施文される。やはり大洞BC式期に位置づけられる。

66は浅鉢で、口端上に小突起が並び、口縁下に2条の平行沈線が巡る。大洞BC式期のものか。63は縄文のみ施文される深鉢胴下半部だが、結節回転文が観察される。晩期前葉のものであろう。

67～69は紐線文土器である。いずれも後期末～晩期前葉のものとみられる。

67は折り返し口縁の直下に斜位の刺突列が並び、直下に1条の沈線が巡る。胴上半部には斜位の集合沈線文が描かれ、沈線および刺突列によって下端を区画される。68は折り返し口縁上に刻みを持つほかは67に共通する。69は折り返し口縁上に刻みを伴う隆帯が巡る。胴上半部は横位弧状の集合沈線文を地文として、縦位の平行沈線文が垂下する。

70は安行3b式期と考えられ、半粗製の土器である。

折り返し口縁上に縄文が施文され、4単位の小突起が付される。段の直下には刺突列が巡り、上下に沈線のなぞりが加えられる。胴上半部に文様帯を持って、帯縄文による鋸歯文が描かれ、下端を平行沈線で区画する。胴下半部は無文である。

71も半粗製の土器と考えられる。胴部のみ残存するが、波状口縁をなすものと考えられる。無文帯の下に沈線のなぞりを伴う隆帯が巡り、以下に集合沈線文が施文される。晩期前葉のものか。

72は砲弾形の深鉢である。刻みを持った水平口縁で、四単位の小突起を配し、前面に円形の貼り瘤を持って、左右を平行沈線で連繫する。突起と刺突の表面には鋭利な工具による刺突が施され、胴部には

篋状工具による横位の撫で調整が観察される。安行3b式期の半粗製の土器と考えた。

73～82は無文の一群で、晩期前葉の粗製土器である。

73は頸部に括れを持ち、口縁外反するものとみられる。74は胴上半部に最大径を持ち、頸部に括れを持って口縁直立する。小波状口縁で、二個一對の突起が配される。

75は胴上半部に最大径を持ち、頸部に強い括れを持って内面が突出する。口縁は削張りしつつ内彎する。篋状工具によるひだ状の圧着痕が観察される。

76～81は折り返し口縁の深鉢である。

口唇部の形態には、

\*末端が反り返る折り返し口縁(76・77・79・80)

\*断面扁平で先細りの折り返し口縁(78・81)

の二者が存在し、これ以外にも多段化するものや、折り返し部の外面が丸く張り出すタイプ等が存在する。

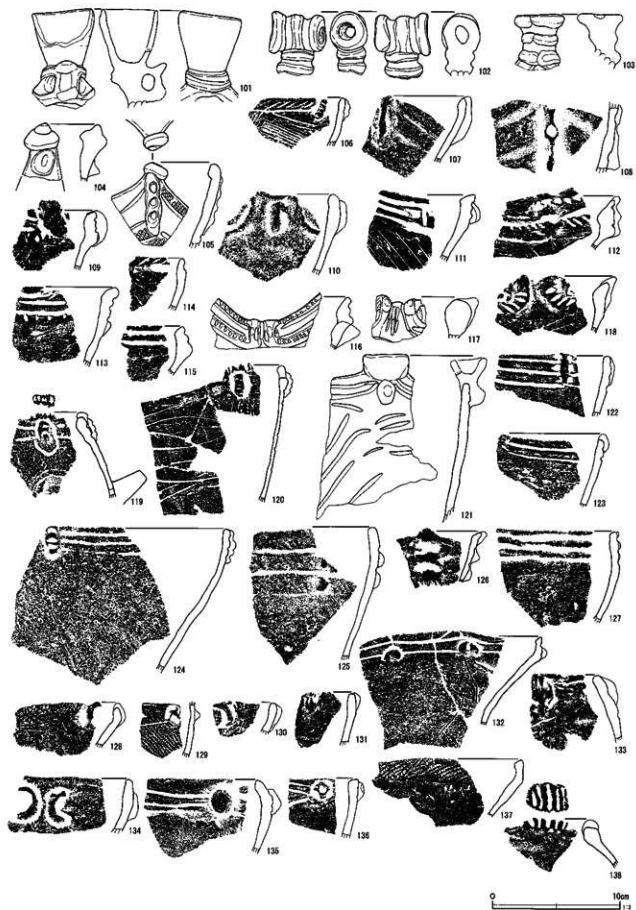
器面調整にも特徴がみられ、篋状工具による粗雑な撫で調整が共通してみられるほか、篋状工具による粘土紐の圧着作業に伴うとみられるひだ状の痕跡がしばしばみられ、輪轆痕を残すものも少なくない。

76では、胴部上半部にひだ状の圧着痕、中段以下には篋状工具のなで調整痕が観察される。78は全面に輪轆み痕が残される。

82～86は単純口縁の深鉢である。器面調整については折り返し口縁のものと共通である。82・83は口縁が「く」の字に外屈する。

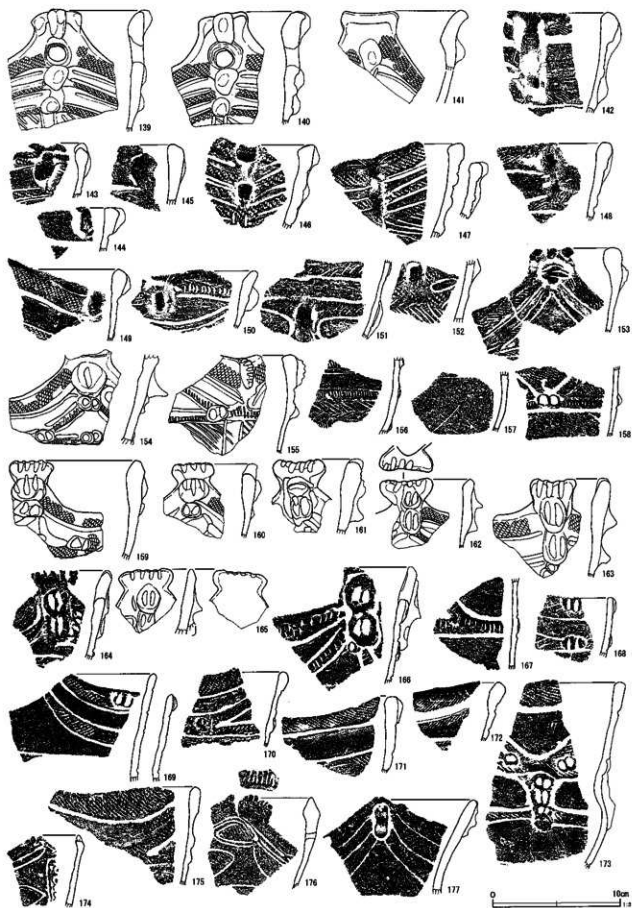
87～91は深鉢以外の器形を一括した。87は浅鉢で、胴部直線的に開いて、口縁のみ直立する。88は丸底になるとみられ、胴張りの浅鉢ないし壺形となる。89は下膨れで胴部中段にゆるい括れを持つ甎形の深鉢で、末端の反り返る折り返し口縁である。

90は注口土器で、口縁部を欠く。91はボウル状の浅鉢で、底部を欠く。ゆるやかな二単位の波状口縁で、波頂部に對を成す突起を配する。

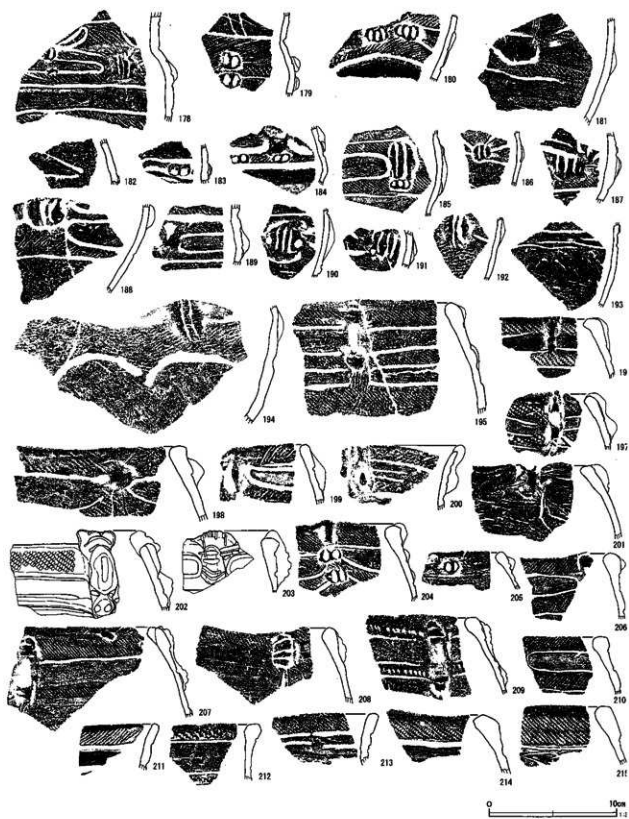


第245図 F区グリッド出土土器 (13)

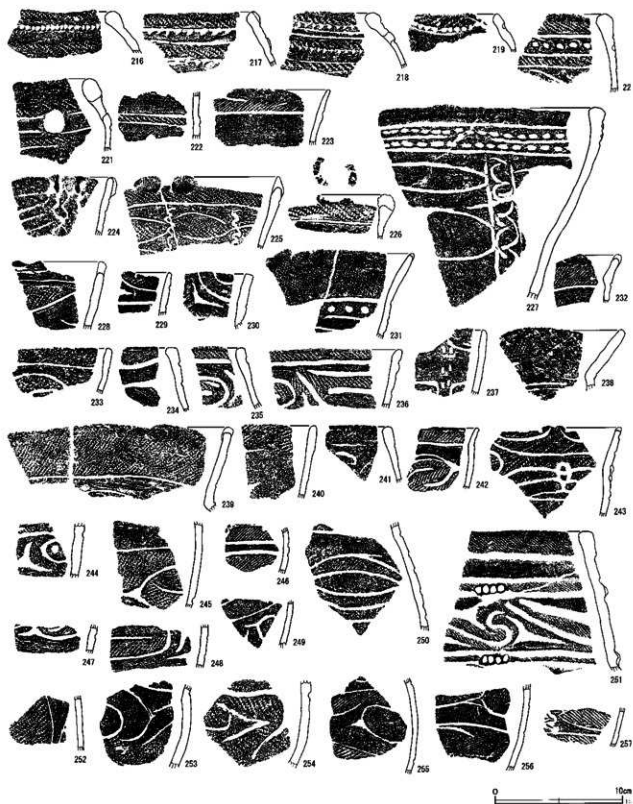




第246図 F区グリッド出土土器 (14)



第247図 F区グリッド出土土器 (15)



第248図 F区グリッド出土土器 (16)

92は深鉢胴部で輪痕を残す。

93~100は底部および胴下半部である。99が安行3b式の精製深鉢に伴う可能性がある他は、大半が晩期前葉の粗製土器と考えられる。

101以下は破片資料である。

101~138は高井東式および曾谷式である。

101~118は大波状口縁の深鉢である。101はさかざき状の中空突起で、前面に橋梁状把手を配する。102は横位の貫通孔を伴う円筒状の突起で、3段の隆帯が巡る。103は中実の円柱状突起で、上面に窪みを持ち、周囲に3段の隆帯が巡る。

104は1段隆帯で比較的小型の突起で、前面には中央押圧を伴う縦瘤を配する。

105は山形波状口縁で、波頂部に扁平な小突起を配し、前面には3段の刺突を伴う縦瘤を配して、左右に平行沈線文による区画を描いて縄文を施文する。

107・108も類似の山形口縁である。

110~112・116~118等は波底部の突起で、単純な縦瘤や、刻みを持つ縦瘤、形骸化した橋梁状把手等がみられる。

120~137は水平口縁の土器である。多くは貼り瘤を持つが、単独のもの以外に複数縦に重畳するもの、縦瘤を刻みや沈線で複数に分割するもの等が存在する。C字状の貼り瘤に縄文を伴う128~130等は曾谷系の個体とみられる。

121は矮小化したさかざき状中空突起の下に貼り瘤を持ち、左右に楕円形区画を配する。

139~194には安行式の波状口縁深鉢を一括した。

139~152は安行1式である。139~141は大波状口縁の波頂部で、貼り瘤が重畳し、帯縄文による多段の区画が構成される。130・140は波頂部直下に円形の貫通孔がみられる。146・147・149は波底部で、やはり縦瘤が配される。150はゆるやかな波状口縁で、口縁直下に刻みが巡り、単独の縦瘤の下に弧線文が描かれる。151は胴下半部の楕円形区画文、152は口縁部区画文の下に配される集合沈線帯である。

153~158・176は安行2式の大波状口縁深鉢とみら

れる。波頂部に刻みをもつ扇状・双頭状の突起が配され、全面に刻みを伴う貼り瘤が配される。口縁下に刻みをもつ隆帯により三角形区画が描かれ、交点に豚鼻突起が配される。

158は区画文の省略がみられ、晩期に下る可能性がある。176は二つの扇状突起が前後に交差して配され、直下に一对の貫通孔が配される。

159~175・177~194は晩期前葉の土器である。安行3a式が多数を占めるが、扁平化した豚鼻突起が重畳する162~166、三角形区画文が崩れて弧状の磨消文様化する169、姥山系の174、弧状沈線文を巡らせて胴部文様帯の下端を区画する194等は安行3bとみられ、極度に形骸化した177はさらに時期が下る可能性もある。

195~215は水平口縁の深鉢である。大半が後期安行式に属する。196・200・211~213は安行1式に属する帯縄文系の土器、それ以外は砲弾形の深鉢とみられる。磨消縄文の弧状モチーフを描く204は晩期に下る可能性がある。

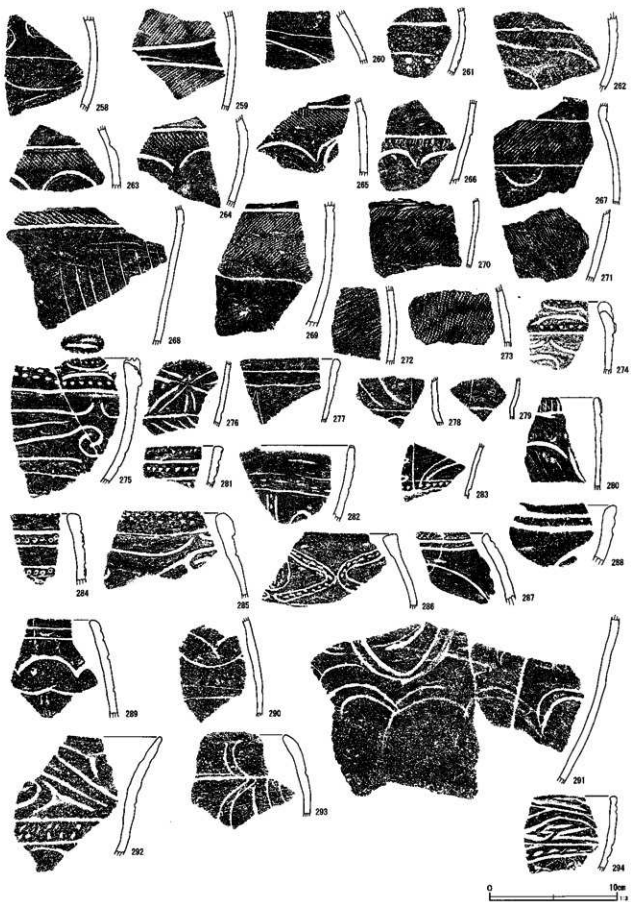
216~221は安行1式の壺形土器である。口唇断面肥厚して帯縄文が巡り、斜位の刺突列が巡る。221は円形の貫通孔を有する。

224~227は楕円土器の系譜を引く連結弧線文系の深鉢である。安行2式に属するが、227は晩期の可能性がある。

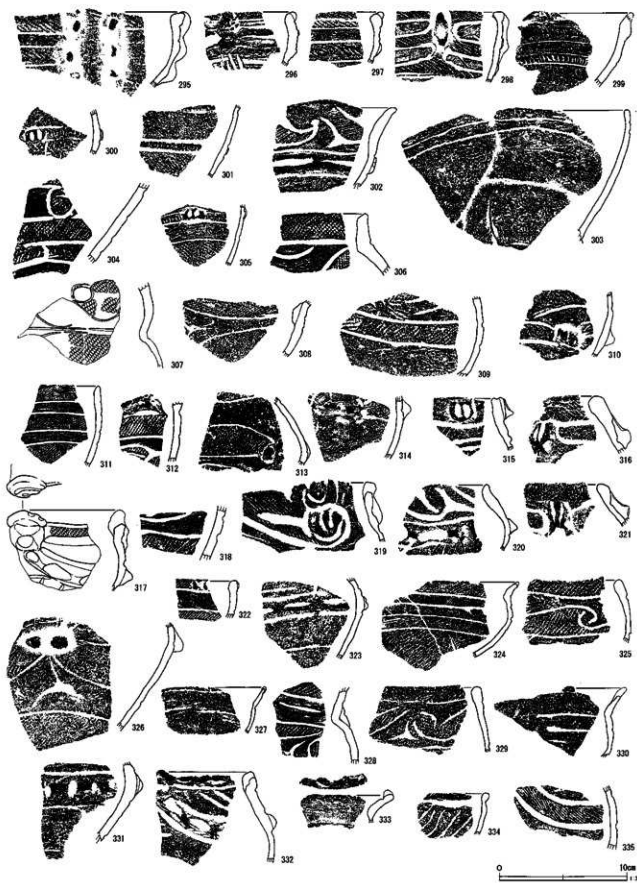
232~273は晩期前葉の磨消縄文系深鉢である。大半が安行3a式に属するが、姥山式類似の文様を描く243、崩れた入組文を描く256や262、胴部文様帯下端を弧線文で区画する263~266は安行3b式であろう。

244は円形刺突を中心とした魚眼三叉文、242・245・249・253・255等は入組三叉文を描く。248は連結弧線文の間に三叉文を配するものであろう。270~273は縄文のみ施文される破片で同時期のものと考えられるものである。

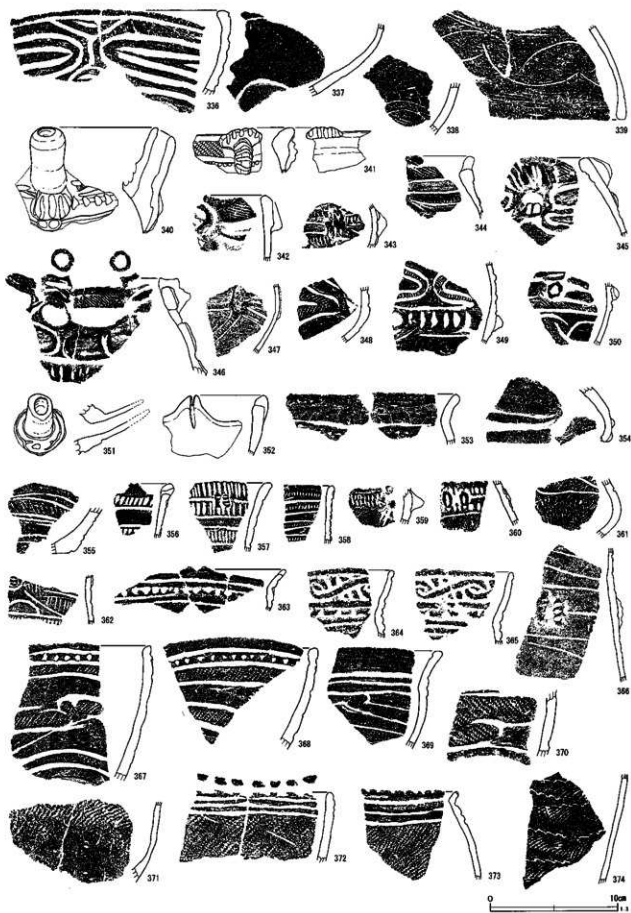
274~287は安行3b式に属する各種の深鉢である。



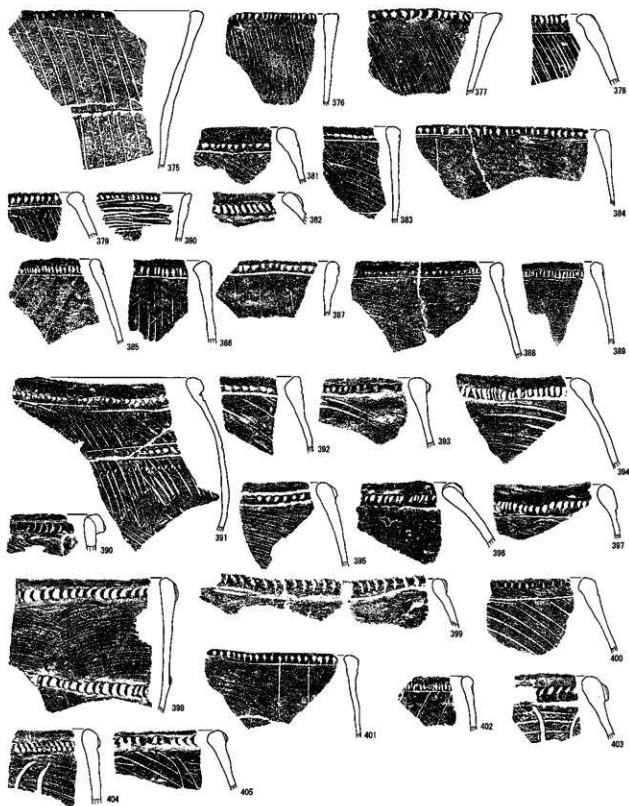
第249図 F区グリッド出土土器 (17)



第250図 F区グリッド出土土器 (18)



第251図 F区グリッド出土土器 (19)



第252図 F区グリッド出土土器(20)



274・275は口縁直下に列点文が巡り、胴部に扁平な入組文が描かれる。275は口端上に楕円形の突起を配する。

277・278は細密沈線文を地文とする土器である。平行沈線による方形区画内部に弧状の区画を描き、細密な集合沈線を充填する。284は円形竹管状工具の先端による刺突文を地文とする。

285は砲弾形の深鉢で、安行3c式に下る可能性がある。折り返し口縁上に複列の列点文が巡り、胴上半部には扁平な入組文を描き、間隙を弧線文で埋める。

286は列点地文で、菱型の区画内部に円文が描かれる。天神原式の影響下にある土器であろう。

288～291は安行3c式の深鉢である。

288～290は上下の弧線文を交互配置して入組文を構成する。291は胴下半部で、文様帯下端が平行沈線による弧状モチーフで閉塞されている。

292は入組文の上下に三叉文が充填される。文様帯下端は複列の列点文を伴う平行沈線により閉塞され、連続弧線文が巡る。293は平行沈線による対弧状のモチーフが二段構成で描かれる砲弾形深鉢で、安行3b式の細密沈線土器の系譜を引く。

294は安行3d式の深鉢である。

295～298は安行1式の浅鉢ないし台付鉢の体部であろう。3段の縦瘤が並列する。299～301・305は後期安行式の台付鉢体部で、刻みをもつ横位の隆帯で胴部を分帯する。300・305は豚鼻突起の安行2式である。対を成す小貼り瘤の322も同時期の可能性がある。

302～304・307・308・328・339は晩期前葉の台付鉢とみられる。対向弧線文を描く安行3b式の脚台339や、半根製の303を除けば概ね安行3a式と考えられる。302は浅鉢の可能性もある。

306・309～335・337～338は晩期前葉の浅鉢である。314～323・326・331・332等は胴中段が「く」の字に張り出す浅鉢で、三叉文の319・320・326は安行3a式、扁平な豚鼻突起が重畳する316・321、単独なが

ら類似する突起315は安行3b式と考えられる。胴部中段に中央押圧を伴う二叉の貼り瘤を伴う313・314・326は壺の可能性もある。

324・330は胴上半部の無文部を巡る沈線が対向三叉文ないし入組文を構成するものとみられ、安行3a式の新段階ないし安行3b式であろう。325は安行で、3b式単沈線の入組文を描く扁平丸胴の浅鉢である。

337・338は丸底の底部で、337は底面周辺に段を持ち、338は鋭利な工具による刺突文を伴う平行沈線文を巡らせる。336は晩期中葉の浅鉢であろう。

340～350は後期末～晩期初頭の注口土器である。刻みをもつ隆帯で突起間を連繋する343・344・347・349は安行2式、帯縄文主導で三叉文を描く348・350、350は安行3a式か。340は注口部で、下面に刻みをもつ貼り瘤と豚鼻突起が重畳する。

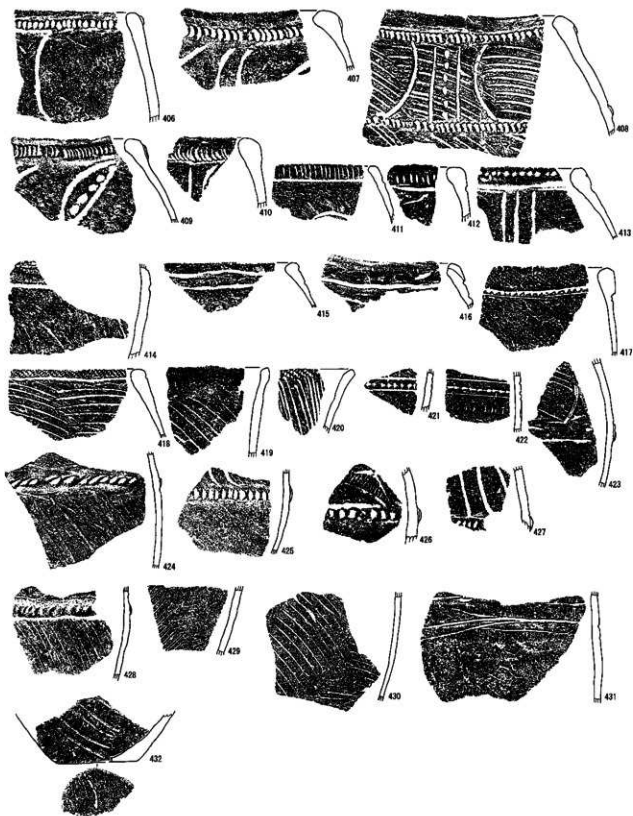
351は安行3a式の注口土器で、磨消縄文系の土器であり、注口部下面に魚眼三叉文を配する。

352は時期不明の口縁部で、無文の水平口縁に先割れの突起を配する。353は頸部に複列の刺突文を巡らせる浅鉢ないし広口壺で、安行3bないし3c式であろうか。354も時期不明である。ドーム状の器形で、二本隆帯の曲線文が描かれる。内面に手捏ねの凹凸を残しており、土偶等何らかの土製品の可能性もある。361は浅鉢ないし小型壺とみられる。L無節の縄文を粗雑に施文した上に沈線文が描かれる。晩期前葉のものか。

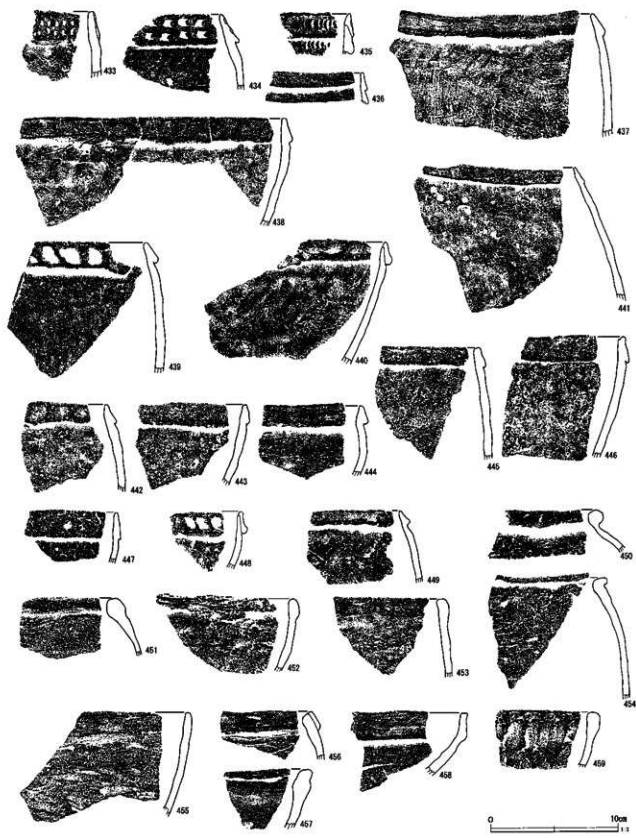
355は晩期前葉の円口方底土器とみられる。平行沈線により半円形の区画文が描かれるほか、底面にも磨消文様が描かれる。

356～360・362・366は東北系の楕円土器である。356～358は深鉢口縁部、360・362・366は胴部で、362は連結弧線文が描かれる。359は注口土器の胴部であろう。

363～365・367～374は大洞式の影響がみられる土器である。363は浅鉢とみられ、頸部の平行沈線間に列点文が巡る。364・365は大洞BC式の浅鉢ないし台



第253図 F区グリッド出土土器 (21)



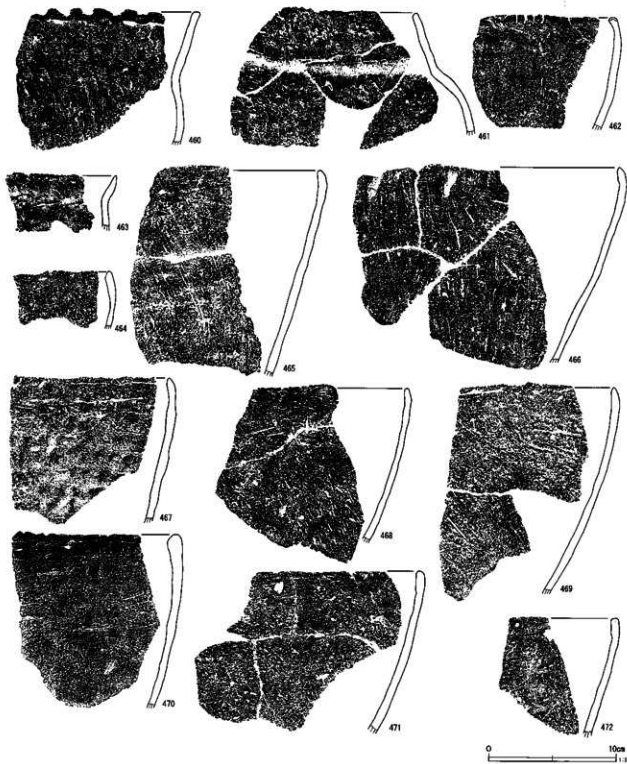
第254図 F区グリッド出土土器 (22)

付鉢口縁部とみられ、羊歯状文が施文される。  
367~370も同時期の浅鉢ないし台付鉢と考えられる。  
367・369の直線化した入組文は在地的な要素といえる。

372は水平口縁上に小突起が並び、口縁直下に平行

沈線を描く口縁部で、大洞BC式期のものであろう。  
373は口縁に刻みを持ち平行沈線を巡らせる広口壺  
で、晩期前葉に位置づけられる。

371・374・484は縄文のみの胴下半部で、374・484  
には結節回転文が施文される。

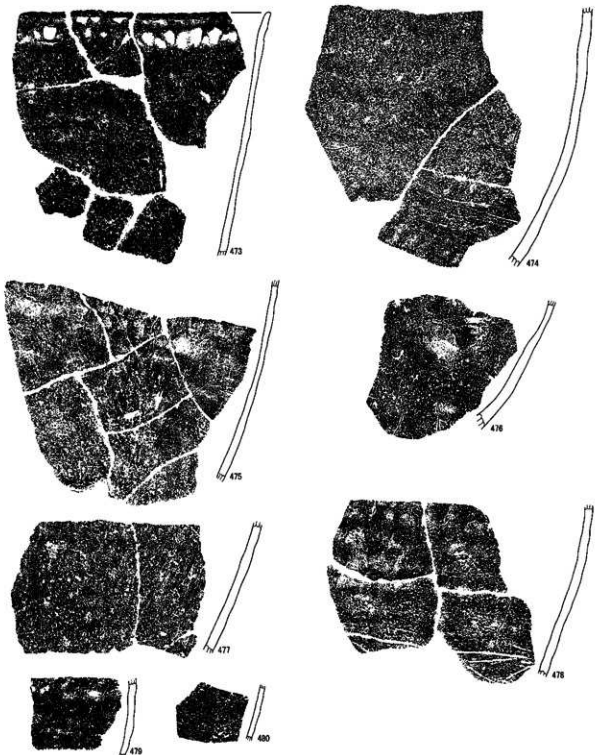


第255図 F区グリッド出土土器(23)

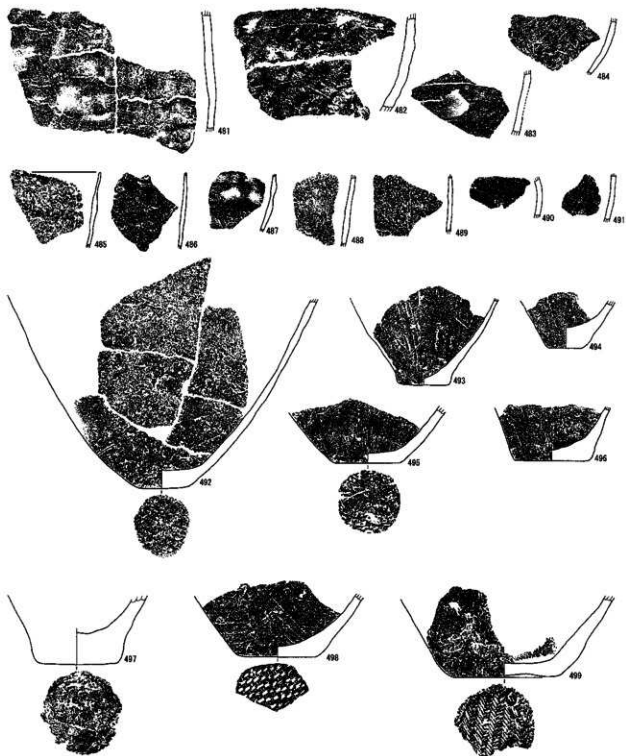
第252図～253図は紐線文土器である。

375～377は口縁直立外反して口唇部肥厚して刺突や刻みを巡らせるもので、後期安行式に伴うものと考えられる。375は胴部中段にも斜位の刺突列による

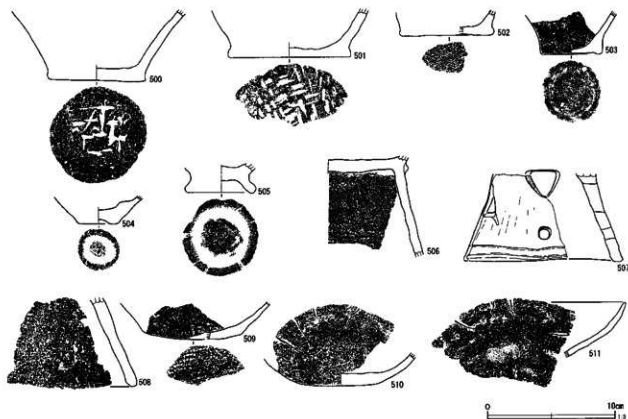
区画を持ち、区画の上下とも縦位の集合沈線文を描いている。381～392・400は口縁内彎して更新肥厚し、刺突ないし刻み+沈線の区画を巡らせるタイプで、後期末～晩期初頭と考えられる。地文集合沈線文は、



第256図 F区グリッド出土土器 (24)



第257図 F区グリッド出土土器 (25)



第258図 F区グリッド出土土器 (26)

胴上半部において横位施文となるものと、すべて縦位～斜位施文となるものの両者が存在する。421・422はこれに対応する胴部破片で、いずれも平行沈線環に斜位の刺突を巡らせる。

393～399は刻みやひだ状押圧を伴う隆帯を巡らせる。424・428はこれに対応する胴部である。無文化する396・399以外、胴上半部の地文は斜位ないし横位の施文となっており、文様帯形成の意図が窺われる。晩期前葉のものか。

401～413は胴上半部に文様帯を持つ口縁部破片で、後期末～晩期前葉のものと思われる。423・425～427はこれに対応する胴部破片である。磨消縄文の426は安行3b式であろう。414～416は沈線のみを区画を描く口縁部・胴部である。419は区画を持たず、口唇肥厚して外面に軽微な段をなす。417・418・420は口縁直下に縄文を施文するもので、外反口縁の420は後期の台付鉢の可能性はあるが、他は安行3b式と考えられる。

433～473は無文の口縁部で、晩期前葉の粗製土器である。440・458等に浅鉢の可能性はあるほかは、基本的に深鉢と考えられる。

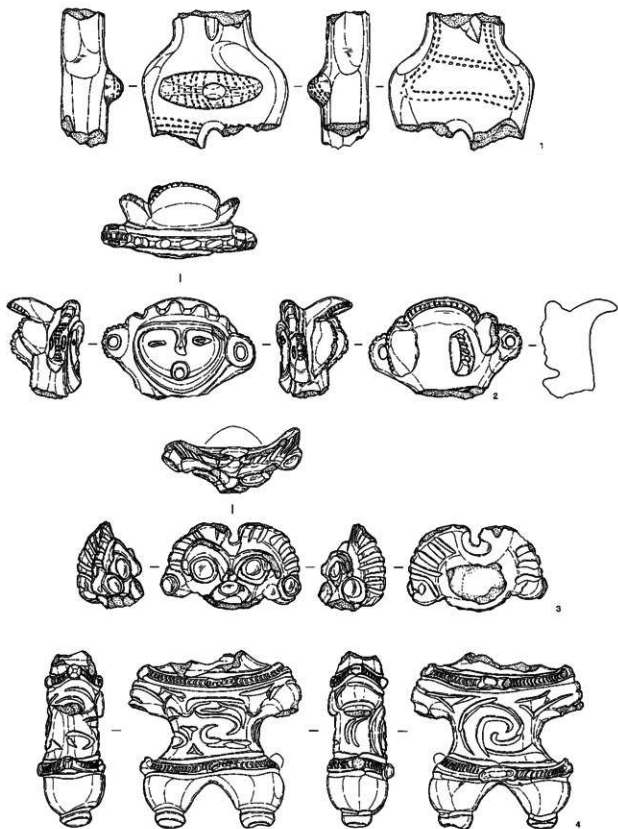
433・444は末端の反り返る折り返し口縁で、篋状工具による複製の列点文が描かれる。436は折り返し口縁が多段化し、それぞれに単列の列点文が描かれる。

436～449は末端反り返る折り返し口縁である。436が多段化するほかは1段構成である。口縁直下にはしばしば成形時の指頭圧痕が観察され、439・448では特に顕著にみられる。

450～454は外面に丸みを持つ折り返し口縁である。

456・458は扁平な折り返し口縁で、口唇断面角頭棒状を呈する。455・457・459は単純口縁ながら外面にゆるやかな段を持つ。

460は指頭押圧による小波状口縁である。462は口端に4個1単位の刻みを施すもので、精製土器における刻みを持った突起を意図したものか。



第259図 F区グリッド出土土偶(1)



461・463～473は単純口縁である。470は口唇断面肥厚するが、それ以外は変化に乏しい断面丸棒頭状を呈する。

器形においては単調に内彎するものが大多数であるが、450・454・461に広口壺風の器形をみることが出来る。450は胴上半部が極端に内彎して、頸部が強く外屈し、内面に隆帯を貼り付けることで折り返し口縁とするもので、強引な成形から頸部内面に亀裂を生じている。461は胴張りで、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁は直線的に内傾している。

460は頸部がくびれて口縁外反するキャリパー形である。463は口縁「く」の字に外屈する。465・466・472は胴部直線的に開いて口縁内屈する。

器面調整においては、篋状工具による粗雑な無で調整と、同種の工具を用いたひだ状の圧着痕が多くに共通してみられる。437・438・452等は部分的に輪

積み痕を残している。

474～483は無文の胴部破片である。器面調整などについては上述の口縁部と同様である。481～483は輪積痕を特に明瞭に残している。

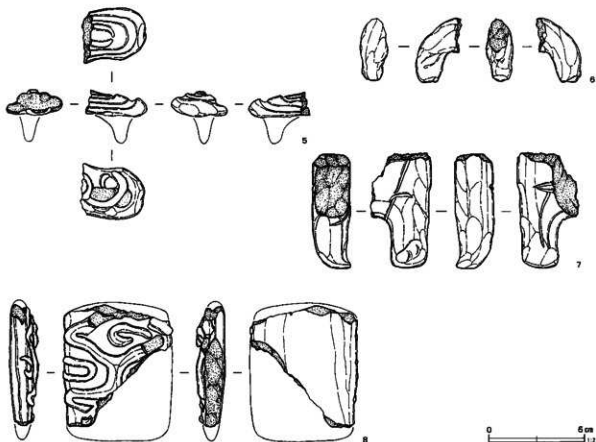
485～491はいわゆる製塩土器であろう。非常に薄手で器面に手捏の凹凸を明瞭に残している。

492～499は無文の底部である。大半が晩期前葉の無文粗製深鉢に伴うものであろう。498・499の底面には網代圧痕が観察される。

#### 土製品

#### 土偶 (第259図・260図)

1は山形土偶の胴部で、胸部から上と両脚を欠失する。前面中央に正中線を示す隆帯があった痕跡が残る。腹部は膨らみ、縦位の刺突列がみられる。背面および脚の付け根にも同様の刺突列が施文される。淡褐色を呈し、焼成はあまり良くない。刺突内



第260図 F区グリッド出土土偶(2)

に赤彩痕が残る。現存する最大高7.2cm、最大幅7.7cm、厚さ3.2cmを測る。後期加曾利B3式期のものと思われる。

2は頭部である。眉から鼻をT字状の隆帯で造出し、環状の粘土紐を貼り付けて小さな眼を表現する。口は盲孔である。耳は横に大きく突き出して中央に貫通孔を持ち、周縁に刻みを施す。後頭部にミミズク土偶の祖型的な冠状の表現を有する。結髪風表現の先端に刻みを施す。現存する最大高5.3cm、最大幅8.0cm、厚さ2.6cmを測る。曾谷式の最も新しい時期に属するものと思われる。

3はミミズク土偶の頭部である。扁平で、左右が後方へと彎曲している。前頭部の結髪風表現が大きく左右に分離する。後頭部の中央に剥離痕がみられ、楕円形の突起が配されていたものとみられる。各所に赤彩痕が残る、全体に赤彩されていた可能性がある。現存する最大高4.5cm、最大幅7.4cm、厚さ2.3cmを測る。安行3a式期のものと思われる。

4は遮光器系土偶である。頭部と両手先を欠失する。肩部および腰部に矢羽根状の刻みを伴う隆帯が巡る。腹部には入組状の三叉文が描かれ、背面には大柄の三叉文が描かれる。胴部扁平で、脚部に最大厚を持っている。乳房は垂れている。胴部下端に小孔を伴う。現存する最大高9.2cm、最大幅9.0cm、厚さ3.2cmを測る。安行3c式期のものと考えられる。

5はミミズク土偶の左肩部である。上下に沈線文がみられ、下面には欠失した腕の剥離痕がみられる。現存する最大高1.3cm、最大幅3.2cm、厚さ2.9cmを測る。晩期のものと思われる。

6は右腕部である。無文で、手捏の粗雑な造りである。黒褐色を呈し、焼成は良い。現存する最大高3.3cm、最大幅2.4cm、厚さ1.2cmを測る。後期のものと思われる。

7は右腹部から右脚部にかけて残存する。扁平で直線的な造りである。表裏に沈線文が施文され、背面にはパンツ状表現の一部らしものがみられる。黒褐色を呈し、白色砂粒を含む緻密な胎土である。現

存する最大高6.1cm、最大幅3.2cm、厚さ2cmを測る。晩期のものと思われる。

8は土版である。胴振りの長方形を呈し、上端および右下半部を広く欠失する。前面のみ蚯蚓腫れ状の隆帯で文様が表現され、背面は無文である。黒褐色を呈し、胎土は砂質、焼成は良好である。現存する最大高6.3cm、最大幅5.6cm、厚さ1.5cmを測る。晩期のものと思われる。

#### 耳飾 (第261図1～第262図3)

1～15は無文の個体を一括した。うち1～4は滑車形耳飾で、断面扁平で内面の張り出しを持たないタイプである。

1は直径と高さの差が比較的小さい筒型の器形で、側縁の抉りを持たず、上下端も直行する。完形で、最大径3.2cm・現存高2.1cmを測り、重さ12.1gを量る。

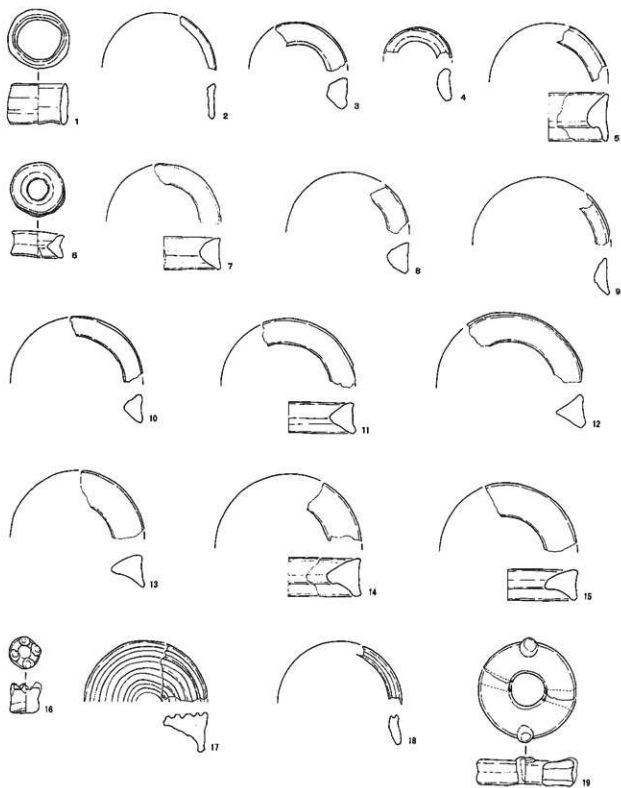
2は断面上端のみ「く」の字に外屈する。全周の六分の一強が残存し、最大径5.9cm・現存高1.8cmを測る(以下、破損品の最大径は推定値)。3は1・2に比べ肉厚で、上下端が内削ぎ状となり、断面台形を呈する。全体の三分の一弱が残存し、最大径5.1cm・現存高1.6cmを測る。

4は上下端が丸みを持ち、全体にゆるやかに外反する。全体の二分の一弱が残存し、最大径3.6cm・現存高1.7cmを測る。

5は上端内面が折り返し状となる断面「r」字状のタイプである。全周の六分の一強が残存し、最大径6.2cm・現存高2.5cmを測る。

6～15は内面中段が突出する断面三角形のタイプである。

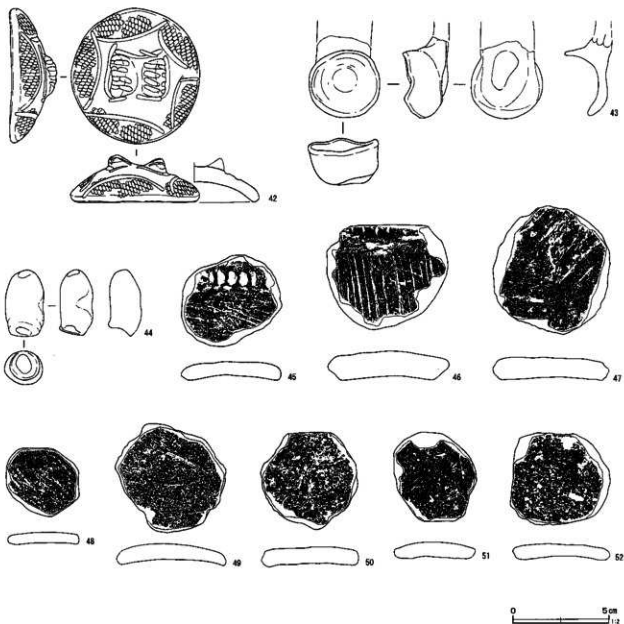
6は同類中比較的小型で、側縁中段がV字状に括れ、上下端が突出する。ほぼ完形で、最大径2.8cm・現存高1.4cmを測り、重さ7.9gを量る。7は側縁の抉りをほとんど持たず、断面上端のみ軽微に外屈して、下端は「ハ」の字に外傾する。全体の4分の一程度が残存し、最大径6.0cm・現存高1.7cmを測る。8は上面に内削ぎ状の平坦部を持ち、側縁の抉りを持たな



第261図 F区グリッド出土土製品(1)



第262図 F区グリッド出土土製品(2)



第263図 F区グリッド出土土製品 (3)

い。全体の八分の一弱が残存し、最大径6.4cm・現存高1.6cmを測る

9は断面中段から上端にかけて直立し、下端のみ軽微に外屈する。全周の八分の一強が残存し、最大径7.2cm・現存高1.9cmを測る。10は断面上下端が丸みを持ち、中段に緩やかな伏りを持つ。全体の四分の一強が残存し、最大径6.9cm・現存高1.5cmを測る。

11は断面上下端が「く」の字に外屈し、中段もゆるやかに張り出す。全周の四分の一強が残存し、最大

径7.0cm・現存高1.6cmを測る。12は内面が鋭角に張り出して、断面上下端は丸みを持ち、側縁にゆるやかな伏りを持つ。全周の三分の一程度が残存し、最大径7.7cm・現存高1.7cmを測る。

13~15は内面下側に若干の反りを持ち、断面「r」字のタイプに近い。

13は内面中段が鋭角に突出し、側縁に緩やかな伏りを持つ。全周の四分の一弱が残存し、最大径7.0cm・現存高1.7cmを測る。14は断面上端に若干の平坦部を

持ち、側縁上下端が軽微に外屈する。全周の六分の一弱が残存し、最大径7.6cm・現存高2.0cmを測る。15は内面突出部の先端が内削ぎ状となる。全周の四分の一強が残存し、最大径7.2cm・現存高1.6cmを測る。

16以下は有文の耳飾である。

16は直径と高さの差が少ない中実臼状の耳飾である。上下面に凹みを持ち、側縁は「く」の字に挟れる。上面に四単位の貼り瘤が付される。完形で、最大径1.6cm・現存高1.6cmを測り、重さ4gを量る。17は断面「R」字を呈する滑車状の耳飾である。内面の張り出しが大きく、上面に広い平坦部を持って、中央の貫通孔を取り巻くように沈線による同心円文が描かれる。全周の六分の一弱が残存し、最大径6.4cm・現存高2.1cmを測る。

18は断面扁平で全体が「く」の字に外反し、上端に1条の沈線が巡る。全周の六分の一強が残存し、最大径6.4cm・現存高1.6cmを測る。19は断面長方形で、厚さが高さよりも卓越する。側縁から上面にかけて2単位の貼り瘤を持ち、これと交差する位置に横位の貫通孔が穿たれる。全周の二分の一弱が残存し、最大径5.1cm・現存高1.5cmを測る。

20は断面三角形で、上面および内面に二個一對の突起を配する。全周の七分の一程度が残存し、最大径5.5cm・現存高1.7cmを測る。

21～25は比較的小型で、中央に透かし彫りを伴うタイプである。いずれも断面上端が肥厚して文様帯となり、下端は先細りで「く」の字に外屈している。

21は中央に巴状のモチーフを配し、周囲に四単位の突起と三叉文が配される。地文として細密な刻みが用いられている。下端の一部を欠失し、最大径3.0cm・現存高1.4cm、重さ5.7gを量る。22は中央透かし彫り部分と外縁の一部が欠損するが、23・24に類似のモチーフが描かれたものとみられる。最大径28cm・現存高16cm、重さ4.2gを量る。

23は中央に「N」字状のモチーフが配され、周囲に4単位の小突起が配される。完形で、最大径2.8cm・現存高1.9cm、重さ8.6gを量る。24は中央に「H」字

状のモチーフを配し、周囲に4単位の小突起が配される。外縁の一部が欠損する。最大径2.9cm・現存高1.8cmを測り、重さ6.1gを量る。

25は外縁の文様の一部だけが残存する。刺突を伴う小突起をはさんで三叉文が対向し、全体に細密な刻みが施される。全周の六分の一程度が残存し、最大径4.4cm・現存高1.8cmを測る。

26～30は断面「r」字状をなす滑車状耳飾で、内面上方の傾斜部分を文様帯としている。

26は断面比較的扁平で、幅狭の文様帯に横S字状の沈線文が描かれる。全周の八分の一程度が残存し、最大径7.6cm・現存高2.5cmを測る。27は沈線による「U」字状モチーフが左右に対向する。全周の四分の一程度が残存し、最大径8.1cm・現存高2.4cmを測る。

28は横楕円形の区画文が巡るものとみられる。全周の七分の一強が残存し、最大径8.2cm・現存高1.8cmを測る。29は渦文+同心円文による巻貝状の突起が配され、左右に1条の沈線が巡る。全周の四分の一程度が残存し、最大径7.8cm・現存高2.6cmを測る。

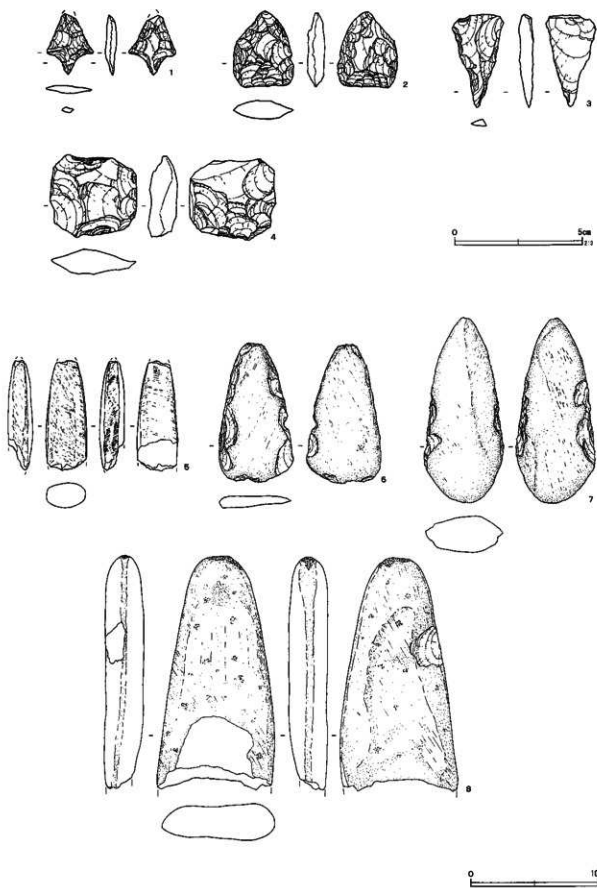
30は横「C」字状のモチーフが上下対向し、左右に楕円形の区画文が配される。全周の六分の一弱が残存し、最大径7.2cm・現存高2.0cmを測る。

31は断面三角形の滑車状耳飾である。上端に細密な刻みを伴う横長の貼り瘤が配される。残存状態はごく断片的だが、最大径8.0cm程度とみられ、現存高2.0cmを測る。

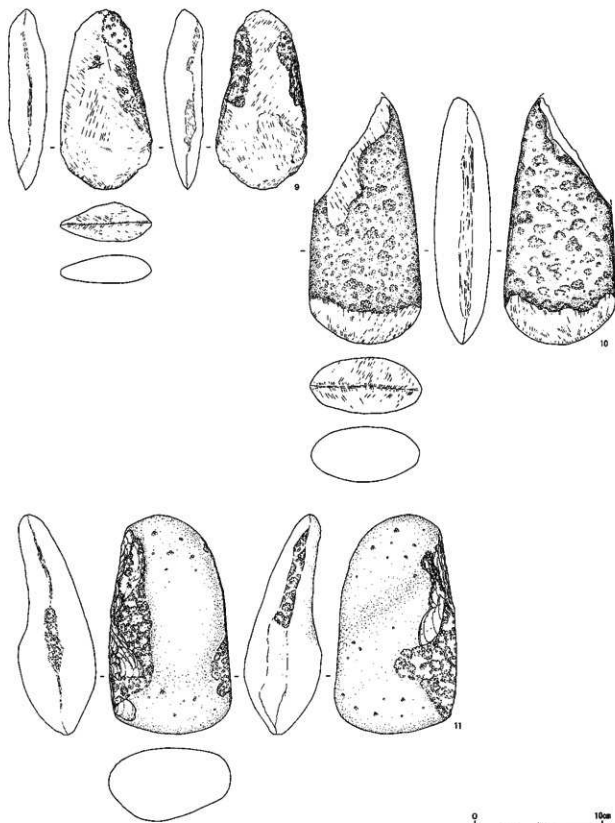
#### ミニチュア土器 (第262図32～41)

32は胴部のみ残存する。広口壺ないしソロバン玉形の浅鉢をかたどったものとみられ、胴部中段に刻みを伴う隆帯の区画が巡り、胴下半部には平行沈線による弧状モチーフが描かれる。復元最大径9.0cm・現存高2.7cmを測る。

33・35・36は浅鉢である。33は底部を欠損する。胴下半部にRL単節横位回転の縄文が施され、最大径4.2cm・現存高2.4cmを測る。35は丸底で胴下半部が「く」の字に張り出す。全体に成形時の指頭圧痕が

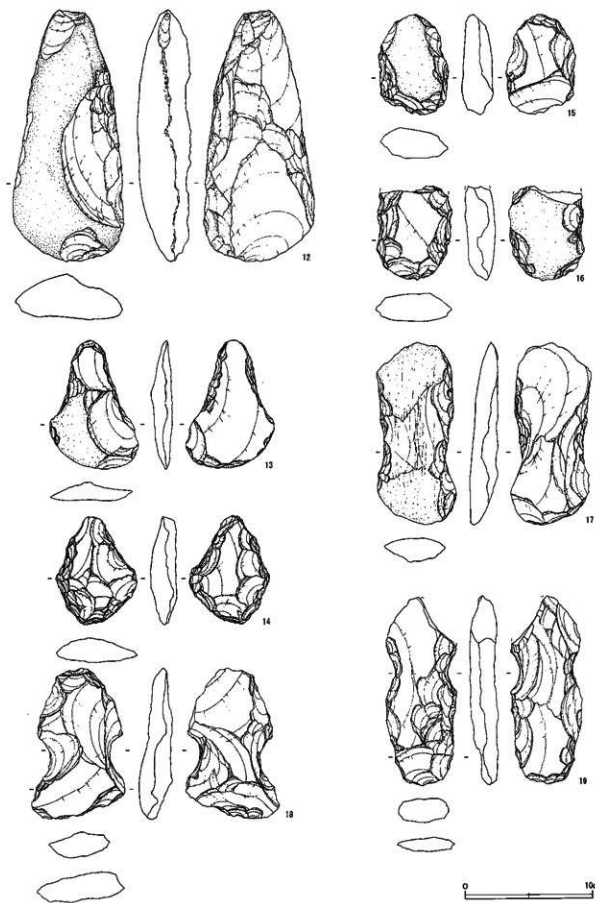


第264図 F区グリッド出土石器(1)

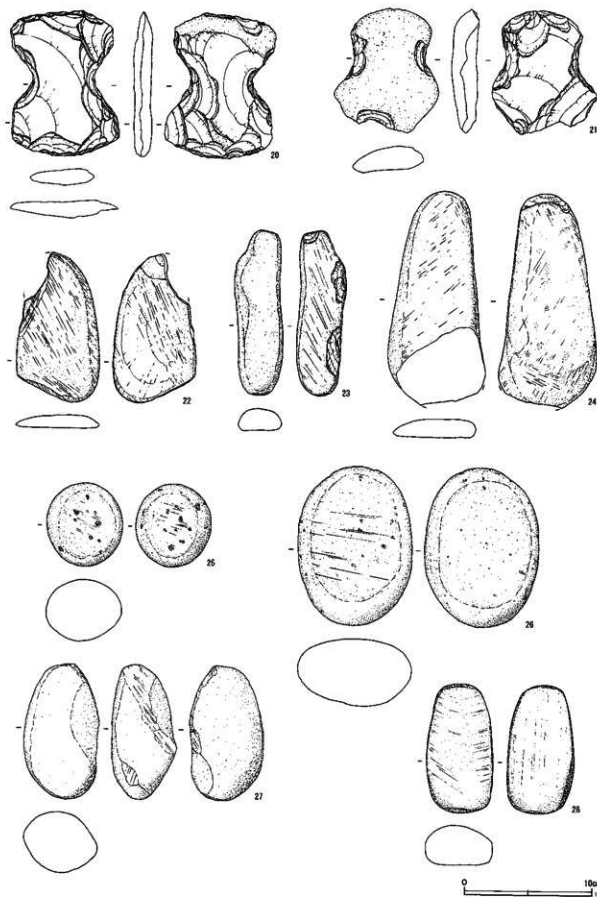


第265図 F区グリッド出土石器(2)





第266図 F区グリッド出土石器 (3)



第267図 F区グリッド出土石器(4)

残る。最大径4.0cm・現存高1.8cmを測る。36は丸底で、口縁にかけて直線的に開く。篋状工具による縦方向の調整痕が観察される。最大径4.3cm・現存高2.2cmを測る。

38は平底で胴部から口縁にかけてほぼ垂直に立ち上がるコップ形の器形である。口縁から胴部にかけて篋状工具による縦位の調整痕が観察される。最大径4.5cm・現存高4.2cmを測る。

41は球形の鉢である。口縁から胴下半部まで残存する。水平口縁で口唇肥厚しつつ内彎し、台形の突起が配される。無文で、篋状工具による縦位の調整痕が観察される。最大径7.1cm・現存高6.2cmを測る。

34・37・39・40はいずれも無文の底部である。34は尖底状の深鉢、37は高台つきの鉢とみられる。39・40は平底の深鉢で、39はやや上げ底状を呈する。

#### 蓋 (第263図42)

平面円形で中央の盛り上がるドーム状の蓋である。中央に刻みを伴う縦瘤が一对配され、周囲に弧状の区画が巡り、RL単節横位回転の縄文が施文される。完形で、最大径7.0cm・現存高2.5cmを測る。

#### 手燭形土器 (第263図43)

容器部分から柄部の付け根までが残存する。無文で、身の深い容器部分に同程度の幅の柄部が付随する「キセルの雁首」様の形態である。

現存する全長4.3cm。容器部分の最大径3.7cm・器高2.4cmを測る。

#### 不明土製品 (第263図44)

紡錘形の土製品で、一端が指頭の押圧により平坦となり、中央に凹みを持つ。文様は施文されない。全長4.5cm・最大径2.0cmを測る。

#### 土製円盤 (第263図45～52)

45は紐線文土器で口縁部ないし胴部中段の区画文を取り込んでいる。最大径5.2cm重さ25.2gを測る。46も紐線文土器で、口縁部の破片を使用する。最大径6.3cm重さ55.8gを測る。

47以下は無文の破片で、50が口縁部である他は、い

ずれも胴部である。分量は以下の通り。

47：最大径6.1cm・重さ44.4g

48：最大径3.2cm・重さ10.2g

49：最大径5.8cm・重さ25.0g

50：最大径5.0cm・重さ21.7g

51：最大径4.2cm・重さ7.8g

52：最大径5.2cm・重さ19.3g

#### 石器

##### 石畿 (第264図1・2)

1は平基有茎の石畿である。先端部を欠損する。腹面に主要剥離面を残し、細かな両面剥離により成形する。

2は石畿未製品とみられるが、そのまま使用に供した可能性もある。平基無茎で、両側縁はゆるやかなカーブを描いて先端部に至る。腹面に主要剥離面を残す。

##### 石錐 (第264図3)

平面二等辺三角形を呈する。縦長の剥片を使用しており、裏面に主要剥離面を残し、表面のみ剥離を加えて成形している。錐部と握み部の区分が不明瞭で、全体に断面三角形を呈する。

##### くさび形石器 (第264図4)

横長の剥片を使用し、裏面に主要剥離面を残す。粗雑な両面剥離により成形しており、上下辺に対し左右の側縁がより鋭角となっている。

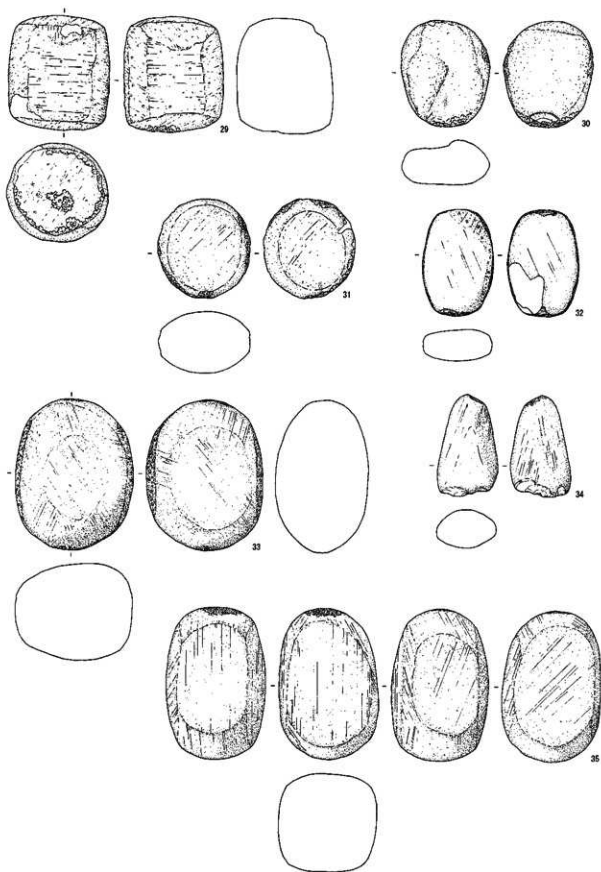
##### 磨製石斧 (第264図5～266図12)

剥離や敲打を残したままの粗製品が目立つ。

5はいわゆる定角型の磨製石斧で、断面三稜線銅形を呈する。刃部と基部をそれぞれ欠損する。

6・7はいずれも完形で、粗製品である。緑泥片岩の扁平礫の両側縁を6は片面のみ、7は両面からの粗い剥離によっておおまかに整形したうえで全面に研磨を施している。8はやや不整形で、基部を中心に敲打痕を残す。刃部を欠損しており、磨石なし叩石の可能性もある。

9は完形で、両側縁に敲打痕を残す。10は基部から胴部左側縁にかけて欠損する。全面に敲打痕を残し、



第268図 F区グリッド出土石器(5)

刃部のみ両面からの研磨で造り出している。

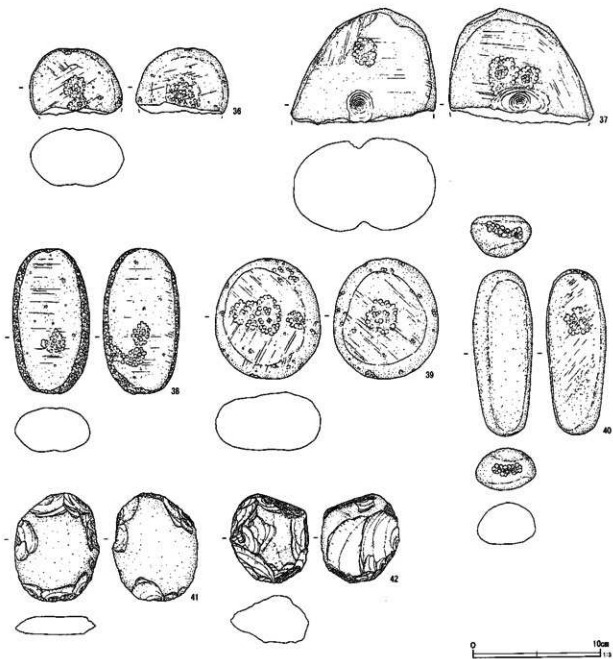
11は両側縁に剥離および敲打痕が集中しており、その他の部分は自然面を残している。磨製石斧未製品として分類したが、側縁部を使用面とする叩石の可能性もある。

12は背面に広く自然面を残す。やはり未製品と考えたが、打製石斧に分類するのが自然であるかもしれない。

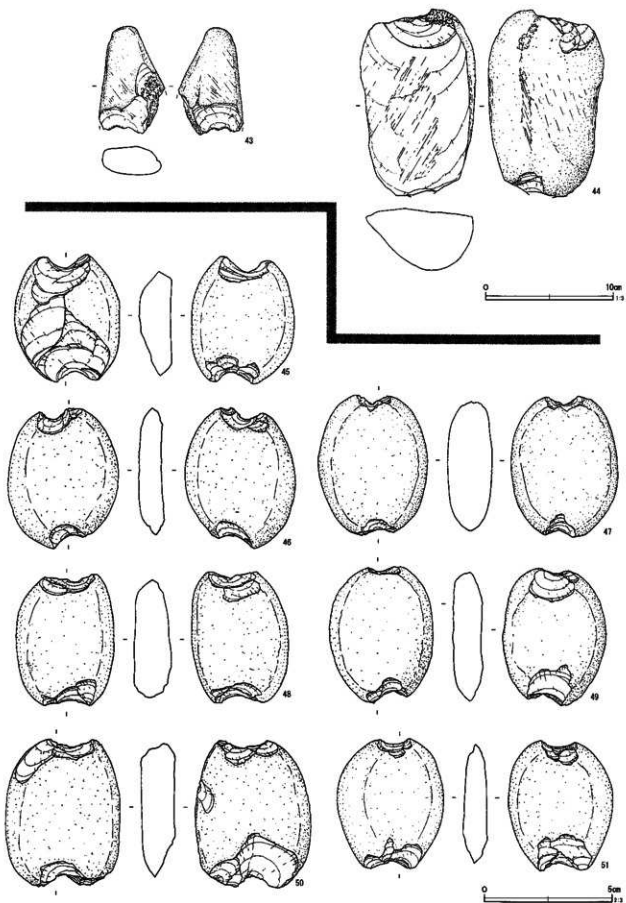
打製石斧 (第266図13~第267図21)

13・14は楕円形の打製石斧である。いずれも横長の剥片を使用し、腹面に主要剥離面を残している。13は背面に自然面を残している。

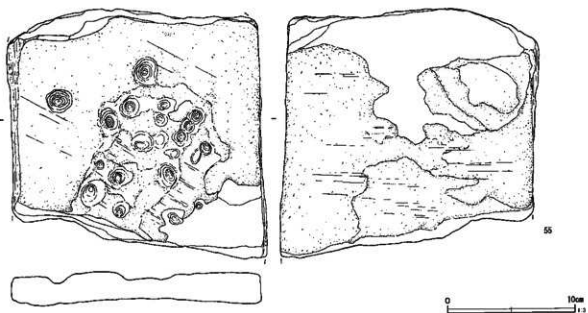
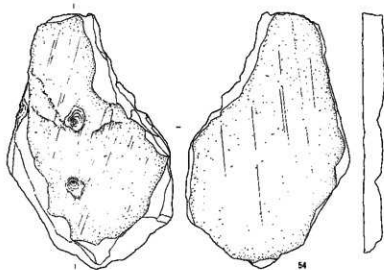
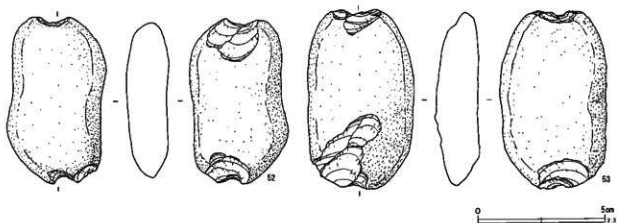
15・16は楕円形の打製石斧である。15は横長の剥片を使用し、腹面に主要剥離面、背面に自然面を残す。刃部は腹側に広い剥離面を持ち、背面のみ細かな剥離を施して造り出しており、再生品の可能性が考え



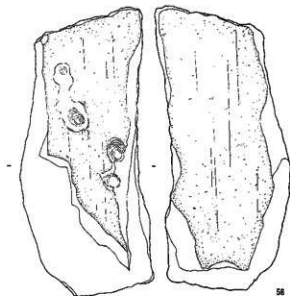
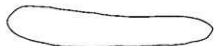
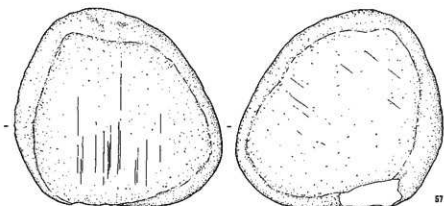
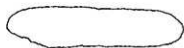
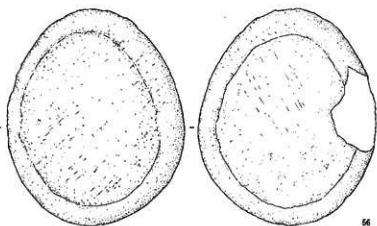
第269図 F区グリッド出土石器 (6)



第270図 F区グリッド出土石器 (7)



第271図 F区グリッド出土石器(8)



第272図 F区グリッド出土石器(9)



られる。16は裏面に広く自然面を残す。長軸側中央で折損しており、基部側である可能性もある。

17～21は側縁に抉りを持つ扇形の打製石斧である。21以外はすべて横長の剥片を素材としている。19については独鈷石の未製品が疑われるが、使用石材（ホルンフェルス）から打製石斧に含めた。

21は背面に広く自然面を残す。刃部中央に裏側からの剥離によって抉入が生じており、大型の石鍾として再利用されている可能性がある。

#### 砥石（第267図22～24）

いずれも粗粒の砂岩を用いている。22・24は扁平な礫の両面および側縁部を使用する。22は裏面に剥離の痕跡が残されており、大型の剥片を使用したものとみられる。23は棒状の自然石の1面のみを使用する。側縁および上端に剥離が生じており、叩石に転用されている可能性がある。

#### 磨石（第267図25～第268図35）

大半は自然礫を無加工のまま使用しており、長期にわたる使用の結果多面体をなすもの（28・29・31～33・35等）はごく少数であった。

これは遺跡自体が扇状地における自然堤防上に位置しているために石材の獲得が容易であり、一つの磨石を恒常的に使い続けることが比較的少なかったためと考えられる。

本報告では比較的定型的な磨石のみを選択的に掲載したが、“使用痕を持つ礫”自体は（石器と認識できなかったものも含め）さらに多量に存在したものとと思われる。

なお、28・33等は側縁に敲打痕が集中することから、ある程度の整形が行われている可能性がある。円柱状を呈する29は大型の石棒片を転用したものであろう。底面中央に敲打痕が集中しており、凹石としての転用が伺われる。

側縁の一部に敲打痕の集中する30・31・35も叩石への転用が考えられる。逆に、下端の剥離面に敲打や擦痕が重なる34は叩石からの転用であろう。

石材は安山岩・閃緑岩が多く、砂岩製のものが少

数混じる。

#### 凹石（第269図36～40）

掲載のものはすべて磨石・敲石からの転用石器である。凹部は比較的浅いものも多く、敲打痕の面的な集中としか認識できないものも少なくない。

36・39は円形の磨石を転用したものである。36は下三分の一を欠失するが、39は完形品である。いずれも表裏両面を使用しており、前者は表面に2箇所と裏面に1箇所、後者は表面に2ないし3箇所と裏面に1箇所の凹部を持つ。36は叩石としても使用されている。

37は楕円形の磨石を転用しているが、下三分の一前後を欠失する。表裏両面を使用しており、表面に2箇所、裏面に3箇所の凹部を持つ。

38も楕円形の磨石からの転用であるが、磨石としての使用にあたり原礫の整形が行われており、側縁すべてにわたって敲打痕が観察される。表裏両面を使用しており、表面に1箇所、裏面に2箇所の凹部がやや下半部に寄って設けられている。

40は棒状の叩石の側面が磨石として転用され、さらに凹石として使用されたものである。凹部は1箇所、やはり中央からやや上方に寄って設けられている。

#### 叩石（第269図41～第270図44）

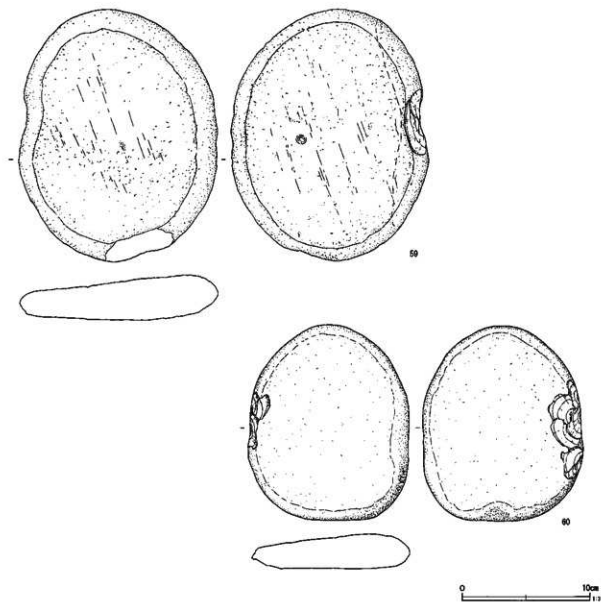
いずれも剥離を伴う打撃→細かな敲打という作業工程が想定され、石斧などの石器製作に関わるものと考えられる。

41・42は扁平な円礫の側縁部に繰り返し打撃が加えられた後に細かな敲打を加えられる。43は棒状の礫の一端にくりかえし打撃が加えられた後に細かな敲打が施される。44は長軸方向に半割された楕円礫の上下両端に剥離・敲打痕が観察される。

#### 石鍾（第270図45～第271図53）

扁平かつ楕円形の自然礫が選択され、長軸方向の両端に交互剥離によるスリットが造り出される。

石鍾の重量の平均値は50.3gで、最大値は78.4g、最小値は35.7gである。石材はすべて砂岩が用いら



第273図 F区グリッド出土石器 (10)

れている。

石皿 (第271図54～第273図60)

絹雲母片岩の板石を用いるもの (54・55・58) と、閃緑岩の円礫を使用するもの (56・57・59・60) の二通りが存在する。

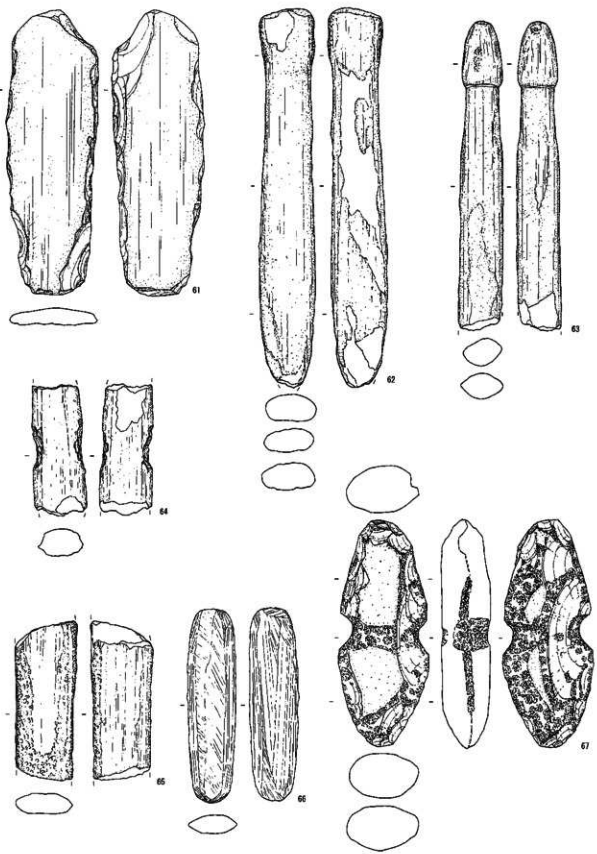
前者は側縁が欠損するものがほとんどで、唯一55のみ左右の側縁が残存し、長方形に整形されていることがわかるほかは、いずれも原形を留めていない。表裏両面使用され、うち一面のみが多孔石として転用されている点も共通している。

後者は長径15cm前後の自然礫がほぼ無加工で使用される。いずれも両面使用されるが、多孔石への転用はみられない。59背面の凹部は自然の風化に伴うものとみられる。59・60の側縁にみられる剥離は、叩石ないし台石としての転用に伴うものである可能性がある。

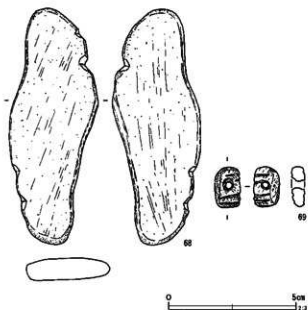
石剣・石棒 (第274図61～66)

断面扁平なものを分類上は石剣に含めたが、中間的な形態が含まれる。

61は絹雲母片岩の板石の側縁を粗割りしたのみ



第274図 F区グリッド出土石器 (11)



第275図 F区グリッド出土石器(12)

で、頭部の造作はみられない。表裏の研磨が徹底され、顕著な光沢を持つ。

62は有頭の石剣ないし石棒である。基部の末端が欠損するほか、広い範囲にわたって表面の剥落がみられる。頭部は長方形に造り出され、胴部との境にはごくゆるい括れを持つ。

63は有頭の石剣である。頭部は紡錘形で胴部との境は明確な段を形成する。

64は胴部のみ残存する。両側縁の中間部分に袢りが設けられており、石錘等への転用が考えられる。

65は胴部のみ残存する。広範囲に敲打整形痕が残り、部分的に研磨が施される。製作途上で破損し、廃棄されたものか。

66は完形品で、小型・無頭の石剣である。両側縁がゆるやかなカーブを描き上下端は丸みを持つ。側縁断面は鋭角で、明瞭な刃部を造り出す。

独鈷石(第274図67)

粗製の独鈷石、ないしは未製品と考えられる。原礫は扁平棒状の河原石であったと考えられ、表裏に自然面を残す。

粗い両面からの剥離により成形され、部分的に敲打調整が施される。特に中段の袢り部分は入念な敲打により作り出されている。

不明石製品(第285図68)

用途不明の石製品で、盤状の礫を使用する。右上および左下の側縁に、研磨によるV字状のスリットを二つつ設けている。表裏および側縁に擦痕が観察される。

垂飾(第275図69)

滑石製の垂飾である。隅丸長方形を呈し、断面扁平である。中央に貫通孔を有し、右側縁から表裏に4条の刻みが施される。貫通孔は両面から穿孔されており、刻みは穿孔後に施されたものとみられる。

第30表 F区グリッド 石器計測表

番号	器種	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石材
1	石鏃	M29-9	(2.3)	1.8	0.4	0.5	B 2-②	黒色頁岩
2	石鏃	M29-7 D	2.9	2.4	0.7	0.8	A 2-①	チャート
3	石鏃	L29-19D	3.6	2.0	0.5	2.8	D-①	黒色頁岩
4	くきび形石鏃	M29-15	3.2	3.4	1.1	11.5		チャート
5	磨製石斧	M29	(8.4)	3.2	1.9	88.3	A-③	蛇紋岩
6	磨製石斧	M29	10.7	5.8	1.0	95.1	B-①	緑泥片岩
7	磨製石斧	M29	12.3	6.2	2.9	310.5	B-①	緑泥片岩
8	磨製石斧	M29-9 D	(18.1)	9.2	3.1	833.2	B-③	緑色岩
9	磨製石斧	M29	14.0	7.1	3.0	394.2	B-①	緑色岩
10	磨製石斧	M29	(19.2)	8.8	4.4	1014.0	B-②	緑色岩
11	磨製石斧	M29-14A	17.0	9.6	6.0	1366.1	B-①	緑色岩
12	磨製石斧	M29-14B	19.6	8.6	4.2	864.7	B-①	緑色岩
13	打製石斧	M29	9.9	6.9	1.7	91.3	B-①	ホルンフェルス
14	打製石斧	M29-6 B	8.4	6.3	2.1	95.7	B-①	ホルンフェルス
15	打製石斧	L29-23C	7.8	5.4	2.5	121.0	D?-①	砂岩
16	打製石斧	L29-22D	(7.3)	5.9	2.4	142.2	D?-④	ホルンフェルス
17	打製石斧	M28-9 D	14.1	6.2	2.2	202.5	A-①	ホルンフェルス
18	打製石斧	M28-19 D	11.7	7.3	2.7	191.6	C-①	ホルンフェルス
19	打製石斧	M29-3 B	14.6	5.6	2.2	200.0	C-②	ホルンフェルス
20	打製石斧	M29	11.3	8.7	1.5	175.6	C-①	ホルンフェルス
21	打製石斧	M29-3 A	9.7	8.2	2.1	165.0	C-①	ホルンフェルス
22	砥石	L29-24C	(11.5)	6.5	1.0	80.4	B-②	砂岩
23	砥石	L27-19B	12.8	3.9	1.8	128.7	B-①	砂岩
24	砥石	M29-14C	(16.6)	7.7	1.8	245.1	B-②	砂岩
25	磨石	M29-2 A	6.4	5.9	4.8	263.9	A 2-①	閃緑岩
26	磨石	M29	12.3	2.9	5.2	826.5	B 2-①	安山岩
27	磨石	L27-24B	10.4	5.8	5.0	320.4	C-①	安山岩
28	磨石	L29-21C		5.3	3.2	253.3	B 3-①	閃緑岩
29	磨石	L29-23D	9.0	7.9	7.6	884.9	D-①	閃緑岩
30	磨石	L29-23B	8.3	7.0	3.5	295.0	B 3-①	砂岩
31	磨石	M29-18B	7.7	7.2	4.8	378.2	A-3-①	安山岩
32	磨石	M29-6 A	8.3	5.6	2.5	180.9	B 3-①	砂岩
33	磨石	M29-14B	11.7	9.1	7.5	1193.7	D-①	安山岩
34	磨石	L29-18D	7.9	4.7	3.4	85.2	C-①	安山岩
35	磨石	M29-9 C	11.7	7.8	7.6	1105.8	B 3-①	安山岩
36	凹石	一括	(5.2)	7.3	4.6	242.0	A 2-b-②	閃緑岩
37	凹石	L29-19D	(9.1)	11.3	7.3	870.3	B 2-b-②	閃緑岩
38	凹石	L29	11.2	6.0	3.5	359.5	B 2-b-①	閃緑岩
39	凹石	M29-14B	9.4	8.2	4.5	530.4	A 2-a-①	安山岩
40	凹石	M27-5	12.8	4.7	3.2	288.0	C-①	砂岩
41	叩石	M29-13B	8.3	6.7	1.5	120.1	B 1-①	砂岩
42	叩石	M29-12B	6.9	6.1	3.8	207.3	A 1-①	ホルンフェルス
43	叩石	SD 5・6	8.3	5.0	2.5	123.6	C-②	頁岩
44	叩石	谷一括	14.5	9.0	6.3	698.4	C-②	安山岩
45	石鏃	M29-2 D	4.1	5.0	1.3	35.9	A-a-①	砂岩
46	石鏃	L29-21D	4.5	5.5	1.0	36.1	A-a-①	砂岩
47	石鏃	L29-19D	4.3	5.4	1.8	64.0	A-a-①	砂岩
48	石鏃	M29-19B	3.8	5.1	1.5	45.8	A-a-①	砂岩
49	石鏃	L29-21B	4.1	5.3	1.2	40.1	A-a-①	砂岩
50	石鏃	M29-1 A	4.5	5.7	1.5	57.1	A-a-①	砂岩
51	石鏃	L29-23C	4.2	5.1	1.2	35.7	A-a-①	砂岩
52	石鏃	L29-24A	3.9	6.5	1.7	60.1	A-a-①	砂岩
53	石鏃	L29-21D	4.2	7.0	1.8	78.4	A-a-①	砂岩
54	石皿	M29	(19.8)	(12.8)	1.9	557.7	D-a-④	網雲母片岩
55	石皿	M29	(19.4)	20.2	2.9	1498.7	B-a-②	網雲母片岩
56	石皿	M29-13B	16.8	13.9	3.4	1004.0	A-a-①	礫岩
57	石皿	L29	15.3	16.2	3.3	1144.2	A-a-①	閃緑岩
58	石皿	M29-13B	(22.3)	(10.0)	4.6	1439.4	D-a-④	網雲母片岩
59	石皿	L29-24B	19.6	15.5	3.8	1523.2	A-a-①	閃緑岩
60	石皿	M29-C	15.1	12.6	2.8	822.3	A-a-①	閃緑岩
61	石刺	谷一括	22.2	7.3	1.6	341.6	②	網雲母片岩
62	石刺	L29	(29.4)	4.5	2.3	490.5	②	緑泥片岩
63	石刺	M29	(24.0)	3.5	2.2	267.5	②	緑泥片岩
64	石刺	M29	(10.2)	4.2	2.2	151.1	③	緑泥片岩
65	石刺	M29-7 C	(12.4)	4.9	1.7	181.7	③	緑泥片岩
66	石刺	M29	15.0	3.9	1.5	135.5	①	頁岩
67	鉤形石	M29	17.6	3.8	7.1	582.4		ホルンフェルス
68	不明石製品	谷一括	9.3	3.5	1.0	44.2		緑色岩
69	磨石	L29-21B・D	1.6	1.0	0.5	1.1		滑石

## V 結語

### (1) 縄文時代の集落について

第三章で触れたとおり、興道熊谷羽生線建設に関わるこれまでの発掘調査で検出された縄文時代の集落跡は、大きく3つのエリアから構成されていた。

- (ア)：最東端B・C区の微高地上にみられた晩期の土壌群および後期中～後葉の作業場
- (イ)：D区中央部の微高地上に営まれた集落跡
- (ウ)：EおよびF区東端部にまたがって営まれた集落跡

これらのうち、(ア)については(イ)・(ウ)の集落に対応する作業場および埋葬空間と位置付けることが可能である。但し、後期中葉段階の生活空間については路線外に存在した可能性が高い。

(イ)・(ウ)の集落は時期的にほぼ重複しているが、単純に出土遺物の時間幅をもって比較した場合、前者は晩期前葉に主体を置きつつも後期中葉から晩期末葉まで幅広い時期の遺物を出しており、後者はやはり晩期前葉～中葉を軸に後期後葉の遺物を若干交えている。

遺構配置の面では、(イ)は堅穴住居跡と土壌のみで構成され、やや離れた位置に(ア)の埋葬空間を背負っている。(ウ)は背後に広大な低地部を背負っていて(イ)のように外部に生産施設・埋葬空間を

### (2) 縄文土器について

今次報告で扱った出土資料は遺物収納用コンテナで225箱に上ったが、その大半を占めるのは、縄文時代後期の土器片であった。

遺物の時期は、古くは後期中葉の加曾利B3式、新しい部分では晩期末葉のものまでがみられたが、特に後期後葉から晩期中葉にかけての土器が主体をなしており、集落の存続時期もこの範囲に収まるものと考えた。

遺跡そのものが扇状地における自然堤防上という層位的にきわめて不安定な環境に立地しており、ま

配置する余地がないが、それでも集落内部のやや中心を外れた部分に配石遺構や土器埋設遺構といった施設を擁しており、遺構のバリエーションという点ではまさっている。

今回は道路用地内という限られた範囲の“線”の調査であったため、“面”的な集落景観を復元する材料が決定的に不足している。

(イ)・(ウ)が一体の集落遺跡であることは疑いの余地がないとして、それが別個の自然堤防上に占地しつつ対峙しているのか、あるいはひとつの凹地を取り巻いて配置された一連の遺構群であるのかについては、今後の発掘調査により周辺の状況が明らかになるのを待つばかりではない。

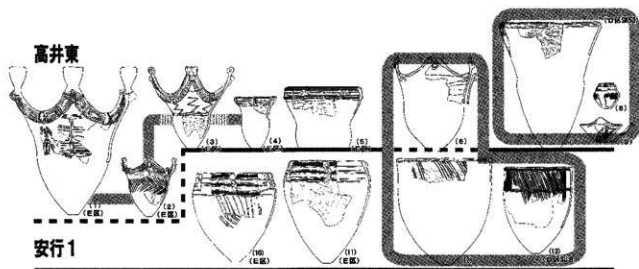
また、今回の調査では工程および時間的な制約から、二つの生活面を隔てるD区第3・第6地点の凹地部分の調査を十分に行うことができなかった。

縄文時代後期の遺跡立地を巡って様々な立場からの論争が交わされつつある現在、遺跡内部の遺構・遺物が検出されない(あるいは希薄である)部分の取り扱いには遺構が濃密な部分と同等の注意が払われるべきであり、今後の課題としたい。

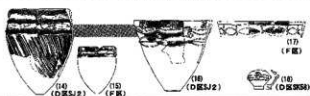
た、遺構の切り合いの激しさ、遺構がいずれも遺物包含層中に構築されている等の事情により、遺構覆土中の遺物の出土状態はしばしば時期的なまとまりを欠いていた。

遺物と遺構の帰属関係についても疑問の残る部分が多いが、ここでは一括と考えられる数少ない事例を軸として、包含層中の遺物で欠落を補うかたちで、本遺跡の縄文時代後期の土器様相を概観しておく。

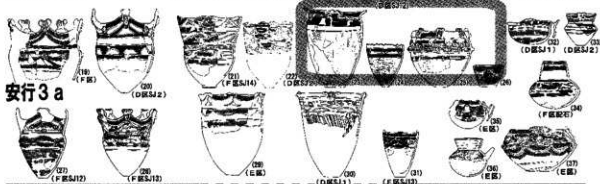
なお、文中の括弧付き遺物番号は次ページ挿図中



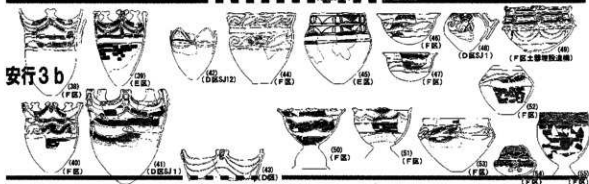
安行 2



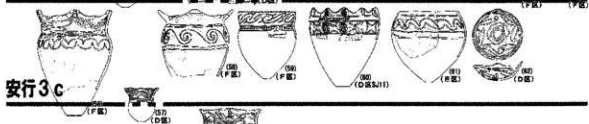
安行 3 a



安行 3 b



安行 3 c



安行 3 d



諏訪木遺跡出土縄文土器集成図

の数字である。

#### 【加曾利B式段階】

D・E区包含層中から少量の土器片が出土したものの、この段階に属する遺構は特定できていない。3単位大波状口縁深鉢に由来するものが目立ち、隣接C区における様相とほぼ重なっている。

この時期の主たる活動の場はB区およびその隣接地に求められよう。

#### 【高井東式段階】

遺物包含層を中心に多量の復元遺物が出土しており、破片レベルでは各地点を通じて満遍なく出土している印象を受ける。

もっともまとまった量の資料を出したのはE区の遺物包含層東斜面部で、第144図1・2・4・5はL-30グリッド中央東寄りの非常に限定された空間からの出土で、一括廃棄と考えると良いかもしれない(第136図・137図)。

大型突起を伴う大波状口縁深鉢(1)は口縁部区画文に縦長の貼り瘤を伴い、胴部は平行沈線文で器面を縦横に分割する。波底部における多段山形の区画線は極めて示唆的である。

山形波状口縁深鉢(2)は波頂部と波底部に縦瘤を重ねさせ、多段の凹線で連繫する。胴部には後期中葉以来の綾杉状沈線文が巡るなど、新旧の要素が混在する。

水平口縁深鉢(4)はキャリバー形で口縁直下に段を持ち、縦瘤と多段の凹線が配される。

遺構からの一括出土として認識できたものはD区に限られている。この地点に居住空間が存在し、凹地をはさんで対峙するC区に土器による煮沸を前提とする一種の作業空間が存在していた可能性が高い。

D区第53号土壙は水平口縁深鉢(7)と甗形の小型壺(8)、二単位山形波状口縁の浅鉢(9)の組み合わせである。深鉢はキャリバー形で口縁部に圧縮された区画文を持ち、「ノ」の字状の隆帯を配する曾谷式的な土器である。

D区第8号竪穴住居跡出土資料からは、山形波状口縁深鉢(6)を図示した。波頂部の双頭突起は安行1式の大波状口縁深鉢に共通しており、波底部に配された(横遣いではあるが)多段構成の楕円形突起も同様である。

これ以外に口縁に段を持つ無文のキャリバー形深鉢が出土し、破片レベルでは大型突起を伴う大波状口縁深鉢や口縁直下に多段の凹線をめぐらせる山形波状口縁深鉢、内彎口縁に貼り瘤を伴う瓢ないし砲弾形深鉢など、各種の器形が増えている。

さらに安行1式の紐織文土器2個体が出土しているが、これらの評価については後段で述べる。

#### 【安行1式段階】

遺構単位のものまとまった資料は得られていないが、E区の遺物包含層中から砲弾形の水平口縁深鉢が4点出土している。破片単位でも大波状口縁深鉢の貧弱さが目を引くが、(1)(2)の高井東系の個体がこれを補充するものと考えたい。

前段で述べたD区第8号竪穴住居跡出土資料であるが、紐織文深鉢2個体の組み合わせである。口縁肥厚するが内彎せずにはほぼ直立し、結節沈線ないし刻み+沈線で文様帯を区画するもので、新しくも安行2式、恐らくは安行1式の範疇に収まる土器と考えられる。

破片資料中には大波状口縁深鉢や砲弾形深鉢、甗形土器、台付鉢など安行1式の各器種を少量ながらバランスよく含んでおり、これに前述の高井東系土器群が伴っている。

(12)・(13)と(6)、さらに第56図6の関係を、E区包含層出土資料と同様の相互補充関係と考えたい。これらを安行1式段階の一括資料とした場合、D区第53号土壙D区→第8号竪穴住居跡という変遷を想定し得る。

#### 【安行2式段階】

やはり遺構単位の一括資料は得られていない。遺物包含層中の破片資料も貧弱で、本遺跡の集落変遷における低迷期と考えるのが妥当かもしれない。



D区第2号竪穴住居跡は晩期前葉の遺構であるが、覆土中から出土した砲弾形深鉢(14)と連結弧線文系の水平口縁深鉢(11)は同時期の資料と考えられる。第36図22~24もこの時期の紐線文土器であろう。

包含層資料としては、F区から小型の砲弾形深鉢(15)と連結弧線文土器(17)が出土している。また、第109図18や第150図48、第240図69なども安行2式期の紐線文土器であろう。

#### 【安行3a式段階】

晩期前葉は集落の最盛期と位置づけることができる。とりわけ安行3a式期には竪穴住居跡や土壇の数も最も多く、配石遺構・土器埋設遺構など集落を構成する施設にバリエーションが生じている。

遺構単位の資料としてはF区第12・13号竪穴住居跡、同第14号竪穴住居跡、単独の資料ながら同区第1号配石遺構、D区第47号土壇などが挙げられ、さらに3b式との混在がみられるがD区第2号竪穴住居跡、第12号竪穴住居跡等も同時期を主体とする資料である。

器種別に見ていくと、後期以来の大波状口縁深鉢は比較的小型の個体が多い。口縁部の三角構成を忠実に残す(19)・(20)がある一方で、区画内部がポジ文化して独立する(27)や、後述する磨消縄文系深鉢の入組三叉文を取り入れることで区画自体が崩壊する(27)などのバリエーションを生んでいる。

貼り瘤を持たない磨消縄文系の深鉢では、連結弧線文土器の流れを汲む(22)、三叉文や入組文の多段構成がみられる小豆沢タイプの(21)のほか、胴上半部に圧縮された文様帯を配する(23)・(24)・(30)・(31)が存在する。

28は小豆沢タイプが極限まで単純化したものといえ、3b式段階に下る可能性もある。同様に地文縄文を喪失し、単調な対向弧線文を描く(30)(および第17図3)も若干新しい印象を受けるが、口縁突起の特徴から本段階に留めた。

砲弾形の水平口縁深鉢については晩期中葉にまで引き継がれていくことが指摘されているが、本遺跡

資料中で当該の土器を特定することは難しい。

注口土器は、貼り瘤+帯縄文の(35)に加え、磨消縄文系の(36)が出現する。

各種の小型浅鉢(32)(26)・小型壺(33)等は土器組成中で一定の量を占めており、また(34)・第148図26・27のような口縁直立する壺や、(37)の胴部がソロバン玉形に張り出す大振りの鉢も多く、さらにここには図示しなかったが第236図27のような台付鉢、第146図17の瓢形土器といった器種も健在である。

概ね新旧2時期が存在し、就中新段階の資料が量的にも充実しているようだ。

図示した資料中で旧段階の可能性のあるものとして大波状口縁深鉢の(19)、水平口縁深鉢(25)、注口土器(35)を抽出することも可能だが、いずれも安行2式の要素を残す個体で、同一時期の系統差と考えることもできる。

なお、この段階を含む後期前葉の特色として多量の粗製無文深鉢をはじめとする無文土器群との共伴がある。ここには図示しなかったが、器形・器種ともにバリエーションに富んでおり、鋸歯状口縁や樽形の深鉢など精製土器にはありえない器形も少なくない。単に精製土器の器種組成のコピーではない「もうひとつの型式」ともいえるべき体系を形成している点は極めて興味深い。

この段階の紐線文土器としては第150図49、第216図3等が好例だが、破片資料中にも多数がみとめられる。

胴上半部に文様帯を持たないものについては安行2式期のものとの弁別が困難だが、例えばF区第13号竪穴住居跡から出土した第208図4については無文化した胴下半部に同時期の粗製無文土器群との混濁を読み取ることができよう。

#### 【安行3b式段階】

量的には前段階の安行3a式に拮抗しているが、ほとんどが遺物包含層中の資料である。精製の鉢と粗製無文深鉢の組み合わせであるF区第1号土器埋設遺構を例外とすれば、遺構覆土中からは安行3a

式と混在するかたちで出土するに過ぎないが、そのなかでもD区第1号竪穴住居跡、同第2号竪穴住居跡にあってややまとまった資料をみることができる。

大波状口縁深鉢は粗製無文深鉢との境界が崩れつつあり、前段階同様の小型精製品(38)(39)(40)と、(41)や第33図3のような粗大なものとの間で二極分化が進むように見える。

多くは波頂部直下に二段の豚鼻突起を配する。三角形区画文を残すものは下端を帯縄文で閉塞する弧状モチーフ(38)(39)となり、さらに口縁直下の帯縄文との境界が崩れて単段階化する(40)が出現する。

水平口縁深鉢では、安行3b式に特徴的な細密沈線土器群(45)は少量で、むしろ前段階の流れを引く磨消縄文系の土器群が卓越している。

浅鉢や台付鉢・壺のモチーフは入組文や弧線文へと画一化し、注口土器は僅少となる一方で、こうした動きを補おうとするかのように(54)(55)といった大洞系の土器の存在が顕著になってくる。

具系統土器としては、隣接の古宮遺跡では安行3b～3c式段階に比定される天神原式が復元個体を含めまとまった資料を出しているが、本遺跡では破片レベルで少量が出土するとどまっており、第82図61・62、第164図327～334・344～347等がこれに該当する。

また、この段階には無文地に貼り瘤のみで文様を表現する半粗製の一群が存在し、E・F区の遺物包含層には第235図18～22、第147図24・25のような多様な器種からなるセットが存在している。これは猪瀬美奈子氏が「コブ・突起・隆帯のみで文様を描くもの」として天神原式の一部に含められたものだが、貼り瘤の形状等にやや地域色がみられるようだ。特に深鉢の器種や突起・貼り瘤の位置関係においてはほぼ安行式の精製深鉢のそれを踏襲しているものとみられる。

なお、この時期の紐線土器の資料としては第18図15、第81図11、第150図50等が挙げられる。

### 【安行3c式段階】

特にE・F区側において資料が充実している。遺構出土の復元資料としてはD区第11号竪穴住居跡出土の(60)があるが、周辺から出土した破片資料に時期的なばらつきが大きく、確実な一括資料は存在していない。

復元資料として図示したものはモチーフや器形の面で前段階を踏襲したものが多く、いずれも新屋雅明氏の細分案における古段階に属するものとみられる。

(56)は大波状口縁深鉢の文様構成を比較的良好に残す資料であり、地文こそ列点化するものの三角形区画文から転化した弧状モチーフ+文様帯下端を閉塞する平行沈線区画は(38)(39)をほぼそのまま踏襲している。

胴下半部の入組弧線モチーフはしばしば胴上半部の文様帯における主モチーフとして用いられ、後述の(61)や破片資料の第165図349・359などに好例を見ることができる。文様の由来は不明だが、後期安行式の入組弧線文の流れとは別に、文様帯下端を区画する連続弧線文から転化したものであろうか。

(58)は大波状口縁深鉢に由来する器形を採用しつつも胴上半部に広く文様帯を取り、本来水平口縁深鉢に特徴的な入組モチーフを描いたものである。

(59)は多段の入組三叉文を描く深鉢で、(21)→(44)の系統上にある土器といえることができる。内彎する小波状口縁の由来は不明だが、(55)のような大洞系の土器か、一部の無文土器群が関わっている可能性がある。

(60)にみられる多段の対向弧線モチーフは安行3a式以来のもので、前段階では(45)のような水平口縁深鉢にみられたものである。

(61)は口縁肥厚し内彎する古典的な紐線土器の器形で、安行3b式に含めることも可能だが、ここでは前述(56)の対向弧線文との関連から3c式古段階と考えた。(62)は浅鉢で弧線+三叉文の入組モチーフであり、やはり3b式以来のモチーフといえ

る。

(57)は小型の深鉢で、新段階ないし3d式に下る資料であろう。安行3c式中～新段階の資料はE・F区遺物包含層破片資料中、第165図362～370・第249図292等に見ることができるが、量的な貧弱さは否めない。

#### 【安行3d式段階】

量的には僅少で、(63)は唯一の復元個体である。破片資料中でも第249図294がある程度で(第165図367も3d式の可能性あり)、集落の継続期間としては安行3c式の初頭段階でほぼ終焉しているとみるのが妥当であろう。

この時期に周辺の堆積環境を激変させるなんらかのイベントが生じたものとみられ、やがて集落一帯は大量の河成堆積物に覆われてしまう。

以上、精製土器を中心に諏訪木遺跡における縄文土器群を概観してきた。後期安行式では大波状口縁深鉢の貧弱さが目立ち、高井東系の個体がこれを補充する可能性が指摘できた。

晩期初頭段階では大洞B1式の入組文土器群の典型例を欠いており、これが时期的な欠落を示すもの

か地域性を示すものかは今後の課題としたい。また、安行3b(～3c?)段階で貼り瘤のみを配する半粗製の無文土器群の良好な資料が得られた点もひとつの地域性を示す可能性があり、注目に値する。

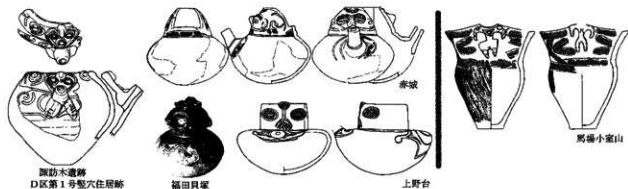
最後にD区第1号竪穴住居跡出土の人面注口土器について再度触れておきたい。

同種の土器については県内では鴻巣市(旧川里町)赤城遺跡で出土例があり、他にも茨城県福田貝塚、同上野原遺跡、岩手県泉屋遺跡等に類例がみられる。

但し、これらはすべて遮光器土偶の顔面表現を取り入れたものであり、器形的にも胴部と頸部の境に括れを持つ大洞式的な器形を踏襲している。

一方、今回出土した資料はミミズク土偶の顔面表現を取り入れたもので、器形的にも安行2式以来の注口土器の伝統に則ったものといえる。

こうした「安行系列」の人面注口土器については他に類例を求め得なかったが、関連する資料として馬場小室山遺跡出土の人体文土器を挙げておきたい。こうした安行系の人体文土器を下地とし、遮光器系の人面注口土器のインパクトのもとでD区第1号住居資料が成立したものと考えられよう。



人面注口土器関連資料

## 参考文献

- 吉野 健 2001 『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書
- 黒坂慎二 2002 『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第283集
- 縄文セミナーの会 2004 『晩期中葉の再検討』第17回縄文セミナー
- 新屋雅明 1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集
- 林 克彦 1994 『天神原遺跡の後・晩期の土器群について』『中野谷地区遺跡群』群馬県安中市教育委員会
- 鈴木加津子他 1992・93 『精進場遺跡(1)・(2)』川口市文化財調査報告第三十集・三十一集
- 橋本 勉 1990 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第93集
- 新屋雅明 1996 『埼玉地方の安行3c式』『埼玉地域文化の研究 下津弘・塚越哲也君追悼論文集』
- 青木義脩他 1983 『馬場(小室山)遺跡(第5次)』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第3集
- 三沢正善他 1982 『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』栃木県小山市教育委員会
- 安孫子昭二 1994 『瘤付土器』『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣
- 阿部芳郎他 2000 『座談会 遺跡研究の目的と方法を考える』『駿台史学 第110号』
- 阿部芳郎他 2004 『縄文時代後・晩期における谷奥型遺丘集落の研究』『駿台史学 第122号』
- 新屋雅明 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第74集
- 江原 英 2001 『環状貝塚・環状盛土遺構』『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会  
縄文セミナーの会 2001 『後期後半の再検討』『第14回縄文セミナー』
- 岩槻市教育委員会 1983 『岩槻市史』『通史編1』
- 山田仁和 2003 『関東地方北部における縄文時代晩期中葉土器群について』『栃木県考古学会誌』24
- 古谷 涉 2004 『安行式粗製土器編年試論Ⅱ』『縄文時代』15
- 埼玉考古学会 1992 『シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化』『埼玉考古 別冊4』
- 鈴木孝之他 2004 『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第298集
- 鈴木正博 1987 『安行3a式形成過程の一考察』『埼玉の考古学』新人物往来社
- 青木義脩他 1982 『馬場(小室山)遺跡』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第1集
- 上野真由美他 2005 『雅楽谷遺跡Ⅱ』『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第307集』
- 茨城県史編さん第一部会 1979 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』

# 報告書抄録

ふりがな	すわのさいせき							
書名	諏訪木遺跡Ⅱ							
副書名	県道熊谷羽生線（熊谷市地内）埋蔵文化財調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第336集							
編著者名	渡辺清志							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4-4-1			TEL 0493-39-3955				
発行年月日	西暦2007（平成19）年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すわのさいせき 諏訪木遺跡	さいたまけんいまがやし市 埼玉県熊谷市大 あがひの 字上之2873他	11202	019	36° 08' 55"	139° 24' 38"	20020515～ 20030930	8700	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
諏訪木遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 16軒 土壇 29基 炉跡 3基 配石遺構 1基 土器埋設遺構 1基		縄文土器 石器 土製 品 石製品		縄文時代後晩期の集 落・遺物包含層の調 査	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第336集

---

熊谷市

---

## 諏訪木遺跡Ⅱ

---

県道熊谷羽生線（熊谷市地内）埋蔵文化財発掘調査報告  
（第1分冊）

平成19年3月13日 印刷

平成19年3月20日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1  
電話 0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／朝日印刷工業株式会社